



令和 7 年度

第 74 回 全道へき地複式教育研究大会

(全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会)

上川大会ファイナルステージ 研究集録

■上川大会スローガン

「 北の大河の源流 上川の地で育つ子らに
未来を切り拓き 夢を実現する力を 」



富良野 一本桜

上川大会実行委員会



令和 7 年度

第 74 回全道へき地複式教育研究大会

(全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会)

上川大会ファイナルステージ

□研究主題

主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった
人間性豊かな子どもの育成

～児童生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす

学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

【期日】 令和 7 年 9 月 17 日（水）・18 日（木）

【会場】 1 日目 全体会・分散会 ～ 旭川市大雪クリスタルホール

2 日目 公開授業・研究協議 ～ 上川管内 6 会場

〈両日ともにリアルならびにオンライン開催〉

【主催】 北海道へき地・複式教育研究連盟

【共催】 全国へき地教育研究連盟

【主管】 上川へき地・複式教育研究連盟

【後援】 北海道教育委員会・北海道教育大学・上川管内教育委員会連合会

旭川市教育委員会・占冠村教育委員会・南富良野町教育委員会

富良野市教育委員会・中富良野町教育委員会・上富良野町教育委員会

美瑛町教育委員会・鷹栖町教育委員会・比布町教育委員会

東神楽町教育委員会・東川町教育委員会・当麻町教育委員会

愛別町教育委員会・上川町教育委員会・和寒町教育委員会

剣淵町教育委員会・士別市教育委員会・名寄市教育委員会

下川町教育委員会・美深町教育委員会・音威子府村教育委員会

中川町教育委員会・幌加内町教育委員会・北海道小学校長会

北海道中学校長会・上川管内校長会・旭川市小学校長会・旭川市中学校長会

上川管内教頭会・旭川市小中学校教頭会

上川管内教育研究会・上川教育研修センター

上川北部・南部 P T A 連合会



一面に広がるそば畑（幌加内町）

太陽となろう

～へき地教師のうた～

作詞 新渡戸 常晴

作曲 石山 美治

♩=104

mp

やま あ い の ち い さ な が っ こ う あ お そ ら と は な

mf *f*

と み ど り が あ る つ ぶ ら な ひ と み の こ ら が ち か

11 cresc. rit. mp tempo

ら い っ ぱ い の び て い る と も よ と も よ ー た い よ

mf

う と な っ て あ す ひ ら く ち え を そ だ て よ う

太陽となろう
へき地教師のうた

作詞 新渡戸 常晴
作曲 石山 美治

一、

山間の 小さな学校
青空と花とみどりがある
つぶらな ひとみの子らが
力いっぱい 伸びている
教師よ 教師よ 太陽となって
あすひらく 智恵を 育てよう

二、

海辺の 小さな学校
潮風と波と光がある
明るい心の 子らが
力いっぱい 伸びている
教師よ 教師よ 太陽となって
あす築く意志を育てよう

三、

北国の 小さな学校
粉雪と 歌と 氷がある
元気な笑顔の 子らが
力いっぱい 伸びている
※教師よ 教師よ 太陽となって
あすつくる夢を育てよう

※くり返し

目 次

挨拶

I 上川大会の開催について

大会開催要項	1
全体会（開会式・閉会式）次第・分散会一覧	2
公開授業校一覧	4

II 全体会の報告

1 記録写真	7
2 基調報告	8
3 分散会	13

III 分科会会場校の研究および配信方法

◇第1分科会 士別市立上士別小学校	19
◇第2分科会 幌加内町立幌加内小学校	51
◇第3分科会 東川町立東川第二小学校	79
◇第4分科会 美瑛町立美馬牛小学校	109
◇第5分科会 富良野市立樹海学校	137
◇第6分科会 南富良野町立南富良野小学校	165

IV 上川大会を終えて

大会振り返り	187
業務報告	193
加盟校一覧	198
第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ実行委員会 組織図 . . .	199
北海道へき地・複式教育研究連盟 役員一覧	200
あとがき	201




上川大会の２年間を振り返って

北海道へき地・複式教育研究連盟

委員長 道 下 誠

(泊村立泊小学校長)




「北の大河の源流 上川の地で育つ子らに 未来を切り拓き 夢を実現する力を」を大会スローガンとして、令和６年度にはファーストステージ、そして今年度はファイナルステージを上川管内で開催することができました。前回の胆振大会から始まった、２年連続同一会場校で全道大会を実施するという新たな開催方式により、前年度の成果と課題を受けての授業改善等が進むとともに、私たちが目指している子どもの変容がよりわかる大会となりました。

６つの分科会（授業会場校）においては、これからのへき地・複式教育の可能性を広げていくような、多岐にわたる授業が展開されました。「学習リーダーを中心とした複式授業」では、子どもたちの主体性と協働性が育まれ、両学年共に学びの深まりが見られました。また、「他管内の学校との遠隔合同授業」では、地理的な制約を超えた学びの交流が実現し、ＩＣＴの力を最大限に活用した教育の新たな可能性が示されました。さらに、「ＩＣＴを効果的に活用した授業」では、個別最適な学びと協働的な学びの融合が見事に図られ、子どもたちの学習意欲と理解力が大きく向上しました。そして、「義務教育学校ならではの、学校種を超えた５学年合同の授業」では、前期課程と後期課程の児童生徒の異学年交流を通じて、互いに学び合い、支え合う姿が印象的でした。

これらの授業実践は、へき地・複式教育の未来を切り拓く貴重な成果であり、今後の教育の在り方に大きな示唆を与えるものです。２年間にわたる継続的な研究と実践の積み重ねは、単なる全道大会の開催にとどまらず、地域教育の活性化と、子どもたちの可能性を広げる大きな一歩となりました。そして何より、へき地・複式教育における新たな展望が開かれたと思います。一般的に、へき地・複式校の子どもたちは大規模校の子どもたちに比べると、「競争心が少なく、コミュニケーション力や社会性が低いのではないか。」と言われていますが、この２年間の取組を通じて、間違いなくこれらの課題に向き合うことができたと言えます。さらに、ＩＣＴの利活用によって、地理的・人的制約を乗り越えた新たな学びの場が創出され、地域の枠を超えた教育連携の可能性も広がってきています。今後は、こうした実践を深化・継続させていくことで、へき地で学ぶ子どもたち一人一人が、より豊かで多様な学びを享受できる環境を整えていかなければならないと思っています。

結びになりますが、上川大会の開催にあたり、ご指導とご支援をいただきました北海道教育庁上川教育局・空知教育局、全体会会場を引き受けてくださった旭川市教育委員会をはじめ、上川管内各市町村教育委員会、教育関係諸団体のみなさまに感謝申し上げます。そして何よりも、上川大会を成功に導いていただいた実行委員のみなさん、会場校の先生方や保護者・児童のみなさん、大会に参加してくださった多くのみなさんに心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。




第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ

研究集録の発刊にあたって

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ
(全国へき地教育研究大会 北海道ブロック大会)

実行委員長 山田 顕 次
(音威子府村立音威子府小中学校長)



第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ研究集録の発刊にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

本年度は、北海道へき地・複式教育研究連盟第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画の2年次として、その研究主題である「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」に基づいて研究を進めてまいりました。この研究成果を広く発信するために、上川大会のスローガンを「北の大河の源流 上川の地で育つ子らに 未来を切り拓き 夢を実現する力を」と掲げ、全体会を旭川市で、分科会を士別市・幌加内町・東川町・美瑛町・富良野市・南富良野町の6会場で開催いたしました。この集録では、これら積み重ねてきた研究の成果をまとめ、これからも続く研究に資するものとなりました。

さて私たちは、昨年度ファーストステージを終え、研究に関わること、運営に関わることを一体的に総括し、成果と課題を明らかにした上で今年度さらなる高みを目指し、研究主題に迫るべく見直しを図ってまいりました。

令和に入り、コロナ禍を受け急速に進んだGIGAスクール構想導入時の慌ただしさは最早隔世の感がありますが、そこで普及した一人一台端末、併せてオンライン等を用いた遠隔による情報の共有など、授業観のパラダイムシフトが進む中、授業研究の再構築が行われ、新たな実践が次々に行われるようになりました。前開催地、胆振大会での成果をはじめとし、これまでの全道大会の積み上げや、多くのご支援、ご示唆をいただくことで、目的をより明確にし、へき地・小規模校に学ぶ子どもたちの豊かな成長へとつなげることができました。

また、オンラインによる実践と研究を重ねることで、GIGAスクール構想に伴う私たちの資質・能力の向上とともに広範で多彩な情報共有を容易とし、より充実した研究を推進しながら、配信などの運営面でも大きな成果を上げることができました。今後もこれらの成果をもとに研究を推進してまいります。

結びになりますが、ご参加いただいた方々はもとより、本大会の開催にご尽力いただきました連盟の会員の皆様をはじめ、北海道教育委員会、北海道教育庁上川教育局・空知教育局、上川管内教育委員会連合会、上川管内各市町村教育委員会、北海道教育大学、北海道小学校長会、北海道中学校長会、上川管内教育研究会等、管内外の関係機関の皆様にごこの場をお借りして厚く感謝とお礼を申し上げ、発刊の挨拶といたします。

第 74 回全道へき地複式教育研究大会

上川大会ファイナルステージ

I 上川大会ファイナルステージ の開催について



開会式

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ開催要項 ＜全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会＞

研究主題

主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成
～児童生徒一人一人が他者とながかり、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

上川大会スローガン

「 北の大河の源流 上川の地で育つ子らに 未来を切り拓き 夢を実現する力を 」

- 1 主 催 北海道へき地・複式教育研究連盟
- 2 共 催 全国へき地教育研究連盟
- 3 主 管 上川へき地・複式教育研究連盟
- 4 後 援 北海道教育委員会・北海道教育大学・上川管内教育委員会連合会
旭川市教育委員会・占冠村教育委員会・南富良野町教育委員会
富良野市教育委員会・中富良野町教育委員会・上富良野町教育委員会
美瑛町教育委員会・鷹栖町教育委員会・比布町教育委員会・東神楽町教育委員会
東川町教育委員会・当麻町教育委員会・愛別町教育委員会・上川町教育委員会
和寒町教育委員会・剣淵町教育委員会・士別市教育委員会・名寄市教育委員会
下川町教育委員会・美深町教育委員会・音威子府村教育委員会・中川町教育委員会
幌加内町教育委員会・北海道小学校長会・北海道中学校長会・上川管内校長会
旭川市小学校長会・旭川市中学校長会・上川管内教頭会・旭川市小中学校教頭会
上川管内教育研究会・上川教育研修センター・上川北部・南部 PTA 連合会
- 5 開催期日 令和7年9月17日（水）・18日（木）
- 6 会 場： 【全体会・分散会会場】旭川市大雪クリスタルホール
【歓迎交流会】アートホテル旭川
【公開授業・研究協議会場】
第1分科会：士別市立上士別小学校 第2分科会：幌加内町立幌加内小学校
第3分科会：東川町立東川第二小学校 第4分科会：美瑛町立美馬牛小学校
第5分科会：富良野市立樹海学校 第6分科会：南富良野町立南富良野小学校
- 7 実施方法： 【リアル開催】 参集形式にて各会場（全体会・分散会・分科会）にて実施
【オンライン開催】 ZOOMにてオンライン配信（全体会・分散会・分科会）
*オンライン配信は、「リアルタイム配信」と「録画配信」の両方の方式

8 大会日程

1日目 17日（水）旭川市大雪クリスタルホール

12:30～ 13:00	13:00～ 13:40	13:50～ 14:10	14:20～ 16:20	16:20～ 16:35		18:30～ 20:00
受付	開会式	基調報告	分散会	閉会式		歓迎交流会

2日目 18日（木）各会場校

8:30～ 9:00	9:00～ 9:45	10:00～ 10:45	11:00～ 12:00	12:00～ 13:00	13:00～ 15:10	15:10～ 15:40
受付	授業公開①	授業公開②	開会式 研究発表	昼食	研究協議	閉会式

9 参加費

・参集による参加 4,000円 ・オンラインによる参加 2,000円

全体会（開・閉会式）次第・分散会一覧

【開会式】令和7年9月17日（13：00～13：40）

旭川市大雪クリスタルホール：音楽堂

（進行：上川大会実行委員）

- 1 開式宣言 第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会 実行委員長 山田 顕 次
- 2 国歌斉唱
- 3 大会歌「太陽となろう」斉唱
- 4 主催者挨拶 北海道へき地・複式教育研究連盟 委員長 道 下 誠
- 5 来賓祝辞 全国へき地教育研究連盟 会長 温泉 敏 様
北海道教育委員会 教育長 中島 俊明 様
上川管内教育委員会連合会 会長 杉山 昌次 様
- 6 来賓紹介 北海道へき地・複式教育研究連盟 事務局長 前田 道弘
- 7 閉式宣言 北海道へき地・複式教育研究連盟 副委員長 落合 利 広

【感謝状贈呈】

【次期開催地実行委員長挨拶】

【基調報告】（13：50～14：10）旭川市大雪クリスタルホール：音楽堂

【分散会】（14：20～16：20）

- I【学校・学級経営】 旭川市大雪クリスタルホール：国際会議場大会議室（1F）
- II【学 習 指 導 1】 旭川市大雪クリスタルホール：レセプション室（2F）
- III【学 習 指 導 2】 旭川市大雪クリスタルホール：第2・3会議室（1F）

【閉会式】（16：20～16：35）旭川市大雪クリスタルホール：各分散会会場

（進行：道へき・複連研究推進委員運営者）

- 1 開 式 の 言 葉 北海道へき地・複式教育研究連盟 研究推進委員
- 2 実行委員長挨拶 全道へき地複式教育研究大会上川大会 実行委員長 山田 顕 次
- 3 感 謝 状 贈 呈 北海道へき地・複式教育研究連盟 委員長 道 下 誠
- 4 閉 式 の 言 葉 北海道へき地・複式教育研究連盟 研究推進委員

※事務連絡

【分散会一覧】

北海道へき地・複式教育研究連盟の長期研究推進計画に基づく実践研究の成果と課題について研究協議を行い、複式教育の充実・発展に資することを目的とする。

	分散会Ⅰ	分散会Ⅱ	分散会Ⅲ
課題	学校・学級経営（第1分野）	学習指導①（第2分野）	学習指導②（第2分野）
提言者	日高管内 えりも町立えりも岬小学校 教諭 粕谷 知希氏	石狩管内 千歳市立駒里小中学校 教諭 岡上 泰子氏	十勝管内 中札内村立上札内小学校 校長 菅原 晴彦氏
発表題	【第3課題】 ふるさとを愛し、伝統と文化を大切にしながら、多様な考えを認め合い、自ら学びをつくる子の育成	【第5課題】 様々な人々とのふれあいから学び、自分の世界を広げる ～児童生徒の主体性・コミュニケーション力の向上を目指して～	【第6課題】 自分の考えをもち、表現し合える子どもの育成 ～学習場面に応じて ICT を効果的に活用することで、主体的に学び、自分の考えを表現できる授業システムの確立～
概要	①地域の郷土芸能である「襟裳少年神楽」。全学年で取り組み町内行事での発表を毎年行っている。「地域を愛する心情」等の身に付けさせたい資質・能力を教科横断的に設定し、全職員・地域一丸となった育成を目指している。 ②えりも町の緑化事業に町内の学校が参加して植樹を行っている。それに関連して総合的な学習を中心に緑化事業やえりも砂漠等について調べ、主体的な話し合いやポスターセッションでの発表など、自らの学びにつながる活動を展開している。	①主体的に学ぶ児童生徒の育成について ・「VACUサイクル」「課題設定の工夫」「対話的な学び」 ・「自己決定の場を設定する」ことによる主体的に学ぶ姿勢の育成 ②他者との関わりから育む児童生徒のコミュニケーション力について ・小中での関わり ・中規模校との関わり ・へき地校同士の関わり ・地域との関わり ・海外との関わり	①十勝の教育環境の説明について ・地域の特性を生かした教育実践 ・地域資源の活用と学びの機会の充実 ②本校の特色ある活動について ・地域資源を活用した体験的学習と課題 ・自らの学びを深めていく過程の構築 ・学びの質の向上と教育活動の充実 ③ICTを活用した協働的な学びの実現 ・学びのツールとしてのICT活用 ・学びを深化させるための“関わり合いのアイテム”としての位置づけ
討議の柱	伝統と文化を継承し、地域と連携しながら豊かな心を育む教育活動の創造と推進	主体性やコミュニケーション力を育てる学習環境や指導方法の改善と充実	地域資源や ICT 機器の効果的な活用による学習過程の改善と教育活動の充実
助言者	北海道教育庁上川教育局教育支援課 学校教育指導班主査 中山 智洋 様	北海道教育庁空知教育局教育支援課 学校教育指導班主査 佐々木 明 様	北海道教育庁上川教育局教育支援課 学校教育指導班主任指導主事 蒔田 和樹 様

公開授業校一覧

第1分科会 士別市立上士別小学校 校長 浅野 拓司	
研究主題	自ら課題を見つけ 共に学び 高め合う子の育成
副主題	～児童が主役となる授業づくり～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導6】
教科等・年次	全教科 「3年計画・3年次」
公開授業1 (複式)	授業者：福川 洋枝 1年生 算数 「10より大きい数」 2年生 算数 「かけ算」
公開授業2 (複式)	授業者：加藤 保 5年生 算数 「割合とグラフ」 6年生 算数 「データの見方」
助言者	北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班指導主事 林 貴史様 北見市立相内小学校 校長(道へき・複連研究推進委員) 木下 めぐみ氏

第2分科会 幌加内町立幌加内小学校 校長 大槻 哲久	
研究主題	豊かな関わりを通して、自己の生き方を考える子の育成
副主題	～道徳科の授業改善を通して～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導6】
教科等・年次	道徳 「2年計画・2年次」
公開授業1 (複式)	授業者：長野 博史 3年生 道徳 「きまりのない国」 ※石狩市立厚田学園3年生との遠隔合同学習 4年生 道徳 「雨のバスでいりゅう所で」
公開授業2 (複式)	授業者：新重 佑樹 5年生 道徳 「ブランコ乗りとピエロ」 6年生 道徳 「この胸の痛みを」
助言者	北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班指導主事 蔭田 和樹様 平取町立二風谷小学校 校長(道へき・複連研究推進委員) 遠山 昌志氏

第3分科会 東川町立東川第二小学校 校長 成 田 浩 幸	
研究主題	主体的に学び 自分の思いや考えを伝え合う子どもの育成
副主題	～子どもが生き生きと学ぶ学習指導をめざして～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導6】
教科等・年次	全教科 「単年度計画」
公開授業1 (複式)	授業者：川 田 啓 太 3年生 算数 「円と球」 4年生 算数 「垂直、平行と四角形」
公開授業2 (複式)	授業者：金 一 かおり 5年生 算数 「割合」 6年生 算数 「円の面積」
助言者	北海道教育庁空知教育局教育支援課学校教育指導班主査 佐々木 明 様 深川市立北新小学校 校長（道へき・複連研究推進委員）船 越 一 郎 氏

第4分科会 美瑛町立美馬牛小学校 校長 岸 美 香	
研究主題	自ら学び、進んで表現し、共に高め合う子の育成
副主題	～学び方がわかり、学ぶ楽しさを実感できる算数科の授業づくりを通して～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導6】
教科等・年次	算数 「3年次計画・3年次」
公開授業1 (複式)	授業者：大 田 千 夏 1年生 算数 「3つのかずのたしざん、ひきざん」 2年生 算数 「たし算とひき算」
公開授業2 (複式)	授業者：佐 藤 志 持 5年生 算数 「割合」 6年生 算数 「データの見方」
助言者	北海道教育庁空知教育局教育支援課学校教育指導班主任指導主事 長 南 彩 様 北斗市立島川小学校 校長（道へき・複連研究推進委員）佐々木 道 彦 氏

第5分科会 富良野市立樹海学校 校長 大 柄 洋 樹	
研究主題	自分の考えを表現し、共に深め合い高め合う児童生徒の育成
副主題	～主体的な学びを目指した指導の工夫を通して～
分野・課題	【学校学級経営2、学習指導5】
教科等・年次	算数 「3年次計画・3年次」
公開授業1 (複式)	授業者：平 間 はるな 5年生 算数 「分数の大きさとたし算・ひき算」 6年生 算数 「円の面積」
公開授業2	授業者：舘 山 英 治 5・6年生 体育 「ソフトバレーボール」 7～9年生 体育 「バレーボール」
助言者	北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班主査 中 山 智 洋 様 洞爺湖町立とうや小学校 校長(道へき・複連研究推進委員) 羽 根 秀 哉 氏

第6分科会 南富良野町立南富良野小学校 校長 馬 場 泰 栄	
研究主題	主体的に学び続け、協働しながら自己の学びを深める子どもの育成
副主題	～深い学びにつながる学習過程の工夫を通して～
分野・課題	【学校学級経営1、学習指導6】
教科等・年次	算数 「単年度計画」
公開授業1	授業者：佐 藤 慶 弥 4年生 算数 「面積」
公開授業2	授業者：大 内 明 5年生 理科 「ふりこ」
助言者	北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班指導主事 川 邊 宏 司 様 枝幸町立音標小学校 校長(道へき・複連研究推進委員) 有 路 直 人 氏

第 74 回全道へき地複式教育研究大会

上川大会ファイナルステージ

II 全体会の報告



第 1 分科会 士別市立上士別小学校



第 2 分科会 幌加内町立幌加内小学校

I 記録写真



アトラクション



開会式（道下委員長挨拶）



基調報告



分散会Ⅰ（学校・学級経営）



分散会Ⅱ（学習指導①）



分散会Ⅲ（学習指導②）

2 基調報告

上川へき地・複式教育研究連盟 研究部長 長井 香征（上川町立上川小学校）

はじめに

上川地方は、北海道のほぼ中央に位置し、雄大な自然に恵まれた美しい地域です。大雪山国立公園をはじめとする豊かな自然が、四季折々の風景を彩り、訪れる人々の心を惹きつけます。特にこの季節は、澄んだ空気と色づき始めた山々が、気持ちを穏やかにしてくれることでしょう。ここ旭川市は、道北の交通の要所として発展し、豊かな食文化を誇る“食のまち”としても知られています。自然と都市が調和するこの地で、皆様と学びを深めながら、へき地・複式教育のさらなる充実に向けて、実りあるひとときとなれば幸いです。

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージの基調報告は、内容を大きく次の3つに分けて、報告させていただきます。

- 1 上川へき地・複式教育研究連盟の研究
- 2 第73回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファーストステージの成果と課題
- 3 第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージに向けた研究推進

1 上川へき地・複式教育研究連盟の研究

(1) これまでのあゆみ

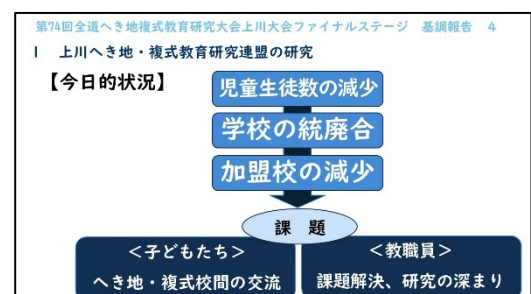
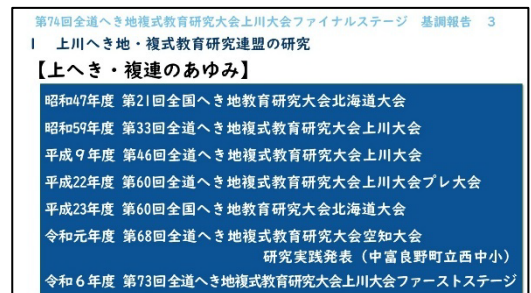
上川管内におけるへき地・複式教育の研究は、昭和23年 北海道へき地・複式教育研究連盟の結成とともに始まりました。以来70年以上にわたり、「上川の地に育つ子どもたちが、未来を切り拓き、夢を実現する力」を育むことを目指し、教育実践を積み重ねてまいりました。

研究大会においては、昭和59年に「第33回全道大会」、平成9年に「第46回全道大会」を開催。さらに平成23年には、前年度の「全道プレ大会」に続き、『第60回全国大会北海道大会』を、上川管内の7市町村・9会場にて開催するなど、これまでに複数の全道・全国大会を実施し、参加者の皆様から高い評価をいただいております。

こうした研究大会の開催や授業実践の積み重ねを通じて、本連盟は、組織的かつ計画的な実践研究と事業推進を行い、現在に至っています。

しかし、近年の急激な少子化の影響により、上川地区でも児童生徒数の減少や学校の統廃合が進み、本連盟の加盟校も年々減少しています。今年度も閉校予定の学校があり、今後も加盟校の減少は避けられない見通しです。

たとえ子どもが一人であっても、私たちへき地校の教師は、共に手を携え、へき地三特性を前向きに捉えなが



ら、「少人数だからこそできる教育」「へき地だからこそできる教育」を積極的に推進し、地域や保護者の信頼に応えていく責任があります。

今後、複式校が増加すると予想される中、本連盟には複式授業の研修機会を担う重要な役割があります。ICTの活用や遠隔授業の展開など、時代の変化に対応したへき地・複式教育の充実に向けて、実態や課題に即した研究を進めていく考えです。

(2) 研究推進計画

本連盟の研究は、これまで、北海道へき地・複式教育研究連盟の研究推進計画に沿って、歩調を合わせながら進めてきました。

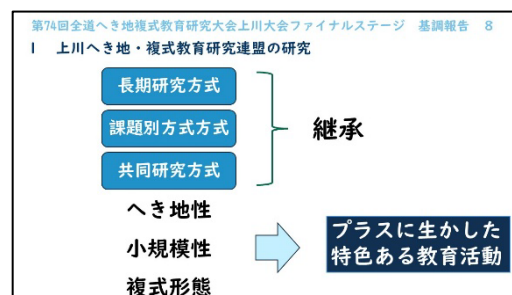
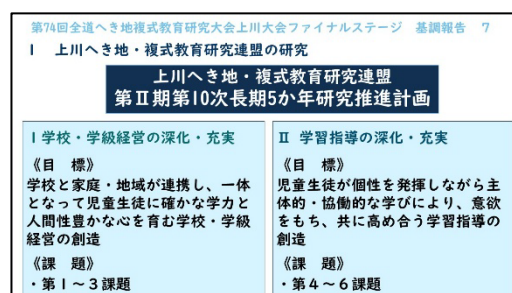
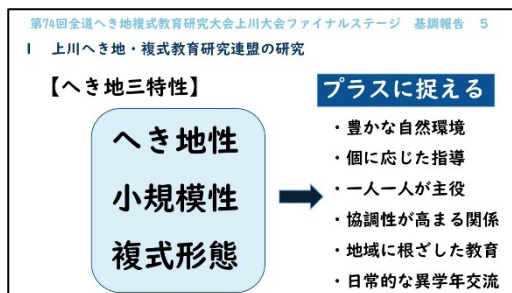
現在の第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画においても、同連盟と連携しながら、これまでの研究・実践の成果と課題を踏まえ、学校や地域の特性を生かした魅力ある教育活動の推進に取り組んでいます。

研究の基本構想としては、研究推進計画との関連を踏まえ、2分野6課題による課題別研究方式を継承しながら、研究の推進に努めています。

また、課題の解明に向けた実践的研究を基盤とし、「長期・課題別・共同研究方式」を継承しています。

へき地三特性を前向きに生かした特色ある教育活動の推進をはじめ、「生きる力」の育成、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「豊かな心」「健やかな体」のバランスのとれた育成を柱とした、へき地・複式教育の充実を図っています。

研究推進計画の詳細、上川へき地・複式教育研究連盟 第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画等につきましては、本大会研究紀要に記載しておりますのでご参照ください。



2 第73回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファーストステージの成果と課題

ファーストステージは、令和6年9月18日・19日の2日間にわたり開催しました。参集型とオンライン配信型を組み合わせたハイブリッド形式で行い、延べ500名以上の方々にご参加いただきました。2日目には、各会場校で分科会を実施し、公開授業・研究発表・研究協議を通じて、各校の研究内容に対して多くの貴重なご意見やご助言をいただきました。これらの取組は、会場校はもちろん、研究協力校や本連盟の加盟校にとっても、研究の深化・充実や授業力の向上につながる有意義な機会となりました。



各分科会から挙げられた成果を4点に整理しました。

(1) 成果

①子どものつまずきに対する支援と授業改善

ヒントカード等の活用により、子どもが自ら考える姿勢を身に付け、ICT教材や半具体物の提示が理解と思考の広がりにも効果を発揮しました。

②ICT活用による学習支援

ロイロノート等による少人数交流が振り返りにも役立ち、遠隔授業では多様な考え方に触れることで思考が深まりました。

③主体的・対話的な学びの定着

表現の型が定着し、子どもは自分の考えを整理して説明できるようになり、課題提示の工夫によって学習意欲も高まりました。

④学習リーダーの育成と学級づくり

学年に応じたリーダー育成が進み、説明や進行が円滑になり、子どもは課題を自分の言葉で捉えて主体的に学習を進める力を育んでいます。

(2) 課題

①主体的な学び

自ら問いをもち主体的に学ぶ力を育むため、教師の適切な評価と支援が求められます。

②ICT活用

ICT活用の格差を解消し効率的な教材準備を進めるため、データ共有体制と研修の充実が必要です。

③授業づくり・指導方法

子どもの主体性を引き出すため、柔軟な学習形態と目的に応じた授業構築が求められます。

④話し合い・学習リーダー

対話の深まりと学習リーダー育成には、目的に応じた話し合いの工夫と支持的な学級づくりが重要です。

(3) 成果と課題のまとめ

このように、ファーストステージでは、4つの観点から着実な成果が見られました。特に、子どものつまずきへの支援や、ICTを活用した交流・振り返りの充実は、子どもの学びの質を高める大きな一歩となりました。一方で、これらの成果と表裏一体となる課題も明らかになりました。主体的な学びのさらなる深化、ICT活用の格差への対応、話し合い活動の質の向上など、今後の改善が求められます。

これらの課題に対しては、授業構成の柔軟化、研修体制の充実、学級づくりの工夫などを通じて、より効果的な支援と学びの環境づくりを進めていく必要があります。

ファイナルステージでは、こうした成果と課題の両面を踏まえ、子どもが自ら学び、深く考え、仲間とともに成長していく学びの姿を、さらに追求していきたいと考えています。

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ 基調報告 12 2 第73回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファーストステージ 【成果】

- ①子どもへの支援と授業改善
 - ・子どもが必要に応じてヒントカードを活用することで、自分で考える姿勢が向上した。
 - ・ICT教材の活用と半具体物の提示により、学習内容の理解と思考の広がりにつながった。
- ②ICT活用による学習支援
 - ・ロイロノートの活用により、少人数での交流が深まり、振り返りにも効果的に活用できた。
 - ・他校との遠隔授業や交流を通し、多様な考え方に触れ、思考を深化させる機会となった。
- ③主体的・対話的な学びの定着
 - ・表現の型が身に付き、子どもが自分の考えを整理して説明できるようになった。
 - ・課題提示の工夫により、知的好奇心や「見通す力」が高まり、学習意欲が向上した。
- ④学習リーダーの育成と学級づくり
 - ・学年に応じたリーダー育成が進み、説明や進行がスムーズに行えるようになった。
 - ・子どもが課題を自分の言葉で捉え、見通しをもって主体的に学習を進める力が育まれた。

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ 基調報告 13 2 第73回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファーストステージ 【課題】

- ①主体的な学び
 - ・子どもが自ら問いをもち、課題に向かって取り組む力が十分に育っていない。
 - ・自分の学び方と学力のギャップに悩む児童もあり、教師の適切な評価や声かけが必要。
- ②ICT活用
 - ・学年や教師のスキルによってICT活用に差が生じ、研修や支援体制の充実が求められる。
 - ・ICT教材の準備に時間がかかるため、データの蓄積・共有による効率化が必要。
- ③授業づくり・指導方法
 - ・教師主導になりがちな場面があり、子どもの主体性を引き出す授業構築が求められる。
 - ・個人→ペア→全体の流れを固定せず、子どもが目的に応じて形態を選べる工夫が必要。
- ④話し合い・学習リーダー
 - ・話し合い場面で対話による深まりが不足するため、目的に応じた話し合いの工夫が必要。
 - ・学習リーダーの技能に個人差があり、日常的な育成と学級の支持的風土づくりが重要。

3 第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージに向けた研究推進 ＜大会研究主題＞

主体的・協働的に学び、
ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成

～児童生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を
伸ばす学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

＜大会スローガン＞

北の大河の源流 上川の地で育つ子らに
未来を切り拓き 夢を実現する力を

本大会では、全国へき地教育研究連盟および北海道へき地・複式教育研究連盟が掲げる研究主題を踏まえ、上川地区における教育実践を基盤としながら、全道の研究成果を交流・共有することを目指しています。

また、今日的な教育課題について協議を深め、へき地・複式教育のさらなる充実と発展を図ることが、本大会の目的です。

これまでの研究大会で得られた成果と課題を踏まえ、7つのミッションを設定し、ファーストステージから継続して取り組んでいます。

＜大会ミッション＞

『ICT を効果的に活用した授業改善や情報発信の在り方』

- ・ ICT を効果的に活用するための授業改善
- ・ 一人一台端末を活用した、個別最適な学び
- ・ ICT を効果的に活用した、協働的な学びの実践
- ・ ICT を効果的に活用した、評価の工夫
- ・ デジタル教科書の効果的な活用
- ・ 遠隔合同授業の効果的な活用
- ・ 授業配信方法の工夫

「長期・課題別・共同研究方式」を継承し、組織的かつ総合的に、研究の累積・継承・発展を図りながら、幅広い内容を対象とした総合的な研究を推進しています。

研究推進計画は5か年を1サイクルとし、前期3年間を「実践研究検証期」、後期2年間を「実践研究整理期」としています。

本大会は、前期の2年次にあたり、2分野6課題との整合性を踏まえながら、各実践を着実に進めているところです。

研究分野1では、地域の特色を生かしながら、魅力ある教育活動と学校経営の充実を目指しています。

研究分野2では、個別最適な学びの実現に向けて、指導方法や ICT の活用、教材や評価の工夫に取り組んでいます。

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ 基調報告 16
3 第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ
に向けた研究推進

【研究の進め方】

第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画

- ①実践研究検証期（令和6～8年度）
→実践研究の成果と課題の整理、創造・発展
- ②実践研究整理期（令和9～10年度）
→実践研究の成果を典型化・定量化→整理・集約

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ 基調報告 17
3 第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ
に向けた研究推進

【研究の内容】

＜研究分野1＞

学校・学級経営の深化・充実
・地域に根差した魅力ある教育活動の創造・発展
・学校、地域の特性を踏まえた研究の推進

＜研究分野2＞

学習指導の深化・充実
・個別最適な学びの実現に向けた指導方法
・ICT活用
・指導目標の設定
・学習過程、教材の工夫
・支援、評価方法の工夫

これまでの研究大会で蓄積された多くの実践を継承しつつ、研究の交流と討議を重視し、成果と課題を共有することで、学校や地域が抱える問題や、新たな教育の在り方を問い直す機会にしたいと考えています。

また、各分科会の会場校と協力校が密に連携し、管内での情報交流を図りながら、これまで築いてきた上川ならではの“へき地・複式教育の魅力”を生かし、さらなる充実と発展を目指してまいります。

大会2日目は、6つの会場校にて分科会を実施いたします。開催要項に概要を掲載し、大会研究紀要に各会場校の研究内容を掲載しておりますので、ご一読いただけますようお願いいたします。

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ 基調報告 17
3 第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ
に向けた研究推進

【研究の内容】

<研究分野1>

学校・学級経営の深化・充実
・地域に根差した魅力ある教育活動の創造・発展
・学校、地域の特性を踏まえた研究の推進

<研究分野2>

学習指導の深化・充実
・個別最適な学びの実現に向けた指導方法
・ICT活用
・指導目標の設定
・学習過程、教材の工夫
・支援、評価方法の工夫

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ 基調報告 19

【分科会会場校】

第1分科会 士別市立上士別小学校



第4分科会 美瑛町立美馬牛小学校



第2分科会 幌加内町立幌加内小学校



第5分科会 富良野市立樹海学校



第3分科会 東川町立東川第二小学校



第6分科会 南富良野町立南富良野小学校



結びに

本研究大会の開催に際し、多大なるご支援、ご助言を賜りました北海道教育委員会をはじめ、北海道教育庁上川教育局、空知教育局、北海道教育大学、上川管内教育委員会連合会、各市町村教育委員会、上川北部・南部PTA連合会等、各教育関係団体の皆様に心より感謝申し上げます。

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ 基調報告 20

第74回全道へき地複式教育研究大会
上川大会ファイナルステージ
＜全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会＞

基調報告

2日間どうぞよろしく願いいたします

上川へき地・複式教育研究連盟 研究部長 長井 番征

3 分散会

分散会Ⅰ 「学校・学級経営の深化・充実」

提言者	【日高管内】	えりも町立えりも岬小学校	教諭	粕谷 知希
助言者	北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班	主査	中山 智洋	様
運営者	辻 由子	道へき・複連研究推進副委員長（根室）		
司会者	有路 直人	道へき・複連研究推進委員（宗谷）		
記録者	平田 佳子	道へき・複連研究推進委員（留萌）		
配信者	船越 一郎	道へき・複連研究推進委員（空知）		
配信補助	久保田正樹	上川大会実行委員		
運営補助	落合 利広	道へき・複連副委員長		
運営補助	嶋本佳世子	道へき・複連監査		

1 発表概要

(1) 提言主題

「ふるさとを愛し、伝統と文化を大切にしながら、多様な考えを認め合い、

自らの学びをつくる子の育成」

(2) 提言概要

本研究の目的は、総合的な学習の時間の充実を通して地域を愛し、目標実現に向けて自ら学びを深める子の育成を目指すことである。提言は二つの仮説に基づいた実践とその成果、課題を提示している。

仮説Ⅰでは、郷土芸能「少年神楽」を通じてふるさとへの愛着を育む活動を実施し、神社見学や練習、町のイベントでの発表を通じて、児童は自己肯定感を高め、郷土芸能への憧れを形成した。一方で、指導内容の固定化によるマンネリ化が課題として挙げられた。

仮説Ⅱでは、地域の教育資源を活用した体験型学習を通じて多様な視点を育む取り組みを実施し、児童は自然や漁業、水産資源について学び、緑化事業や発表会を通じて学びを深めた。ポスターセッション形式の発表を行うことにより、児童は課題を自分事として捉え、多様な視点から物事を考える力を育んだ。しかし、毎年同じ内容に偏りがちな点が課題として挙げられた。

なお、その他の取組として、放課後学習や家庭学習強化週間を全職員で支援し、児童一人一人に応じたきめ細やかな指導を行っていることなどが紹介された。

2 研究協議

＜討議の柱＞ 伝統と文化を継承し、地域と連携しながら豊かな心を育む教育活動の創造と推進

＜全体協議＞

(1) 伝統と文化の「継承」に必要なカリキュラムの精緻化と「創造」への転換

・教育目標との関わりの明確化

伝統文化への取組が、子どもが身に付けるべき資質・能力とどのように関わるのかを明確に設定することが大きな課題である。カリキュラム編成においては、最終的にどのような資質・能力を身に付けるべきかを改めて振り返って明確にすることが重要である。

- ・継承と創造の両立

マンネリ打破には、神楽を例にすると、大人が継承すべき神楽は守りつつ、子ども神楽では地域との対話を通じて子どもが工夫できる余地を残すなど、継承すべきものと改善すべきものを分けて考えるとよい。また、ICT を活用して他地域の神楽と比較することで固定概念が打破され、新たな創造につながる可能性もある。こうした工夫により学習活動の固定化を防ぎ、既存の活動を次に活かす新しい方法や創造を生み出すことが、継続的な推進に必要なのではないか。

(2) 地域人材・資源の活用と連携強化

- ・地域性を活かした実践

地域ごとに異なる伝統や文化を生かした活動が求められる。例として、火山地域では防災教室を火山の噴火と結び付ける実践、酪農・漁業地域では体験学習、他に保育園・中学校との合同運動会などを実施している。高齢者が多い地域では、警察と連携し子どもが特殊詐欺防止のチラシを配布する活動も行われている。特色が乏しい地域でも自然を基盤にした取組が可能で、幼稚園から高校まで一貫した森林教育を町づくりと連動させた例も紹介された。

- ・地域人材の最大限の活用

専門的知識をもつ人材の活用例として、「火山マイスター」による防災教育や、CS 講座での風揚げ・生け花指導が挙げられた。警察や消防と連携し、防犯教室や避難訓練での煙体験、消火器指導など地域協力による実践も共有された。外部との関わりを重視し、招くだけでなく、活動成果の都市部での発表や外部視点を取り入れたカリキュラム再編により、新たな創造が期待される。

(3) 豊かな心を育む教育活動の推進と若手教職員育成

- ・地域への愛着と貢献意欲の醸成

協議のキーワードは「地域への愛着」である。身近なものが都会の人にとって貴重だと気付くことで、新たな愛着が生まれる。「地域に学び、還元し、力になりたい」という子どもたちの貢献意欲を育てていきたい。

- ・へき地教育に携わる教職員の育成

教職員には、働き方改革と両立しながらへき地教育のやりがいを感じられる機会の提供が必要である。若手育成では、学生が学校訪問や地域の温かさを経験することで、へき地教育へのマイナスイメージが卒業時にはプラスに変化する傾向があり、この経験を生かした育成が重要である。

3 助言者から

- ・教育課程の編成では、学習指導要領に基づく資質・能力の育成と、地域ならではの学びの両立が重視される。総合的な学習の時間を軸に、探究的な学びを通して課題を見付けて解決していく力を育て、教科横断的なカリキュラムへとつなげていきたい。
- ・地域資源を活用し、発達段階に応じた系統的な学びを第1学年から第6学年まで積み上げる工夫がされていた。今後、カリキュラムを見直す際には、地域・学校・保護者の願いを踏まえ、幼児教育から高校までをつなぐ一貫性を視点にもつことも重要である。
- ・学校運営協議会などの連携の場では、「育てたい子ども像」の共有が求められる。この目標が教育課程に明確に位置付けられることで、教育活動が具体的に展開され、評価されていく。特に、へき地では、地域性や小規模性の特性を生かした教育活動を展開していきたい。
- ・教育活動に外部の力を取り入れることで社会に開かれた教育課程の実現し、今求められている資質・能力を子どもたちに身に付けさせることを目指していきたい。

分散会Ⅱ 「学習指導の深化・充実 ①」

提言者	【石狩管内】千歳市立駒里小中学校	教諭	岡上 泰子
助言者	北海道教育庁空知教育局教育支援課学校教育指導班	主査	佐々木 明 様
運営者	遠山 昌志	道へき・複連研究推進委員	(日高)
司会者	木下めぐみ	道へき・複連研究推進委員	(オホーツク)
記録者	柏尾 和市	道へき・複連研究推進委員	(釧路)
配信者	吉田 貴	道へき・複連研究推進委員	(後志)
配信補助	牛田美也子	上川大会実行委員	
動画撮影	前田 道弘	道へき・複連事務局長	

1 発表概要

(1) 提言主題

「様々な人々とのふれあいから学び、自分の世界を広げる」

～児童生徒の主体性・コミュニケーション力の向上を目指して～

(2) 提言概要

本校は小規模校で、多様な価値観に触れる機会が少ないため、「様々な人々とのふれあいから学び、自分の世界を広げる」という研究テーマを掲げ、子どもたちの主体性とコミュニケーション力の育成を目指している。

主体的な学びの育成では、「VACU サイクル」を軸に、課題設定や対話的な学びの工夫を重ねてきた。今年度は「主体的に考え行動できる子の育成」をテーマに、理論研修や授業研究を通じて実践を深めている。中学校では ICT を活用し、生徒が自ら学習計画を立てる取組も進んでいる。

コミュニケーション力の育成では、小中合同の活動や市内中規模校との交流、ICT を活用した遠隔交流などを通じて、多様な他者との関わりを経験している。生徒会・児童会が中心となり、主体的に関わる姿が見られている。

地域や海外とのつながりでは、自然や産業体験、英語を使った国際交流などを実施。こうした取組を通じて、子どもたちは自らの世界を広げ、目指す子ども像に近づく学びを積み重ねている。

2 研究協議

<討議の柱> 主体性やコミュニケーション力を育てる学習環境や指導方法の改善と充実

<全体協議>

- ・主体性については、「主体性」と「主体的」の違いを明確にし、学校全体で共通認識をもつことが重要である。その上で、子どもが学びに向かう動機づけにつながるよう、学校として意図的な仕掛けが必要である。
- ・コミュニケーションの力を育むには、外部との連携を通じて相手との関わりを意識させることが大切である。将来、様々な場面で活躍できる人材育成につながるよう、必要性をもたせた取組が求められている。
- ・小規模校ならではの人間関係の近さから、伝えなくても伝わる環境がある一方で、継続的なコミュニケーションや課題設定の難しさが課題となっている。語彙力や表現力の育成も含め、研修の充実が必要である。

- ・アウトプットの場を意図的に設定し、話し合いの型を活用することで効果的な対話を促すことができる。自信をもたせる工夫や小中連携の取組を広げることで、より力を伸ばすことができるのではないかな。

3 助言者から

- ・研究の核心：子どもの姿を基盤とした学び

今回の研究協議では、学校や指導法ではなく「子どもの姿」を基盤に議論が進められていた点が印象的だった。例えば「発表には自分の言葉で語るための理解が必要」といった子ども目線の課題から協議を深めていた姿勢は重要である。学校の目標だけでなく、子どもの学びの様子を観察し、そこから取組を設計することで、学びは持続可能になる。駒里小学校の「様々な人々とのふれあいから学び、自分の世界を広げる」というテーマは、これからの社会を生きる子どもに必要な視点であり、主体性とコミュニケーション力の育成に向けた多様な活動に敬意を表したい。

- ・主体的な学びの育成と今後の展望

「主体的に学ぶ児童生徒の育成」は8年間継続され、先生方が自ら課題を見出し改良を重ねてきた成果である。子どもたちは「学び方」を体得し、「課題提示→見通し→振り返り」の流れを理解し、複式学級の学びを支える仕組みとなっている。今年度は授業や家庭学習に「自己決定の場」を取り入れ、学習方法を自ら選ぶ実践が進んでいる。特に中学生がICTを活用し、自ら課題設定する姿は、学習を「自分ごと」として捉えている証であり、次期学習指導要領の目指す姿そのものである。一方で、選択肢の中から選ぶ段階に留まる課題もあり、今後は「課題を創出・設定する力」の育成が重要となる。日常とのつながりから問いをもたせ、「なぜ？」と考える授業設計や、家庭と学校を往復する学習の循環により、自律的な学びが深まる。

- ・他者との関わりによるコミュニケーション力の育成

学年を超えた交流を日常的に行うことは、小規模校の強みであり、児童が役割を担い発表やリードを経験する中で、リーダーシップや協働する力が育まれる。市内や他校との交流も計画的に実施されており、ICTを活用した「ゴロゴロひろば」は、技術的な壁を越えた素晴らしい実践である。これにより、子どもたちは閉じた関係性から抜け出し、他校の児童とつながることができる。今後は、遠隔授業の共有へと発展させ、多様な意見に触れることで思考の広がりが期待される。これは子どもだけでなく、教師間の研修にもつながる可能性がある。また、「ふるさと探検隊」のような活動も刺激となるが、単発で終わらず、学びの意味や次への活かし方を考える機会を設け、カリキュラムに系統的に位置付けることで、学びの連続性が確保される。

- ・まとめと今後の期待

今回の実践は、小規模校の課題を乗り越え、学びを深める先進的モデルである。今後の期待として、①自ら問いを立てる力の育成、②クラウド等を活用した学びの成果と課題の可視化が挙げられる。これにより、子ども自身が学びの質や成長を自覚し、PDCAサイクルを効果的に回すことが可能となる。子どもたちが自分の学びをデザインし、地域や世界へつながる力を育むことを今後も期待している。

分散会Ⅲ 「学習指導の深化・充実 ②」

提言者	【胆振管内】中札内村立上札内小学校	校長	菅原 晴彦
助言者	北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班	主任指導主事	蒔田 和樹 様
運営者	羽根 秀哉	道へき・複連研究推進委員（胆振）	
司会者	北川 美香	道へき・複連研究推進委員（檜山）	
記録者	鬼塚 健次	道へき・複連研究推進委員（石狩）	
配信者	佐々木道彦	道へき・複連研究推進委員（渡島）	
配信補助	田村健太郎	上川大会実行委員	
運営補助	高館 正司	道へき・複連監査	
運営補助	長澤 啓二	道へき・複連事務局次長	

1 発表概要

（１）提言主題

「自分の考えをもち、表現し合える子どもの育成」

～学習場面に応じてＩＣＴを効果的に活用することで、

主体的に学び、自分の考えを表現できる授業システムの確立～

（２）提言概要

十勝管内では、へき地・複式教育研究大会や課題別実践交流研修会、教師力向上ワークショップなどを通じて、教育課題の共有と実践の工夫が継続されている。また、北海道教育大学との連携により、授業公開や児童理解交流を通じて、授業力の向上にも取り組んでいる。

本校では、山村留学制度や緑の少年団活動、愛鳥モデル校活動など、地域と連携した特色ある教育活動を展開している。子どもたちは自然体験や地域交流を通じて、人とのつながりや地域への思いを育みながら、学びの質を高めている。特に緑の少年団活動では、「学ぶ・守る・愉しむ」の３つのテーマのもと、バードウォッチングや植樹、カヌー体験など多様な体験活動を行い、自然の大切さや地域を思う心を育んでいる。さらに、総合的な学習の時間や異校種間連携も取り入れ、教育活動の充実を図っている。また、ICTは、子どもたちが自分の考えをもち、表現し合える学びを支える重要なツールとして活用している。個別最適な学びと協働的な学びを行き来する手段としても位置付け、授業のシステム化や学習スタイルの統一にもつなげている。

2 研究協議

<討議の柱> 地域資源やICT機器の効果的な活用による学習過程の改善と教育活動の充実

<全体協議>

- ・山村留学や小規模校の学習スタイルに関する質問が出され、ICTを活用した協働的な学びの具体例などが共有された。
- ・地域資源の活用では、高齢化による学習機会の減少への不安が示され、CSの活用や外部機関との連携による活性化が求められる。酪農や海など地域の資源を活かした学びは、人との関わりによって支えられており、地域の力で子どもたちが育てられている。山村留学では、外国籍児童への対応が新たな課題となっている。

- ・教育課程では、小規模校から大規模校への移行に際し、児童が安心して参加できるようアイスブレイクや行事の段階的連携が有効とされた。他校との交流には準備の負担が課題であり、工夫が求められている。
- ・ICT 活用では、アナログとデジタルの融合による協働的な学びを進めることが大切である。ロイロノートや動画の撮影、生成 AI の活用など、効果的な活用方法があり、学習方法の選択肢が広がる一方で、書く力の低下や端末の違いによる戸惑いも課題として挙げられた。

3 助言者から

(1) 小規模校の実態と課題

- ・小規模校といっても、地域によって実態はさまざまで、それぞれに特色がある。産業や住民構成、移住者の有無、外国籍の児童生徒の増加など、市町村によって状況は異なる。
- ・地域のまちづくり戦略とも関係があり、各学校では地域の特性を活かした工夫を凝らした取組が行われている。
- ・学習指導においては、小規模・少人数の利点を最大限に活かすことに難しさもある。
- ・少人数であるため一人一人に目が届きやすく、丁寧な指導は可能だが、それだけでは「個に応じた指導」とは言えない。育成を目指す資質・能力に向けて、個別のニーズに応じた指導の充実が求められる。単に手厚くするのではなく、資質・能力を明確にし、それに基づいた指導を実現していく必要がある。

(2) 教育課程

- ・幼児教育は、環境を通して行う教育であり、遊びを通じて多くのことを学ぶ。保育者が環境を構成し、意図的に関わるのが重要である。遊びの中には多様な学びが含まれており、学校教育においても、特色ある活動の中に学びを位置付け、それを意図的・計画的に仕組んでいく必要がある。
- ・教育課程の編成にあたっては、育成を目指す資質・能力を明確にし、学校や児童生徒の実態を踏まえて、意図的かつ計画的に教育をプログラムすることが重要である。そして、それを実施・評価・改善するというプロセスを大切にしていく必要がある。
- ・次期学習指導要領では、学校に一定の裁量が与えられる見込みであり、柔軟な教育課程の編成が可能となる。したがって、今からその準備を進めていくことが求められる。

(3) ICT の利活用

- ・ICT は「デジタル学習基盤」として位置づけられており、一人一台端末やクラウド環境、情報機器、ネットワーク、ソフトウェアなどで構成される学習環境全体を指す。クラウド環境も含めて、これらが一体となってデジタル学習環境を形成している。
- ・現在は、端末の使い方にとどまらず、クラウドやネットワーク環境を含めて、教育にどのように統合していくかが問われる段階にある。ICT を探究的な活動と組み合わせることで、情報の収集・整理・分析の力が高まり、学びの質が向上する。時間の効率化も図れるため、他の活動に時間を充てることが可能となり、学びをさらに深めることができる。
- ・そのためには、子どもたちに必要な資質・能力を的確に捉え、それに基づいた教育課程を編成し、環境を最大限に活用して実施していくことが重要である。

第 74 回全道へき地複式教育研究大会

上川大会ファイナルステージ

Ⅲ 分科会会場校の研究および配信方法



第 3 分科会 東川町立東川第二小学校

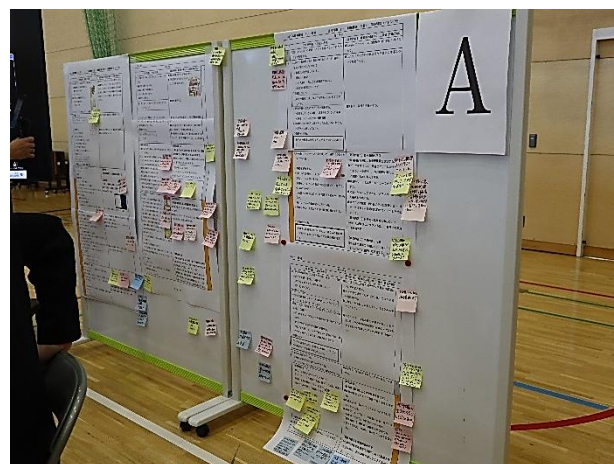


第 4 分科会 美瑛町立美馬牛小学校

第1分科会

【研究主題】

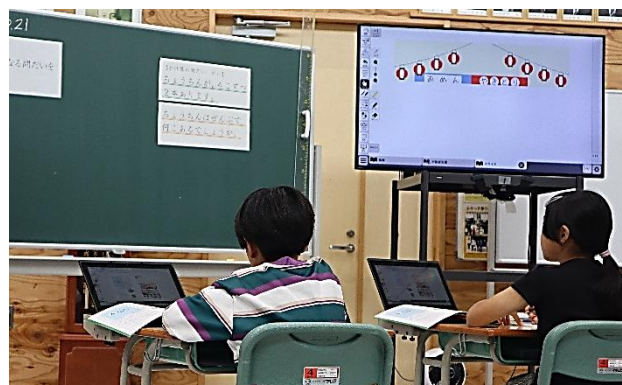
自ら課題を見つけ 共に学び 高め合う子 の育成
～児童が主役となる授業づくり～



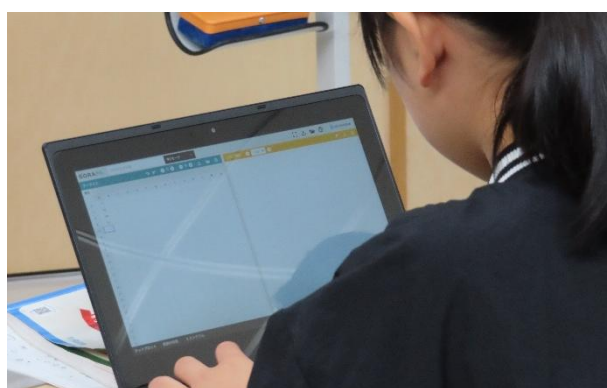
士別市立上士別小学校

I 授業の様子

【公開授業①：第1・2学年】



【公開授業②：第5・6学年】



Ⅱ 研究の概要

1 研究主題

自ら課題を見つけ 共に学び 高め合う子 の育成
～児童が主役となる授業づくり～

2 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

令和3年に中央教育審議会から出された答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～では、予測困難で、急激に変化する時代の中で子どもたちが育むべき資質や能力が示された。そこでは、「令和の日本型学校教育」の姿として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が示された。また、それらの学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の必要性も示された。義務教育の段階においては、学校ならではの児童同士の学び合いや、多様な他者と協働した探究的な学びを充実させること、一人一人の興味・関心等に応じて意欲を高めること、やりたいことを深められる学びを提供することなどの必要性も示された。

(2) 小規模校・少人数学級としての課題

小規模・少人数の学校における学習では、①「一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたきめ細かな指導が行いやすい。」②「意見や感想を発表できる機会が多くなる。」③「教師が複数の学年間を行き来する間、児童生徒が相互に学び合う活動を充実させることができる。」と言われることが多い。反面①「固定化、序列化された人間関係や相互評価からの脱却が困難な場合がある。」②「同学年における切磋琢磨、磨き合いの場の設定が困難なときがある。」③「集団規模が小さいため、学習活動が制限されてしまうことがある。」④「教師の目が届きすぎて、困っていると支援が入るため、自分の力で何とかしなくてよくなる。」ことも多い。

本校においても、前述の内容の通り、児童個々の学習状況の把握、意見・発表の場の設定等メリットを生かしながら学習活動を進めることが多い。しかしながら、児童間での序列化により、学習を進めるとき、学力上位の児童が周りの児童の様子を気遣いながら、自力解決、あるいは集団解決を提案する場面が見られる。また、話し合い活動においては、一見活発に進められているように見えるが、学力上位の児童が中心となり、学力下位の児童は受動的に参加することが固定化されている。そのため、根本的に学習に対して主体的に取り組めているのか疑問が残るところである。話し合い活動も同様に、協働的な学習のように見えて、実際には教える側と教えられる側が固定された一方的な関係となってしまう、学びを深めるには至らない実態が見られる。

(3) 本校の児童の学習の実態、および、令和6年度までの本校の研修について

令和3年度～令和6年度の全国学力・学習状況調査、および標準学力検査の結果を経年比較する学年による多少の誤差はあるものの、国語科、算数科において、特に思考・判断・表現の観点で課題があることを分析することができた。

本校では、令和2年度から令和4年度までの3年次計画で、「算数科」を窓口とし、自ら考え、学び合う子の育成に迫ってきた。3年間の取組で、「説明をしたり、話し合ったりすることが上手にな

った。」「学習リーダーを中心に、自分たちで学習を進められるようになった。」といった成果がある一方、「見通しをもって学習を進めることができない。」「思考よりも正解を求める傾向にある。」「集団思考で話し合いが深まらない。」といった課題が挙げられた。

この課題の解決を図るため、研修の目的を「自己調整学習を身に付ける。」として取り組んだ。しかしながら、手立ても不十分なまま進めたこともあり、課題を解決するだけの結果に至らなかった。さらに、研修自体の検証を行った際、客観的判断資料や結果を数値化できず可視化できたものとはならないところ、また、子どもたちにも十分目的を達成したと言える力がつかなかったことから、改めて研修内容を大きく見直すこととした。

令和6年度では、「個別最適な学び」「自己評価の工夫」「対話的・協働的な学び」の3つを重点に置き、研修を進めることとした。この取組により「個別最適な学びを設定することにより、学力下位層の児童も必要に応じてヒントを効果的に活用し、自分の考えをもてるようになった。」「評価の観点と基準を児童に示すことにより、児童自身の自己評価が行いやすくなった。」といった成果がある一方で、「自主的に学習を進めることはできるが、主体的ではない。」「意見や考えを話したり、聞いたりすることはできるが、言いつばなし、聞きつばなしとなっていることが多い。」「小規模ならではの課題が解決しているとはいいがたく、児童の発表した考えが更に発展し、深い学びにつながる対話的・協働的な学びをめざす必要がある。」などの課題が挙げられた。また、令和6年度全国学力・学習状況調査、令和6年度CRTの結果においても全国平均や全道平均を下回っており、特に、論理的思考をはじめとする、思考・判断の観点が課題となっている。そのため、令和7年度では、「算数科」を窓口とし、主体的に学習に取り組む授業づくりと学習内容の定着により重点をおき、研究を進めることとした。

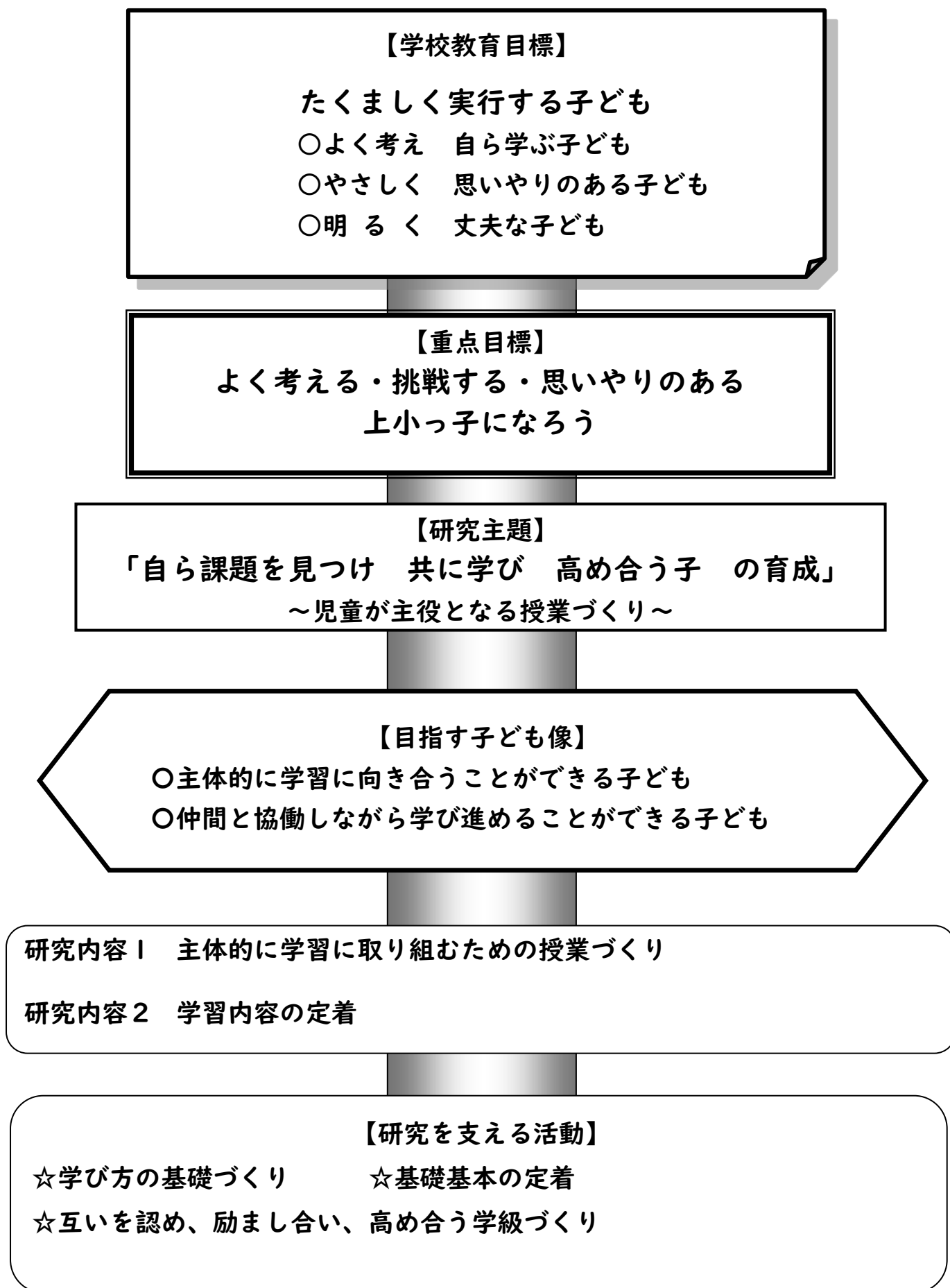
本校の目指す児童像から

本校の学校教育目標は、「たくましく実行する子ども」であり、これを具現化するために次の3つの目指す児童像が掲げられている。

「・よく考え自ら学ぶ子ども ・やさしく思いやりのある子ども ・明るく丈夫な子ども」
に示される児童の育成を念頭に令和6年度からの3年計画の研修を行うものとする。

3 北海道へき地・複式教育研究連盟 第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画との関連

【研究分野1】学校・学級経営の深化・充実
〈研究課題1〉 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進を図る
○学校の教育目標の達成に向け、児童生徒の確かな学びを創る経営の創造と推進 ○児童生徒一人一人の個性や能力を生かし、多様な体験を重視した教育活動の充実
【研究分野2】学習指導の深化・充実
〈研究課題6〉 主体意識をもって仲間と共に高め合う学習過程の改善・充実を図る。
○主体的・対話的で深い学びの視点から、多様な考え方や個人差、学年差に応じた学習過程の改善と充実 ○教科の特質に応じた問題解決的な学習の指導過程の改善と充実



5 研究内容

研究内容1 主体的に学習に取り組むための授業づくり

児童が主体的に学習に取り組むためには、直面する課題をどう判断し、行動するか迷ったとき、誰かに解決法を求めるのではなく、「こうしたらどうだろう」と自身の判断を提示し、行動していく必要がある。本校の児童は、学びに向かう自主性はあるが、主体的に学習に取り組む力が十分に身に付いていない。そこで、本校では、主体的な学びを次のように押さえ、達成するためのステップを踏むこととした。

主体的な学び

課題を自分事として捉え、解決に向けた見通しをもち、様々な見方・考え方を働かせながら解決に向かい、その学びの過程を振り返り、よさや課題点を見いだして次につなげようとする。

<p>ステップ1(低学年)の目標</p> <p>○学ぶことに興味や関心をもつ。</p> <p>【児童の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題に対して興味、関心をもっている。 ・問題に対して疑問をもっている。 	<p>【教師側の手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題提示の工夫 ・発問の工夫 	<p>【共通目標】</p> <p>○粘り強く取り組む。</p> <p>【児童の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題解決のために最後まで思考している。 <p>【教師側の手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思考の視覚化の工夫 ・児童一人一人に合わせた指示や声かけ
<p>ステップ2(中学年)の目標</p> <p>○見通しをもつ。</p> <p>【児童の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の課題をつかんでいる。 ・本時の問題を既習事項と結び付けて考えている。 	<p>【教師側の手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題提示の工夫 ・児童が個人で既習事項の振り返りができる工夫 	
<p>ステップ3(高学年)の目標</p> <p>○自己評価を分析する。</p> <p>【児童の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時や単元で身に付けた力や課題に気付いている。 ・これまでの学びをもとに、新たな見通しをもっている。 <p>○自己のキャリア形成の方向性と関連付ける。</p> <p>【児童の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身に付けた力や考え方を他教科や学校生活に生かしている。 	<p>【教師側の手立て】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価するための工夫 ・児童一人一人に合わせた声かけ 	

① 個別最適な学びの適切な場面設定と手立て

主体的に学習に取り組むためには、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていかなければならない。まず、個別最適な学びにおいては、適切に場面を設定することが重要である。そこで個別最適な学びの適切な場面を次のように押さえた。

本校における個別最適な学びの場面

児童間の学力差が生まれる単元や一単位時間

この場面で、児童間の学力差を少なくすることで、どの児童も自分の考えをもち、主体的に学び向かうことができると考えた。また、このような場面において個別最適な学びを適切に設定するためには、児童一人一人の実態を把握する必要がある。そこで、児童のつまずきを把握するために、つまずきの具体的な内容と把握方法の共通理解を図った。

【予想される児童のつまずき】

(1) 内容理解

①言語領域 ②視覚領域 ③聴覚領域

(2) 知識

①既習事項の理解 ②系統的学習内容の理解

(3) 思考

①ワーキングメモリ ②論理思考 ③見通す力 ④マルチタスク

(4) 技能

①運動機能 ②空間認識、色覚、数の概念 等

(5) 特性

【把握方法例】

(1) 前学年や就学前の引き継ぎ

(2) 各種テスト

①CRT ②チャレンジテスト ③知能検査 ④発達検査等

(3) 授業、日常生活を通して

(4) 健康診断

(5) レディネステスト

児童のつまずきを把握し、個別最適な学びでは、一人一人に合わせた指導方法を準備していく。昨年度までは、ワークシートの作成、具体物といった手立てを講じてきた。個別最適化を図り、さらに児童に主体的に学ぶ力を育成するためには、思考を補助するための手立てや更に考えが発展できる手立てなど学力下位層から上位層まで児童一人一人に合わせた手立てを講じていく。

学力差を縮める手立ての一つとして、ICT の活用がある。しかし、ICT だのみの授業を行うのではなく、アナログとデジタルを併用しながら、効果的に活用していく必要がある。

ICT の効果として、本校では、以下のような内容の共通理解を図った。

ICT の効果

(1) 視覚的效果

① 視覚化 ② 動画の活用

(2) 聴覚的效果

① 聞き取りのサポート ② 繰り返し聞くことができる。

これらの効果を踏まえ、児童の実態に応じて次のような ICT の活用に取り組んでいる。

ICT の活用例

- ・ICT 端末やノートの写真の共有
→Classroom、chat、ロイロノート
- ・スライドショーを活用した動画による思考の補助
→スライド
- ・思考ツールを用いた思考の整理
→デジタル教科書、ロイロノート
- ・半具体物を用いた思考の整理
→デジタル教科書、ロイロノート
- ・デジタル学習教材の活用
→新ネットレの学習教室「<https://nll.red/>」

こうした様々な手立てを講じていくだけでなく、本校では個別最適な学びの場面において「同時間接個別指導」も取り入れていく。「同時間接個別指導」を取り入れることで、教師が状況に応じて、臨機応変に児童の指導にあたる事が可能となり、よりよい学びへとつなげていくことができると考えた。

② 対話的・協働的な学びの工夫

本校だけでなく、小規模校・少人数学級としての課題でもある、小集団であるための学習活動の制限。集団思考の際に、少人数であるため、建設的な話し合いをするために必要となる個々の発言が少なく、対話に深まりをもたせられないという



現状にある。また、序列化された人間関係から、学力上位層の一方からの発言で対話が成立しないこともある。

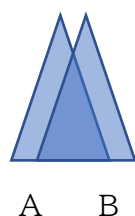
本校においては対話的な学習のイメージを下のような図で共通理解している。図については、①考えのもてない児童Bは、考えをもつ児童Aに吸収されたり、吸収されるのを待っていたりする。②ほぼ同じ考えで新たな考えに発展しない。③考えが反発し合い、一致点しか見いだせない。または、一致点で妥協してしまう。④児童A・Bの考えがさらに発展し、深い学びにつながる。と、押さえている。今回の研修としては、①、②の状態になりやすい小規模校の課題解決を考えている。

【対話的な学習のイメージの図】

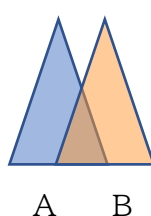
①吸収



②同意・同調



③反発・妥協



④対話的⇒深い学び



④の状態になるためには教師の適切な問いかけが必要となってくる。そこで本校では、適切な問いかけとして次のような手立てをとっている。

問い返しの例	発問の例
意味を問う	「どういう意味かな？」
理由や根拠を問う	「どうしてそうなったの？」
方法を問う	「どのように求めたのか？」
考えの続きを問う	「～さんの続きが言える？」
気持ちを問う	「～さんの気持ち(考え)わかる？」
相違点を問う	「これと、これは、何がちがうの？」
共通点を問う	「どこが(何が)同じなの？」

また、対話的・協働的な学びを行っていくためには、児童の話す力、聞く力そして、話し合う力の育成も必要となっていく。そこで、それぞれの力を身に付けるために段階的な目標を設定した。

聞き方	
低学年	○話している人を見て、大事なことを落とさずに聞く。
中学年	○話している人が、何を伝えたいかを考え、自分の考えと比べながら聞く。
高学年	○話している人を見て、自分の考えと比べながら聞き、それに対する意見をもつ。

話し方	
低学年	○伝えたいことや相手に応じて、声の大きさや速さを考えながら話す。
中学年	○「まず」「次に」「そして」など話す順序を考えながら話す。 ○自分の伝えたいことがよく伝わるように理由を挙げながら話す。
高学年	○教科の用語を使って話す。 ○自分の伝えたいことを簡潔にし、内容が明確になるように話す。

話し合い方	
低学年	○発表後には「同じです」「他にもあります。」「付け足します。」などと反応する。
中学年	○自分の考えと相手の考えを比べ、共通点や差異点を見いだしていく。
高学年	○自分の考えと相手の考えを比べ、より妥当な考えを見いだしていく

研究内容 2 学習内容の定着

確かな学力とは、知識や技能はもちろん、学ぶ意欲や自分で課題を見つける力を指している。確かな学力を身に付けるためには、一単位時間や単元の学習内容をしっかり定着させる必要がある。そこで、学習内容の定着を図るため、3つの共通理解を図った。

【学習内容の定着のために】

- ・評価の重点化
- ・自己評価と実際の到達度の一致
- ・学び方の習得と選択する力の育成

まず、「評価の重点化」については、単元計画の際に「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を単元のどこで重点的に評価するのかを決める。それにより、児童の学習内容の定着度を把握し、次の授業改善へとつなげていく。

次に、「自己評価と実際の到達度の一致」については、「一単位時間の中で評価規準を提示」「評価問題への取組」を実施することで評価の一致を行う。自己評価の内容としては、その一単位時間で学んだ力が本当に身に付いたかを振り返る必要がある。しかし、本校児童の実態として、「頑張って取り組んだから今日の学習はできた。」といった自己評価をしてしまうことがある。そこで、児童が行う自己評価と学習の最終場面で行う学習評価がかい離しないように、自己評価と学習の到達度を一致させていく。

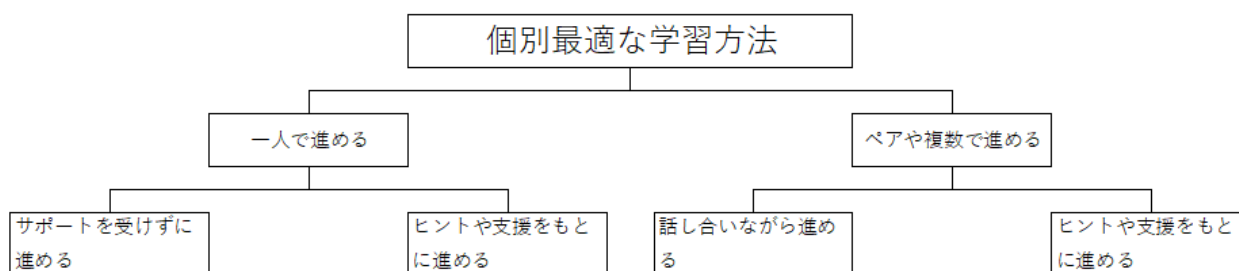
「一単位時間の中で評価規準を提示」では、A 評価、B 評価、C 評価を吟味し、児童にもわかる言葉で提示していく。また、A 評価、B 評価、C 評価については、教師側で共有し、評価の基準をそろえるようにしていく。「評価問題への取組」では、その授業で身に付けるべき力が本当



に身に付いたかを確認することができる問題を教師が選定し取り組ませる。

自己評価については、ICT を活用しデータ上に蓄積させていくことで、いつでも自分の学びを振り返られるようにしていく。また、自己評価と実際の到達度が一致していない児童については、教師側から適切な言葉がけや評価を行うことで、自己評価する力を高めていく。

最後に「学び方の習得と選択する力の育成」については、次の 4 つの学び方を習得させていく。



児童一人ひとりがさまざまな学び方を知り、そのよさを理解し、その時々学習場面に合った学び方を選択できるようにすることで、学習内容の定着を図ることができる考える。本校では、学び方のパターンを設定・確認し、学び方を習得させ、最良の学び方を選択・決定する力の育成に取り組んでいる。特に、ペアや集団活動においては、児童間の序列化により、学力上位層が下位層を気遣い、自身にとっての最良の学び方を選択できなかったり、下位層が受動的で、双方向の対話的な学びにならなかったりすることがある。そこで、人間関係や学力に左右されることなく、自身の最良の学び方を選択できるよう、併せて指導している。また、自身の学び方について評価を行わせることで、学ぶ力の習得を図っていく。学習の到達度の振り返りだけでなく、個別最適な学び方における自己評価も行っている。学び方をどのように計画し、どのように学習を進めたのかを記録し、最適な学びであったかを振り返り、成果や反省点を次時に生かすようにしている。PDCA サイクルを活用し、学び方のレベルアップを図っている。

6 これまでの成果と課題

(1) 成果

- ・学力下位の児童に合わせた授業の工夫を進めていくことで 4 月よりも自分で考えようとする姿勢が向上してきた。特に下位層の児童が必要に応じてヒントを活用していこうとする姿が見られ始めてきた。
- ・学び方を提示して児童が選択できるようにし、課題解決の場面で自分の考えに不安をもつ児童が周囲と考えたり、確かめ合ったりすることで自信をもって集団解決に臨むことができた。
- ・思考を補助するためのヒントを ICT を活用して提示したことにより、自ら取りに行く手間や恥ずかしさなどが軽減された。
- ・ICT を活用して半具体物としての活用や動画の作成できることから、学力下位層にとってイメージしやすくなり、自分の考えをよりもつことができるようになった。

(2) 課題

- ・学習を進めることはできる。しかし、児童一人一人が問いをもち、課題に向かって取り組んでいく主体的に学ぶ力が不十分である。

- ・今年度は、思考を補助するためのヒントカードを提示し学習を進めさせてきたが、児童一人一人に合わせた学びとはなっていないこともある。そのため、児童の学習状況を把握し、一人一人に合わせた手立てが必要となってくる。
- ・論理的に考える思考力が十分に身に付いていない。
- ・自分のしたい学び方と自分の学力が一致していない、「ヒントを見る＝自分はできていない」と感じてしまう児童もいるため、メタ認知を促す教師の適切な評価と言葉かけが必要である。
- ・ICT を積極的に活用する学年としていない学年が見られる。学年、児童の実態にもよるが、積極的なICT の活用をしていく必要がある。しかし、ICT だけの授業ではなく、デジタルとアナログを併用させる必要がある。
- ・ICT に強い教師、苦手な教師によって手立ての行い方が異なることが考えられる。ICT の活用の仕方については研修を深めていく必要がある。

7 指導案

第1・2学年 算数科学習指導案

日 時：令和7年9月18日（木） 第1校時
児 童：士別市立上士別小学校第1・2学年
第1学年2名 第2学年2名 計4名

指導者：福川 洋枝

1 単元名

第1学年 「10より大きいかず」（教育出版）

第2学年 「かけ算」（教育出版）

2 単元について

(1) 教材観

第1学年	第2学年
<p>0から10までの数、および時計をよむための素地として11、12を指導してきた。数の数え方、よみ方、書き方、順序、系列、大小について理解を図るとともに、集合数と順序数の違いも捉えられるようにした。また、日常生活では、日付、金銭など、10を超える数についても触れてきている。</p> <p>本単元では、20までの数の数え方、よみ方、書き方、数の構成、順序、系列、大小について理解を図るとともに、30程度までの数についても数えられるようにする。ものの数を10のまとまりをつくって数え、「10と3で13」のように「10といくつ」とみたり、「10が2個で20」とみたりするなど、2位数を10のまとまりに着目して捉える見方について理解を図る。そして、この見方を広げ、「20と5で25」とみたり「10が3個で30」とみたりすることで、より大きな数の表し方への見通しをもたせる。</p> <p>また、本単元では、$10+3$、$13-3$のような十＋1位数とその逆の減法、$15+2$、$18-3$のような繰り上がりのない十何＋1位数とその逆の減法についても扱う。「10といくつ」とみる数の構成の見方を生かし、ブロックなどを用いて計算のしかたを考え説明できるようにしたい。</p> <p>ここでの指導は、十進位取り記数法の素地となるものである。これを踏まえ、「大きなかず」では、「一の位」「十の位」の用語とともに2位数及び簡単な場合の3位数についての理解を深めていく。</p>	<p>2ずつ、5ずつ、あるいは10ずつのまとまりをつくって数を数える学習や、規則的におはじきを並べる活動などをおして、乗法の素地となる経験をさせてきた。また、長さの学習で、任意単位を用いて基準量のいくつ分として全体量を表すことも扱ってきた。</p> <p>本単元ではこれらの経験をもとに、日常の具体的な事象と結びつけて乗法が用いられる場面を捉え、乗法の意味や式の表し方を理解させていく。乗法は、基準量「1つ分の大きさ×いくつ分」という式の意味を、具体物の操作や言葉などと結びつけながら理解させたい。</p> <p>また、乗法の意味の理解を図ったあと、5の段、2の段、3の段、4の段の九九を構成していく。3の段では、「かけられる数」の用語も指導し、4の段ではこの用語を意識させながら乗法の性質を生かして構成できるようにする。十分な時間をとって習熟を図るとともに、その過程では、九九にはさまざまなきまりがありそうだという見通しをもたせて、次単元「かけ算九九づくり」の6の段以降の九九の構成に活用させていく。</p>

(2) 児童観

第1学年	第2学年
<p>本学級の児童2名は、学習に対して真面目に取り組むことができる。</p> <p>算数科においては、自ら進んで問題を解いたり、自分の考えを堂々と発表したりする姿が見られた。しかし、自分の考えを発表することに満足して、友達の考えを聞き流しがちである。友達の考えを理解しようとしながらよく聞くこと、「どのように考えたのか」や「なぜその答えになったのか」などについても考えることが課題である。</p>	<p>本学級の児童2名は、学習に対して興味をもち、意欲的に取り組むことができる。</p> <p>算数科においては、2名とも課題解決や自分の考えをもち発表することに意欲的である。しかし、基礎的な知識・技能の定着の度合いに差があるとともに、2名のうち1名が、計算の速さ、立式、正答率、図形や直線の正確さや、最後まで話を聞くこと、最後まで集中して取り組むことが課題である。</p>

(3) 指導観

第1学年	第2学年
<p>(2) 児童観の課題を踏まえ、次の3つの手立てを取り入れる。</p> <p>1つ目、10のまとまりに着目し、「10といくつ」</p>	<p>(2) 児童観の課題を踏まえ、次の2つの手立てを取り入れる。</p> <p>1つ目、同じ大きさのまとまりに着目し、基準</p>

<p>という見方で数の構成を考えること、また、活動の中で、1ずつ数えるばかりでなく、2ずつ、5ずつ数えることのよさにも目を向けさせたい。さらに、数の構成の見方を生かして10より大きい数の計算のしかたを考えることができるように指導したい。</p> <p>2つ目、数の見方と計算のしかたを別々のものとしてでなく、深く関連付けて理解できるように、ブロックを操作したり、線で囲んだりして具体的に考え、説明する活動を大切にしたい。</p> <p>3つ目、デジタル教科書などを使うことで、間違いを気にすることなく、画面上で繰り返しブロックを操作したり、数字を使ったりして考えさせたい。</p> <p>指導においては、自分の考えをもつことももちろん、友達の考えを聞くことで、自分の考えを確認したり修正したり補充したりできるよさを感じられるよう、交流の時間も大切にしたい。</p> <p>また、個別での課題解決場面で同時間接指導を取り入れることで、つまづいている児童やよりよい解決方法を模索している児童など、学びに即した指導となるように進める。</p> <p>単元の学習の終わりには、身のまわりのさまざまな場面で用いられている数を見付け、算数の学習を生活に生かそうとする態度を養っていききたい。</p>	<p>量のいくつ分として全体量を求めるという乗法の意味は、単位の基本となるものである。例えば、「3人ずつ4つ分」の場面は、$3+3+3+3$という加法の式で表すことができるが、これを、3×4と表すことで、1つ分の数が3で、それが4つあることが示される。このような乗法の式のよさを捉えながら、身のまわりから「同じ数のいくつ分」とみられるものを見つけたり、乗法の式に表したりする活動に取り組み、その意味と用いられる場面について理解を深めさせたい。</p> <p>2つ目、デジタル教科書などを使うことで、間違いを気にすることなく、画面上で繰り返し操作できるようにして意欲を継続させたい。</p> <p>指導においては、いろいろなものの数を乗法の式で表す活動に取り組みながら、その答えを求めるときには、同数累加の計算をすることに気付かせる。</p> <p>また、個別での課題解決場面で同時間接指導を取り入れることで、つまづいている児童やよりよい解決方法を模索している児童など、学びに即した指導となるように進める。</p> <p>九九の暗唱に終始するのではなく、乗法の性質についての気付きを引き出しながら、自身で九九を構成していけるようにし、自ら進めていく意欲をもたせ、主体的に学ぶ態度を培っていききたい。</p>
---	---

3 単元の目標

第1学年	第2学年
<p>30程度までの数について理解し、数えたり表したり比べたりすることができるとともに、数の大きさを具体物や図などを用いて考え表現する力、及び繰り上がりのない2位数と1位数の加法、減法の計算のしかたを考える力を身に付ける。また、数に親しみ、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学ぶ態度を養う。</p>	<p>乗法の意味や式について理解し、計算することができるとともに、図や式などを用いて計算のしかたを考える力を身に付ける。また、乗法について考えることに進んで関わり、乗法を用いるよさに気付き生活や学習に活用しようとする態度を養う。</p>

4 単元の評価規準

(1) 第1学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>30程度までの数の数え方、よみ方、書き方、数の大きさや順序について理解し、数を数えたり比べたりすることができる。また、繰り上がりのない2位数と1位数の加法、減法の計算ができる。</p>	<p>数のまとまりに着目し、数の大きさの比べ方や数え方を考え、それらを日常生活に生かしている。また、繰り上がりのない2位数と1位数の加法、減法の計算のしかたを考えている。</p>	<p>数に親しみ、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学ぼうとしている。</p>

(2) 第2学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>乗法の意味や式について理解し、1位数と1位数との乗法の計算が確実にできる。</p>	<p>数量の関係に着目し、計算の意味や計算のしかたを考えたり、計算に関して成り立つ性質を見いだしたりしていると同時に、その性質を活用して、計算を工夫したり計算の確かめをしたりしている。</p>	<p>乗法の計算に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気付き、生活や学習に活用しようとしている。</p>

5 単元の指導計画

(1) 第1学年

時	目標	評価の観点		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 2 本時	20 までの数の数え方、よみ方、表し方を理解する。	・20 までの数について、数え方、よみ方、表し方を理解している。	・10 より大きい数について、2ずつや5ずつ、10 ずつなどの数のまとまりを用いて数えたり、「10 とあといくつ」などの見方を用いて表し方や比べ方を考えたりしている。	・身のまわりのものの個数を数えたり、数えたものを数字で表したり、30 程度までの数を身のまわりから見つけ、その大きさを捉えたりしようとしている。
3	数のまとまりに着目しながら、20 までの数を数えることができる。	・20 までの数について、2 とびや5 とびで数えかたを理解し、数えたり表したりすることができる。		
4	20 までの数を合成・分解することができる。	・20 までの数を 10 といくつに合成・分解することができる。		
5	20 までの数を数直線上に表し、数の順序、系列を理解する。	・20 までの数について、数直線での位置、順序、系列を理解している。		
6	20 までの数の大小を理解する。	・20 までの数の大小を理解し、比べることができる。		
7	20 台、30 台の数の数え方、よみ方、表し方を理解する。	・20 台、30 台の数について、数え方、よみ方、表し方を理解している。		
8	十＋1位数の加法と、その逆の減法の計算のしかたを理解する。	・十＋1位数の加法と、その逆の減法の計算ができる。	・十＋1位数及び十何＋1位数の加法と、その逆の減法の計算のしかたを、数の構成をもとにブロックなどを用いて考えている。	
9	繰り上がり、繰り下がりのない、十何＋1位数の加法と、その逆の減法の計算のしかたを理解する。 [10 をひくひきざん]*	・繰り上がり、繰り下がりのない、十何＋1位数の加法と、その逆の減法の計算ができる。		
10	身のまわりの数に関心を持ち、30 くらいまでの数を探することができる。	・身のまわりから 30 くらいまでの数を探することができる。		

(2) 第2学年

時	目標	評価の観点		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 2	乗法の意味、乗法の式について理解する。	・乗法の意味や式の表し方を理解している。	・乗法が用いられる場面を具体物や図などを用いて考え表現するとともに、乗法の式を、具体的な場面に結びつけて考えている。	・乗法の意味や計算のしかたについて、累加や乗法に関して成り立つ簡単な性質を用いるなどして主体的に考えたり、乗法を生活や学習に活用しようとしたりしている。
3	乗法の式について理解を深める。 [おはじきをつかってあらわそう!]	・乗法が用いられる場面で、「1 つ分の数」「いくつ分」「全部の数」の関係を捉えて式に表すことができる。		
4	乗法の答えの求め方を理解する。	・乗法は累加で答えを求めることができることを理解している。		
5	乗法の式を、具体的な場面と関連づけて用いることができる。	・「1 つ分の数」と「いくつ分」の意味について理解を深め、乗法の式を具体的な場面と関連づけて用いることができる。		
6	[つながるミカタ] 身のまわりのものを乗法の式で表すことができる。	・身のまわりから乗法が用いられる場面を見だし、乗法の式に表すことができる。		
7	5の段の九九を構成することができる。	・乗法九九について知り、累加などによって、5の段の九九を構成することができる。	・計算のしかたを振り返り、乗法に関して成り立つ簡単な性質を見いだしたり、それをもとに乗法を構成したりしている。	
8 9	5の段の九九に習熟する。	・5の段の九九を唱えることができる。		
10	2の段の九九を構成することができる。	・累加などによって、2の段の九九を構成することができる。		
11 12	2の段の九九に習熟する。	・2の段の九九を唱えることができる。		
13	3の段の九九を構成することができる。	・答えがいくつずつ増えているかなどを用いて、3の段の九九を構成することができる。		

14	3の段の九九に習熟する。	・3の段の九九を唱えることができる。	
15			
16	4の段の九九を構成することができる。	・乗数と積の関係などを用いて、4の段の九九を構成することができる。	
17	4の段の九九に習熟する。	・4の段の九九を唱えることができる。	
18			
19 本時	乗法の式に合う問題を作ることができる。	・乗法の式に合う問題を作ることができる。	
20	学習内容の理解を確認し、確実に身につける。	・学習内容を理解し、基本的な問題を解決することができる。	・「かけ算」の学習のよさや見方・考え方を振り返っている。

6 本時の指導

(1) 本時の目標

第1学年	数のまとまりに着目しながら、20までの数を数えることができる。
第2学年	乗法の式に合う問題を作ることができる。

(2) 研究との関わり

【研究内容1について】

①個別最適な学びの適切な場面設定と手立て

両学年とも、本時の学習内容を児童が見通すことができた段階から、同時間接指導の展開とした。これは、学びの主体は自分たちであると強く意識づけることをねらいとしている。

第1学年は、ブロックを操作し、10のまとまりを作って考えることに加え、デジタル教科書を使って、画面上でブロックを操作したり、数字を使ったりして考える。

第2学年は、画面上の挿絵に、同じ数ずついくつ分のまとまりを作って囲むことで、解決に向けて意欲を高めたり、繰り返し確かめたりして考える。

また、同時間接指導を位置付けることで、指導者が流動的にわたりを行い、つまづいている児童やよりよい解決方法を模索している児童など、学びに即した指導ができると考えた。

本時内の直接・間接・同時間接指導の設定と、そのための具体的な手立て

第1学年児童の活動	第2学年児童の活動
前時のふりかえり 練習問題 <div>ICT 機器の活用 ・ミライシードによる練習問題</div>	課題をつかむ
問題をつかむ 課題をつかむ	課題を解決する <div>ICT 機器の活用 ・デジタル教科書を使ってまとまりを作ったり消したりする</div>
課題を解決する 練習問題に取り組む 振り返りを行う <div>ICT 機器の活用 ・ロイロノートを使って何度でも数えることができる ・AIドリルによる練習問題 ・ロイロノートによる振り返り</div>	交流する 振り返りを行う <div>ICT 機器の活用 ・デジタル教科書を使って説明する ・ロイロノートによる振り返り</div>

直接指導（白） 間接指導（灰色） 同時間接（オレンジ色）

②対話的・協働的な学びの工夫

両学年とも、交流場面での話す・聞く力を身に付けることで、今後学年が上がった際に、対話的・協働的な学びを実現することにつながると考える。また、交流場面で挿絵などを使い、話す内容を視覚化しながら伝え合うことで、理解を深められると考える。

【研究内容2について】

児童と教師の学習内容の到達度の一致を図るため、授業の終末において、評価問題に取り組んだり、振り返りやまとめの記述をしたりする時間を設定する。その際には、「おおむね満足できる」状況（B）の具体的な姿について児童が的確に捉え、その姿を明確にして活動できるようにする。

知識・技能	第1学年
本時の評価規準	20までの数について、数え方、よみ方、表し方を理解している。
児童への提示	10のまとまりをつくってかぞえる、10が2つで20とわかる。

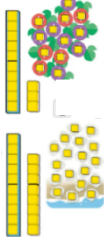

思考・判断・表現	第2学年
本時の評価規準	基準量のいくつ分を見分け、乗法の式に合う具体的な場面についての問題を考えている。
児童への提示	同じ数ずつ何個分かをたしかめて、かけ算のしきに合う問だいを考える。

(3) 本時の展開 (2/10)

直接指導 (白)

間接指導 (灰色)

同時間接 (オレンジ色)

第1学年	
	○学習活動・児童の思考
7	<p>○10のまとまりに着目する考えを振り返る。</p> <p>①朝顔を数えた画像を見ながら。 数え方を振り返る。 ・10と3で13。</p> <p>②貝を数えた画像を見ながら 数え方を振り返る。 ・10と8で18。</p> <p>○ミライシード (大きいかず1) で復習する。</p> 
8	<p>○問題をつかむ。</p> <p>なんびきいるでしょうか。</p> <p>○予想する。 ・10をこえてると思う。 ・20くらいだと思う。 T: どうやって数えたらいいかな? ・ブロックを置いて数える。 ・1つずつ数字で数える。 T: 何匹いるか工夫して数えてみよう。 ○課題をつかむ。</p> <p>(か) くふうしてかぞえよう。</p> <p>・課題をノートに書き、挿絵を貼る。</p> 
5	<p>○見通しをもちノートに書く。 ・ブロック ・数字</p> <p>○課題を解決する。</p> <p>①ブロックを置いて数える。 ・とんぼに1個ずつブロックを置く。 ・ブロックケースを使って10のまとまりにして並べる。 ・10が2つできたから20 答え20匹。</p> <p>②数字で数える。 ・数字で1匹ずつ数える。 ・10のまとまりで囲む。 ・10のまとまりが2つできたから20 答え20匹。</p>
25	<p>○考えを伝え合う。</p> <p>①ブロックを置いて数えました。 ・とんぼに1個ずつブロックを置きます。 ・置いたブロックを数えます。 ・10が2つできました 答えは20匹です。</p> <p>②数字で数えました。 ・とんぼに数字を置いていきます。 ・10のまとまりで囲むと、10のまとまりが2つで</p>

【研究内容】 ●教師の関わり □評価(評価方法)

●クロームブック・のりを用意しておく。
●朝顔や貝とブロックとを1対1に対応させ、10のまとまりとして並べる画像を見ながら振り返らせる。(前時にデジタル教科書を使った画像などをロイロノートに保存し、振り返られるようにする。)

●拡大した挿絵を黒板に貼り問題を提示する。
●挿絵を配りノートに貼らせる。(一人2枚)

●児童の発した考えに対して、適切に問い返し、課題を見出せるようにする。

【研究内容1】
同時間接指導による学習展開を設定する。

【研究内容1】
ブロックを操作して数えたり、繰り返し確かめができるように画面上で操作したりして数えられるようにする。



□まとまりに着目して数えている。
(操作・ノート)

●ブロックの操作は、黒板に貼った、拡大した挿絵を使って発表させる。
●数字で数えた発表は、ロイロノートをテレビ画面に映して発表させる。

<p>きました。答えは20匹です。 T：2つのやり方でできたね。同じところはどこかな？ ・10のまとまりをつくって数えたこと。 ・10のまとまりが2つできて20になったこと。 ○まとめを行う。</p> <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>⑤ 10のまとまりをつくってかぞえる。10が2つで20。</p> </div>	<p>●2つの共通点を問い、10のまとまりをつくることの大切さに気付かせる。</p>
<p>○練習問題に取り組む。 ・ミライシード(AIドリル10より大きいかず)に取り組む。 ○振り返りを行う。 【今日の目標は、10のまとまりをつくって数えること。10が2つで20とわかることでした。できましたか？】 ◎：できた ○：もうすこし 【10のまとまりが2つで20になる問題を、正解できましたか？】 ◎：できた ○：できなかった</p>	<p>【研究内容2】 「概ね満足できる」状況(B)の具体的な姿をわかりやすい文で示し、できたかどうかで振り返られるようにする。(ロイロノート)</p>

(19/20)

第2学年		
○学習活動・児童の思考	【研究内容】 ●教師の関わり □評価(評価方法)	
<p>T：かけ算の式で表せるものがかくれているよ。わかるかな？ ・輪投げが3個ずつ3本ある。 ・お面が3個ずつ4種類ある。 T：例えばちょうちんはどうか？ ・4個ずつ2本ある。 T：ちょうちんで問題をつくるとどうなるかな？ ・ちょうちんが4個ずつ2本あります。ちょうちんは全部で何個あるでしょうか。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>⑥ 絵を見て、しきがかけ算になるもんだいをつくりましょう。</p> </div> <p>○課題をつかむ。</p> <div style="border: 1px solid blue; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>⑦ かけ算のもんだいをつくろう。</p> </div>	<p>●挿絵と問題文をテレビ画面に映す。 ●「同じ数のまとまり」があることに目を向けさせる。</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p>●ちょうちんを例に挙げて、握らせていく。</p> <p>●問題を提示する。 ●絵から見つけたかけ算を発表させ、本時で取り組む、式のカードを黒板に提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 2×3 4×6 5×3 </div>	7
<p>○課題を解決する。 ○数のまとまりを囲み、自分の考えがまとまってからノートに書く。 ◎りんご飴が2本ずつ3個並んでいる。 ・りんごあめが2本ずつ3個あります。りんごあめは全部で何本あるでしょうか。 ◎焼き鳥が4個ずつ6本並んでいる。 ・焼き鳥が4個ずつ6本あります。焼き鳥はぜんぶで何個あるでしょうか。 ◎射的の景品が5個ずつ3段並んでいる。 ・射的の景品が5個ずつ3段あります。景品は全部で何個あるでしょうか。 ○1つできたら、2つ目3つ目を作る。</p>	<p>【研究内容1】 同じ数ずついくつ分のまとまりを見つけ、画面上で囲むことが繰り返しできるようにする。</p> <p>●既習のかけ算の問題文を例として黒板に提示して、問題文の言葉がわからないときに見て考えられるようにする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>例「だんごが3こずつ5本あります。だんごはぜんぶで何こあるでしょうか。」</p> </div>	13
<p>○交流する。 ◎2×3 りんご飴の問題を作りました。 ・りんごあめが2本ずつ3こあります。りんごあめは全部で何本あるでしょ</p> <div style="text-align: center;">  </div>	<p>【研究内容1】 同時間接指導による学習展開を設定する。 ●児童が数のまとまりを書き込んだ挿絵をテレビに映す。 ●3問終わった児童は、かけ算の式で表せるものについて、他にも問題を作ってよいこと</p>	

<p>◎ 4 × 6 焼き鳥の問題を作りました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・焼き鳥が4個ずつ6本あります。焼き鳥はぜんぶで何個あるでしょうか。 <p>◎ 5 × 3 射的の景品の問題を作りました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・射的の景品が5個ずつ3段あります。景品は全部で何個あるでしょうか。 <p>○ 振り返りを行う。</p> <p>T：かけ算の問題をつくるのに大事にしたことは何だったかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ数ずつが何個分かあること。 <p>【今日の目標は、同じ数ずつ何個分かをたしかめて、かけ算の式に合う問題を考えることでした。できましたか？】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎：できた ○：もうすこし ・わかったこと、気をつけたいことなどを書く。 <p>○ 練習問題に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スマイルドリル 13－6 	<div data-bbox="619 159 778 315" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="624 338 783 490" data-label="Image"> </div> <p>を伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 児童から出なかったものについては、予め用意した挿絵に書き込みながら、児童に説明させる。 <p>【研究内容2】</p> <p>「概ね満足できる」状況（B）の具体的な姿をわかりやすい文で示し、できたかどうかで振り返られるようにする。</p> <p>（ロイロノート）</p> <p>「わかったこと」「気をつけたいこと」などを記述させ、本時で習得した内容の理解やつまづきに気付いているかを確認する。（ノート）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● スマイルドリルを使って練習問題に取り組む。
--	---

第5・6学年 算数科学習指導案

日 時：令和7年9月18日（木）第2校時
 児 童：土別市立上土別小学校第5・6学年
 第5学年4名 第6学年5名 計9名
 指導者：加藤 保

1 単元名

第5学年 「割合とグラフ」（教育出版）
 第6学年 「データの见方」（教育出版）

2 単元について

（1）教材観

第5学年	第6学年
<p>データの活用について、これまでに一次元表、二次元表、棒グラフ、折れ線グラフを指導してきた。統計グラフの特徴として、棒グラフは数量の大小を比較するのに適していて、折れ線グラフは数量の変化の様子を表すのに適していることも理解させてきた。また、第4学年の二次元表の指導に関連して、統計的な問題解決の方法、すなわち「問題－計画－データ－分析－結論」という統計的探究プロセス、いわゆるPPDACサイクル（以下PPDACサイクル）についても触れた。</p> <p>本単元では身のまわりの事象から問題を見いだし、目的に応じて集めたデータについて、初めに棒グラフに表して分析する。そして、その結果を見て、割合についても比べたいという新たな目的を見いだして、割合を表すグラフとして帯グラフと円グラフを導入し、よみ方やかき方を理解させる。全体と部分、部分と部分の間の関係が捉えやすくなるという割合グラフの特徴について、棒グラフや折れ線グラフとの違いを意識させながら理解を図っていく。</p> <p>グラフのよみ取りについては、全体と部分の関係、部分と部分の関係など、多面的な見方で考察できるようにするとともに、数量と割合の違いに着目し、年次変化に合わせて合計数が増加している場合など、割合は減少していても実際のデータとしては増加している場合があることについて、筋道を立てて考え説明できるようにする。</p>	<p>統計的なデータをグラフや表に表すことについて、これまでに、量的データの大きさを示す棒グラフ、時系列データの変化の様子を示す折れ線グラフ、データの割合を示す帯グラフと円グラフ、及び一次元や二次元の表を指導してきた。また、第5学年では、統計的な問題解決の方法について知らせ、「問題－計画－データ－分析－結論」というPPDACサイクルによって考察することを経験させた。</p> <p>本単元では、これらの既習事項を生かし、日常の事象について目的をもって調べ、統計的な手法を適切に活用して分析したり判断したりする活動を行う。その過程では、データ全体を表す指標として平均値、中央値、最頻値などの代表値について指導するとともに、量的データの分布の様子を捉えることにも着目させ、ドットプロットに表し、更に度数分布を表す表や柱状グラフについても理解を図る。</p> <p>統計的な問題解決の対象は不確実な事象であるため得られた結論について、それが妥当なものであるかどうかを批判的に考察することが大切である。そして、更に検討が必要であると判断した際には、再度問題解決の過程を行うことになる。このような一連のプロセスを支えるものが活動の最初にある目的意識である。子どもたちにとって身近で関心の高い題材を工夫し、目的意識をもって問題解決に取り組めるようにしていく。</p>

（2）児童観

第5学年	第6学年
<p>学習に対する意欲はあるものの、こだわりのある児童が多く、自分の学習方法に固執する傾向が強い。そのため一つ一つの学習に丁寧に取り組んだり、最後まで粘り強く取り組んだりすることが苦手であり、基礎的な学習内容をしっかりと習得できているとは言い難い。</p> <p>算数の学習でも前向きに問題解決に取り組むが、それまでの学習内容が定着していないため、見通しをもてなかったり自分の力だけでは取り組むことができなかったりすることも多い。また、児童同士の対話の場面では、学力差が明確なため、すぐに教えてもらおうとしたり、安易に解き方だけを口出してしまったりすることが多いという課題がある。</p>	<p>学習に対する意欲はあるが、学習への姿勢にやや緩さが見られ、基礎的な学習内容が定着していない児童が大半である。その児童たちは、学力テストの結果でもアンダーアチーバーと判定されており、学習に取り組む姿勢の改善を図っているところである。</p> <p>算数の課題解決に向けての意欲は高く、既習事項を生かして取り組むことができる。意見交流を行うときには、学力差にとらわれることなく、自分の意見を述べたり、他人の意見を求めたりすることができる。</p> <p>しかし、学力が定着していないため間違った解決方法で取り組んだり、途中であきらめてしまったりすることが多いという実態がある。</p>

(3) 指導観

第5学年	第6学年
<p>児童の実態を受けて、学習の展開の中では、積極的に同時間接指導を取り入れている。これは解決に向けた取り組みに困難さを感じている児童に、積極的に働きかけができるように考えているからである。帯グラフや円グラフの表し方について、割合を表すグラフという目的に着目して、全体を1(100%)として部分の割合で区切って表すことの意味を捉えることを適切に指導したい。</p> <p>また、目的に応じて適切な表やグラフを選んで分析し、自分の考えを伝えたり、主張したりする活動も扱う。土別市の農業従事者数や、農産物のデータを提示し、児童自らが問題を見出し、PPDAC サイクルをもとに問題を解決していく態度を養っていききたい。</p>	<p>解決に向けて適した方法を見出せないでいる児童に個別に働きかけができるよう、同時間接指導を多く取り入れるようにしたい。</p> <p>データの特徴を表すときには、最大値や平均値、中央値、最頻値など、さまざまな見方で考察するとともに、それぞれの代表値の目的に着目し、どの値を用いるのが妥当であるか、その値によって何がいえるのかについて批判的に考察することが大切である。更に、データの特徴を一つの数値で表すだけではなく、データの分布に着目してその特徴を捉えようとするなど、多面的な見方で考察できるようにすることも大切である。そこで、土別市の農業従事者の年齢に着目して、統計的な問題解決を図るようにした。自分たちでデータを整理分析し、傾向を読み取り考察できるようにしたい。</p>

3 単元の目標

第5学年	第6学年
<p>帯グラフと円グラフ及び統計的な問題解決の方法について理解し、目的に応じてデータを収集し、データの特徴や傾向に着目してグラフに的確に表現し、それらを用いて問題を解決したり、解決の過程や結果を多面的に捉え考察したりする力を身に付ける。また、その過程を振り返り、グラフの表現のよさに気づき生活や学習に活用しようとする態度を養う。</p>	<p>代表値や、度数分布を表す表とグラフ、及び統計的な問題解決の方法について理解し、目的に応じてデータを集めて分類整理し、代表値などを用いて問題の結論について判断するとともに、その妥当性について批判的に考察する力を身につける。また、その過程を振り返り、統計的な問題解決のよさに気づき生活や学習に活用しようとする態度を養う。</p>

4 単元の評価規準

(1) 第5学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>円グラフや帯グラフの特徴について理解し、表したりよみ取ったりすることができる。また、データの収集や適切な手法の選択など統計的な問題解決の方法を知っている。</p>	<p>目的に応じてデータを集めて分類整理し、データの特徴や傾向に着目し、問題を解決するために適切なグラフを選択して判断し、その結論について多面的に捉え考察している。</p>	<p>データの収集とその分析について、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気づき学習したことを生活や学習に活用しようとしていたりしている。</p>

(2) 第6学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>代表値の意味や求め方、度数分布を表す表やグラフの特徴及びそれらの用い方を理解している。また、目的に応じてデータを収集したり適切な手法を選択したりするなど、統計的な問題解決の方法を知っている。</p>	<p>目的に応じてデータを集めて分類整理し、データの特徴や傾向に着目し、代表値などを用いて問題の結論について判断しているとともに、その妥当性について批判的に考察している。</p>	<p>データを収集したり分析したりすることについて、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気づき学習したことを生活や学習に活用しようとしていたりしている。</p>

5 単元の指導計画

(1) 第5学年

時	目標	評価の観点		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 2	帯グラフ、円グラフのよみ方を理解する。	・割合を表すグラフとして、円グラフや帯グラフの特徴を理解し、よみ取ることができる。	・データを集めて分類整理し、データの特徴や傾向に着目し、目的に合ったグラフの表し方について考えている。	・データを分析したりグラフに表したりすることについて、目的意識をもって主体的に考えたり、得られた結論について多面的に捉え考
3 4	帯グラフ、円グラフのかき方を理解する。	・帯グラフや円グラフのかき方を理解し、表すことができる。	・データを集めて分類整理し、データの特徴や傾向に着	

			目し、目的に合ったグラフの表し方について考えている。	察したりしようとしている。
5	複数の帯グラフを比べて、データを正しくよみ取ることができる。	・複数の帯グラフを比べて、データをよみ取ることができる。	・データからよみ取った結論について多面的に考察している。	
6 本時	士別市の農業の特徴について、「士別市の作物別戸数」「士別市の耕地と一経営者あたりの耕地面積」「士別市の農家の年齢分布」のグラフからデータをよみ取り、多面的に考察する。	・「問題-計画-データ-分析-結論」といった統計的な問題解決の方法を理解している。	・士別市の農業の特徴について、「士別市の作物別戸数」「士別市の耕地と一経営者あたりの耕地面積」「士別市の農家の年齢分布」のグラフからデータをよみ取り、多面的に考察している。	
7	学習内容の理解を確認し、確実に身に付ける。	・学習内容を理解し、基本的な問題を解決することができる。	・「割合とグラフ」の学習のよさや見方・考え方を振り返っている。	

(2) 第6学年

時	目標	評価の観点		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	データ全体を表す指標としての平均値の意味を理解する。	・集団の特徴を表す値として用いられる平均の意味について理解している。	・統計的に解決する問題を設定し、その解決のために適したデータを収集し分類整理して分析して、結論を得ている。また、結論や問題解決の過程が妥当であるかどうかを別の観点や立場から批判的に考察している。	・データを分析して問題を解決することについて、目的意識をもって主体的に考えたり、得られた結論の妥当性について批判的に捉え考察したりしようとしている。
2 3	ドットプロットの意味と用い方や、代表値として最頻値や中央値を用いる場合があることを理解する。	・ドットプロットの特徴や用い方、及び最頻値、中央値などの代表値の意味や求め方を理解している。		
4	データの分布の様子を度数分布表に表し、その特徴をよみ取ることができる。	・度数分布表の特徴や用い方、階級と度数の意味を理解し、度数分布表に表したりよみ取ったりすることができる。	・度数分布表や柱状グラフからデータ全体の分布の様子を捉えたり、代表値などを用いたりして、問題の結論について判断している。	
5	度数分布表をもとに柱状グラフに表し、それをよみ取ることができる。	・度数分布を表すグラフとして、柱状グラフの特徴を理解し、柱状グラフに表したりよみ取ったりすることができる。		
6 7	様々な観点からデータを分析し、その結果を根拠にして結論をまとめることができる。	・代表値の意味や求め方、度数分布を表す表やグラフの特徴及びそれらの用い方を理解している。		
8	柱状グラフが用いられる場面や見方について理解を深める。		・年令別人口の柱状グラフ(人口ピラミッド)をよみ取り、変化の様子について多面的に考察している。	
9 本時 10	問題を統計的に解決するための計画を立て、ドットプロットや度数分布表、棒グラフから、士別市の農業従事者の年齢の傾向をよみ取ることができる。	・「問題-計画-データ-分析-結論」といった統計的な問題解決の方法を理解している。	・身のまわりの事象について、目的に応じて、統計的な問題解決の方法で考察している。また、結論や問題解決の過程が妥当であるかどうかを別の観点や立場から批判的に考察している。	
11	学習内容の理解を確認し、確実に身に付ける。	・学習内容を理解し、基本的な問題を解決することができる。	・「データの見方」の学習のよさや見方・考え方を振り返っている。	

6 本時の指導

(1) 本時の目標

第5学年	士別市の農業の特徴について、「士別市の作物別戸数」「士別市の耕地と一経営者あたりの耕地面積」「士別市の農家の年齢分布」のグラフからデータをよみ取り、多面的に考察する。
第6学年	士別市の農業従事者の年齢の傾向をよみ取るための計画を立て、ドットプロットや度数分布表、棒グラフに表すことができる。

(2) 研究との関わり

【研究内容1について】

①個別最適な学びの適切な場面設定と手立て

両学年とも、本時の学習内容を児童が見通すことができた段階から、同時間接指導の展開とした。これは、学びの主体は自分たちであると強く意識づけることをねらいとしている。それによ

って、自分に合った学習方法を選択し、解決に向けてのプロセスを自分でデザインできるようにした。本時でも、データを分析することを意識し、自分たちでグラフやドットプロットに表すことで、解決に向けて意欲を高めることができるとともに、見通しをもった取組ができるようにしたい。

また、同時間接指導とすることで、指導者が流動的にわたりを行い、つまづいている児童、よりよい解決方法を模索している児童など、一人一人の学びに即した指導ができると考えた。

本時内の直接・間接・同時間接指導の設定と、そのための具体的な手立て

第5学年児童の活動	第6学年児童の活動
動画の視聴 <div>ICT 機器の活用 ・NHK for school の動画視聴</div>	問題をつかむ 課題をつかむ
問題をつかむ 課題をつかむ	解決の方法を考える <div>対話的・協働的な学び ・解決に向けた具体的な手立てを自分たちで話し合って考える</div>
グラフの作成 <div>ICT 機器の活用 ・Google スプレッドシートを用いたグラフづくり</div>	データをもとにドットプロットや度数分布表、棒グラフに表す。 <div>ICT 機器の活用 ・SGRAPA（統計グラフ作成アプリ）を用いたドットプロットや度数分布表、棒グラフの作成</div>
課題の解決 結論を考える	

直接指導（白） 間接指導（灰色） 同時間接（オレンジ色）

②対話的・協働的な学びの工夫

両学年とも、一授業時間の中で、明確な発表・交流の場の設定はしていない。これは、疑問点や気付いたことがあれば、自由に話しかけることができるよう日常から授業実践を続けてきているためである。

第5学年は、本時の中で ICT を活用して、グラフに表す場面がある。ここでは、自分が作成したグラフと他者が作成したグラフを比較することを促すようにする。その結果、互いの考えを交流することになり、問題解決に向けて、それぞれが考えた土別市の農業の様子について考えを深めることができるようになると考えている。

第6学年では、まず解決の方法を考える場面で具体的な手立てについて交流することを促す。更に、農業従事者に関するデータを SGRAPA に入力する場面で、作業を分担・協力して取り組むことを考えさせたい。データを協力して入力することで、農業従事者の年齢の傾向について互いの意見が交流できると考えている。

【研究内容2について】

①学習内容の定着

児童と教師の学習内容の到達度の一致を図るため、授業の終末において評価問題に取り組んだり、振り返りやまとめの記述をしたりする時間を設定する。その際には、「おおむね満足できる」状況（B）の具体的な姿を児童にとって捉えやすい形で提示する。

思考・判断・表現	第5学年
本時の評価規準	土別市の農業の特徴について、「土別市の作物別戸数」「土別市の耕地と一経営者あたりの耕地面積」「土別市の農家の年齢分布」のグラフからデータをよみ取り、多面的に考察している。
児童への提示	グラフを見て、土別市の農業の特ちょうについて考えたことを記述している。
知識・技能	第6学年
本時の評価規準	土別市の農業従事者の年齢の傾向をよみ取るための計画を立て、ドットプロットや度数分布表、棒グラフに表している。
児童への提示	土別市の農業従事者の年齢の特ちょうをよみ取るための計画を立て、ドットプロットや度数分布表、棒グラフに表している。

(3) 本時の展開 6 / 7 時間 直接指導 (白) 間接指導 (灰色) 同時間接 (オレンジ色)

第 5 学年		
	○学習活動・児童の思考	【研究内容】●教師の関わり□評価(評価方法)
5	○NHK for school の動画「グラフを選べるようになるう」を視聴する。	●Google クラウドに動画の URL を貼り付けておく。
8	○土別市の農産物ごとの農家の戸数のデータ(資料 1)を見て何のグラフか考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・農家の人数を表している。 ・稲作が一番多い。 ・この人数から考えると北海道ではない。 ・土別市の農家のデータだ。 ○問題をつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 土別市の農業にはどのような特ちょうがあるのでしょうか。 </div> ○特徴を調べるためのデータを確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・農業をしている人の数 ・農業をしている人の年齢 ・耕地 ・1人あたりの耕地面積 ○特徴をつかむためにはどうしたらよいのか考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・グラフに表したらいい。 ○課題をつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 土別市の農業の特ちょうをグラフからよみ取ろう。 </div>	●これまでの社会科や総合的な学習との関連について想起させる。 ●資料 2、資料 3 を提示する。
32	○Google スプレッドシートを使って、目的に合わせたグラフに表す。 ○課題を解決する。 <ul style="list-style-type: none"> ・2020 年の農業をしている人のグラフを見ると、稲作をしている人が一番多い。 ・農業をしている人の割合の変化を見ても、稲作の 1 位は変わらない。 ・いも類・豆類が 2 位で、野菜類が 3 位なのも変わらない。 ・働いている人の数は減ってきている。 ・それなのに一人当たりの耕地面積は増えている。 ○結論を考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 土別市の農業は、稲作が中心で、働く人の数は減ってきているが、一人当たりの耕地面積は増えている。 </div>	【研究内容 1】個別最適な学び →同時間接指導による学習展開を設定する。 <ul style="list-style-type: none"> ●データを活用して、最適なグラフに表すことができるよう支援する。特に階級の幅をどのように調整するかを考えさせる。 ●効果的に ICT を活用することができるよう支援する。 ●児童が作ることができないグラフは、操作方法を指導し作成する。 ●棒グラフは数量、折れ線グラフは数量の変化、帯グラフは割合が視覚的に抑えやすいことを想起させる。 【研究内容 1】対話的・協働的な学びの工夫 →他の人が作成したグラフも見て、お互いの意見を交流する。 【研究内容 2】学習内容の定着 □土別市の農業の特徴について考えたことを、適したグラフを選択して記述する。(ノート)

9 / 1 1 時間

第 6 学年		
	○学習活動・児童の思考	【研究内容】●教師の関わり□評価(評価方法)
	○土別市の農業をしている人の年齢に着目して、気付いたことを話し合う。(資料 4) <ul style="list-style-type: none"> ・2015 年と比べると 2020 年は減っている。 ・若い人は少ない。 ○問題をつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 土別市で農業をしている人の年齢は、どのように変わっているのか比べましょう。 </div> ○抽出したデータを比べるためにどうしたらいいか考える。(資料 5) <ul style="list-style-type: none"> ・データをドットプロットや度数分布表、棒グラフに表す。 ・散らばりの様子や代表値に着目する。 ・SGRAPA を使ってドットプロットや度数分布表、棒グラフに表すことで傾向をつかめる。 	●これまでの社会科や総合的な学習との関連について想起させる。 <ul style="list-style-type: none"> ●データを分析するために取り組んできた学習を想起させる。 ●分析するために必要となるものは何なのかを考えさせる。 ●元のデータでは数が多く処理できないことから、2015 年の農業従事者数から 100 人、2020 年から 84 人を抽出したデータ(資料 5)を提示する。
		5

○課題をつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> データを分せきして、土別市の農業をしている人の年齢について結論を考えましょう。 </div>		
○解決の方法を考える。 ・SGRAPA の活用の仕方について考える。 ・データを SGRAPA に入力するために、役割を分担する。	●効果的に ICT を活用することができるよう支援する。	8
○課題解決を行う。 ・協力して SGRAPA にデータを入力する。 ・ドットプロットや度数分布表、棒グラフから、農業従事者の年齢の傾向について考える。 ・それぞれの年度の代表値を考える。 ○振り返りを行う。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 今日の学習が、どのように進めることができたのかを書きましょう。 </div>	【研究内容 1】 →同時間接指導による学習展開を設定する。 ●階級の幅をどのように調整するかを考えさせる。 ●作成しながら気付いたことがあったときには、メモをさせる。 ●必要なドットプロットや度数分布表、棒グラフを作成できたら、分析を行うよう促す。 【研究内容 1】対話的・協働的な学びの工夫 →データを入力しながら、気付いたことを交流する。 【研究内容 2】学習内容の定着 □土別市の農業従事者の年齢について結論を考えるために、自分が取り組んだことを記述する。（ノート）	32

8 研究協議の記録

(1) 授業者振り返り

①1・2年生

本時では、ICT を効果的に活用しながら学習を進めた。ICT の活用により、児童は間違いを恐れずに取り組む姿が見られ、誤りに気付いた際には自ら修正し、子ども同士で意見を交わしながら学び合う場面が多く見られた。このように、ICT が安心して挑戦できる学習環境づくりに寄与していることがうかがえた。また、ブロックを指で操作する活動は、直感的な理解を促すとともに、振り返りの際に自らの考え方を確かめる手立てとして有効であった。さらに、自分の考えを大画面に映して発表する場面では、堂々と発表しようとする姿が見られ、表現力の向上にもつながっていた。

同時間接指導時に複数の児童を支援する場面では、ICT を通して個別に関わる機会を確保することができ、児童の実態に応じた柔軟な指導が可能であった。一方で、発表のタイミングによって児童の思考の過程を十分に見取れない場面もあり、再度発表を求めることがあった。

今後は、児童の思考の流れを的確に把握するための見取りの工夫が課題である。なお、2年生の児童は自ら時間を調整しながら学習を進める姿が見られ、主体的に学ぼうとする意識の高まりが感じられた。ICT の特性を生かすことで、児童の主体性・表現力・協働的な学びの深化が期待できると考える。

②5・6年生

本単元は、現行の学習指導要領に基づく教科書改訂後に新たに加わった内容であり、研究が十分に進んでいない領域である。そのため、本実践では、今後の指導の在り方を探る目的で授業を行った。授業では、データの活用を主題とし、専用アプリケーション(SGRAPA)及び Google スプレッドシートを用いて学習を進めた。これらの ICT を活用することで、与えられたデータを基に様々なグラフを作成し、比較や分析を行いながら試行錯誤する姿が見られた。この過程を通して、データを多面的に捉えようとする思考力が育まれていた。また、学習内容を「土別市のよさ」と関連付けることで、地域に根ざした学びとし、児童が自分たちの暮らす地域に誇りをもって学ぶ姿が見られた。

指導形態としては、同時間接指導の枠組みの中で、同時直接指導の充実を意識して授業を構成した。

ICT の活用により、児童が自らの考えを整理し、友達と共有する場面も多く見られた。6年生の児童は、自ら考え、友達と意見を交わしながら学習を進めることができた。特にデータの見方や考え方について、児童同士で気付きを共有し合う姿が見られ、協働的な学びの深まりを感じた。

今後は、地域教材のさらなる工夫と、ICT を効果的に活用した指導法の体系化を図っていきたい。

(2) 協議内容

①研究内容1～「同時間接指導」は児童の主体的な学びを促していたか

本時の授業を通して、同時間接指導の効果や今後の課題について活発な協議が行われた。まず、1・2年生の学習の様子から、日常の指導の積み重ねが生かされており、学び方が確立しつつあることが確認された。また、児童が自ら考え、学習に向かおうとする姿が見られる一方で、より一層「自主的に学ぶ力」を育成する必要性が指摘された。授業者への質問では、これまでの指導の流れや意図について具体的な確認がなされ、児童に学習の方向性や見通しをもたせることの重要性が共有された。そのうえで、学習のねらいや手立てを児童自身が理解し、自らの学びを見通して進められるようにすることが、主体的な学びの深化につながるのではないかという意見でまとめられた。

意見交流の中では、次のような視点が挙げられた。

- ・児童が主体的に学ぶ姿が見られ、同時間接指導の効果が表れていた。
- ・同時間接の形が徐々に定着しており、児童が自分で学ぶ体制を整えている。今後は、学ぶことを楽しみ、自ら学習をコントロールできるようになることが期待される。
- ・児童への支援のタイミングや程度の見極めが難しく、普段から多様な場面で児童を観察し、個に応じた支援の「ライン」を意識する必要がある。
- ・今後は「同時間接指導」から「直接同時指導」への展開も視野に入れ、児童の発達段階や学級の実態に応じた柔軟な指導形態を検討していくべきである。

これらの意見を踏まえ、今後は同時間接指導を基盤としつつ、児童の主体的な学びを支えるための支援の在り方や、複式の特性を生かした新たな指導モデルの可能性についてさらに研究を深めていく。

②研究内容2～個別最適な学びの実現のために ICT は効果的に活用されていたか

本時の授業においては、ICTが十分に効果的に活用されていたのではないかという意見が多く聞かれた。Google スプレッドシートやデジタル教科書を活用した学習活動が、児童の理解を深めるうえで有効であったとの評価がなされた。協議の中では、アプリ(SGRAPA)などのICTを使用する具体的な場面や操作方法などについて、授業者への質問が出された。また、ICTの活用だけにとどまらず、児童同士の対話の場面や、その対話を促す教師の働きかけも重要であるという点が共通理解としてまとめられた。

意見交換の中では、次のような視点が挙げられた。

- ・Google スプレッドシートやデジタル教科書が授業の中で効果的に活用されていた。
- ・デジタル教科書が、どの学校・どの学年でも使用できるように整備されていくことを望む。
- ・ICTの活用が特に効果を発揮する単元や場面を見極め、計画的に取り入れていくことが大切である。
- ・児童がICTを「使う・使わない」を自ら選択できる自由度をもたせることが、個別最適な学びにつながるのではないか。

これらの意見を踏まえ、今後はICTを単なる学習ツールとして活用するのではなく、児童の思考を深め、対話を促すための手段として位置付けていくことが求められる。教師の意図的な支援と児童の主体的な選択を両立させることで、より豊かな学びの実現を目指していく。

③研究内容3～学びの振り返りは児童が学習内容の理解度を把握することができたか。

本時の授業においては、1・2年生の振り返り方がよかったという意見が多く聞かれた。児童が自分の学びを評価規準に照らして丁寧に振り返る姿が見られ、学習の定着や次時への意識付けにつながっていたことが確認された。協議では、振り返りの方法や具体的な支援の仕方について授業者への質問がなされた。また、振り返りの姿が本時の授業内だけで見られたものか、日常的に定着しているものかを判断するには継続的な観察が必要であるとの意見も出された。

意見交換の中では、次のような視点が挙げられた。

- ・児童が評価規準に沿って、自分の学びをしっかりと振り返ることができていた。
- ・学びの振り返りを通して、児童が自分の課題や次に生かすべき点を意識できるようにすることが重要である。
- ・振り返り活動を一時的なものにせず、日常の学習活動の中に位置付けて継続的に行うことで、学びの質の向上につながるのではないか。

これらの意見を踏まえ、今後は児童が自ら学びを見つめ直し、学習方法を改善していく力を育てるために、評価規準や振り返りの観点を明確にしながら、日常的に振り返り活動を充実させていくことが求められる。

(3) 助言等

①北海道へき地・複式教育研究連盟研究推進委員 北見市立相内小学校長 木下 めぐみ 氏

- ・昨年度から研究課題を大きく変更し、新たな視点での取り組みを進めている点が印象的です。
- ・グラフから特徴を的確に読み取り、ICT 機器の活用など、自分の判断で学習方法を選択しながら取り組む姿が見られます。
- ・教師の支援がない中でも、児童同士が自ら考え、話し合い、ICT を活用しながら個に応じた学びを進めており、主体的な学習の姿が確立されています。
- ・教師が児童の主体的な活動を丁寧に支え、適切に導いている様子がうかがえます。
- ・児童の話し方や聞き方など、コミュニケーションの基礎的な力がしっかりと指導されており、そのことが深い対話の実現につながっています。
- ・自己評価においては、学んだことの積み重ねが自分の成長として実感できるようになっており、そのことが児童の自己肯定感の高まりにつながっていると感じられます。

②北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班指導主事 林 貴史 様

- ・直接的な指導の場面が少ないからこそ、子どもたちに1時間の見通しをもたせ、学習の流れを自ら意識できるようにすることが大切です。
- ・学習の中で「10のまとまり」の重要性を理解できるよう、教師が適切に支援していくことが大切です。
- ・算数における学びの積み重ねを、単元や教科全体を通して活用していく視点が求められます。
- ・児童一人一人の得意なことや苦手なことを的確に把握できるのは、小規模校ならではの大きな強みです。
- ・日常的に ICT を活用しているため、児童にとって ICT は自然に使える学習ツールとなっており、抵抗感なく学びに生かしています。
- ・これからも、児童が主役となる授業づくりを意識し、自ら考え・学び・発信する学習の実現を目指していくことが大切です。

9 成果と課題

研究内容 1 主体的に学習に取り組むための授業づくり

- ① 個別最適な学びの適切な場面設定と手立て
- ② 対話的・協働的な学びの工夫

(1) 成果

- ・同時間接指導を中心とした学習展開にすることにより、児童は学びの主体は自分であると強く認識し、課題の解決に向けて意欲的に取り組むことができた。また、これまでの本校の大きな課題でもあった学力下位層の児童への柔軟な対応が可能となり、解決に向けてつまづいている児童や戸惑いを見せている児童に適切に指導をすることができた。
- ・様々なICT機器やアプリを効果的に活用することにより、児童は、自分に合った課題の解決への方法を見付けることができたり、自分なりの考えをまとめていくことができたりしていた。特にデジタル教科書は、問題の提示や、解決に向けた算数的な操作活動など、日常の学習においても大変効果的であった。
- ・ICT機器の活用は、対話的で協働的な学びにもとても効果的であった。少人数であることで、他者の意見を広く知るために活用するというよりも、一緒に解決に向けて取り組む場面で特に効果があったと考えている。

(2) 課題

- ・同時間接指導を中心とした学習展開にするためには、自分から学習に取り組む意欲を高めること、解決への見通しをしっかりとつこと、追究の方法を自分で考えながら取り組むことといった力をしっかりと身に付けさせなければならない。そのため、日常的な学習の充実が必要であり、自分たちで学習を進める力をさらに身に付けさせる必要がある。
- ・ICT機器やアプリを活用するためには、その取扱いや操作方法をしっかりと身に付けさせる必要がある。低学年においては、机上の整理から細かく指導を続ける必要があり、高学年においては教師自体がそのアプリの使い方を習得する必要がある。校内での研修を充実させ、一層の指導方法の充実を図りたい。
- ・少人数学級においては、やはり対話的な学びに難しさが残った。日常の授業でも、考え方や意見が限定されてしまい、児童の考えを広げることが十分にはできていない。今後は、遠隔授業なども視野に入れ、多様な考え方や意見に触れることができるように研究を進めていきたい。

研究内容 2 学習内容の定着

(1) 成果

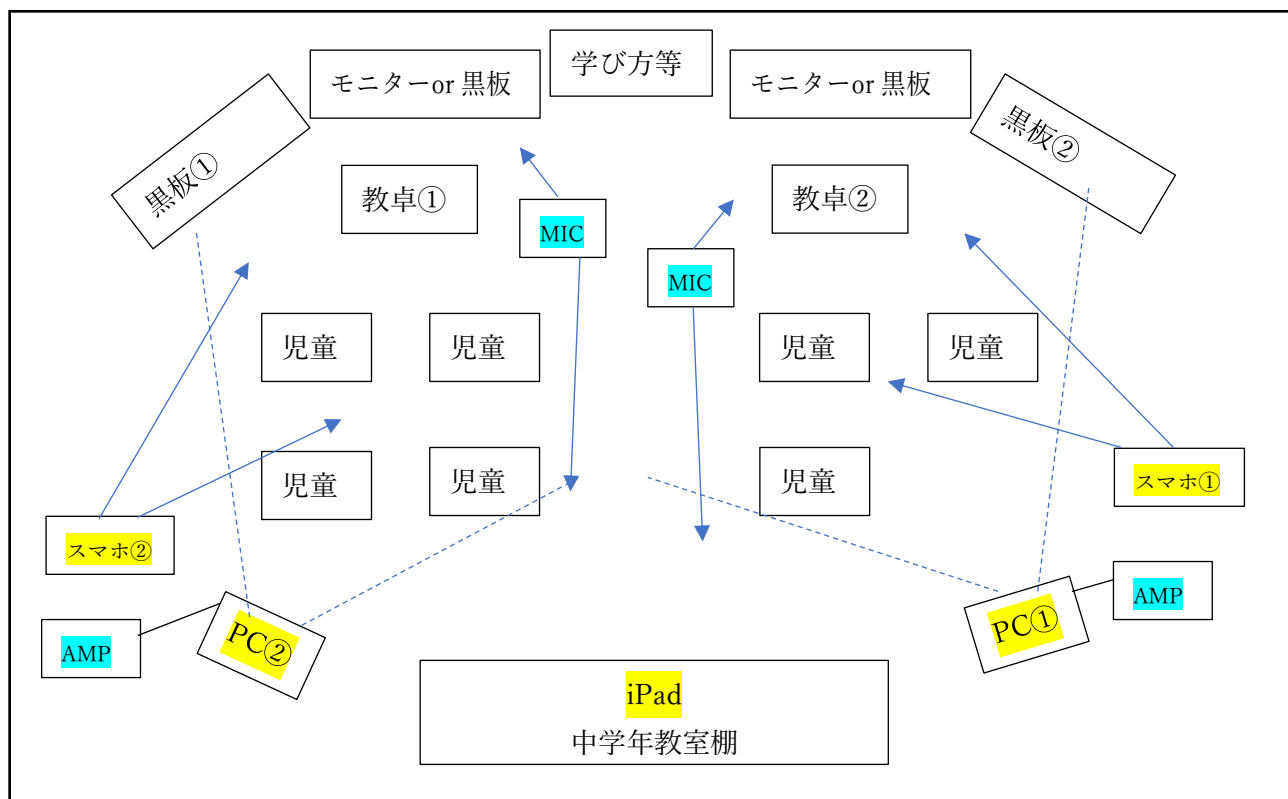
- ・自己評価と実際の到達度の一致を図る取組は、児童が自己の学習を振り返る観点をもつことができ、次時以降の学習で、課題意識を高めたり、追究の方法を模索したりするときに生かすことができていた。

(2) 課題

- ・提示した評価規準に合わせた振り返りが正しくできていないときがある。教師はその状況を適切に把握し、次時の指導に生かそうとはしていたものの、正しい振り返りを行うための指導については後手に回ってしまうことが多かった。日常から適切な自己評価の仕方について指導を続ける必要がある。

10 配信状況の記録

【授業配信 1・2年 5・6年 共通】



ブレイクアウトルームを二つ作成（配信本部から共同ホスト権限をもらってから設定）

参加者が自由に移動できる設定にしておく（上士別小上学年 と 上士別小下学年 の二つを作成）

○モニター用 PC →chromebook

（市から支給されているもの 共同ホスト ドングル使用→スマホに Wi-Fi）

○メインセッション →iPad ノイズ低にして全体を撮影

ダイソーの広角レンズを装着

私物のタブレット台にセットし、角度を小物で調整

○ブレイクアウトルーム→PC①②（サーフェス×2）ズームの設定でノイズ除去を低にする

2台とも加盟校の物を借用。市から支給されている chromebook ではweb カメラや外付けのビデオカメラを試したが画質やメモリの問題で使用不可と判断した。

マイクの入力レベルを自動調整のチェックを外す
※ローカルレコーディングを行う

ワイヤレスマイクアンプより有線で音を入力

集音パラボラをマイクスタンドにセットして使用

Phone 端子→ミニ phone 端子→U S B 端子Cに変換し入力

→Wi-Fi 専用スマホ①②（SIM カード無し）

1 台は予算で購入。もう 1 台は加盟校で使っている物を借用。持ち手はダイソーのミニスタンドを使用（私物）当初は必要に応じてカメラのオン・オフをする予定だったが授業者と打ち合わせて常にオンにした。

画像のみで使用（マイクはミュート）（常時カメラオン）
できるだけ寄るが、メインカメラにかぶらないように注意
肉眼で先にズームするところを確認してからカメラで寄る
寄った後は、最低でも 10 秒ほどキープ
移動はゆっくり



三脚に、タブレット用スタンド（会場校の物）を付けて設置。ワイヤレスアンプと接続しています。

タブレット用スタンド（サンワサプライ）



USB—C と 3.5 mm ミニジャック（スピーカー＆マイク）の変換アダプタ（加盟校の物）（型式 PAA—C3P）



iPad にダイソーの拡大レンズを装着して撮影。授業中は電源ケーブルを刺した状態で撮影

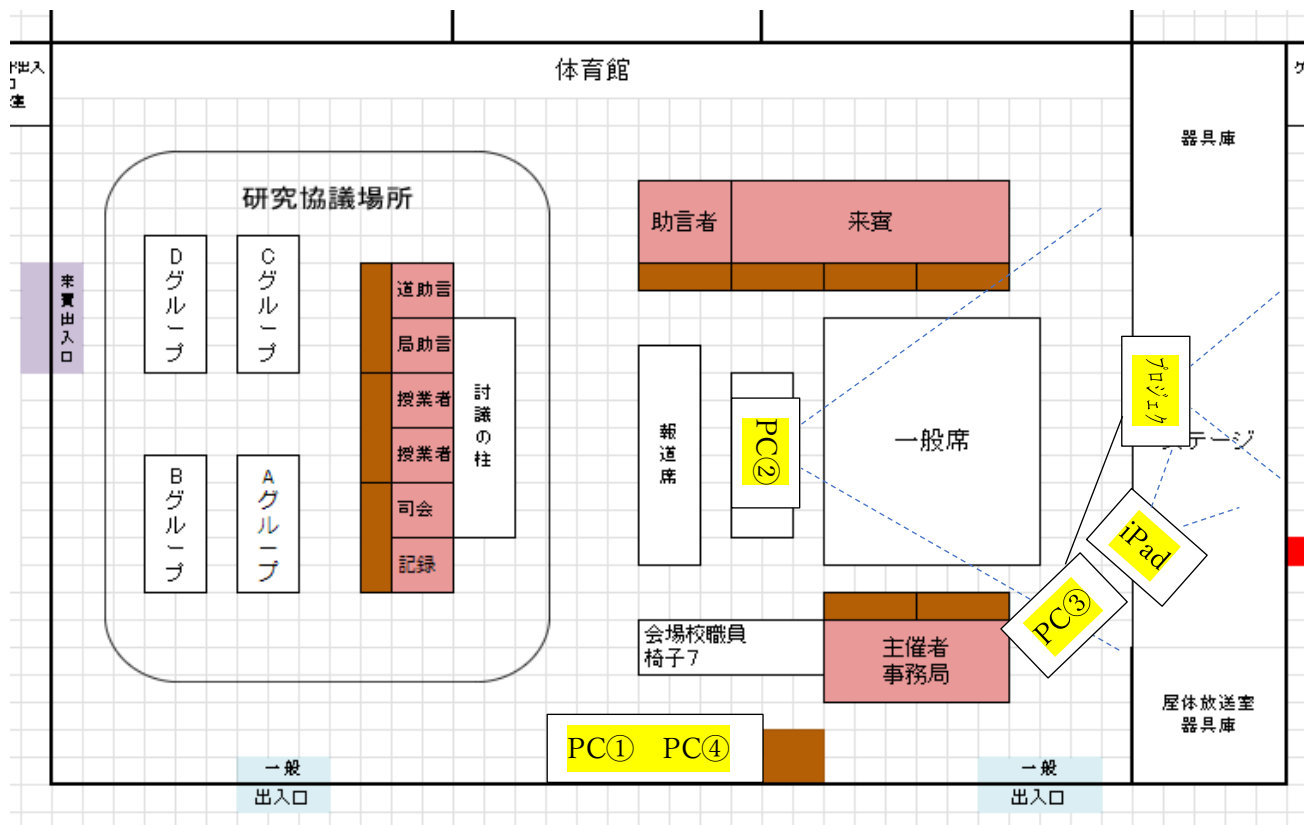


加盟校に眠っていたパラボラ集音器。マイクスタンドにつけるタイプ。集音タイプ（ガンマイク）のコンデンサーマイクが望ましいが、ケーブル処理やミキサーを間に挟んで…では、操作する人間を配置できないため（予算の問題も含め）この仕様に。録音された動画を見てファイナルステージでは改善の余地あり。

共同ホストを権限を数台に与えてもらったが、授業ごとにローカル録音するために「ログアウト→REC 変換→再度ログイン→再度共同ホスト権限をもらう」が休憩時間の15分では難しいと判断し、モニター用の chromebook にだけ共同ホスト権限を継続させた。

ローカル録音は配信本部で行ってもらった。

【開会式・研究発表配信】



授業終了後後15分でセッティングを変更 電源ケーブルごと体育館に運び、セットする

PC① (サーフェス)

→体育館音響からの音を有線入力、体育館入口壁側にセット
チャット管理

PC② (サーフェス)

→会場での全体の様子を撮影 (体育館中央からステージ方向撮影)
スタンドは授業配信と共用

iPad

→演台での発表者近影用

タブレットスタンド (挟むタイプ) に再セットして演台付近にセット

PC③ (chromebook 研究発表用) → 画面共有+HDMI でプロジェクターに出力して参加

PC④ (chromebook モニター・共同ホスト) →権限をもらったまま、モニター用として活用

※Wi-Fi 専用スマホは使用しない

資料写真

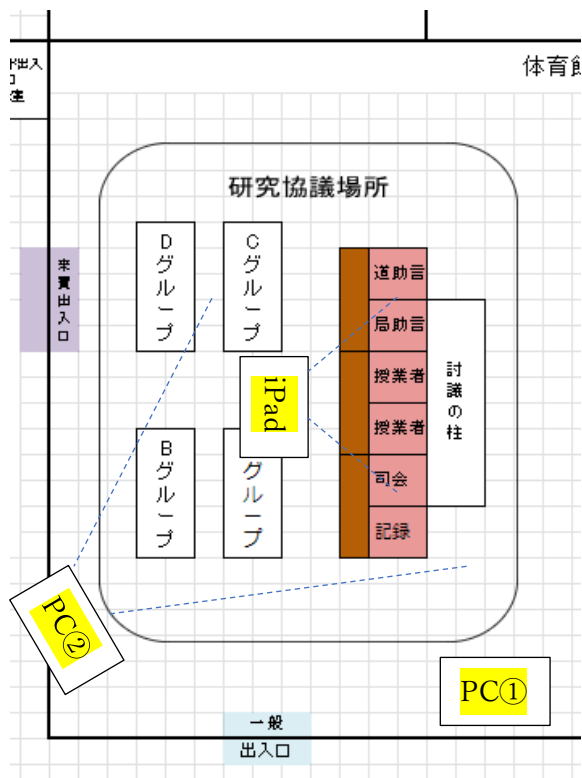


変換ジャックは授業時と同様。会場校は体育館放送室からコントロールミキサー台を出してフロアで操作できる仕様なので、そこから外部に出力系統を一つ作り PC と接続した。

演題上で話す方の近影をとるための物。オンライン配信を前提としているので、多少目立つかもしれないがこの位置に配置。



【研究協議配信】



PC②（サーフェス）→研究協議の全体の様子を撮影
（体育館後方から斜め方向）

グループ協議中は A グループ
撮影（ブレイクアウトルーム）
TV モニターと接続しオンライン
参加者が見えるようにする
体育館音響からの音を入力

PC①（サーフェス）→体育館の壁側 チャット管理
グループ協議中は、C を撮影
グループごとの発表時にはタブ
レットにして発表者を撮影（手持）

iPad →全体では司会・授業者などの発表者近影用
タブレットスタンドにセットし机付近
グループ協議中は、A グループのブレイクアウ
トルームに入り、拡大指導案を撮影

PC④（chromebook モニター・共同ホスト） →権限をもらったまま、モニター用として活用
ブレイクアウトルーム作成 入室管理

※グループ協議

PC①→授業と同様ワイヤレスマイクアンプより有線で音を入力

集音パラボラをマイクスタンドにセットして使用（体育館音響と切り離す）

Phone 端子→ミニ phone 端子→U S B 端子 C に変換して入力

ズームの設定でノイズ除去を低にする マイクの入力レベルを自動調整のチェックを外す

PC②→ブレイクアウトルームに移動（オンライン参加者とのハイブリッド用）体育館音響からの出力を
20m延長し、入力。司会用含め3本のワイヤレスマイクを渡し、発表している人の音声オンライン
参加者に聞こえるようにする。

その際、体育館音響のメイン出力はカットし、体育館のスピーカーからは音が出ないようにする。

※全体交流の場面になったら元（研究協議開始時）に戻す

第2分科会

【研究主題】

豊かな関わりを通して、自己の生き方を考える子の育成
～道徳科の授業改善を通して～



幌加内町立幌加内小学校

I 授業の様子

【公開授業①：第3・4学年】



【公開授業②：第5・6学年】



Ⅱ 研究の概要

1 研究主題

豊かな関わりを通して、自己の生き方を考える子の育成
～道徳科の授業改善を通して～

2 研究主題設定の理由

(1) 教育の今日的課題から

今の子どもたちが、変化が激しく先行き不透明なこれからの時代を生き抜くためには、「生きる力」を身に付けた人間の育成が強く求められている。それに合わせて学校教育は、「自ら考え、主体的に判断し行動できる資質や能力」を育成することを重視した教育への転換を図ってきた。学習指導要領においては、引き続き「生きる力」を育むことを目指して、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を通し、創意工夫を生かした特色のある教育活動を展開することとしている。「生きる力」を身に付けさせるためには、知識や技能の習得はもちろんのこと、思考力・判断力・表現力を身に付けた子どもの育成を目指していかなければならない。

こうした状況の中、「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことを目標とする道徳教育の重要性は一層高まっており、道徳科は道徳教育の要として計画的、発展的な指導を行うことが求められている。

(2) 本校の研究の経緯から

本校では昨年度から、「豊かな関わりを通して、自己の生き方を考える子の育成」を研究主題とし、道徳科において、「ICT と遠隔合同授業の効果的な活用」「ポートフォリオの活用の工夫」を中心に研究し、授業改善を図ってきた。

昨年度の実践では、学習リーダーが「対話」を進めていくための手立てとして ICT を活用し、遠隔合同授業でも自分たちの意見と同じか違うかを比較しながら考えを深めることができた。また、ポートフォリオは、自分の意見だけではなく他者の意見も蓄積できることで、今後も考えを広げたり深めたりすることに役立つなどの成果が見られた。

一方で、「タブレットを通しての交流が多かったため、少人数のよさを生かした話し合いも増やせるとよい」「ポートフォリオは、児童の変容を十分に捉えるため、中長期的な振り返りも必要」などの課題も残った。

(3) 児童の実態から

本校の児童は素直であり、目標やめあてに向かって真面目に取り組むことができる。一方で、聞く力や自分の考えを言語化する力などについて課題が残る。

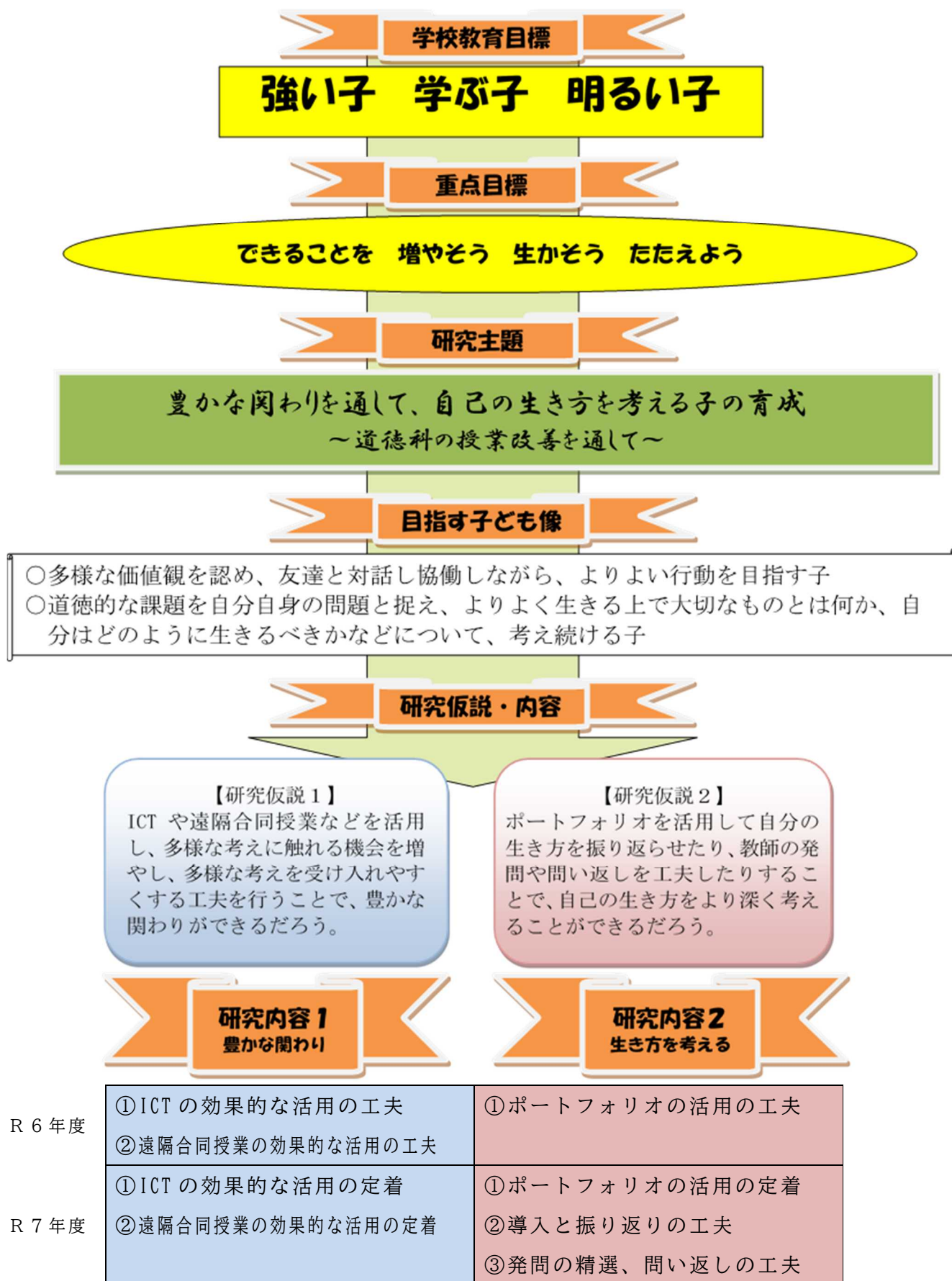
昨年度の「全国学力・学習状況調査」や「標準学力検査」の傾向分析結果においても、目的や意図に応じて自分の考えを表現することを、苦手としていることが明らかになった。

以上のような実態から、今年度は、学校の重点目標である「できることを 増やそう 生かそう たたえよう」の達成を目指し、昨年度の研究主題「豊かな関わりを通して、自己の生き方を考える子の育成」を継承し、道徳科の授業改善をより一層図っていくこととした。

3 北海道へき地・複式教育研究連盟 第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画との関連

【研究分野1】学校・学級経営の深化・充実
〈研究課題1〉 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進を図る。
○学校の教育目標の達成に向け、児童生徒の確かな学びを創る経営の創造と推進 ○児童生徒一人一人の個性や能力を生かし、多様な体験を重視した教育活動の充実
【研究分野2】学習指導の深化・充実
〈研究課題6〉 主体意識をもって仲間と共に高め合う学習過程の改善・充実を図る。
○主体的・対話的で深い学びの視点から、多様な考え方や個人差、学年差に応じた学習過程の改善と充実 ○地域内外の異校種間連携や交流学习による新たな学習過程の改善と充実

4 全体構造図



5 研究内容

(1) 豊かな関わり

道徳教育では「考え、議論する道徳」への転換が求められている。本校の目指す子ども像「多様な価値観を認め、友達と対話し協働しながら、よりよい行動を目指す子」を育成するためには、児童が意見を交流し、問題をよりよく解決しようとする「対話」の場面が非常に重要である。

しかしながら、本校は児童数が少ないため、そもそも多様な考えに触れる機会が少なく、また、自分の考えをまとめて表現することを苦手としている児童もいる。そこで、ICT や遠隔合同授業を効果的に活用することで、表現や対話の方法、対話できる対象や時間などを増やし、豊かな関わりをもてるように工夫した。

①ICT の効果的な活用

児童の中には、直接話したりプリントに書いたりするよりも、ロイロノートなどタブレットのアプリを活用した方が、意欲的に自分の意見を表現できる子もいる。また、お互いの意見を常に画面上で見られるようにしておくことで、表現することが苦手な子は友達の意見を参考にでき、早く課題が終わった子も自分とは違う意見に触れることで考えを深めるきっかけとすることができる。昨年度の実践では、低学年は書き込んだプリントを写真に撮って共有し、中・高学年ではロイロノートを使って意見を可視化するなど、児童の発達段階に合った取り入れ方ができた。

タブレットに打ち込み、ペンで書き込み、ワークシートを写真に撮るなど、それぞれの方法で可視化

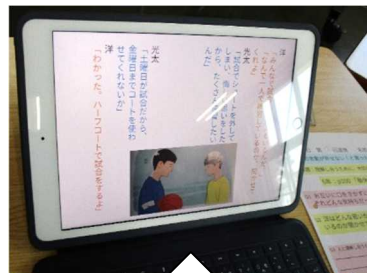


タブレットで友達の意見を確認

さらに、複式授業における「わたり」を円滑に行うためにも、ICT の活用は重要な意味合いをもつ。まず、展開前半においては、登場人物の関係性など、教材をしっかりと把握しておかなければ、自分の意見をもつことも難しい。しかし、両学年ともに直接指導で教材把握をすると、「対話」に使える時間がなくなってしまう。そこで、間接指導でも教材把握ができるように、ポイントをまとめた資料をロイロノートで作成した。範読音声聞いた後に各自がタブレットを使って資料を確認することで、間接指導の短時間で教材を把握することができ、次の活動にもスムーズに移行できた。



イヤホンをして範読音声を聞く



タブレットで資料を確認

複式の道徳の授業では、児童が個別に課題に取り組む時間だけではなく、意見を交流し深めていく「対話」の場面でも、間接指導を進めていかなければならないことが多い。そこで、タブレットの画面を共有して誰でも編集ができるよさを生かし、学習リーダーが「対話」を進めていくための手立てとして活用した。間接指導の間に、学習リーダーが中心となって、お互いの意見の同じところや似ているところ、違うところなどを見付けて話し合い、ペンで線を引いて色分けをしていく。教師が戻ってくるまでに意見の比較や整理ができれば、直接指導でより深い「対話」をしていくことが可能となる。



学習リーダーを中心に共通点を色分け



意見が整理された画面で直接指導

昨年度の実践では、ロイロノートを活用した記入シートの工夫により、可視化した意見をもとに少人数でじっくりと交流することができた。また、ロイロノートに意見を書かせていたことで、教師が意図していない捉え方を児童がしていたことに気づき、急遽補助発問を増やして対応できた実践もあった。児童の意見を確認しながら授業を進められるところも ICT 活用のメリットである。

一方で、「新たに資料やシートなどを作成するため、事前準備に時間がかかる」「目の前の友達ともタブレットを通しての交流が多かったため、少人数のよさを生かした話合いも増やせるとよい」などの課題も残った。そこで今年度は、昨年度から蓄積したデータを効果的に活用することで準備の時間短縮を図り、より ICT を使う必然性を考えた上で授業を構成している。

②遠隔合同授業の効果的な活用

本校では、一昨年度から遠隔合同授業の実践に取り組んでいる。一昨年度は、別海町立西春別小学校にご協力いただき、道徳で、学年ごとに担任が分かれて指導する複式双方向型の授業に取り組んだ。全学年 45 分間の授業を通して行うことができ、ワークシートやアプリ上に意見を残すことで他校とも考えを交流できた。一方で、「相手校のつぶやきが拾いにくい」「相手校の反応も見ながら進めるので、授業のテンポが普段より遅くなってしまう」などの課題も残った。

昨年度は、石狩市立厚田学園にご協力いただき、道徳の授業を中心に交流を深めた。一昨年度の反省を生かし、授業の導入から終末までを合同で行うのではなく、導入や「対話」などの場面に絞って合同で進めることとした。最初に導入場面を合同で行うことで、本時の課題に対して共通理解を図った。両校の板書やタブレットのアプリ

りも活用して児童の意見を可視化し、「対話」の場面を合同で行うことで、自校だけでは気付かなかった視点や意見にも触れ、考えをより深めていくことができた。また、小規模校同士がつながることで、児童の活躍できる場が増えるというメリットもあった。

一方で、協力校とのハードやアプリの違いから、接続が困難なことや、準備に時間がかかるなどの課題も生じた。そこで今年度は、年度初めに厚田学園に伺い、実際に環境を確認した上で打ち合わせを行ったことで、その後の準備にかかる時間を削減できるように努めた。

また、今年度は複式学級で遠隔合同授業に取り組み、学年のグループに厚田学園の児童も入ってもらい、本校教師による直接指導と間接指導と一緒に受ける形を提案した。タブレット画面上で可視化された意見の交流をするだけではなく、学習リーダーを中心として進めるグループの「対話」も一緒に行い、直接意見をやり取りしている。学習を積み重ねることで児童同士の対話がスムーズにできるようになり、児童自らが意見の共通点や相違点に気付けるようになってきている。

身近な生き物や、自然のじまんをしましょう（ほろかない、あつた）。



厚田学園の児童も同じアプリを使い、意見を可視化して交流



厚田学園の児童も入ったグループで直接対話しながら交流

（２） 生き方を考える

本校の目指す二つ目の子ども像「道徳的な課題を自分自身の問題と捉え、よりよく生きる上で大切なものとは何か、自分はどのように生きるべきかなどについて、考え続ける子」を育成するためには、道徳的な課題を自分事として捉え、これまでやこれからの行動を見つめ直すことが重要である。

しかし、本校には物事を自分事として捉えることが難しい子や、一度答えが出るとそこで思考が止まり深く考えられない子もいる。そこで、児童の思考をより深める発問や問い返しを精選し、児童が自己の変容に気付けるよう、ポートフォリオや振り返りの活用を工夫していく。

①ポートフォリオの活用の工夫

時数が少なく、週１回程度の頻度で行う道徳科の授業において、児童の思考を見

える形で残し積み重ねていくポートフォリオは、とても大きな意味合いをもつ。

教師にとっては、授業中だけでは見取ることができない長期にわたっての児童一人一人の変容を捉えるものとなる。その都度、評価をコメントなどのかたちで児童にフィードバックし、自分のよさに気付かせ主体的に学ぶ意欲を高めたり、教師自身が今後の指導の改善・充実に取り組むための資料として活用したりすることができる。

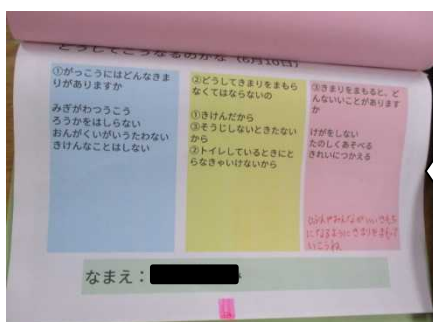
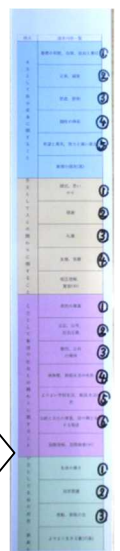
児童にとっては、過去と現在を比較することで、自分の考えの変容に気付き、意欲の向上につながっていくものであり、結果的に児童の成長につながるものとする。また、ポートフォリオそのものが、同じ内容項目の道徳的な課題や、自己の生き方について考えるときのヒントとも成り得る。導入の場面でポートフォリオを見返す時間をとることで、本時と同じ内容項目での自分の思考や教師からのコメントを振り返ることができ、見通しをもって本時の課題に取り組むことができる。

導入でポートフォリオを見返す

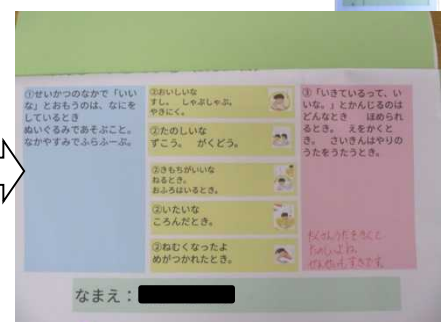


ポートフォリオは、教師や児童がいつでも振り返りたいときに見られるようにする必要があり、毎時間取り組んだワークシートや、タブレットの画面を印刷したものを綴じて蓄積している。ポートフォリオには、少なくとも、ねらいとする道徳的価値に迫る展開前半の主発問と、自分事として過去や今後の行動について考えていく展開後半の主発問の、二つに対しての意見は残していくこととしている。また、同じ内容項目の授業の記録をすぐに見返せるように、4分類ごとに色分けし、色ごとに場所を分けて綴じていくなど工夫をしている。

内容一覧表を使い、4分類ごとに色分けをして、ワークシートに印を付ける



左（ピンク）はC「集団や社会との関わり」
右（黄緑）はD「生命や自然・崇高なものとの関わり」



昨年度の実践では、ポートフォリオの色分けは、児童が「今日は何色」と確認してくるなど定着しており、活用しやすかった。また、タブレットの画面を印刷したものを蓄積すると、自分の意見だけではなく他者の意見も振り返ることができる。さらには前年度の意見も後から振り返れるので、今年度は、同じ教材の昨年度のポートフォリオも参考にできるよう、状況に応じて授業の中で提示している。

一方で、ポートフォリオは昨年度から導入し短期間で取組を行ったため、ファース

トステージ時には児童の変容を十分に捉えるには至らなかった。今年度は、昨年度のポートフォリオも蓄積できているため、定期的に同じ分類の内容項目の学習を振り返る時間をつくり、児童自身が自分の変容に気付ける場を作っている。

②導入と振り返りの工夫

道徳では、導入場面で問いかけた課題に対し、展開前半で教材を通して迫り、展開後半で自分事として考えていくため、一単位時間内でも導入時と終末時で児童の考えが変わることも起こり得る。そこで、授業の終末の部分に「振り返り」の場面を設定し、自分の学びの変容に目を向けられる学習活動となるように工夫した。

「導入」の場面では、教師が以下のような取組から教材や児童の実態に合ったものを選び実践した。

- (ア) 児童に事前アンケートをとり、結果をグラフやテキストマイニングなどで可視化し、集団としての考えを確認する。
- (イ) 主題名や教材名から受けた印象や、現在の自分の考えを話し合う。
- (ウ) 作文や日記、行事の振り返りなどから、児童のエピソードを紹介し話題とする。
- (エ) 同じ内容項目のポートフォリオを見直させ、児童に自分が以前どのような考えをもっていたかを確認させる。
- (オ) 写真や短い動画を見せ、主題や教材に関わる問題を提起する。
- (カ) 教材文に出てくる小物や絵本などの具体物を見せ、教材に関わる問題を提起する。
- (キ) 主題や教材に関わるクイズを出し、意欲を高める。

導入の仕方を工夫し、自分のこれまでの経験を振り返ったり、現在の自分の考えをはっきりさせたりすることで、課題に対して方向付け、意欲を高めていくことができた。

(ア)
アンケート結果のグラフをテレビに映し確認



(ウ)
教材文「あさがお」
自分の朝顔の観察記録の見直し



(オ)
「町内合同清掃」の写真を提示し、そのときの気持ちを確認



(カ)
教材文「きんのおの」が載っている「イソップ物語」を提示



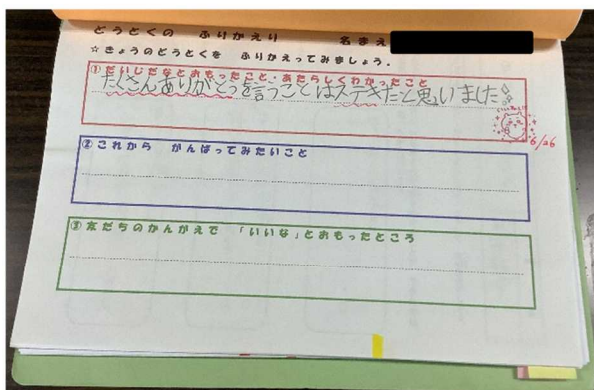
(キ)

主題「きまり
を まもる」
きまりについ
ての○×クイ
ズ

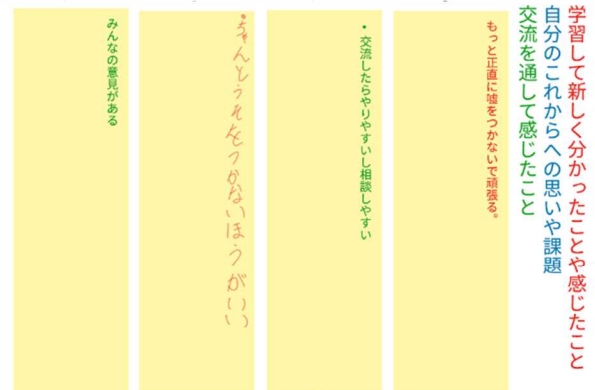


「振り返り」の場面では、本時の感想や頑張りを発表させるだけではなく、以下の視点から、教師が本時に合ったものを選んだり、児童に自分で選ばせたりして考えさせた。発達段階に応じた、児童に分かりやすい言葉で視点を伝え、毎時間継続して取り組んでいくことで習慣化を図った。また、視点を色分けして掲示したりプリントに書かせたりするなど、全学年が共通して取り組み、継続しやすいよう工夫した。

	低学年	中学年	高学年
価値理解	・今日の勉強で、大事な なと思ったこと や、新しくわかった こと	・授業を通して新た に分かったことや 感じたこと	・授業を通して新た に分かったことや感 じたこと
人間理解	・これから頑張ってみ たいこと	・自分のこれからの 生活に取り入れた いこと	・自分のこれからへの 思いや課題
他者理解	・友達の考えでいいな と思ったところ	・友達との交流を通 して感じたこと	・友達との交流を通 して感じたこと



3つの視点から、教師が選んで振り返らせ、色分けしてある枠に記入させる



3つの視点から、児童が自分で選んで振り返りを行い、色分けして記入する

③発問の精選、問い返しの工夫

道徳科の学習では、展開後半で教材から離れ、いかに自分自身の問題として考えさせるかが重要である。展開後半の時間を確保するためには、ねらいとする道徳的価値に教材を通して迫る展開前半を、限られた時間の中で終えなければならない。とはいえ、短時間で十分に価値に迫ることができないまま自分事に移行してもねらいからはずれたものとなり、全く意味がなくなってしまう。

そこで、発問を精選して必要最小限に減らし、ねらいとする道徳的価値に迫るための主発問を十分に吟味していくことが重要である。「どの場面で」「どのような」発問をすると、価値に迫るような児童の意見を引き出せるのか、教材研究は勿論のこと、児童の実態も考慮した上で主発問を設定しなければならない。

道徳的諸価値の理解から考えると、発問は「人間理解」「他者理解」「価値理解」の3つに分けることができる。どこを中心発問とし、どの順番で問うのか、内容項目や教材の特徴、児童の実態などに合わせて構成していくことが重要である。

① 人間理解	「道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解すること。」 ⇒自分の気持ちや考えを確かめる。
② 他者理解	「道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということを前提として理解すること。」 ⇒みんなの気持ちや考えを出し合い、比べ合う。
③ 価値理解	「内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解すること。」 ⇒いろいろな気持ちや考えの中から、よりよいと思うものを見付け、自分の生き方に生かそうとする。

授業の核となる中心発問が児童に理解されなければ、道徳的価値に迫っていくことは難しいため、補助発問も予め用意しておく必要がある。ただし、特に複式では言い直しや補助発問ができない場合もあるので、やはり一度で児童に伝わるよう中心発問の吟味が大事となる。教材の特徴や児童の実態から、出てくるであろう意見を予想し、主発問と補助発問を考えていかなければならない。また、児童の意見に対してさらに根拠を尋ねたり、周辺価値の方に流れてしまいそうな場合に立ち止まらせたりと、状況に応じて問い返しをしていく。

指導案には、主発問、補助発問、予想される児童の反応などを明記し、教師がどのように授業をコーディネートしていくのかを可視化した。

6 これまでの成果と課題（昨年度の反省より）

（１） 成果

- ・ ICT の活用は、児童の発達段階に合った取り入れ方となっていた。
- ・ 教材把握のためのポイントをまとめた資料は効果的だった。
- ・ ロイロノートの活用は、記入するシートも分かりやすく、少人数でじっくりと交流できていたのでよかった。
- ・ 遠隔合同授業は、全てをつなぐのではなく部分的につなぐ方が、集中力の面でも適切であった。
- ・ ポートフォリオの色分けは、「今日は何色」と確認するなど、子どもたちに定着しており、活用しやすかった。
- ・ ロイロノートを印刷して蓄積すると、自分の意見だけではなく、2 学年分の友達の意見も後から振り返れるので、来年度以降の参考にもなる。
- ・ 他教科にも生かせる学習リーダーの話し合いの進め方や、道徳の授業の流れなどが、子どもたちに定着した。

（２） 課題

- ・ ICT を活用する際、新たに資料やシートなどを作成することとなり、事前準備に時間がかかってしまうなどの課題があった。データを蓄積し、共有することによって、準備の時間短縮を行い、ICT のよさを更に引き出せるよう改善が必要だと考えている。
- ・ 遠隔合同授業では、協力校とのハードやソフトの違いから良好につなぐことが困難で準備に時間がかかるなどの課題が生じた。事前に使用する環境を確認し、必要な設定を行い、事前準備の時間削減を図る必要がある。
- ・ 本年度から導入したポートフォリオは、短期間で取組を行ったため、児童の変容を十分に捉えるには至らなかった。今後は、ポートフォリオを継続的に活用することで、児童一人一人の成長過程を記録し、より効果的な学習支援へとつなげていきたい。

第3学年・4学年 道徳科学習指導案

日 時 令和7年9月18日（木）

児 童 第3学年7名（男子3名、女子4名）

第4学年5名（男子2名、女子3名）

指導者 長野 博史（T1） 神田 武（T2）

大畠 玲（T2）石狩市立厚田学園

- 1 主題名 第3学年『きまりは何のため』
第4学年『みんなが気持ちよく』

- 2 教材名 第3学年「きまりのない国」
第4学年「雨のバスでいりゅう所で」

3 内容項目

C【主として集団や社会との関わりに関すること】（12）「規則の尊重」

- ・約束や社会のきまりの意義を理解し、それらを守ること。

4 ねらいとする道徳的価値について（価値観）

児童が成長することは、同時に所属する集団や社会を構成する一員として集団や社会の様々な規範を身に付けていくことでもある。そのためにも、法やきまり、約束を進んで守ることができるようにすることが必要である。法やきまりは自分たちを拘束するものとして自分勝手に反発したり、自分の権利は強く主張するものの、自分の果たさなければならない義務をなおざりにしたりする者も存在する中で、社会の法やきまりのもつ意義について考えることを通して、法やきまりが、個人や集団が安全にかつ安心して生活できるようにするためにあることを理解し、それを進んで守り、自他の権利を尊重するとともに義務を果たすという精神をしっかりと身に付けるように指導する必要がある。その際、法やきまりを守ることは、その自分勝手な反発等に対してそれらを許さないという意味をもつことと表裏の関係にある。

また、身近な集団におけるよりよい人間関係づくりや人間関係における規範意識について考えさせるためにも、重要な内容項目である。特に、人と人が仲間をつくり、よりよい人間関係を形成する上では、自分の思いのままに行動するのではなく、集団や社会のために自分が何をすればよいのか、また、自分に何ができるのか、自他の権利を十分に尊重する中で果たすべき自らの義務を考え、進んで約束やきまりを守って行動する態度を養うことが必要である。

5 児童の実態について（児童観）

3・4年生の児童は、休み時間や放課後などに気の合う仲間で行動することが増えている。グループ内の約束や自分たちだけが通じるきまりをつくり楽しく活動している反面、社会規範やルールを破ることがある。また、一人一人が身近な生活の中で、約束や社会のきまりと公共物や公共の場所との関わりについて考えることは少なく、付和雷同的な行動が見られる。

6 教材について（教材観・指導観）

第3学年の教材は、「きまりは、何のためにあるのか」を学びのテーマとして考える。主人公が抱く、「きまりがなければいいのに」という気持ちに共感させたい。また、「きまりは何のためにあるのか」や、「きまりを守る大切さ」について、自分の問題として考えさせたい。

指導を通して、一般的な約束や社会のきまりの意義やよさについて理解し、それらを守るように児童の考えを広げていきたい。さらに、社会集団を維持発展する上で、社会生活の中において守るべき道徳としての公德を進んで大切にすることを育てたい。

第4学年の教材は、社会のマナーやきまりを守ることの意義を最も考えさせたい。順番を無視してバス停の先頭に並んだ主人公を母親が連れ戻すが、連れ戻された理由がわからず、バス内でのいつもと違う母親の様子から自分がした行為について主人公は考え始める。社会的な規範意識をもち、我が子を戒める母親の強い思いをもとに、約束やきまりを大切にしようとする意欲を育てたい。

集団生活をする上で、一人一人が相手や周りの人の立場に立ちよりよい人間関係を築くことや、集団の向上のために守らなければならない約束やきまりを十分考える機会にし、社会生活の中において守るべき道徳としての公德を進んで大切にすることを育てたい。

7 研究との関わり

【研究内容1】豊かな関わり

○遠隔合同授業の効果的な活用

- ・タブレットのアプリを活用して、児童の意見を可視化し、「対話」の場面を他校の児童と遠隔合同授業を行うことで、本校の児童だけでは気付かなかった視点や意見にも触れ、考えをより深めることができる。

【研究内容2】生き方を考える

○導入と振り返りの工夫

- ・導入部分で事前アンケートの結果を確認し、自分の考えや現状を理解させ、展開後半でもう一度アンケート結果に立ち戻り、課題を自分事としてしっかり捉えさせ、終末部の振り返りにつなげていく。

8 本時の学習

（1）ねらい

第3学年 きまりは何のためにあるのかを考えさせ、約束や社会のきまりの意義を理解し、守ろうとする心情を育てる。

第4学年 人が気持ちよく過ごすために大切なことを考えさせ、社会のマナーやきまりの意義を理解し、守りながら行動しようとする心情を育てる。

(2) 展開

段階 (時間)	学習活動 ○主な発問 (◎中心発問) ・予想される児童の反応 3年 (人) 人間理解 (他) 他者理解 (価) 価値理解 4年	留意点(※)・評価(◆)
導入 (5分)	<p>1 ポートフォリオを活用して同じ内容項目の学習を振り返る。</p> <p>2 きまりを守れなかったり、破ったりしたときの経験を振り返る。 「いままできまりややくそくを守れなかったことはありますか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・廊下を走っちゃった。 ・宿題をやらなきゃいけないのに、やらずに遊んでしまった。 	<p>※事前アンケートを活用する。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>みんなが安心して気持ちよく生活するためには、どんなことが大切なのでしょう。</p> </div>		
展開前半 (20分)	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1; padding-right: 10px;"> <p>3 教材「きまりのない国」を読んで話し合う。</p> <p>○けんたは、どうして「ああ、きまりのない国って、ないかな。」と言ったのでしょうか。(人)</p> <p>※考えをタブレットにまとめ、交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きまりを守るのが苦手。 ・注意されるのがいや。 ・自由にくらしたい。 <p>○「やっぱり、元の国にもどりたいなあ。」と言ったとき、けんたはどんなことを考えていたのでしょうか。(他)</p> <p>※考えをタブレットにまとめ、交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きまりがなければ、自分がこまる。 ・きまりがあると、安全に暮らせる。 </div> <div style="flex: 1; border-left: 1px solid black; padding-left: 10px;"> <p>3 教材「雨のバスでいりゅう所で」を読んで話し合う。</p> <p>○お母さんに、並んでいた所までつれていかれたとき、よし子はど う思ったでしょう。(人)</p> <p>※考えをタブレットにまとめ、交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早く乗れたかったのに。 ・早くしないと、座れない。 <p>○お母さんの横顔を見ながらよし子は、自分のしたことについてどう考えたでしょう。(他)</p> <p>※考えをタブレットにまとめ、交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分は、横入りしてしまったんだ。 ・周りの人のことも考え、ルールを守らなければならなかったんだ。 </div> </div>	<p>※4年生はタブレットで音声を聞き、タブレットを使い教材の内容を確かめる。</p> <p>※3年生は、遠隔合同を行い、他校児童の意見を交流する。</p> <p>※教師の直接指導では、ペア、グループで話し合い、考えを交流する。</p> <p>※間接指導では、児童が交流したうえでリーダーが意見の共通点、相違点を焦点化する。</p> <p>◆3年 きまりの意義を理解し、それを守ることが大切なことだと考えている。 【タブレット】</p> <p>◆4年 約束やきまりを守ることの意義について考えている。 【タブレット】</p>

<p>展開後半 (15分)</p>	<p>4 今までの自分の行動を振り返る。</p> <p>◎みんなが安心して気持ちよく生活するためには、どんなことが大切ですか。(価)</p> <p>※考えをタブレットにまとめ、交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やくそくやきまりをしっかりと守る。 ・やくそくやきまりは自分やみんなのためにあるので大切にしなければならない。 <p>(補) やくそくやきまりはだれのためにあると思いますか</p> <p>※考えを発表して交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分や、みんなのためにある。 <p>5 これまでの自分の行動をもう一度振り返る。</p> <p>○でも、守っていけるかな？</p>	<p>◆きまりやマナーを守ることの意義を考え、きまりを守ることが自分にとっても周囲にとっても気持ちのよい生活につながるということに、改めて気付いている。</p> <p>【タブレット・発言】</p> <p>※アンケートの結果から、これまでの行動を振り返り、これからどのように生活していくか考える。</p>
<p>終末 (5分)</p>	<p>6 本時の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約束やきまりは自分のためにあることがわかった。(価) ・自分のためにきまりを守っていこうと思う。(人) ・友達の考えを知ることができてよかった。(他) 	<p>※振り返りシートを使い、本時の学習を振り返る。</p>

(3) 板書計画

3年

課題

みんなが安心して気持ちよく生活するためには、どんなことが大切なのでしょう。

「わたしのなご国」

〇はじめに「わたしのなご国について」を聞き、
いっしょにうたおう。

・わたしのなご国がきれい。
・わたしのなご国がこころ。
・自由な国です。

〇「やがて、元の国に帰りたいなあ。」と言ったとき、
けなげなうさぎを導いてくれるところ。

・わたしがなご国、自分がなご国。
・わたしがなご国、わたしのなご国。

〇みんなが安心して生活できるように、
どんなことが大切ですか。

・いっしょにわたしのなご国をうたおう。
・いっしょにわたしのなご国をうたおう。
大切にしてほしい。

※青文字は画面とタブレットで表示

4年

課題

みんなが安心して気持ちよく生活するためには、どんなことが大切なのでしょう。

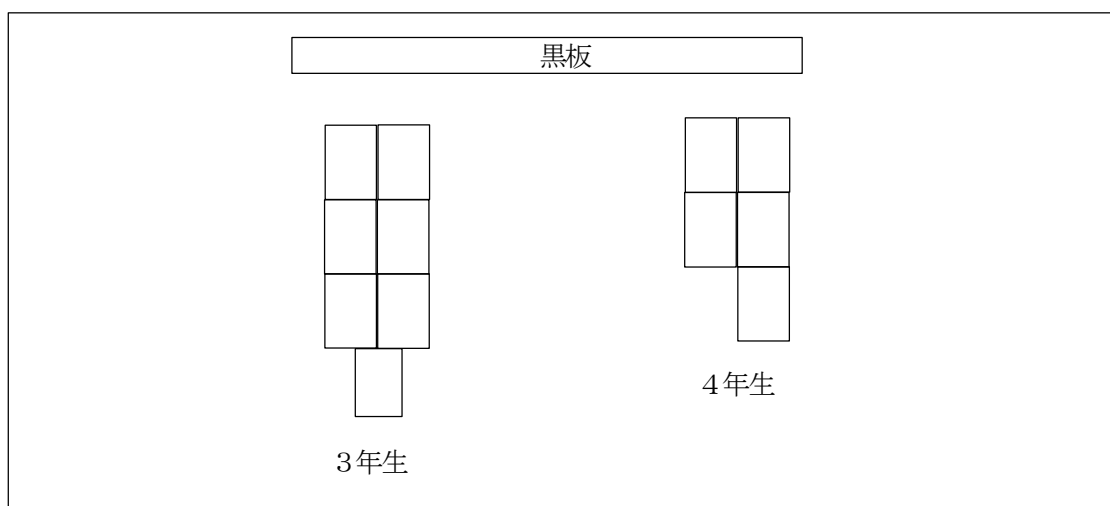
「国の手紙」の所見

〇「おれは」並ぶた所見のようには、
やんせいの国は、
・早く乗ったが、
・早くのぞく、座れた。
〇おれは、顔を、
自分が、
・自分は、横入った。
・周りの人の、
なら、
〇みんなが安心して、
んなことが大切だ。

・やんせいの国は、
・やんせいの国は、
大切。

※青文字は画面とタブレットで表示

(4) 机配置図



第5学年・6学年 道徳科学習指導案

日 時 令和7年9月18日(木)

児 童 第5学年5名(男子2名、女子3名)

第6学年11名(男子6名、女子5名)

指導者 新重 佑樹(T1) 鷲見 隆(T2)

- 1 主題名 第5学年『分かり合うために』
第6学年『広い心で』

- 2 教材名 第5学年「ブランコ乗りとピエロ」
第6学年「この胸の痛みを」

3 内容項目

B【主として人との関わりに関すること】(11)「相互理解・寛容」

・自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。

4 ねらいとする道徳的価値について(価値観)

人は、多様な考えや意見をもっている。自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、自分とは異なる意見や立場も広い心で受け止めて相手への理解を深めることで、自らを高めていくことができる。しかし、私たちは自分の立場を守るために、つい他人の失敗や過ちを非難してしまうなど、自己本位に陥りやすい弱さをもっている。そのため、広い心を持ち自分と異なる意見や立場を尊重することで、違いを生かしたよりよいものが生まれるよさや、相手の過ちなどに対しても、自分にも同様の過ちがあることとして謙虚な心、広い心で受け止め、適切に対処できるように指導することが大切である。

5 児童の実態について(児童観)

5・6年生は様々な学習や生活を通して、自分とは異なる相手の考えや意見を受け入れることの大切さについては、理解が深まってきている。しかし、相手の失敗や過ちを広い心で受け止められずに、表情や態度に感情が出てしまうこともある。また、考えが納得できずに、トラブルに発展してしまうこともあった。

6 教材について(教材観・指導観)

第5学年の教材では、スター気取りであるブランコ乗りのサムが、ピエロの分まで演技時間を使ってしまう。ピエロや団員は自分勝手なサムに怒るが、疲れ果てたサムの姿を見て、力いっぱい演技が観客の心を打つのだと思い、広い心で相手の思いを尊重する話である。本教材では、自分の考えや意見を他者に伝えるとともに、異なった意見に対しても広い心を持ち、相手の立場を尊重することの大切さを考えさせたい。また、本教材は団員一人一人が、集団の一員として何ができるかを考える必要があることから、「C よりよい集団生活、集団生活の充実」との関連も図ることが可能であり、「B 相互理解、寛容」を多面的・多角的に考える際の参考としたい。

第6学年の教材では、朝実から無視を受け寂しい気持ちでいた「私」が朝実に理由を聞くと、由希が原因であることが分かり、朝実から由希を無視しようと提案を受ける。由希のせいだから仕返しに無視をするのは当然のことと思いつつも、一人ぼっちの由希を見てだんだん「私」の胸が痛くなっていく話である。本教材では、広い心で相手を許すことに加えて、自分とは異なる意見も受け入れ、相手の意見から謙虚に学ぶことの大切さを考えさせたい。また、本教材は一人寂しそうにしている友達を見て、胸が痛んだ主人公の姿から「B 友情、信頼」の「友情」と関わり、自らを謙虚に振り返り、広い心で寛容に振る舞おうとする思いや考えに繋がってくる。「B 相互理解、寛容」を多面的・多角的に考える際の参考にした

い。

7 研究との関わり

【研究内容1】豊かな関わり

○ICTの効果的な活用

- ・タブレットのアプリを活用することで、学習リーダーを中心とした話し合い活動を展開し、自分と友達の意見を効果的に交流し考えを深めさせる。

【研究内容2】生き方を考える

○導入と振り返りの工夫

- ・導入時にICTを活用して、「広い心」に関する事前アンケート結果を共有することで、価値に対する自分の姿や、学級の状態について捉える。
- ・過去の道徳プリントから、赤い印で色分けされた同内容項目の振り返りと比べることで、過去にどのような考えをもっていたかを思い出させる。

○発問の精選、問い返しの工夫

- ・複式の「わたり」では、教師からの発問や問い返しのタイミングが難しいため、展開前半は予め発問を精選して用意し児童のリーダーを中心に学習を進め、展開後半からは発問を揃えて教師が直接指導で問い返しなどを行い、深めていく。

8 本時の学習

(1) ねらい

第5学年 考えの違う者同士が関わり合って暮らすために必要な心を考えさせ、広い心で相手の思いや立場を尊重しようとする心情を育てる。

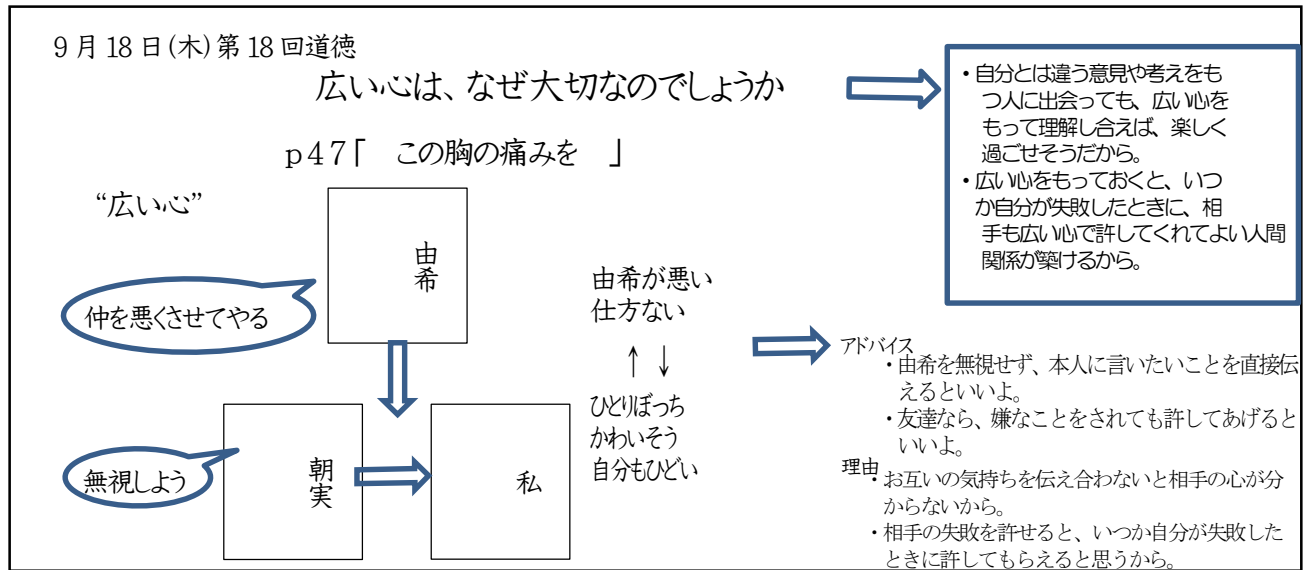
第6学年 「広い心」とはどんな心かについて考えさせ、自分について謙虚に振り返り、よりよい関係を築こうとする心情を育てる。

(2) 展開

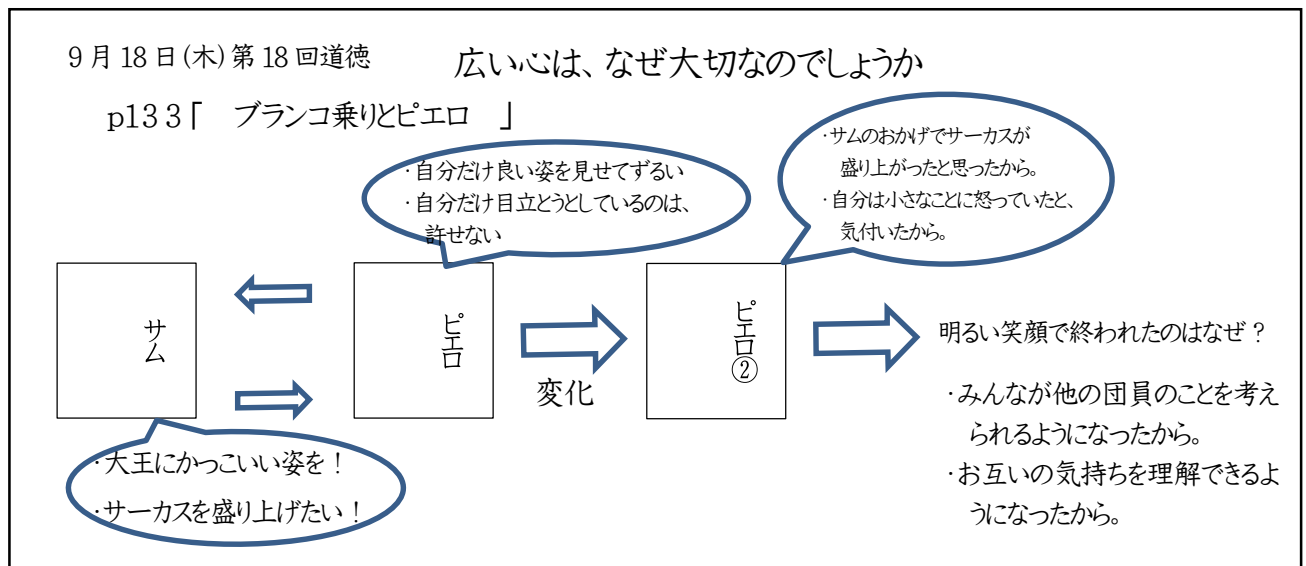
段階 (時間)	学習活動	○主な発問 (◎中心発問)	・予想される児童の反応	留意点(※)・評価(◆)
	5年	(人) 人間理解 (他) 他者理解 (価) 価値理解	6年	
導入 (5分)	1 相手の行動に「許せない」とってしまった経験を振り返る。 ・経験がある ・経験はない <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 広い心は、なぜ大切なのでしょう。 </div>			※事前アンケートを活用する。
展開前半 (25分)	2 事前に読んだ「プランコ乗りとピエロ」の内容を確認する。 ○ピエロは、サムに対してどんなことを思いましたか。(人) ・自分だけ良い姿を見せてずるい。 ・自分だけ目立とうとして許せない。		2 事前に読んだ「この胸の痛みを」の内容を確認する。 ○朝実「無視しよう」と言われた私は、どんなことを思いましたか。(人) ・由希が悪いから、仕方ない。 ・本当にいいのかな。	※教科書教材の音声朗読を、授業前に教室で聞かせる。 ※学習リーダーを中心として、直接交流をする。
	3 教材について話し合う ○サムに対する、ピエロの気持ちが変わったのは、なぜでしょう。(他) ・サムのおかげでサーカスが盛り上がったと思ったから。 ・自分は小さなことに怒っていたことに、気付いたから。 ○サーカスが、団員たちの明るい笑顔で終わったのは、どうしてですか。(価) ・みんなが他の団員のことを考えられるようになったから。 ・お互いの気持ちを理解できるようになったから。		3 教材について話し合う ○私はどうして、胸が痛んだのでしょうか。(人) ・独りぼっちになっていて、かわいそうに見えてきたから。 ・自分もひどいことをしていると思ったから。 ○あなたが「私」の友達なら、どんなアドバイスをしますか。 【アドバイス】(他) ・由希を無視せず、本人に言いたいことを直接伝えるといいよ。 ・友達なら、嫌なことをされても許してあげるといいよ。 【理由】(価) ・お互いの気持ちを伝え合わないと相手の心が分からないから。 ・相手の失敗を許せると、いつか自分が失敗したときに許してもらえと思うから。	※ロイロノートでの交流では、共通点や相違点を焦点化して進める。 ◆自分の意見を伝え合い、自分と異なる気持ちをもつ人を受け入れることの大切さについて考えている。(5年) 【タブレット・発言】 ◆自分について謙虚に振り返り、自分と異なる気持ちをもつ人を受け入れることの大切さについて考えている。(6年) 【タブレット・発言】
展開後半 (10分)	4 今までの自分の行動を振り返る。 ◎広い心をもつことは、どうして大切なのでしょう。(価) ・広い心をもてると、自分とは違う考えをもつ人にでも、考えていることを伝え合うことで、相手の考えや気持ちが理解できるから。 ・広い心をもてると、いつか自分が失敗をしても、周りの人が広い心で許してくれるかもしれないから。 (補) 自分とはちがう考えをもつ人には、どのように関わればよいですか？ 相手の失敗を広い心で許せると、自分にどんなよいことがありますか？			◆自分とは違う考えをもつ他者を受け入れることの難しさについて考え、広い心をもつことはなぜ大切なのかを考えている。 【ワークシート・発言】
終末 (5分)	5 本時の振り返りをする。 ○今日の学習で、自分にとって大切なと思ったことは何ですか。(価) ・相手を許せないと思っても、広い心をもって、相手の考えを冷静に聞き、お互いの考えを伝え合っていくことが大切だと思った。			※道徳ファイルから過去の「相互理解、寛容」の学習プリントを出し、考えを比較する。

(3) 板書計画

全体・6年生（正面）



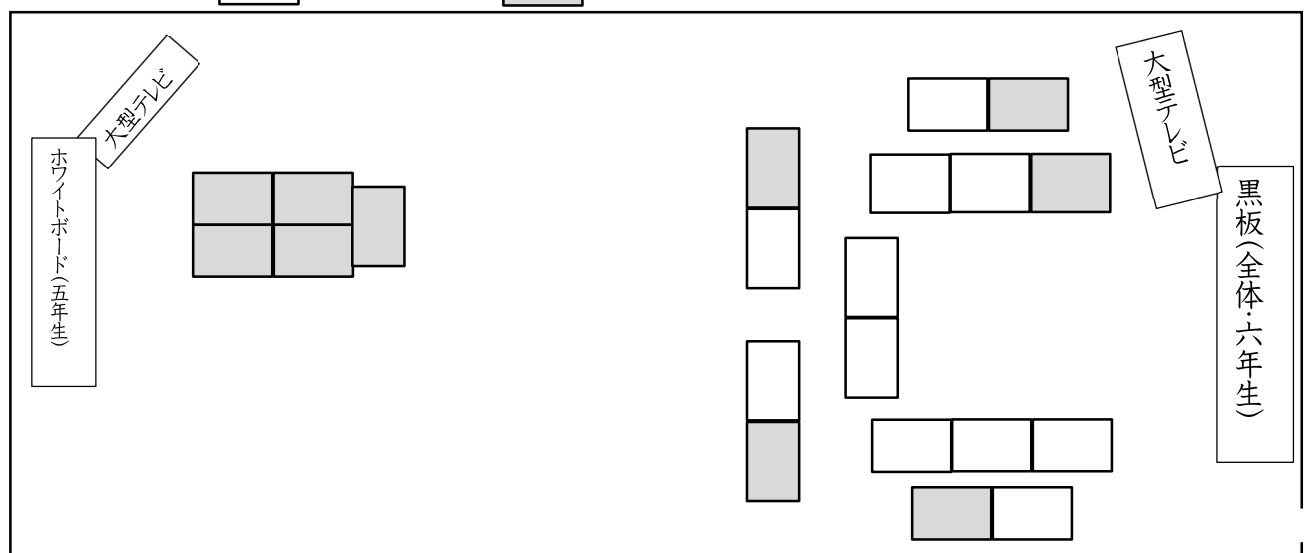
5年生（裏面）



(4) 机配置図

6年生

5年生



8 研究協議の記録

(1) 授業者振り返り

公開授業①【3・4年生】長野博史教諭

- ・授業未実施のため、これまでの取組を発表及び交流

公開授業②【5・6年生】新重佑樹教諭

- ・ア 児童全員が主体的に参加する
- ・イ 教師待ちにならない
- ・ウ 再現性の高さ

の3つを重視して授業を行った。

- ・ICTの効果的な活用として、導入時に児童からのアンケート結果と3つにしばった具体例を表示し、5分という短時間で行うことができるように工夫した。また、発問2でロイロノートを活用して意見を可視化し、他者参照ができるようにした。
- ・終末では、過去と授業後の自分を比較するため、道德ファイルを活用して振り返った。
- ・ワークシートの発問は、教科書の発問を中心に、児童だけで進められるよう考え、一部を変えて作っている。
- ・複式授業の課題として、時間配分が難しい。事前に教材を読んで時間を確保したり、学習リーダーを育成することで円滑な進行を図ったりしているが、本時の授業では、5年生の間接指導が想定以上に時間を費やし、最後がつまってしまった。

(2) 協議内容

- ・遠隔合同授業は、他校の同学年児童の意見も聞くことができ、両校の児童の見方や考え方が広がる。また、何度も意見を交流したり名前を呼んだりすることにより、両校の子どもたちの関係性ができていた。
- ・遠隔合同授業において、事前や事後の打ち合わせを行い、改善が図られていた。一方で、ICT機器に詳しい教職員が必要になるなど、事前準備の負担が大きい。
- ・授業者は、ICT機器を活用する場面と実際に書く場面を意図的に設定していた。ICTの活用は、意見を可視化できることで、苦手な子も他の意見を参考にすることができ、そこから自分の意見も書けるようになる。また、ロイロノートに発問を入力することで、学習リーダーを中心に、児童が主体的に授業に臨んでいた。
- ・事前にアンケートをとり、導入で結果を見せたのは非常に効果的だった。発問を絞ることにより、過去のワークシートを有効に活用でき、振り返りの際に過去のワークシートを見返すことができるのが良かった。

(3) 助言等

北海道へき地・複式教育研究連盟研究推進委員 平取町立二風谷小学校校長 遠山 昌志 氏

- ・へき地・複式の観点で道徳を考えると、3・4年生の教材「雨のバスでいりゆう所で」の設定は、幌加内にはない状況と思われる。教材と日常の差を埋める場面が導入であり、アンケートを活用することにより自分事として押さえさせることができる。
- ・対話は、共感できるかどうか重要。意見を増やす方法としては、横のつながり「近隣校」や、縦のつながり「家族」があり、「遠隔」も手法の一つとして考えることができる。教育効果がどれだけ上がるかが大切。遠隔合同は、機材トラブルなどの変なことはあるが、それ以上の効果があり、実践し協議する価値がある。
- ・発達段階、発達過程で考えると、3・4年生は「なぜなぜ期」、じぶんだったらどうするかを考える。5・6年生は「未来期」、抽象的でも考えられる。複式の強みは異学年交流である。本時の授業で「自分の身に悪いことが起こるから広い心が大切」と考えていた5年生が、6年生と交流することで違ふと気づき、全慣習的段階から抜けることができた。

北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班主任指導主事 蒔田 和樹 様

- ・よい道徳の授業とは、自分のこれまでを振り返り、自己を見つめることができる授業である。
- ・遠隔合同授業は、これまでの経験の積み重ねからブラッシュアップされている。課題はあるが、トライ＆エラーで克服することができる。自己満足で終わらないよう、子どもたちはどう思っているのか意見を聞いてみるのが大切である。
- ・ICTの活用は、効果が本当にあるのか、意図を明確化させる必要がある。アンケートの活用は最近多いが、本時の授業では、①何をさせたいのか具体的な意図をもった上で集計結果からいくつかピックアップする ②展開後半でアンケートに戻り、現実の自分事として考えさせる という2つの工夫があった。
- ・ポートフォリオの取組は、学校全体で統一されており、継続させることが大切である。
- ・発問は、助詞だけでもニュアンスが変わる。ワークシートに発問を載せることについては、「先がわかってしまうのではないか」という意見もあるが、直接指導する場面が限られているため、意図してどのメリットをとるかという問題となる。
- ・教材を先に読ませる場合、心に引っかかったところに線を引かせながら読ませると、後からでも見返し気付くことができる。

9 成果と課題

(1) 成果

- ・遠隔合同授業は、集団が小さいへき地校においても多様な考えに触れることができ、両校にとって効果的であった。また、他校とつながることで、児童に意欲や集中力が生まれた。
- ・今回の遠隔合同授業を通して、道徳の授業だけでなく、他の教科や活動にも繋げることができるなど、可能性を広げる実践となった。
- ・ICT を活用する場面と紙に書いたり直接交流したりする場面を意図的に設定し、ワークシート内にも明記し、児童に伝えるなど、活用を取捨選択したことで、探究活動や話し合い活動を充実させることができた。
- ・導入と振り返りを工夫した。特に、導入で提示したアンケート結果を、展開後半でも活用したことにより、自分事に移行しやすい学習活動となった。
- ・学習リーダーの役割を絞り、様々な教科で継続して取り組んでいくことで、複式の間接指導も児童が進められるようになった。

(2) 課題

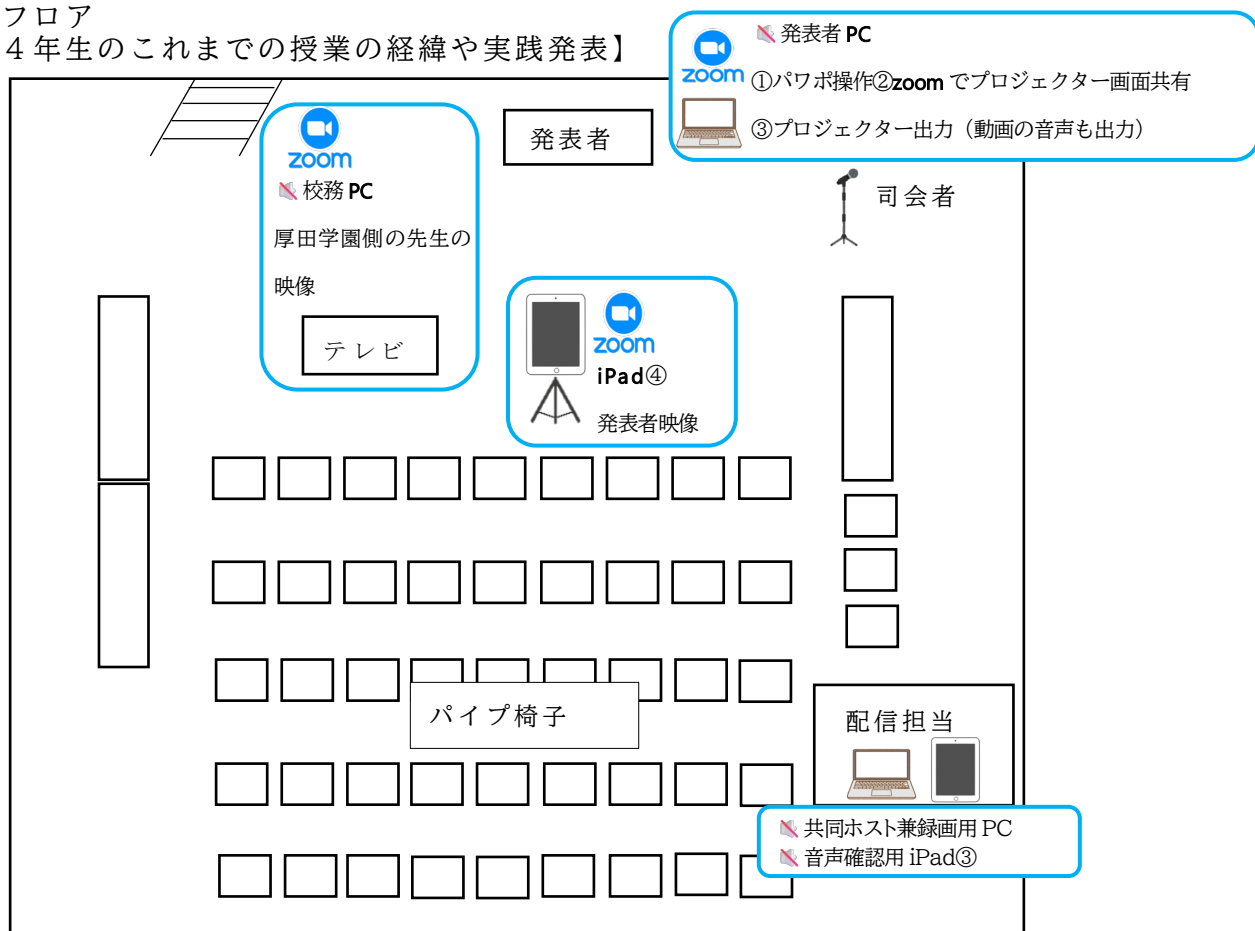
- ・遠隔合同授業において、実践や打ち合わせを重ね試行錯誤することで改善を図ることができた、その分負担も大きくなった。ICT 機器に詳しい教職員がいないと検討していくことも難しいため、持続可能な方法を模索していく必要がある。
- ・複式での道徳の授業では、直接指導と間接指導のバランスを考えた時間配分が必要である。間接指導でも自己を見つめ、他者と協働しながら多面的・多角的に考えを深めていけるよう、更なる手立ても考えていかなければならない。

10 配信状況の記録

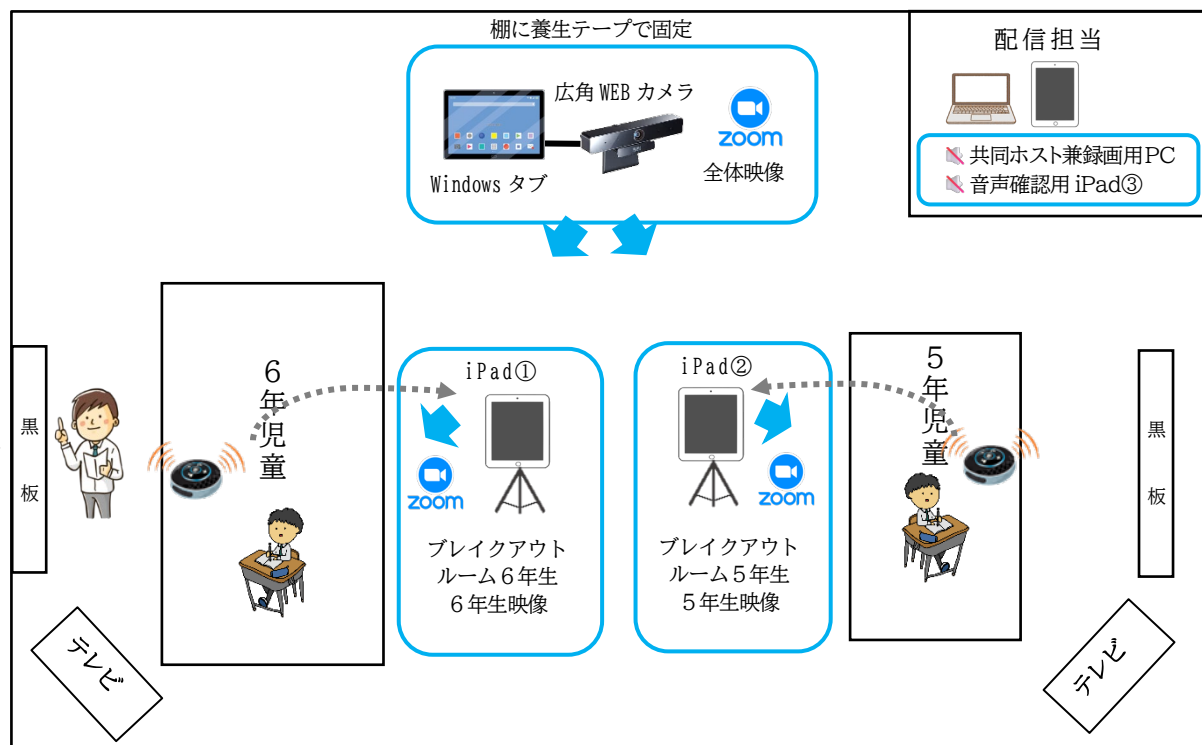
(1) 配置図

○体育館フロア

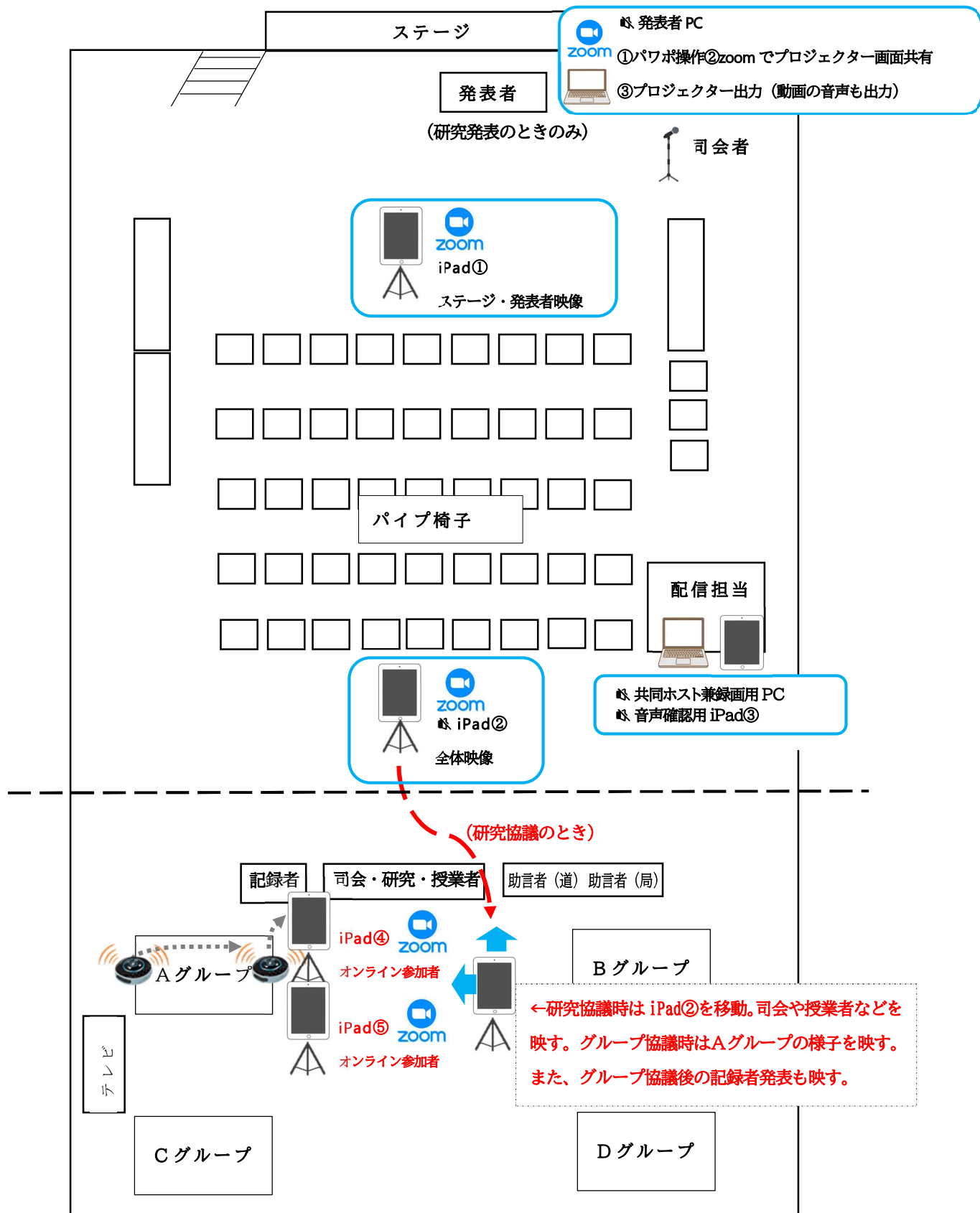
【3・4年生のこれまでの授業の経緯や実践発表】



【5・6年生新重先生授業 実施場所：5・6年生教室】



○体育館フロア
 <開閉式・研究発表・研究協議>



(2) 配信方法

3・4年生の実践発表のとき→ブレイクアウトルームなし

- ・発表者 PC→パワーポイントをプロジェクターに投影しつつ zoom に画面共有。
- ・校務用 PC→zoom に参加している厚田学園の先生を TV に表示。
- ・iPad④→発表者の様子を配信。

5・6年生授業のとき→ブレイクアウトルームあり（2ルーム）

- ・Windows タブレット→全体映像を配信。
- ・iPad①は6年生のブレイクアウトルームで配信。（マイクスピーカー接続）
- ・iPad②は5年生のブレイクアウトルームで配信。（マイクスピーカー接続）

開会式、閉会式、研究発表のとき→ブレイクアウトルームなし

- ・発表者 PC→パワーポイントをプロジェクターに投影しつつ zoom に画面共有。
- ・iPad①はステージや発表者の映像を配信。
- ・iPad②は全体映像を配信。

研究協議とグループ協議のとき

- ・iPad②は前に出ている発言者や、グループ協議のグループ映像を配信。
- ・iPad④と⑤はオンライン参加の映像を表示。（マイクスピーカー2台リンク状態で接続）

【備忘録】

- ・授業の配信は、マイクスピーカーを配置することで子どもの声を拾いやすい。zoom のノイズ除去は切った方がクリアに聞こえた。
- ・開閉会式や研究発表など体育館マイクを使用した声は zoom のノイズ除去は切った方がクリアに聞こえた。マイクスピーカーよりも iPad のマイクの方が良かった。
- ・グループ協議だけは、雑音が多いため zoom のノイズ除去機能が非常に有効。マイクスピーカーを配置することで声を拾いやすい。
- ・録画は、有線 LAN が繋がっている PC で行う方が良い。（無線 LAN の負荷軽減のため）
- ・オンライン参加者はグループ協議では同じグループにまとめる。
- ・研究発表など会場でパワポや動画を映しつつ、画面共有にて同じ物を流す場合は、音声のハウリングに注意。

(3) 機材など

- ・iPad 第8世代 5台
- ・windows タブレット 1台
- ・ノート PC 6台→発表者1台、厚田学園映像用1台、共同ホスト用1台、録画用3台
- ・Jabra マイクスピーカー Jabra Speak710 2台（@約3万×2台）
- ・広角 web カメラ サンワサプライ CMS-V51BK 1台（@約1.5万×1台）
- ・iPad で撮影する際の三脚 5台

第3分科会

【研究主題】

「主体的に学び 自分の思いや考えを伝え合う子どもの育成」
～子どもが生き生きと学ぶ学習指導をめざして～



東川町立東川第二小学校

I 授業の様子

【授業公開①：第3・4学年 算数】



【授業公開②：第5・6学年 算数】



Ⅱ 研究の概要

1 研究主題

「主体的に学び 自分の思いや考えを伝え合う子どもの育成」
～子どもが生き生きと学ぶ学習指導をめざして～

2 主題設定の理由

令和5年度は、職員の大幅な入れ替わりがあったことから、特に算数科を中心に複式の授業づくりについて研修してきた。学習規律、学習過程、わたりずらしなどの基本的な授業の型の共有、学習リーダーの取組により、教師は複式授業のイメージを具体化し、校内での共通理解を図ることができた。児童も学習の流れを理解し、学習リーダーを中心に、自分たちで学習を進めようという意識も身に付いてきた。一方で、教師が児童に理解させようと「教える」ことに力を入れ過ぎてしまうこと、児童がすぐに教師を頼ってしまう傾向があること、間接指導時の学びについての課題が浮かび上がってきた。

令和6年度は、前年度の課題を解決するため、研究主題を「主体的に学び 自分の思いや考えを伝え合う子どもの育成～子どもが生き生きと学ぶ学習指導をめざして～」と設定し、教師主導の授業から、児童が友達と関わり合いながら主体的に学ぶ「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、「主体的な学びを支える授業づくり」を重点に、間接指導につながる直接指導の工夫（問題提示と課題把握の工夫や、見通しのもとせ方など）に焦点を置いた授業づくりに取り組んだ。その結果、学びを自分事とし、見通しをもって取り組み始める姿が見られるようになった。

今年度は、間接指導を充実させ、更に児童同士が関わりをもつ学びを目指し、「主体的・協働的な学びを支える授業づくり」を重点とした。昨年同様、直接指導の工夫に加え、自ら学ぶ間接指導の工夫に焦点を置き、児童が自ら学びを選択し、仲間とともに関わり合いながら、主体的・協働的に学びに向かうための授業づくりを目指す。

また、東川町内には本校を含め3校の小規模複式校がある。これまでに、学年ごとに集合学習や、オンラインによる3校合同の理科の学習、ICT を活用して作品の交流などを行ってきた。また、宿泊研修や修学旅行も3校合同で実施している。児童の実態や課題、共通点も多いことから、昨年から同じ研究主題のもと、合同での研修を進めている。低・中・高・支援ブロックに分かれた合同研修を中心に、各学校の実践例や意見交換、授業交流などを行い、よりよい授業づくりをめざす。

3 北海道へき地・複式教育研究連盟 第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画との関連

【研究分野1】学校・学級経営の深化・充実
〈研究課題1〉 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進を図る
○学校教育目標の達成に向け、児童の確かな成長につなげる学級経営
○地域のよさや特色を体験的に学ぶ活動の充実
【研究分野2】学習指導の深化・充実
〈研究課題6〉 主体意識をもって仲間と共に高め合う学習過程の改善・充実を図る
○子どもに委ねる時間を大切にした授業づくり
○「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた授業づくり
○東川小、東川第一小、東川第三小などとの学校間交流の充実

令和7年度 研究の概要

上川へき地・複式教育研究連盟（第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画）研究主題

「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」
～児童生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

東川町へき地・複式教育研究連盟 研究主題

主体的に学び 自分の思いや考えを伝え合う子どもの育成
～子どもが生き生きと学ぶ学習指導をめざして～

めざす児童像

自分の考えをもち、仲間と学び合い、学ぶ楽しさを実感できる児童

1 課題を見出し、意欲をもって
粘り強く解決していく児童

2 仲間と積極的に関わり、自分
の考えを自分なりの方法で発信
できる児童

3 自己を振り返ることで成長を
実感すると共に、新たな課題に
向かおうとする児童

研究内容

令和7年度

◇主体的・協働的な学びを支える授業づくり

・間接指導につながる直接指導の工夫 ・自ら学ぶ間接指導の工夫

ICTの効果的活用

○自ら学ぶツールとして ～情報収集、情報発信、個に応じた学習など
○仲間と学ぶツールとして ～情報共有、共同作業、共同編集、遠隔授業など

令和6年度

◇主体的な学びを支える授業づくり

・問題提示と課題把握の工夫 ・間接指導につながる見通しのもとせ方の工夫

令和5年度

◇学びの土台づくり

・複式授業、算数科指導の研修 ・学習リーダーの取組
・学習規律、ルールの統一 ・学習指導過程の統一 ・ふりかえり

学びを支える土台

◇学習規律、学習ルールの定着（東川スタンダード） ◇伴走者となる教師の関わり
◇学習リーダーの育成（シナリオの活用） ◇心理的安全性が確保された学級経営
◇子どもが学ぶ環境づくり（場の設定、資料の準備等）

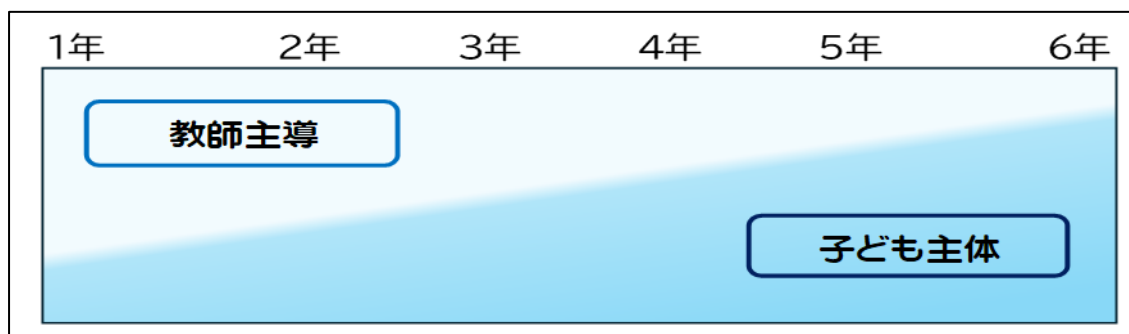
5 研究内容

☆「主体的・協働的な学びを支える授業づくり」に向けて

児童の「主体的・協働的な学びを支える授業づくり」を実現するために、本校では、児童に学びを委ねる時間を大切にしている。児童に学びを委ねると言っても、全てを児童に任せることではない。発達段階や学習内容に応じて、児童に委ねる内容や時間は変わってくる。次の2つを研修の基盤とし、本校の研修を通して児童一人一人に確実に資質・能力を身に付けさせていく。

① 教師の関わり方

児童の主体的・協働的な学びを支えるためには、教師の関わり方が重要である。これまでの教師の指導についての反省や児童が教師を頼りがちになるという実態から、本校では、基本的な「子ども主体」と「教師主導」の割合を下図の通りとし、高学年においても、教師が指導性を発揮し、児童に指導すべきことは教師主導で学習を進める場面も必要とおさえている。



② 単元計画の工夫

全ての授業の中で、児童が主体的・協働的に学ぶ場面を設定することは理想であるが、学習内容や指導事項によっては、低学年でも子ども主体の場面が多くなったり、高学年でも教師主導の場面が多くなったりすることがある。

本校では、次の3点を大切にしている。

- ・単元、本時で児童に身に付けさせたい資質・能力を明確にすること
- ・その資質・能力を身に付けさせるためにどのような学習過程が最適かを考えること
- ・育成を目指す資質・能力を児童が身に付けられるように、単元全体を見通して計画を立てること

(1) 間接指導につながる直接指導

複式授業では、一方の学年に教師が直接指導をしている間、もう一方の学年は自力で学びを進めていくことになる。このとき、教師がつかなくても、学びを止めずに自分たちで学び進められるよう直接指導をどう構築するかが大切である。

① 問題提示

- ・児童が学ぶことに興味や関心をもち、自分事として考えられるような問いを工夫する。
- ・具体物や ICT を活用したり、問題に仕掛けをしたりするなど、提示を工夫する。

② 課題把握

- ・前時や既習事項との違いや、児童の疑問や問いから課題を一緒に考えていく。

(発達段階に応じて自分たちの力で課題を考えていけるように)

- ・本時で「何を学ぶのか」(目的意識)、「何ができるようになればよいのか」(学習内容)を児童が明確に把握できるようにする。

③ 見通し

- ・児童自身が「何を」「どのように」解決したらよいかを見通せるようにする。
- ・児童の実態や学習内容に応じた用具、資料などを準備し、児童が選択したり、解決への手掛かりにしたりできるようにする。

・見通しの種類

結果の見通し ～ 答えはどのくらいになりそうか

手順の見通し ～ 問題を解決するための具体的な手順、学習の流れ
終わったらどうするか

方法の見通し ～ 既習事項、経験の中に活用できる事柄や手掛かりはないか
何を使うとよいか、誰と学ぶか など

(2) 自ら学ぶ間接指導の工夫

教師が直接つけない間接指導の時間は、児童が自ら学びを進める貴重な時間である。教師がつかないため、日常の学級経営が重要であることは言うまでもないが、仲間とともに解決に向かって学び続けることができるよう、学び方や環境づくりなどの工夫が大切である。

① 学び方の工夫

ア 学習過程の工夫

児童が主体的に学び続けるとともに、本時の学習内容が定着できるようにするために、直接指導、間接指導の特長を理解し、効果的に学習活動が行われるように「わたり」と「ずらし」を工夫する。

・同時間接指導

- ・一方の学年に重点を置いた直接指導 など

イ 学習規律の徹底、学習リーダーなどによる主体的な学びの土台作り

- ・詳細は「☆学びを支える土台☆」を参照

② 自らの学びを選択できる環境づくり

ア 誰と学ぶかを選択

これまでの間接指導の「一人学習」→「ペア・グループ学習」→「全体交流」という流れにこだわらず、初めから仲間と相談したり、途中からグループで相談したりするなど、児童の思考の流れに応じた学習ができるようにする。

イ 何を使って学ぶかを選択

教科書を使う、ICTを使う(過去のデータ、友達の考えの共有など)、ノートを使う、教室掲示を活用など、児童自身が自らの学びに適したものを選択しながら学習を進めていくようにする。

③ 話合いの目的・観点を明確にする

「この時間には何を目的に交流するのか」「どんな視点で意見を聞か」など、交流の観点を伝え、発表会で終わらないようにする。

例) ○○について話し合ってみよう

↑

- 「共通点や相違点について」 ～比較する・分類する・多面的に見る
- 「よりよい方法について」 ～順序付ける・一般化する
- 「理由や根拠について」 ～関連付ける・理由付ける

☆学びを支える土台☆

(1) 学習習慣と学習規律

① 学習ルールの指導

- ・机の上、ノートの書き方、タブレットの使い方
- ・間接指導時のルール

自分の学習が終わったら何をして待つか、
分からないときにはどうするか など

- ・板書のルールを統一

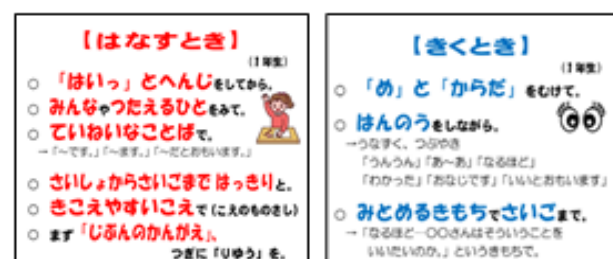
(チョークの色、課題、まとめなど)

- ・東川スタンダード



② 話し方、聞き方～交流の充実のために

- ・低、中、高学年の発達段階に合わせて、話し方、聞き方のルールを教室に掲示。
- ・段階を踏んで指導する。



③ リーダー学習

- ・学習リーダーを中心に自分たちで学習活動を進めることで、主体的に学ぶ習慣、協力する姿勢を育てる。
- ・「聴き合い助け合う」集団を育てる。
- ・各学年の段階の目標は以下のように設定した。

低学年	中学年	高学年
学習の土台作り 学習リーダーの指示で発表	ともに伸びる学習の雰囲気 学習リーダーの司会で話し合い	児童相互の高め合い 学習リーダーのまとめ
・2年生終了までに、シナリオをもとに、先生のサポートを受けながら、進行できるようにする。 ・学習の流れをだいたい覚えられるように、黒板に掲示する。	・4年生終了までに、シナリオを使って学習リーダーを中心に学習を進行できるようにする。	・6年生終了までに、シナリオを使わなくても、学習リーダーを中心に学習を進行する。
・答え合わせや漢字ドリルは少しずつシナリオを使わずに進められるようにする。	・答え合わせや漢字ドリルは、シナリオを使わず進行する。	
・課題やまとめは、先生と一緒に話し合いながら考える。	・課題やまとめは、板書やキーワードなどを活用して自分たちで考えるようにする。	・本時の課題やまとめを自分たちで考える。
・公平に指名する。	・簡単な交流場面の進行。	・交流場面での進行。話し合いの焦点化など。

※学習リーダーだけが頑張るのではなく、みんなで協力して進めることを繰り返し働きかける。
 ※「今日の学習で何が学べたか」「学び方のどこがよかったのか」を振り返り、自分たちで進められたという自信を付けていく。

(各学年段階の目標)

算数の 学しゅうの おすすめかた

もんだいを する	① 前の時間は、どんなことを 学しゅう しましたか。 ② きょうの もんだいを、かくにん します。  ☆先生の せつめい ③ もんだいを 読みます。さんはい。 ④ 気づいたことは ありますか。 ☆ 大きな数字、言葉、何を もとめるか、何算 になりそうか、
かだいを つかむ	⑤ 今日のかだいを かんがえます。  ☆先生の せつめい ⑥ かだいを 読みます。さんはい。 ⑦ かだいを ノートに 書いて ください。 ※ ぜんいんが 書けたら、先生と 見通しを 立てる。
シンキング タイム	⑧ シンキングタイムを はじめます。時間は、() 分です。 ※ まずは、自分の カで がんばってやってみる。 ア、できた人から、自分のかんがえをつたえる。 イ、こまづいてる人のおたすけ ウ、ペアやグループで ⑨ グループで、話しあいをしてください。時間は、() 分です。 ※ 自分の かんがえを つたえる。 ⑩ シンキングタイムを おわります。すわってください。 ⑪ はっぴょう してください。
まとめ	⑫ まとめてを します。  ☆先生と いっしょに、まとめる。 ⑬ まとめてを読みます。さんはい ⑭ ノートに書いてください。
たしかめ	⑮ たしかめ もんだいを します。  ☆先生と いっしょに ⑯ こたえあわせ ⑰ スキルの ○ ページを やってください。(キュービナをしてください) ※ ふりかえり

算数の学習の進め方

2025.5

問題 把握	① 始めの挨拶 ② 日付・教科書のページをノートに書いてください。 ③ 前の時間を振り返ります。→ ノートやロイロノートなどを見て確認する。 ④ 問題を確認します。 ⑤ 問題のポイントをチェックします。→ 赤ペンなどで線を引く など → 数字、何を聞かれているのか、大事な言葉、式を立てる など
課題 把握	⑥ 課題を考えます。→ 今日学習することを考えて発表する。 ◇ 活動型「～しよう」 ◇ 思考型「解き方を考えよう」「説明の仕方を考えよう」 ◇ 確認型「～を確認しよう」「～なのか確かめよう」 ⑦ 課題の確認をします。→ 先生と一緒に課題を確認する。→ 課題を読みます。 → ノートに書いてください。(分) ⑧ 学習の見通しをもちます。今日の課題を解決するために何が必要だと思いますか。 ◇ 式を立てる…公式・計算の順番 など ◇ 言葉…説明・理由など ◇ 図や表…アレイ図・テープ図・数直線・線分図・グラフ など
一人 学習・ 交流	⑨ まず個人で考えます。時間は(分)です。 ※ 早く終わった時は、A他の考えがないか、さらに考える。 B友達と確認する。 ※ 分からない時は、C友達にアドバイスをもらう。 D先生を読んで質問する。 → 時間です。自分の考えをロイロノートに送ってください。 ⑩ 次に全体で交流します。→ 全員発表する。 ※ テレビ前発表 ロイロ共有ノート など→ リーダーが意見をまとめる。
まとめ・ たしかめ	⑪ それでは、まとめます。それぞれが発表する。→ リーダーが意見をまとめる。 ⑫ では、練習問題をします。 教科書(ドリル)○ページの○番に取り組みます。(分) → 答え合わせをします。(2分) ⑬ 最後に振り返りをします。 → リーダーが今日の学習を確認する。 「今日の課題は○○でした。………」→ 黒板のキーワードを見つけて発表 ※ ノートに振り返りを書きます。 ・できたこと ・わかったこと ・気付いたこと ・考えたこと ・難しかったこと ・もっと知りたくなったこと など ⑭ 終わりの挨拶

(学習リーダー用のシナリオ～2年生・高学年)

(2) 学習過程の基本形

- ・学習過程の基本形をもとに、単式・複式にかかわらず、学校全体の学び方指導として定着を図る。(掲示など)
- ・基本形をもとにしながら、本時の目標や学習内容、単元構成との関係、学級の実態に応じ、各段階を半分ずつずらして組み合わせたり、学年に軽重をつけたりして、直接指導と間接指導を柔軟に配置するようにする。
- ・子ども主体の授業づくりを目指し、学年が上がるにつれて、少しずつ子どもたちが自分たちの力で学習を進めていけるようにしていく。

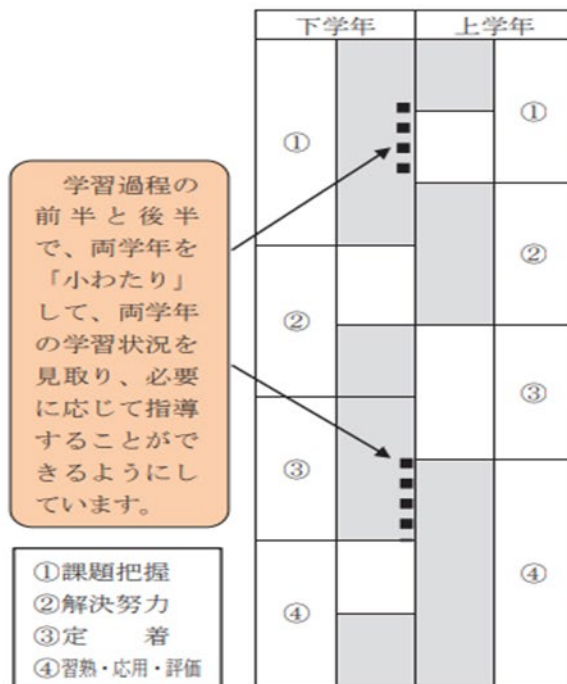
	学習活動 (A 学年)	指導	学習活動 (B 学年)	
つかむ・ 見通す	・ 前時の学習を想起する。 ・ 問題を知る。 ・ 本時の課題を把握する。 ・ 解決の見通しをもつ。	直 間 接 接	・ 前時で学習した結果を利用して、補充 問題や発展問題に取り組む。 ※ ドリル、Qubena など	ふ か め る

考える	・課題解決に取り組む。 (一人で、友達と) ※内容や実態に合わせて、形態を選択する。	間接	直接	・前時の学習を想起する。 ・問題を知る。 ・本時の課題を把握する。 ・解決の見通しをもつ。	つかむ・見通す
まとめる	・解決の道筋と結果を発表する。 ・どの方法がよりよい方法か話し合う。	直接	間接	・課題解決に取り組む。 (一人で、友達と) ※内容や実態に合わせて、形態を選択する。	考える
ふかめる	・学習を振り返り、まとめる。 ・まとめた結果を利用して、補充問題や発展問題に取り組む。 ※ドリル、Qubena など	間接	直接	・解決の道筋と結果を発表する。 ・どの方法がよりよい方法か話し合う。 ・学習を振り返り、まとめる。	まとめる

(算数科の学習指導過程の基本形)

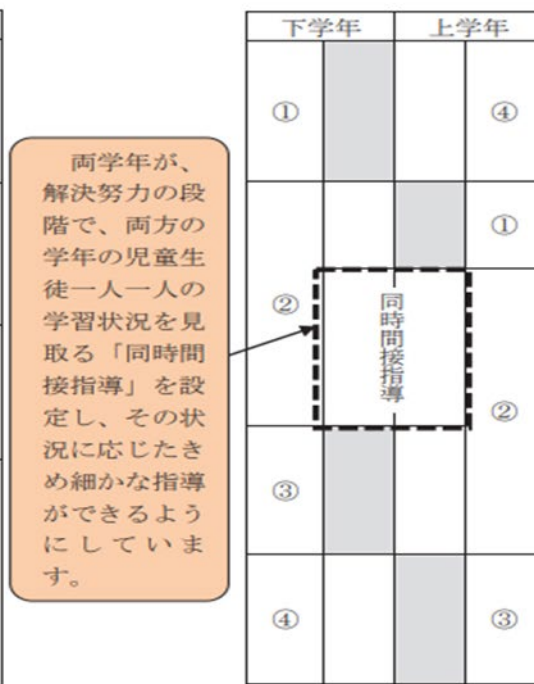
<工夫例1>

各段階を半分ずつずらして組み合わせ、
両学年の学習状況を見取る工夫をした例



<工夫例2>

両学年同時間接指導の時間帯を設定し、
両学年の児童の学習状況を見取る工夫をした例



(学習過程の工夫例～「へき地・複式・小規模校教育の手引き」より)

(3) ICT の効果的活用

① 自ら学ぶツールとしての活用

子どもが自分のペースで学びを進めたり、理解を深めたりすることが可能となる。教師がついていない間接指導の時間においても、ICT を使って調べたり、手掛かりを得たりすることで、「一人で学ぶ時間」に思考を止めずに進めることができるようにする。

- ・情報収集
- ・学習内容、資料などの記録、蓄積
- ・動画教材、AI型教材 Qubena を活用した学習支援、個別最適な学び など

②仲間と学ぶツールとしての活用

子ども同士の考えの共有や、交流場面での考えの可視化、課題への協働的な取組が可能になる。特に間接指導では教師がつけない時間もあり、ICTを活用して互いの考えを共有することで、分からないときのヒントを得たり、自分と異なる視点に気付いたりするなど、子ども同士の学び合いや学びを深めるために有効である。

- ・意見、考えの共有、比較
- ・協働での資料作成、まとめ活動
- ・他校との遠隔学習～中学校理科担当教諭による町内3校合同の6学年理科
- ・作品交流など



← 4年生国語科では、要約文をPadletを使って交流した。お互いの要約文を見て、いろいろな要約の仕方があることや、いろいろな考えがあることを学ぶことができた。

6 これまでの成果と課題

(1) 成果

- ・主体的、対話的に学ぶ子どもを育てるための土台となる学級づくり(学習習慣と学習規律)として、話し方や聞き方の指導及び学習ルールの指導を進めることで、自分の思いを素直に表現したり、互いの考えを尊重し合ったりする姿が多く見られるようになった。
- ・児童の問いをもとに、課題を立てて、見通しをもって課題解決にあたる指導過程が定着しており、その後の間接指導時には、児童が主体的に自己解決に励むことができた。
- ・学習リーダーの取組により、子どもたちが1時間の学習の流れ(解決の見通し)をもつことができ、自分たちで学習を進める意識を高めることができた。また、全校での取組により、6年間の学びの姿のイメージを職員で共有でき、各学年での取組にもつなげることができた。
- ・ICTを活用することで、友達と自分の考えを比較しやすくなり、よりよい解決策を見出すなどの気付きが見られた。
- ・3校でブロック研をしてきたことで、同じ悩みを共有し、自校の実践に生かすことができた。またICTを使った作品交流などをしてきたことで、子どもたちは自分の学校以外の子どもたちの多様な考えに触れることができた。

(2)課題

- ・教師がどう教えるかではなく、子どもたちがどう学ぶのかを意識した授業づくり。どこを子どもたちに任せて、自ら学び進める力を高めていくか考え、授業を構築していく。(主体的に児童が学ぶための授業づくりについての教師の意識改革。)
- ・間接指導をどのように充実させていくか。発達段階に応じた話合いや交流の在り方を工夫する必要がある。また、一人学習→ペア・グループ学習→全体交流の流れにとらわれず、子どもの様子や本時の目標など、目的に応じて児童が形態を考えて学習を進められるようにすること。
- ・ICTの更なる効果的な活用法や、新たな教育アプリの活用法を探ること。

7 指導案

第3・4学年 算数科学習指導案

日 時 令和7年9月18日(木) 1校時
 児 童 第3学年4名 第4学年9名
 指導者 川 田 啓 太

《第3学年》

1 単元名『円と球』

2 単元について

円や球は子どもたちにとって身近な形であり、幼児期より「まる」、「ボール」など通して慣れ親しんできた図形である。1学年の学習では、「かたちあそび」の活動を通して、筒状の形や球形は転がりやすいことや、筒状の形を写し取るとまるい形になることなどに着目してきている。

本単元では、公平に玉入れをするという目的意識をもとに、的から等距離の点をいくつも調べることを通して、一つの点から同じ長さになるようにかいたまるい形を「円」と定義している。そして、円の「中心」「半径」「直径」の意味や性質を調べたり、その性質を基にコンパスで作図したりする活動を通して、円についての理解を深めていく。コンパスは、円を作図する用具としてだけでなく、長さを写し取ったり一定の距離の点を探したりする場合にも用いられる。単元13で二等辺三角形や正三角形などの作図にも活用される技能なので、十分に時間をとって習熟をさせておきたい。球の概念や性質については、具体物の操作や観察を通して理解を図っていく。球を切断した立体模型を観察したり、ドアや箱に挟んで球の直径を調べたりするなど、円の学習と結び付けながら球の性質を捉えさせる。

○学習内容系統図

1年 10 かたちあそび	3年 9 円と球 13 三角形	5年 15 正多角形と円
------------------------	------------------------------	------------------------

3 児童の実態

複式学級となった3年生は、異なる学年との学びに徐々に順応し、輪番制の学習リーダーのもとで、国語・算数の授業では子ども主体の学習時間が増している。しかし、予期せぬ場面や納得できない内容に対しては、言い合いが頻発している。そのため、お互いが気持ちよく学習できるよう、対話スキルの向上に取り組んでい

《第4学年》

1 単元名『垂直、平行と四角形』

2 単元について

これまでに、基本的な平面図形について、長方形、正方形、直角三角形、二等辺三角形、正三角形、および円を指導し、頂点や辺の数、直角の有無、辺や角の相等関係などを観点に考察させてきた。そこでは、図形の敷き詰めなどの活動を通して、辺の並び方についての素地的な経験もさせた。更に、単元4「角」では、図形の構成要素としての角の意味に加え、回転の大きさを表す角の意味についても理解を図り、分度器による角度の測定や作図の仕方を指導した。

本単元では、二直線の位置関係を表す概念として、垂直、平行を指導する。また、図形を分類する観点に辺の位置関係を加え、基本的な平面図形を台形、平行四辺形、ひし形にまで広げていく。四角形を構成する要素として、対角線についても指導する。例えば、ひし形の2本の対角線は垂直に交わり互いを二等分するなど、対角線という観点からも図形を考察させる。図形を分類したり、その性質を調べたり、作図したり、敷き詰めたりする活動を通して、平面図形の見方を深めていきたい。

○学習内容系統図

2年 9 三角形と四角形 3年 13 三角形	4年 4 角 7 垂直、平行と四角形 16 立体	5年 ・四角形の関係を調べよう 5 合同と三角形、四角形 14 四角形や三角形の面積
---	---	--

3 児童の実態

4年生は複式学級2年目を迎え、輪番制の学習リーダー運営もすっかり定着してきた。困ったときや思考が停滞したとき、見通しが立たないとき以外は、自力で学習を進められるようになり、子ども主体の学びの時間が増え、自ら学ぼうとする意欲も高まっている。算数科では、問題から課題への流れを意識し、「ただ写す」のではなく、「分

る。算数科では、教科書で使用されている「中心」「半径」「直径」などの用語を丁寧に扱い、発言や記述活動を通して表現力を日々育んできた。

交流の場面では「ながら話」を大切にしている。具体的には、「指を指しながら」「操作しながら」「比べながら」など、言葉だけでなく視覚的にも分かりやすく表現することを意識している。これにより、児童は自分の考えと友達の考えを比べながら、相手の考えを読み取り、理解しようとする姿が見えてきた。算数の一単位時間の流れはおおむね理解できており、活動に参加できるが、「間違えたくない」「自分の考えを通したい」というこだわりから衝突が起こりやすくなっている。そのため、「解決のヒントが見付ければよい」「交流の中で理解を深める」という姿勢を繰り返し伝え、思考を促している。

本単元「円と球」では、形を捉えたり、定規で線を引いたり、紙を折ったりする活動が多い。手先の微細運動が苦手な児童が多いため、日々の練習を重ねつつ、コンパス・定規・具体物を活用して、円や球の中心・半径・直径の定義や性質を体験的に学ばせたい。

4 指導について

本時は、本単元における3時間目である。この時間では、円の中心や半径を見付ける活動を通して、円の直径の概念を理解させることを目指す。児童は、複数の半径や円を調べることで、帰納的に「直径は半径の2倍である」ことを見だしていくことが大切である。

〈研究との関わり〉

研究内容 (1) ③

「見通し」

3年生は、既習事項「中心、半径など」を手がかりにした方法の見通しをもち、手段「折る、定規を使うなど」の方法の見通しをもたせることで、学びを止めることなく継続的に考えさせたい。

4年生は、既習事項「平行、辺など」を手がかりにした方法の見通しをもたせることで、間接指導の時間でも、学びを止めることなく継続的に考えさせたい。

研究内容 (2) ②

「自らの学びを選択できる環境づくり」

3年生では、自ら考える学びを基本とし、まず「問題を正しく理解する力」を育てたいと考えている。その上で、子どもが発見したことを共有し、答え合わせを通して、少しずつ協働のよさに気付くよう促していきたい。また、子ども同士の交流方法は教師が提示し、子どもが選べる環境を整えたい。

4年生では、個人での思考と全体交流をはっきり分けず、子どもの思考の流れに応じて自然に学習できるようにしたい。型にとらわれず、学び続けられる柔軟な環境を目指している。また、交流の方法も子ども自身が選べるよう、教師が適切な手段を提示し、自律的な選択ができる場を整えたいと考えている。

研究内容 (2) ③

かっていること」「聞かれていること」に分類してノートにまとめるよう子どもたちと確認してきた。その結果、思考の効率化と学習の見通しが可能になってきた。さらに、用語カードを活用することで、低い学力層の児童も安心して個人で考える時間に入れるようになった。また、教科書に登場する用語（平行、半径など）を丁寧に扱い、発言やノート記述を通して表現力を育むことを重視している。

交流の場面では、活動スピードの差を解消するために「もっとやってみる」「困っている人に声を掛ける」「周りを確認する」といった学習態度を促し、子ども自身の活動が止まってしまうことがないよう工夫をしてきた。交流活動では、「ロイロノート」を使ったノート共有、画面共有や具体物操作などを取り入れ、学び方の手段を明確にしている。さらに、「指をさしながら」「動かしながら」「操作しながら」(子どもたちとは、ながら話と名付けた。)という視覚的にも分かりやすく表現することを意識し、子どもたちが主体的に対話・発表できる環境づくりを進めてきた。

本単元「垂直、平行と四角形」でも、これらの学びのスタイルを維持しつつ、子どもたちが思考と対話の中で深く理解を進められるよう学ばせたい。

4 指導について

本時は、本単元における7時間目である。この時間では、四角形について、辺の位置関係に着目して台形、平行四辺形、平行がない四角形に分類する活動を通して、台形や平行四辺形の意味を理解することを目指す。

「話し合いの目的・観点を明確にする」

3年生では、様々な大きさの円でも同じことが言えるのかという観点から円の中心と半径の位置関係を確認めさせたい。また、問題と課題をはっきりさせることで一単位時間に取り組むことを明確にさせたい。

4年生では、平行な辺の組に注目して四角形をグループ分けし、それぞれに名前を付けることで平行四辺形と台形を比較し、図形を構成する要素を確認させたい。また、問題や課題をはっきり示すことで、一単位時間に取り組む内容を子どもたちに明確に理解させたい。

5 単元の目標

円とその中心、半径、直径について理解し、図形の性質を見いだしたり構成の仕方を考えたりする力を身に付けるとともに、円に関連して、球についても理解する。また、円や球に進んで関わり、身の回りのものの形を円や球として捉えるなど、生活や学習に活用しようとする態度を養う。

【学習指導要領との関連 B(1)ア(ウ)、B(1)イ(ア)】

6 単元の評価規準

知識・技能	円とその中心、半径、直径について理解し、円を作図したり長さを写し取ったりする道具としてコンパスを用いることができる。また、円に関連して、球についても理解している。
思考・判断・表現	円の中心、半径、直径に着目し、構成の仕方を考えるとともに、図形の性質を見だし、身の回りのものの形を円や球として捉えている。
主体的に学習に取り組む態度	円や球に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気づき生活や学習に活用しようとしている。

5 単元の目標

直線の垂直や平行の関係及び台形、平行四辺形、ひし形について理解し、図形の性質を見いだしたり構成の仕方を考えたりする力を身に付ける。また、その過程において、多面的に捉え検討してよりよい方法を粘り強く考える態度や、学習したことを生活や学習に活用しようとする態度を養う。

【学習指導要領との関連 B(1)ア(ア)(イ)、B(1)イ(ア)】

6 単元の評価規準

知識・技能	面積の単位 $[cm^2, m^2, km^2, a, ha]$ の測定の意味、単位の関係について理解し、長方形及び正方形の面積を公式を用いて求めることができる。
思考・判断・表現	面積の単位や図形を構成する要素に着目し、図形の面積の求め方を考えているとともに、面積の単位とこれまでに学習した単位との関係を考察している。
主体的に学習に取り組む態度	長方形や正方形の面積について、数学的に表現、処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気づき学習したことを生活や学習に活用しようとしていたりしている。

7 指導計画と評価

時	目標	評価	時	目標	評価
1	・円の意味、性質、円の中心、半径を理解する。	・円の直径の意味や、直径と半径の関係について理解している。 【知・技】	1	・垂直の意味を理解する。	・垂直の意味を理解している。 【知・技】
2		・円の半径や直径を観察することを通して、それらの性質を見いだしている。 【思・判・表】	2	・平行の意味、性質を理解する。	・平行の意味及び平行な2本の直線の幅はどれも等しくなっていることを理解している。 【知・技】
3 本時	・円の直径を理解する。	・円の半径や直径を観察することを通して、それらの性質を見いだしている。 【思・判・表】	3	・平行の性質を理解する。	・図形を観察する観点として、直線の位置関係に着目している。 【思・判・表】
4	・直径の性質を理解する。	・直径が円の中で一番長い直線になることを理解している。 【知・技】	4	・垂直な直線、平行な直線の作図の仕方を理解する。	・垂直な直線、平行な直線を作図することができる。 【知・技】
5	・コンパスの使い方を理解し、円の作図ができる。	・コンパスの使い方を理解し、円を作図することができる。 【知・技】	5		・垂直、平行の定義や性質をもとに、それらの直線の構成の仕方を考えている。 【思・判・表】
6	・コンパスの機能を理解する。	・コンパスには長さを写し取る機能があることを理解し、線の長さを写し取って比べることができる。 【知・技】	6	・垂直、平行な直線の作図の仕方をもとに、長方形を作図することができる。 ・垂直や平行を見付けることができる。	・垂直、平行の定義や性質をもとに、それらの直線の構成の仕方を考えている。 【思・判・表】
7	・球の意味、性質、球の中心、半径、直径を理解する。	・球を観察したり、球を平面で切ったときに見える円について考察したりすることを通して、それらの性質を見いだしている。 【思・判・表】	7 本時	・台形や平行四辺形の意味を理解する。	・四角形について、辺の位置関係に着目して分類し、分類した四角形の特徴を見いだしている。 【思・判・表】
8	・日常生活の場面にコンパスを活用し、その機能と有用性について理解を深める。	・コンパスを使って、地図上のある地点から1kmのところや、ある地点間のおよその距離を調べることができる。 【知・技】	8	・平行四辺形の性質を理解する。	・平行四辺形の向かい合った辺の長さ、及び角の大きさはそれぞれ等しいことを理解している。 【知・技】

9	・学習内容の理解を確認し、確実に身に付ける。	・学習内容を理解し、基本的な問題を解決することができる。 【知・技】	9	・ひし形の意味、性質を理解する。	・ひし形の意味を理解している。また、ひし形の向かい合った辺は平行で、向かい合った角の大きさは等しいことを理解している。 【知・技】
			10	・平行四辺形の作図の仕方を理解する。	・平行四辺形を作図することができる。 【知・技】
			11	・台形、ひし形の作図の仕方を理解する。	・台形、ひし形を作図することができる。 【知・技】
			12	・対角線の意味、基本的な四角形の対角線の性質を理解する。	・対角線の意味、基本的な四角形の対角線の性質を理解している。 【知・技】
			13	・平行四辺形や台形の性質をもとに、それらを敷き詰めた図のかき方を考え、理解を深める。	・平行四辺形や台形を敷き詰めた図の中に他の図形を認めたり、平行線の性質に気付いたりして表現している。 【思・判・表】
			14	・学習内容の理解を確認し、確実に身に付ける。	・学習内容を理解し、基本的な、問題を解決することができる。 【知・技】
【主体的に学習に取り組む態度】は、単元全体を通して、評価する。 ・円の性質を調べたり、コンパスを使って作図したりすることに主体的に取り組むとともに、身の回りから円や球を見付けようとしたり、円を用いた模様づくりなどを通して円の美しさを感じようとしたりしている。			【主体的に学習に取り組む態度】は、単元全体を通して、評価する。 ・既習の図形の見方などをもとに、台形、平行四辺形、ひし形の性質や構成の仕方を主体的に考え、身の回りから垂直や平行の関係にあるものや、台形、平行四辺形、ひし形を見付けようとしている。		

8 本時の目標

3年生	4年生
・円の半径や直径を観察することを通して、それらの性質を見いだすことができる。 【思・判・表】	・四角形について、辺の位置関係に着目して分類し、分類した四角形の特徴を見いだすことができる。 【思・判・表】

9 本時の展開（★：直接指導 ☆：間接指導）

第3学年				第4学年			
過程	主な学習活動 ・児童の反応 □教師の発問	教師の働きかけ（・） 指導上の留意点（※）	形態	形態	主な学習活動 ・児童の反応 □教師の発問	教師の働きかけ（・） 指導上の留意点（※）	過程
つかむ	1 問題を把握する □この円を見て下さい。	※教科書は見せない	★ ★ ★		1 前時の学習の振り返り ・身の回りから垂直や平行の物を見付けた。	※教科書は見せない	ふかめる

第5・6学年 算数科学習指導案

日 時 令和7年9月18日（木）2校時
 児 童 第5学年5名 第6学年5名
 指導者 金 一 かおり

《第5学年》

1 単元名『割合』

2 単元について

割合の意味については、低学年から「倍」という言葉を用いて素地となる経験をさせてきた。4学年では、整数で表される簡単な場合についての割合も扱い、ある数量を1とみたときに、もう一方の数量がどれだけに当たるかを表しているという割合の意味と、ある二つの数量の関係と別の二つの数量の関係を比べる場合に差ではなく割合で比べる場合があることについて指導してきた。また、単元10「単位量あたりの大きさ」では、量の比較の考え方として、単位面積当たりの人数のように異種の二つの量の割合として捉えられる数量の比べ方や表し方についても指導してきた。

本単元では、同種の二つの数量について割合を用いて比べることを考え、一方を基準量としたとき（1とみたとき）、もう一方の比較量がどれだけに当たるかを表す数という割合の意味を、小数で表される場合にまで広げ、「割合＝比較量÷基準量」の式にまとめる。また、基準量を100とみて表した百分率の意味や表し方も理解させる。更に、割合の求め方をもとに、比較量や基準量を求める問題も扱い、それらの関係を明確にし、割合についての理解を定着させていく。割合は、算数の学習のみならず、他教科等の学習や実生活で活用されることも多い。公式を覚えるだけの形式的な指導にならないよう配慮し、具体的にどんな場面で活用できるかを実感をもって捉えられるようにしていきたい。

○学習内容系統図

4年 くらべかた 小数と整数のかけ算・わり算	5年 小数のかけざん 小数のわり算 わり算と分数 単位量あたりの大きさ 割合	6年 分数のわり算 比
------------------------------	---	-------------------

3 児童の実態

学習リーダーを中心に1時間の学習の流れを意識し、自分たちで進めていこうという意欲が高まってきている。

個人思考では、間違えていたらどうしよう、

《第6学年》

1 単元名『円の面積』

2 単元について

5学年では、円周率について「円周の長さが直径の長さの何倍になっているかを表す数」として定義し、どんな大きさの円でも、直径の長さを1とみると円周の長さは3.14になることについて理解を図った。また、その前段階では、正多角形と円の関係について、円の中心の周りを等分割することで正多角形が作図できることも指導した。面積については、平行四辺形、三角形などの面積を、等積変形や倍積変形などによって求めることや、不定形の面積を方眼を用いて概測することも扱ってきた。

本単元では、円の面積の計算による求め方を指導する。円は曲線で囲まれた図形であるため、面積の求め方を考えるにくい。そこで始めに、およその面積を捉えて見通しをもたせるようにする。そして、より詳しい値を求める工夫を考えていく中で、既習の求積可能な図形に等積変形する考えを引き出し、円を細かく等分して並べ替えて長方形にする考えに気付かせていく。円の面積の公式をつくるときは、等積変形した長方形の縦と横が、もとの円のどの部分に当たるかを考えていくことが大切である。また、「発展的な学習内容」としておうぎ形の面積を求めることも扱う。子どもの実態に応じて、円の面積についての理解を深めることをねらいとして指導していく。

○学習内容系統図

4年 面積	5年 四角形や三角形の面積 正多角形と円	5年 円の面積 およその面積と体積
----------	----------------------------	-------------------------

3 児童の実態

学習リーダーを中心に自分たちで学習する経験を重ねてきていることもあり、話し合いを自分たちで進めていく習慣が身に付いている。

つまりいたり分からなかったりしたときにどうしたらいいか分からないという思いをもって取り組んでいた児童がいたこともあり、分からないことや質問などをどんどん自由につぶやき、友達のアドバイスや声掛けをヒントに取り組むよう指導してきた。

交流では、ロイロノートを活用し、お互いの考えを交流・確認している。まだできていなくても、その後どのように考えていたのか、また友達の説明を参考にしてこう考えたなど、子ども自身が既習事項や周りの人の考えを使いながら解決していこうという姿が見られるようになってきた。

算数科の学習では、既習事項とのつながりを考え、はかせ（はやく・簡単に・正確に）を意識した学習に取り組んでいる。

4 指導について

本時は、本単元の8時間目である。日常の買い物において、セールや〇%引きのような場面を想起することから、割引率しか明らかではない場合も、もとの割合から減らす割合を先に引いて考えると能率的に処理できることに着目させ、解決の見通しにつなげたい。

割合で比べる場合には、比べるために必要となる二つの数量の関係について、比例関係を前提として捉える見方が大切になる。この見方により、ある数量の関係と別の数量の関係をどちらも基準量1にそろえて、それぞれの比較量の大きさによって比べることができるようになる。また、何を基準量として何を比較量とするのか、基準量1とみるのか100とみるのかなど、問題の条件や目的をもとに考えていくことも大切にしたい。

〈研究との関わり〉

研究内容（1）③

「見通し」

5年生は、30%の値段ではなく、30%引き（ $1-0.3$ ）で70%の値段になることを押さえる。定価より高くなりそうか、安くなりそうかなど、値段を予想するなど数量の関係に着目させ、解決の見通しをもたせる。

6年生は、どのような図形の組み合わせとみるか個人での見方を引き出し、その見方は一通りではないことに気付かせる。既習の円と直角三角形の図形の組み合わせの図形であることに着目させ、図や式を使って求めることを意識させる。

研究内容（2）②

「自らの学びを選択できる環境づくり」

※間接指導の流れにこだわらず、初めから仲間と相談したり、途中から立ち歩いて話したりするなど、児童の思考の流れに応じた学習を進めていく。

個人思考では、分からないことや既習事項などについて自由につぶやき、友達のアドバイスや声掛けをヒントとして意欲的に取り組んでいる。

交流では、ロイロノートを活用し、お互いの考えを交流・確認している。ここでも、自由につぶやきながら、それぞれ考えを比較して聞いたり、話したりして交流している。しかし、話合い（交流）が活発になるにつれ、どんどん課題からそれてしまう傾向が見られ、学習のまとめまでに時間を要してしまうことが多く見られる。

解決の糸口を見付け出すために、自分たちが課題を解決するために取り組んだ過程（図や式、既習事項）を振り返り、意見のやりとりをしながら考え方を高め合える学習を大切にしている。

4 指導について

本時は、本単元の8時間目である。円や直角三角形の面積の公式など、既習の学習を生かすために、どんな図形の組み合わせとみて求めていくのかを引き出していきたい。また、途中式に着目し、どの部分の面積を求めているのかについて説明することも意識して取り組ませたい。

面積の求め方を考えるときは、既習の求積可能な図形に等積変形するという見方・考え方が大切である。

円の場合は等積変形の考えが見出しにくいですが、できるだけ近い値を得られるように求め方を工夫する中で、気付かせていく。また、円の面積の公式は「半径×半径×円周率」とまとめられるが、その意味について振り返り、円の面積が半径を一辺とする正方形の3.14倍になっているという見方にも着目できるようにしたい。

5年生は、課題や考え方・計算の方法などを交流し解決の糸口を見付けられるための時間となるようにしていく。

6年生は、自分の思考を説明したり友達の考えに質問したりするなど、お互いの考えを交流できる時間と、教科書の式や図の説明を手掛かりに考え方を整理させていく。

研究内容（2）③

「話し合いの目的・観点を明確にする」

5年生は、共通点や相違点など、交流の視点をおさえながら聞くことができるよう声掛けをしていく。

6年生は、どんな図形の組み合わせとみて求めたのかに絞って、交流することができるよう声掛けをしていく。

5 単元の目標

ある二つの数量の関係と別の二つの関係を比べる場合に割合を用いる場合があることや、百分率を用いた表し方を理解するとともに、その意味や求め方を図や式などを用いて考える力を身に付ける。また、その過程において、多面的に捉え検討してよりよい方法を粘り強く考える態度や、学習したことを生活や学習に活用しようとする態度を養う。

【学習指導要領との関連C（3）ア（ア）（イ）、C（3）イ（ア）、内（4）】

6 単元の評価規準

知識・技能	ある二つの数量の関係と別の数量の関係とを比べる場合に割合を用いる場合があることや、百分率を用いた表し方を理解し、割合などを求めることができる。
思考・判断・表現	日常の事象における数量の関係に着目し、図や式などを用いて、ある二つの数量の関係と別の二つの数量の関係との比べ方を考察し、それを日常生活に生かしている。
主体的に学習に取り組む態度	割合について、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用しようとしたりしている。

5 単元の目標

円の面積の計算による求め方を理解するとともに、その方法を図や式などを用いて考えたり、公式を導いたりする力を身に付ける。また、その過程において、面積の求め方を多面的に捉え検討してよりよい方法を粘り強く考える態度を養う。

【学習指導要領との関連B（3）ア（ア）、B（3）イ（ア）、内（3）】

6 単元の評価規準

知識・技能	円の面積の計算による求め方について理解している。
思考・判断・表現	図形を構成する要素などに着目し、円の面積の求め方を見いだしているとともに、その表現を振り返り、簡潔かつ的確な表現に高め、公式として導いている。
主体的に学習に取り組む態度	円の面積について、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用しようとしたりしている。

7 指導計画と評価


時	目標	評価	時	目標	評価
1 2	・小数で表される場合 ・の割合の意味と表し方、割合を用いた比べ方を理解する。	・割合の意味と表し方、割合＝比較量÷基準量の関係を理解している。 【知・技】	1 2 3	・円の求め方を理解する。	・円の面積の求め方について、既習の求積可能な図形の面積の求め方などをもとに図や式などを用いて考えている。 【思・判・表】
3	・資料全体と部分の大きさの関係や、部分と部分の大きさの関係を、割合を用いて表すことができる。	・基準量と比較量の関係を捉え、割合を求めることができる。 【知・技】	4 5	・円の面積の公式を理解する。	・半径×半径×円周率の式が、半径を1辺とする正方形の面積の3.14倍を意味していることを理解し、公式を用いて円の面積を求めることができる。 【知・技】
4	・百分率の意味と表し方を理解する。	・百分率と「パーセント(%)」の意味を理解し、百分率を用いて表すことができる。 【知・技】	6	・中心角が90°のおうぎ形の面積の求め方を理解する。中心角が60°のおうぎ形の面積の求め方を、発展的に考えることができる。	・円の1/4のおうぎ形では、面積も円の1/4になっていることを理解している。 【知・技】
5	・百分率が100%を超える場合を理解する。	・百分率が100%を超える場合があることを理解し、そのような場面も含めて百分率で表すことができる。 【知・技】	7	・円を組み合わせた図形の面積を求めることができる。	・円を組み合わせた図形の面積を求めることができる。 【知・技】
6	・基準量と割合をもとに、比較量を求めることができる。	・基準量＝比較量÷割合の関係を理解し、比較量と割合から基準量を求めることができる。 【知・技】	8 本時	・半円と直角三角形を組み合わせた図形の面積の求め方を、筋道を立てて説明することができる。	・図形の求積に必要な構成要素を判断し、円の一部とみられる図形や円などを組み合わせた図形の面積の求め方を考えたり表現したりしている。 【思・判・表】
7	・比較量と割合をもとに、基準量を求めることができる。	・コンパスには長さを写し取る機能があることを理解し、線の長さを写し取って比べることができる。 【知・技】	9	・学習内容を確認し、確実に身に付ける。	・「円の面積」の学習のよさや見方・考え方を振り返っている。 【思・判・表】
8 本時	・割合を $(1-\alpha)$ とみる場合について理解し、基準量と割合をもとに、比較量を求めることができる。	・割合を $(1-\alpha)$ とみて、基準量と割合から比較量を求めることができる。 【知・技】			

9 10	<ul style="list-style-type: none"> 割合を $(1 \pm \alpha)$ とみる場合について理解し、比較量と割合をもとに、基準量を求めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 割合を $(1 \pm \alpha)$ とみて、比較量と割合から基準量を求めることができる。 <p>【知・技】</p>	
11	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活の場面の問題解決に割合を活用し、判断の理由を言葉や式などを用いて説明することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活の場面の問題解決に割合を活用し、判断の理由を言葉や式などを用いて考え表現している。 <p>【思・判・表】</p>	
12	<ul style="list-style-type: none"> 学習の内容を理解し、確実に身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 「割合」の学習のよさや見方、考え方を振り返ることができる。 <p>【思・判・表】</p>	
<p>【主体的に学習に取り組む態度】は、単元全体を通して評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 割合を用いて比べるような具体的な場面について、その意味や比べ方を粘り強く考えたり、生活や学習に活用しようとしていたりしている。 		<p>【主体的に学習に取り組む態度】は、単元全体を通して評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 円の面積の求め方について、既習の求積可能な図形の面積の求め方などをもとに粘り強く考えたり、数学的に表現・処理したことを振り返り多面的に検討したりして、よりよい方法を見いだそうとしている。 	

8 本時の目標

5 年生	6 年生
・割合を $(1-\alpha)$ とみる場合について理解し、基準値と割合をもとに、比較量を求めることができる。【知識・技能】	・半円と直角三角形を組み合わせた図形の面積の求め方を、筋道を立てて説明することができる。【思・判・表】

9 本時の展開 (★：直接指導 ☆：間接指導)

第5学年				第6学年			
過程	主な学習活動 ・児童の反応 □教師の発問	教師の働きかけ（・） 指導上の留意点（※）	形態	形態	主な学習活動 ・児童の反応 □教師の発問	教師の働きかけ（・） 指導上の留意点（※）	過程
つかむ	1 前時までの学習を振り返る ・百分率(割合を表す0.01を1%) ・比較量＝基準量×割合 ・基準量＝比較量÷割合	・画面提示～🌱 7問題文	★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★		1 前時の学習の振り返り ○大きい円の面積から小さい円の面積をひくと色のついた部分の面積を求めることができた。	※学習リーダーを中心に行う。	ふかめる
	2 問題を把握する <div>  7 定価 4000 円の服が、30%引きの値段で売られています。この服は何円で買えるでしょう。 </div> ・定価（基準量）が 4000 円 ・30%引きの値段になる（見積もり） ・30%引きだから、4000 円より安くなりそう？ ・求めることは、割引後の値段				2 練習問題に取り組む P255◇4		

[illegible]

8 研究協議

(1) 授業者より

＜公開授業①「3・4年算数」に関して＞（○成果、△課題）

○3・4年生ともに、練習問題まで到達できなかったが、自分が思っていた学んでほしい考え方には十分迫ることができたので、よかった。

○4年生は、初めの活動を前時に行っておくことで、時間に余裕ができたと思う。

△3年生は、円に触れる活動が長くなってしまい、まとめが急ぎ足になってしまった。

△4年生は、形の仲間分けを、教科書にある形も含めて、仲間分けすることで、多くの形に触れることができたのではないかな。

＜公開授業②「5・6年算数」に関して＞（○成果、△課題）

○5年生は、問題から読み取れる内容を見付けることができた。そのため、見通しも立てることができた。

○子どもたちが思いを声に出し、互いに教え合ったり、アドバイスしたりするなど、少人数で学ぶよさが表れていた。

○6年生は、課題の把握や見通しなど、既習事項を使って自分たちで進めることができた。

△5年生の全体交流で、この学習のポイントである割合が、子どもたちにうまく伝えることができなかった。

△今回の授業では、ずらしの形で授業を始めたが、これから同時にスタートして同時間接指導で学習を進められるようにしていく。

(2) 全体交流(グループ交流結果の主な要点)

＜主体的に学ぶことについて＞

- ・高学年で、教師がいなくても授業を進めていけるように、低学年からの積み重ねが大切である。
- ・主体的に学ぶことができるようにするためには、事前に見通しをしっかりとらせることが大事である。
- ・子どもたちが自分たちで授業を進めていくことが理想であるため、わたりずらしの授業ではなく、同時間接指導が主流になってくる。
- ・単学年の学級での学習でも、複式に備えて子どもたちを育てていくことが大切である。
- ・1対1の場面であっても、様々な考えを表出させることが必要である。

＜学習リーダーについて＞

- ・単式、複式と学校事情によって様々な状況があるが、1年生から6年生まで継続的に育てていくことが大切である。
- ・リーダーの育成は、他の教科でも育成できるので、子どもたちの活躍の場を広げることが大事である。
- ・小さな役割を与えることから始まり、成功体験を積み重ねていくことが大事である。ただし、単元の見通しを立てるためにも、どこを教師主体で指導するかのプランを立てておく必要がある。

＜ICTの効果的な活用について＞

- ・ノートとタブレットを使い分ける大切さと難しさがある。
- ・教室に多くの掲示ができない場合、振り返りでタブレットを利用することができる。
- ・授業だけでなく、小規模校同士の交流や実践で使うことができる。
- ・タブレットを活用することにより、考えた過程の振り返りができたり、板書を保存して振り返りに使ったりすることができる。
- ・タイムマネジメントに有効であるし、間接指導が成立しやすい。
- ・協働的な学びには、小規模校にとってよいツールとなっている。

(3) 助言者より

①北海道へき地・複式教育連盟研究推進委員 深川市立北新小学校長 船越 一郎 氏

＜授業でのねらいの迫り方について＞

- ・ねらいへの迫り方として思考力・判断力・表現力を満たすものであった。

- ・活動の時間を十分確保していたことがよかった。
- ・友達と関わらなければ課題を解決できない場面の設定がよかった。
- ・5年生は、知識・技能、6年生は思考力・判断力・表現力を身に付ける授業であったが、5年生は割合にこだわっていたところがすばらしい。6年生は、特に先生が目玉させたわけではなかったが、分かりやすいまとめをしていた。
- ・一人一人の表現のよさを、教師がコメントすることで、価値付けされ、子どもたちは自分がやったことは間違っていなかったと思い、その時の力を維持できる。

<自ら学ぶ子どもの育成について>

- ・発達段階が上がるとともに、完成に近付いている。6年生は特に完成形の一つを表している。
- ・自分たち自身が当事者意識をもっていることは、主体性の表れである。
- ・昨年と比べて非常に成長していた。間接指導に関わる直接指導の在り方という視点を徹底していたからである。
- ・複式というのは、子どもの力ではなく、学びの土壌を生み出すよい環境である。

② 北海道教育庁空知教育局教育支援課学校教育指導班 主査 佐々木 明 様

<授業全体を通して>

- ・本日の授業は、見応えがあった。よい授業は時間が経つのが早い。
- ・一生懸命やっている姿、考えている姿が見られ、応援したくなった。
- ・批判というとダメ出しのように思うが、言葉を間違わなければ改善につながるので、そういうマインドをもってもらえるとよい。
- ・3年生は、円を2つに折った真ん中がどうして中心なのかという問いがあってもよかったのではないかな。
- ・4年生は、課題を出して、子どもたちがどうしようというときに、知っている人がいればそれを共有していくのもよかったのではないかな。
- ・5年生の割合は、日常生活で想起させることは難しいと思ったが、教師の指示が少なかったのも、子どもたちの主体性を育てているのが分かった。
- ・6年生は自分たちで進めていた。
- ・どの子も自分の考えが言えるし、間違いも指摘できるのはよい。

<協議について>

- ・自由進度学習、複線型など子どもに委ねれば委ねるほどよい。
- ・ただし、委ねすぎて一斉指導で教えなければならないことを、とにかく子どもが学んで進めていけばよいということではない。
- ・子どもたちが協働しながら一つの課題に向かって意見を言い、傍聴していない姿が、自由進度や複線からは得られない姿である。

<今後に向けて>

- ・知識・技能について学習アプリでという流れになっているのではないかな。授業で知識を身に付け、その後は学習アプリで行うと、小規模校ではよい流れになる。
- ・進捗を把握するなど、教師のマネジメントが大事になってくる。
- ・思考力・判断力・表現力について、小規模校だと考えが広がらないことがあるが、リモートや遠隔で行うことで広がる可能性がある。
- ・まず「やってみよう」が大事である。やってみて課題があれば、その課題に対してブラッシュアップさせていけばよい。
- ・クラウド等を使って、他の人が作ったフォルダを自由に見られるようにすることで、単元計画を共有でき、先生方の研修につながり、先生方にメリットがある。

9 成果と課題

(1) 成果

- ・主に間接指導の場面で、子どもたち同士相談したり、自ら解決したりするなど、学びの選択ができることで、より主体的な学びにつなげることができた。
- ・見通しを子どもたちにしっかりもたせることで、その後のリーダーによる授業進行、それに沿って自ら意欲的に学習に臨むことができるようになってきた。
- ・これまでの学習を生かしながら子どもたちが思考できるような学習の流れや声掛けがあったので、子どもの思考の流れが止まることはなかった。
- ・子どもの実態に合った環境づくりを工夫することで、子どもたちは安心して授業に集中することができた。
- ・既習事項が確認できる手立てを工夫することで、間接指導の場面においても、自分で学習を進められることができ、学びのつながりになる。
- ・ICTを活用することで、友達と自分の考えを比較しやすくなったり、分からないときのヒントを得たりすることができ、子ども同士の学び合いや学びを深めるために有効であった。
- ・授業の計画・実施に際しては、近隣校の先生方の協力を得て、教材研究や授業構想を共同で進めてきたことにより、授業改善の視点を広げるとともに、より効果的な授業づくりを進めることができた。

(2) 課題

- ・子どもに委ねる時間を確保することを意識した授業づくりを進めてきたが、教師主導で学習を進める場面とのバランスを今後も考えていく必要がある。1単位時間だけでなく、単元の計画を構築していくようにする。
- ・間接指導につながる直接指導では、子どもが本時で「何を学ぶか」「何ができるようになればよいのか」子ども一人一人が把握できるように、課題設定の工夫が必要である。
- ・デジタルを活用する場面とアナログで行う場면을両立させ、ICTのよさ、ノートのよさを教師が把握した上で、学年の発達段階に応じて、系統立てる必要がある。
- ・複式授業の中で、目標の達成状況の把握をどの場面で行うのか計画し、評価することが必要である。

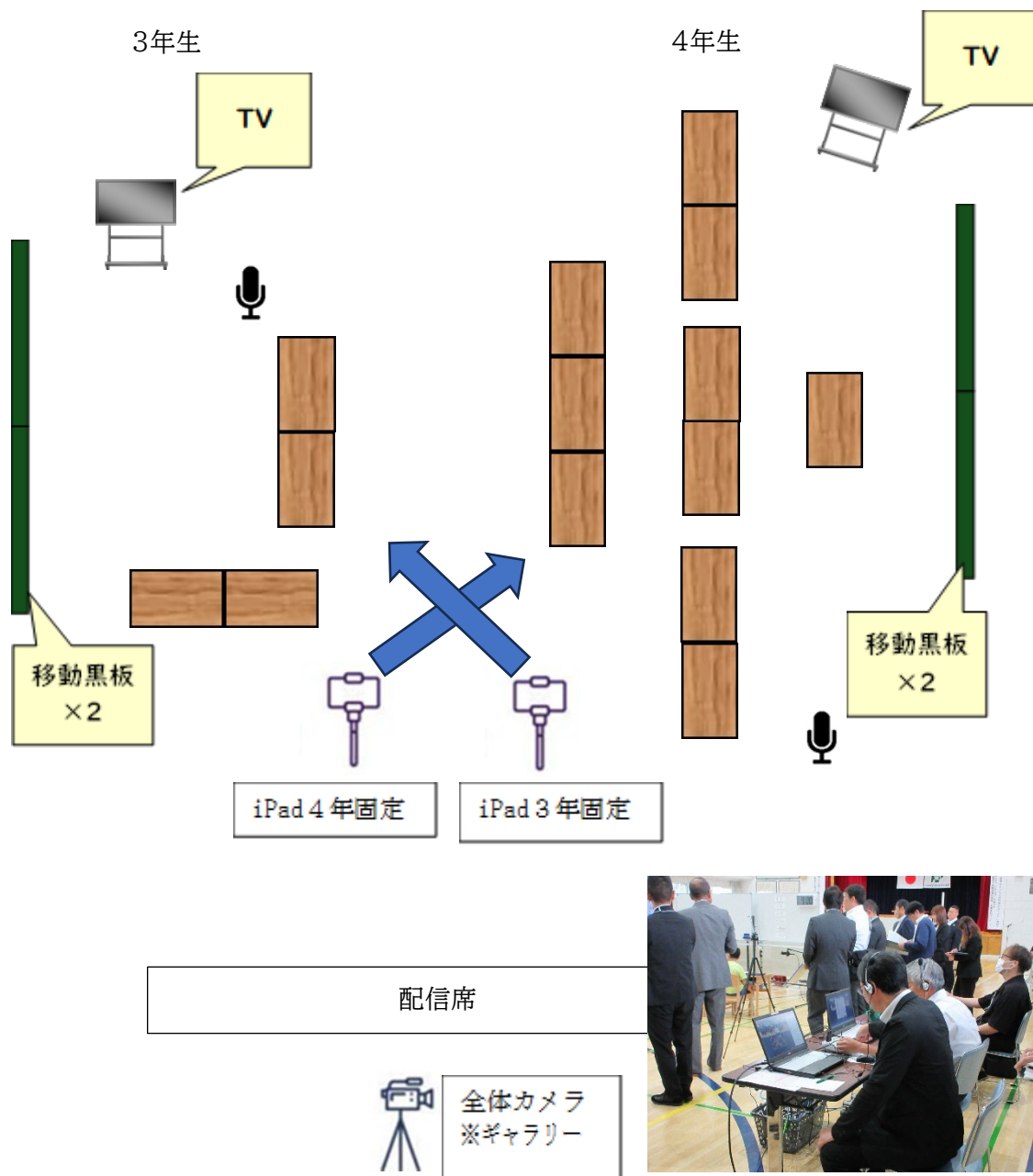


10 配信状況の記録

(1) 配置図・配信方法・機材など

① 授業公開① 3・4年算数

ア 授業会場図

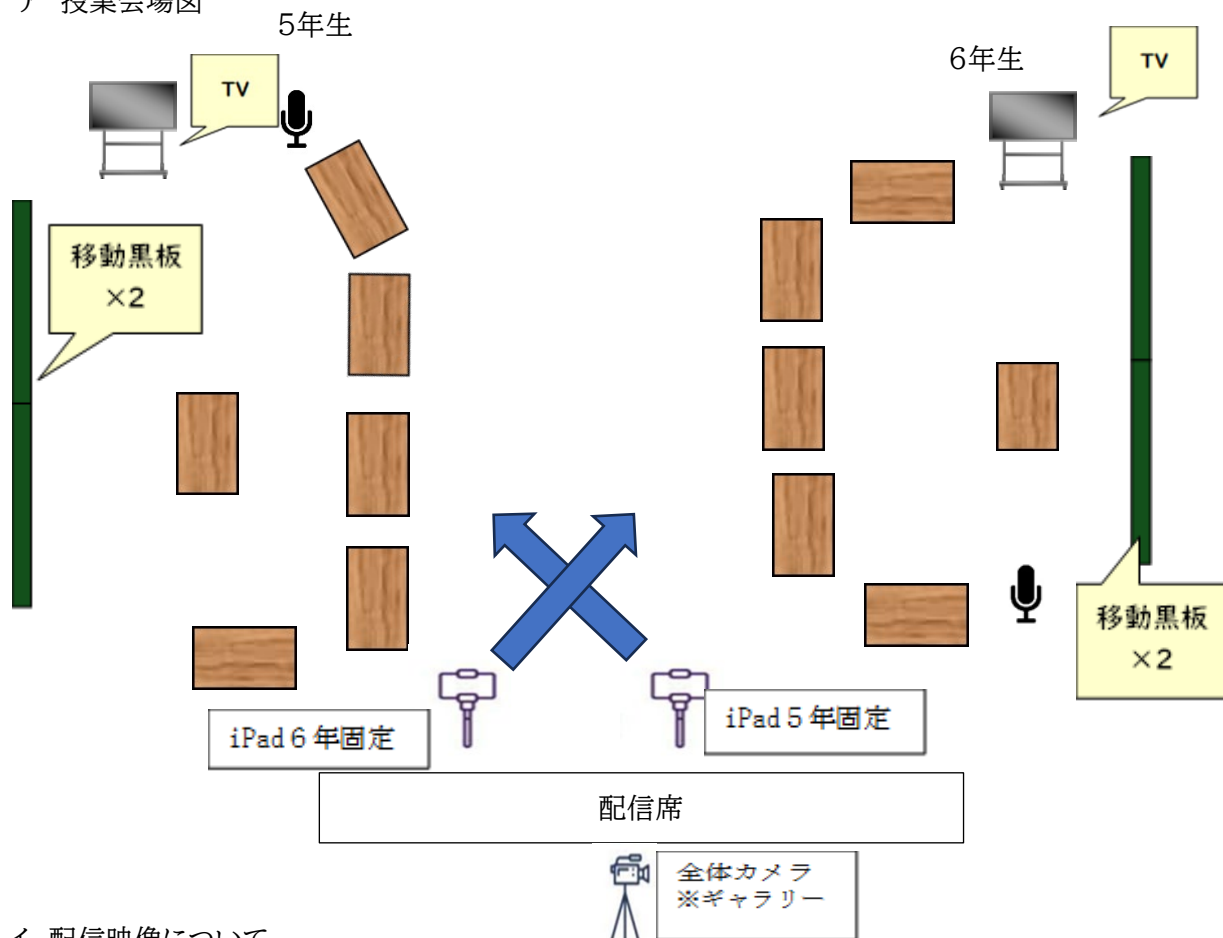


イ 配信映像について

映像NO.	カメラの種類	映像の内容	ブレイクアウトルーム	音声の有無	参加者音声・画面
映像 1	ipad① +集音マイク	3年固定	授業	音声あり	ミュート・画面OFF
映像 2	ipad② +集音マイク	4年固定			ミュート・画面OFF
映像 3	ビデオカメラ	授業全体		音声なし	ミュート・画面OFF

② 授業公開② 5・6年算数

ア 授業会場図



イ 配信映像について

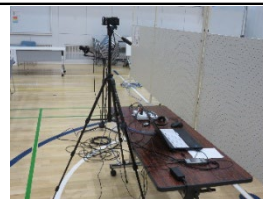
映像NO.	カメラの種類	映像の内容	ブレイクアウトルーム	音声の有無	参加者音声・画面
映像 1	ipad① +集音マイク	5年固定	授業	音声あり	ミュート・画面OFF
映像 2	ipad② +集音マイク	6年固定			ミュート・画面OFF
映像 3	ビデオカメラ	授業全体		音声なし	ミュート・画面OFF

③ 開・閉会式、研究発表について

ア 会場図

・開閉会式・研究発表、体育館中央付近よりステージに向けて、カメラ固定

イ 配信映像について



映像NO.	カメラの種類	映像の内容	ブレイクアウトルーム	音声の有無	参加者音声・画面
映像 1	ビデオカメラ	全体会場	全体会	音声あり	ミュート・画面OFF

④ 研究協議について

ア 会場図

・オンライン参加者については別室にて、Zoom

イ 配信映像について



映像NO.	カメラの種類	映像の内容	ブレイクアウトルーム	音声の有無	参加者音声・画面
映像 1	ビデオカメラ	全体会場	研究協議	音声あり	ミュート・画面OFF
映像 2	ipad①	研究協議Gグループ			話すときはミュート解除 画面ON

第4分科会

【研究主題】

「自ら学び、進んで表現し、共に高め合う子の育成」
～学び方がわかり、学ぶ楽しさを実感できる算数科の授業づくりを通して～



美瑛町立美馬牛小学校

I 授業の様子

【公開授業①：第1・2学年】



【公開授業②：第5・6学年】



第Ⅱ章 研究の概要

1 研究主題

「自ら学び、進んで表現し、共に高め合う子の育成」
～学び方がわかり、学ぶ楽しさを実感できる算数科の授業づくりを通して～

2 研究主題設定（令和5年4月設定）の理由

（1）学校教育の今日的課題

社会の在り方が先行き不透明で「予測困難」な時代となってきた。そのため、学習指導要領の着実な実施とICTの活用により、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要である。

【学力の確実な定着等の資質・能力の育成に向けた方策】

- ・教科等横断的な学習の充実
- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
- ・ICTの活用

（2）令和4年度までの研究の成果と令和5年度からの本校児童の課題

本校では令和2年度から「自ら学び、学びを生かす子の育成」を目指し、「国語科」を窓口にして、3年間、実践・検証を行ってきた。説明文の学習の流れを確立することで、児童は安心して学習に取り組むとともに、意欲的に読みを進めたり要約・要点をまとめたりしようとする姿勢が見られるようになった。また、学習計画表を活用しゴールを明確にすることで、見通しをもって学習活動を進める力が高まった。さらに、各教科等の授業で振り返り活動に取り組むことで、学習内容の定着が見られた。

その一方で、自分なりの意見や考えはあるものの、自信をもって学習に取り組むことができなかったり、主体的・対話的に友達と共に学ぼうとする力に課題が見られたりといった実態が見られた。これらの課題を解決するためには、学ぶ楽しさを実感しながら学習することや自信をもって自分の考えを発表するための手立てを明確にすること、友達との話し合いを通して協働的な学びの価値に気付くことが必要であると考えた。そこで、令和5年度から算数科を窓口に「学ぶ意欲を高める工夫」「表現力を高める工夫」「考えを広め、深める工夫」の3点に研究の視点をおき、授業改善に努めている。

3 北海道へき地・複式教育研究連盟 第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画との関連

【研究分野1】学校・学級経営の深化・充実
〈研究課題1〉 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進を図る
○小規模校の利点を生かし、地域に根ざした特色ある教育活動を推進する。
【研究分野2】学習指導の深化・充実
〈研究課題6〉 主体意識をもって仲間と共に高め合う学習過程の改善・充実を図る
○学習リーダーを中心とした児童が主体となる授業改善を進める。

4 全体構造図



5 研究内容

研究内容1 学ぶ意欲を高める工夫

(1) 児童の実態把握

レディネステストや事前アンケートを実施し、診断的評価を行うことで、児童一人一人の実態把握に努める。診断的評価を単元の指導計画や指導方法の工夫・改善に生かすことで、個別最適な学びに迫ってきた。

(2) 指導内容・指導計画の工夫

①【見通す力（見積もる力）の育成】

算数科の学習において、児童自身が問題解決するためには「見通す力（見積もる力）」が不可欠であり、その力をつける手立てを以下のように整理し、実践してきた。

- ア 既習事項との関連付け
- イ 表現方法のレパートリー
- ウ 数量の見積もり
- エ 言葉を手掛かりに

また、昨年度からは「見通す・見積もる」場面を思い切って児童に委ねることで、児童主体の授業づくりを目指すことも行ってきた。

【実践例】 第5学年「割合」



学習リーダーが中心となり、児童同士が話し合いながら課題設定や問題解決の見通しをもつことができた。

見通す場面では、「数直線や、□を使った式などを使って考えられそう」と、既習事項を活用して、比較量と割合をもとに、基準量を求めてみようという意欲をもち、自力解決に向かう姿が見られた。

②【問題提示の方法】

児童の実態や単元の性質をふまえ、児童一人一人が確実に問題を把握できるように具体物や ICT なども活用しながら提示場面を工夫して扱ってきた。

③【課題の吟味（3 観点のうちのどの観点なのかを明確に）】

課題設定では、前時の学習内容との違いや、「ここまでは分かる（解くことができる）けれど、ここからが分からない。」といった部分に目を向けさせ、より本時の学習に迫る課題設定となるように指導してきた。また、児童が主体的に課題設定に取り組むことができるように、課題設定の際の表現についても継続して指導してきた。

- ア 活動型「～の計算練習をしよう。」「～の図形の描き方を練習しよう。」
 - イ 確認型「～にはどのような特色があるのだろうか。」
 - ウ 思考型「～はどのように求めるのだろうか。」「～のようになるのは、なぜだろうか。」
「～（求め方・分かりやすい説明の仕方など）を考えよう。」
- さらに後述するが、「算数用語」や「見方・考え方」をパネルにし、活用していく。

(3) 基礎・基本の定着

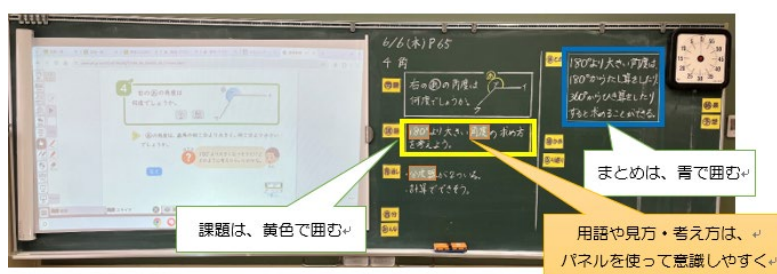
各学年で必要な四則計算を中心に、算数の学習の土台づくりを行ってきた。朝学習では、学習プ

リントやドリル等に加え、e ライブラリ等の ICT を活用し、児童が自分で必要な学習を自分で選び、年間通して繰り返し学習する機会を設定してきた。

研究内容2 表現力を高める工夫

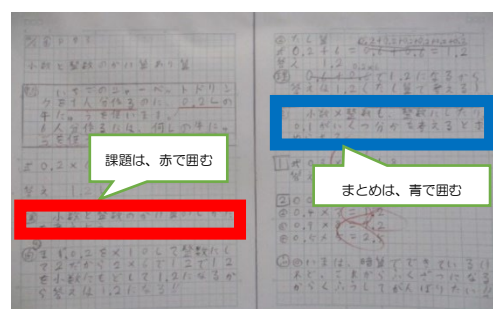
(1) 板書の工夫

- ①問題解決的な学習の流れがわかる板書構成。
- ②文字の大きさや配色・記号・括弧・囲み・矢印などを活用し構造的に。
- ③単元の中で使っていきたい算数用語や見方・考え方のパネルを活用していく。



(2) ノート指導の工夫

板書を基本としながら、児童が自分で考え、必要な事項を工夫して付け加えられるように指導してきた。また、4年生以上の学年は、実態に応じて教師が書いたものをそのまま板書する+αを少しずつ指導してきた。



【実践例】 全学年「ノート掲示による交流」



児童のノートを職員室前に掲示し、他学年の児童とのノート交流を行った。自分自身のノートの書き方を振り返るとともに、上級生や仲間のノートを参考にするすることで、発達段階に応じたノートの取り方の工夫ができるようになりつつある。

(3) 発問・指示の工夫

児童の思考を深化させるためには、発問の吟味が必要である。児童のつぶやきや気付きから発生する「問い返し発問」を大切にしながら、児童主体の授業づくりを目指してきた。児童はより一層、学習を「自分事」としてとらえ、主体的に学ぶことができてきている。

(4) ICT 等教材・教具の工夫と具体物・半具体物等教材のバランス

個別最適な学びを保証する上でも、ICT の活用は必要不可欠である。「追究する」場面の考えを深める際に、ノートに書いた自分の考えをスクリーンに映したり、必要に応じてクロームブックを活用したりして交流してきた。一方で低学年は、具体物や半具体物を操作する活動を通して、よりよい方法に気付いたり自分の考えがまとまったりすることが期待できることから、ICT だけでなく、具体物や半具体物の操作を引き続き大切にしたり、操作をクロームブックで撮ったりする手立ても取り入れてきた。また、作成した教材・教具、児童の考え等をデータで保存・保管し、共有することで、一から作る時間や手間の短縮を図るとともに、既存の教材・教具を改善、活用することで、より児童に合った教材・教具の工夫を行っている。

【実践例】 第1学年「たしざん」



ブロックの操作や、丸図を描くことを通して、繰り上がりのたし算の計算方法を考えていくことができた。

交流場面では、敢えて ICT は使用せず、ホワイトボードに自分の考えを表現することで、考えの比較がしやすくなり、同じところ、違うところ等を児童同士で見つけ、交流することができた。

【実践例】 第3学年「わり算」



集団解決時での個人思考を発表する際に、ノートに書いた自分の考えをテレビ画面に映して交流した。

ロイロノートの共有ノートを活用することで、改めて板書する必要がないため、個人思考や集団解決の時間を十分に確保し、児童の思考をより深めることができた。

(5) 声の大きさや話す速さの意識づけ

算数科だけでなく、全教育活動を通して相手意識をもって話すこと・聞くことの指導をしていくことを大切にしていく。少人数が故に、小さな声で話しても何となく伝わることから、児童は話し方に問題意識をもっていない。しかし、自分の考えを分かりやすく伝えたり、関心をもって聞いてもらったりするためには、大きな声で明瞭に話すことは大切なスキルである。日直の号令や日常的なあいさつ、朝会や集会での司会や発表など話す場面を活用して、継続的に大きな声で明瞭に話すことを指導している。集会ではマイクなしで話すことを基本とする。あわせて、家庭学習や朝の会等を活用して、日常的に音読や詩の暗唱など声を出す学習活動を積極的に取り入れている。

研究内容3 考えを広げ、深める工夫

(1) 対話での練り合いを取り入れた学習展開の工夫

本校では、低・中・高学年の発達段階に応じた「話し方・聞き方の視点」を考え、6年間を通して途切れることなく系統的に「話し方・聞き方」の指導を行ってきた。児童が自信をもって対話での練り合いの活動ができるように、全学級において「話し方・聞き方の視点」の掲示も行っている。

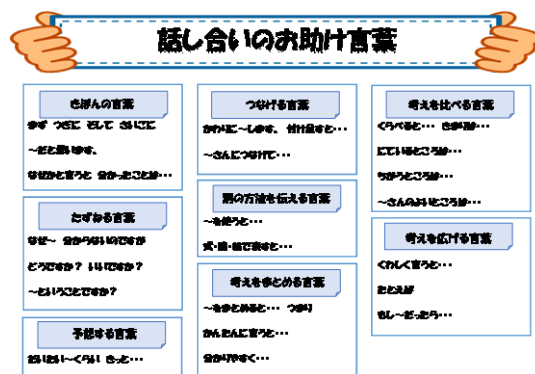
また、集団解決時において、友達の考えに関心をもち、思考を深めるための方策として、

ア 集団解決の前に、比較する観点を示す(共通点や相違点を探し、簡潔的確なものを見つける等)

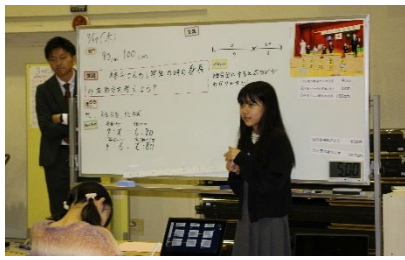
イ 教師側から誤答を提示し、その間違いを協力して説明する

ウ 問題づくりを行い、互いに問題を解いてみることで、考えをもう一度整理する

など、より児童が積極的に練り合ったり考えを深めたりする場の設定の工夫を行っている。



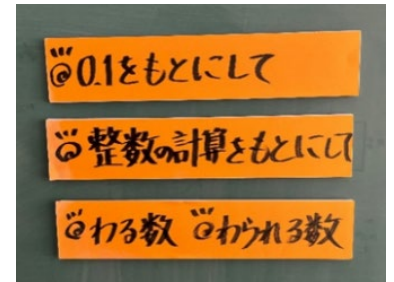
【実践例】 第6学年「比」



児童の1年生の時の身長を求めるために、教師側から敢えて不必要な情報を提示した。その中から必要な情報とそうでない情報はどれなのかを考えていくことで、児童同士の対話での練り合いが深まっていく様子が見られた。練り合い活動で導いた情報から、線分図や比の式を使い、問題解決に向かうことができた。

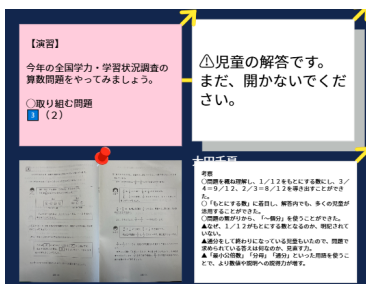
(2) 算数用語や見方・考え方の定着と活用

学習リーダー中心に学習を進めていく際に、算数用語を活用しながら対話を深めていけるようにするため、単元の中で必ず覚え、使ってほしい算数用語や見方をパネルにし、単元を通して常に黒板に掲示し、意図的に活用していく。継続していくことで、自然と算数用語や見方が視界に入り、活用することができるようになると考える。次第に、算数リーダーを中心に児童が進んで準備できるようになることが期待でき、より主体的な学びにつながると考える。単元が終わった後も後方に掲示するなどし、単元間における関連づけの際などにも活用していく。



算数の教科書に載っている「算数で使いたい見方・考え方」や「いつも大切にしたい算数の考え方」、学習指導要領に明記してある「用語・記号」を基本にしながら、該当学年で学ばせたい算数用語を指導していく。

【校内研修より～全国学力・学習状況調査の演習】



今、求められている力や本校児童に身に付いている力、培っていきたい力を全職員が把握し、今後の指導に生かしていくために演習を行った。全国学力・学習状況調査の問題から数問を実際に解き、児童の解答を分析することで、今年度の学校課題でもある情報をもとに考えをまとめたり表現したりする力の育成、算数用語や見方、考え方をを用いて筋道を立てて順序よく考えていくことが大切だということを改めて共有することができた。

(3) 振り返りの工夫

① 振り返りの必要性について ～「今」を言語化し、「次」につなぐため～

学習における振り返りは、自分の学びを確認し、学びを深め、次の学習や今後の生活につなげるために行う。また、教師が児童の学びを把握し、授業改善に生かすためにも役立つ活動である。

振り返りが次時の学習への課題設定や見通しをもつ際の拠り所になることにも気付かせるなど、振り返りの価値付けを行っていくことで、児童にとってより意味のある活動となるように、引き続き指導を続けていく。

②自己評価の仕方について

※全学年5分程度で行う。

・低学年・・・◎○△で自己評価させる。本時の学習がよく分かった、だいたい分かった、むずかしかった等を自己評価させ、次時の指導に生かす。

2年生は、徐々に学習感想も書かせながら、次時の指導に生かす。

・中・高学年・・・スプレッドシートへ理解度と学習の振り返り・感想を記入する。前時の学びをすぐに見返せるため、学びの蓄積や変容が実感しやすい。また、友達の記述も共有できるので、自分自身への学びから、集団としての学びへと広げていくことができる。

③学習感想の書き方について

・第一段階～「楽しい」「また、勉強したい」「わからない」という言葉が出てくる。また、算数の学習内容についての具体的な記述がなく、抽象的な言葉が多い。

・第二段階～算数の内容について、どこが分かったのか、どこにつまづいたのかなど、自分の考えを書くようになる。

・第三段階～自分の考えだけでなく、他人の考えについて自分がどう思ったのかを書くようになる。また、文章の中に他人の名前が出てくるようになる。

・第四段階～自分の考えについて、見直しをしている記述が出てくる。自らに問い直し、数学的な内容の発展を考えている。

※1年生は◎○△、2年生は、第一段階、中学年は第二段階、高学年は第三・四段階の学習感想が書けるように指導していく。

ふりかえりのポイント

- 1 今日の学習で分かったこと
- 2 前の学習と比べて気づいたこと
- 3 できるようになったこと
- 4 役に立った考えや方法、解き方
- 5 「は・か・せ・どん(速く・かんたんに・せいかくに・どんなどきも)はどれか
- 6 友達のよい考え・がんばり
- 7 友達から学んだこと
- 8 学び合いを通して自分が成長したこと
- 9 次の時間・家庭学習で頑張りたいこと
- 10 学習したことから生活の中で生かせそうなこと

【実践例】スプレッドシートを活用した振り返り（中・高学年）

授業で学んだことを自分の言葉で書こう！

	A	B	C	D	E
	〇〇	日にち	今日の理解 と度 (1～5)	・友達との交流 ・算数用語の使用 ・自分の考えとくらべながら(共通・相違点) ・あたたかい反応(うなずく・なるほど等)	本時の感想
1					
2	1	2025/03/04火曜日	5	角柱と円柱でなかまわけできたし、角柱と円柱のことがわかった。ロイロで交流して、考えを深められた。(ほまれの角がないとか)	少しだけ角柱と円柱のことがわかってよかった！！
3	2	2025/03/05水曜日	5	交流で、円柱や角柱の面についてみんなで考えられてよかった。糸の考えで、三角形とただの四角形は平行じゃないことがわかってよかった。	円柱と角柱の面のことがすこしわかってよかった！底面と側面という言葉がわかったよ。
4	3	2025/03/06木曜日	5	今日は、頂点、面、辺の数を調べられたし、○角形だったら、頂点は○×2で、辺は○×3で、面は○+2ということがわかってよかった！(法則！)	頂点や辺、面の数の調べ方がわかったし、交流もしっかりできた。次回から複雑になるらしいのがんばる。
5	4				
6	5				
7	6				

「振り返り」発表時に教師からの賞賛・アドバイス、コメントによる励ましなどを適宜取り入れながら内容の充実を図っていく。

また、算数用語の活用や対話の充実にも焦点をあて、振り返っていけるようにアプローチしていく。

6 これまでの成果と課題

(1) 研究内容1 学ぶ意欲を高める工夫に関わって

【成果】

- ・児童の発達段階に応じて、学習リーダー中心に主体的に授業を進めることができた。
- ・問題提示の方法を工夫することで、児童の知的好奇心や見通す力が高まった。

【課題】

- ・児童の実態や確実に個人思考で解決させたいという思いから、教師主導になる場面があった。
- ・学習リーダーに委ねることで、課題やまとめの文言が不十分だったり、課題とまとめの整合性が図れていなかったりする場面があった。

【今後の方向性】

- ・前時までの振り返りを活用し、児童が主体的に課題に気付いたり課題解決に向けて取り組んだりできるようにしていく。教師の「待つ」姿勢や「同時間接」の学習形態も大切にしていく。
- ・算数用語を意識して使うことができるように、既習の用語を掲示していく。

(2) 研究内容2 表現力を高める工夫に関わって

【成果】

- ・学習リーダーを中心とした練り合いが停滞しそうな場面で、適切な発問をすることで、児童の思考が深化する場面があった。
- ・フラッシュカードや問題提示、集団解決時のノート交流等、適切なICTの活用を図ることができた。

【課題】

- ・声の大きさや話す速さなど、児童のみならず教師も表現力を高める必要がある。
- ・ICTの効果的な活用と、特に低学年の具体物・半具体物の操作の大切さ。

【今後の方向性】

- ・日常的に大きな声を出す機会の設定。
- ・発達段階に応じた具体物・半具体物等の教具の効果的な活用とICTとのバランスの再考。

(3) 研究内容3 考えを広げ、深める工夫に関わって

【成果】

- ・個人思考から集団解決へ向かう授業展開の継続で、児童主体の学習活動を進めることができた。
- ・「見通す」段階から児童に委ねることにより、主体的に問題解決しようという学習意欲が高まった。

【課題】

- ・集団解決時に、個人思考の交流に終始してしまい、対話での練り合いとまでは至っていなかった。
- ・振り返りの時間確保と今後につながる振り返りの充実。

【今後の方向性】

- ・比較の観点、新たな視点や誤答の提示、算数用語の活用など、より児童が積極的に練り合ったり考えを深めたりする場の設定の工夫を行っていく。
- ・振り返りが次時の学習への課題づくりや見通しをもつ際の拠り所になることに気付かせるなど、振り返りの価値付けをすることでより意味のある活動となるように、引き続き指導を続けていく。
- ・算数用語の活用や友達との対話にも焦点をあてて振り返っていけるようにアプローチしていく。

7 指導案

第1・2学年 算数科学習指導案

日 時 令和7年9月18日(木) 1校時
場 所 体育館
児 童 第1学年 1名 第2学年 5名
指導者 大 田 千 夏

1 単元名

第1学年 「11 3つのかずのたしざん、ひきざん」

第2学年 「6 たし算と ひき算」

2 内容のまとめ

第1学年 「A 数と計算」(1)「数の構成と表し方」(全5時間)

第2学年 「A 数と計算」(2)「加法、減法」(全9時間)

3 児童の実態

①学習能力はそこまで高くないものの、毎時間の学習を真面目に取り組むことで、既習内容の定着を図ってきた。10玉そろばんやブロックの操作に繰り返し取り組むことで、数の概念や数の加減のイメージが構築されてきている。一方で、1位数+1位数、1位数-1位数の計算は指を使ったり、頭の中でじっくり考えたりすることが多く、反射的に答えるまでには至っていない。

①算数のみならず学習内容が定着していないことと、言葉での指示に時間を要するため、多くの場面で支援を必要とすることが多い。単純な加法や減法の計算は、繰り返し取り組むことで定着はしつつあるが、個人思考で自分の考えを表現する場面では、停滞することが予想される。

②学習への意欲は高いものの、数の概念で未定着な部分があるうえ集中力が途切れやすいため、学習内容を理解するのに支援を要することが多い。普段と違う環境や大勢の前での発表では、固まってしまうこともしばしばある。また、立式や単純な計算はできても、どのような道筋で考えたのかを表現することに課題がある。

③決まった形やこれまでに経験したことがあれば安心して学習に取り組むことができるが、初めてのことや今までと違った角度で物事が進むと、とたんに停滞してしまうことが多い。考えが閃けば、確実に活動を進めることができるが、自分自身で試行錯誤したり、友達にわからないことを聞いたりすることに課題がある。

④学習理解が高く、前時との違いに着眼し課題を見つけたり、学習の流れに沿って学習リーダーとして学習を進めたりすることができる。その一方で、算数に限らず自信をもって自分の意見や考えを言うことに課題があり、理解していても自ら発信しないことも多い。

⑤たし算やひき算などの単純な計算は得意だが、算数全般に対する苦手意識も強く、気分によって取り組みにむらがある。普段と違う環境や大勢の前での発表が苦手なことに加え、自信の無さから、思考が停滞することも予想される。

4 単元について

(1) 教材について

加法と減法の計算について、これまでに、1位数+1位数で和が10以下の加法とその逆の減法、及び繰り上がりのない++1位数や十何+1位数とその逆の減法を指導してきた。

本単元では、3つの数の加法や減法について指導する。式の意味については、問題場面を実際に演じたりブロックを操作したりして、それを式に置きかえるとといった段階を踏むことにより、実感をもって理解できるようにすることが大切である。具体的な場面と式を結びつけて捉える活動を丁寧に扱い、式についての理解を深めていきたい。

ここでの学習は、単元12の繰り上がりのある加法、及び単元13の繰り下がりのある減法につながる。これらの計算をするときには、10のまとめをつくるために、 $9+4=(9+1)+3$ とみたり $12-9=(10-9)+2$ とみたりする考えが用いられる。また、2学年で乗法を導入するときは、 $3+3+3+3$ のような同数累加の場面を 3×4 という乗法の式に表していくが、これもまた本単元の学習が土台となっていると考える。

第2学年の単元2「たし算」、単元3「ひき算」では、2位数どうしの加法、減法の計算のしかた、及び筆算形式について指導した。また、単元5「100より大きい数」では、3位数の表し方と1000、及び十や百を単位としてみられる数の加減計算も扱った。

本単元では、2位数+2位数で百の位に繰り上がる加法、百何十何-2位数で百の位から繰り下がる減法、及び簡単な繰り下がりが2回ある計算を経験することになる。既習事項を生かして類推的に考えたり、ブロックを操作したりして、計算のしかたを子ども自らに発見させながら丁寧に指導していくことにする。また、結合法則を用いて計算を工夫することや、()を用いて式に表すことも指導する。

なお、数が大きくなって計算が複雑になるので、大きなまちがいを避けるために見積もりをして、答えや計算方法の見通しをたてさせることも大切にしたい。加法の交換法則や加法と減法の相互関係を用いて計算の確かめをするなど、計算の法則を生かせるようにしていくとよい。

(2) 指導について

加法と減法の計算について、これまでに、1 位数 + 1 位数で和が 10 以下の加法とその逆の減法、及び繰り上がりのない十 + 1 位数や十何 + 1 位数とその逆の減法を学習してきた。

本単元では、既習の事項を土台にしなが、初めて 3 つの数の加法や減法について学習をする。これまでは問題場面が 2 つだったが、今回はまだお話が続いていることに着眼させることで、3 つの数の式になることに気付かせ、他の場面でも 3 つの式にできそうだという広がりをもたせたい。合わせて、これまでの加法、減法と同様に、問題場面に合わせてブロックを操作し、式に表す活動を通して理解を深めていく。

また、機械的に式を立てるのではなく、問題場面の变化を時系列にそって捉え、ブロック操作や○の図、式、言葉を対応させながら説明する場面を意図的に設けることで、式のよさにも感得できるようにしていく。式は、計算の答えを求めるためのもののみならず、具体的な場面の数量の関係や思考の過程を表す際にも用いられるなど、多様な働きがある。問題場面を表す「算数の言葉」であることを念頭におきながら、本単元の指導にあたる。

第 2 学年の単元 2 「たし算」、単元 3 「ひき算」では、2 位数どうしの加法、減法の計算のしかた、及び筆算形式について指導した。また、単元 5 「100 より大きい数」では、3 位数の表し方と 1000、及び十や百を単位としてみられる数の加減計算を学習してきた。

本単元では、大きな数になっても十進位取り記数法の仕組みに基づき、位ごとに数を分けると、既習の計算と同様に解くことができるという見方・考え方に気付かせ、自信をもって計算をしたり考え方を発表したりすることを通して学習の確実な定着を図る。

特に、筆算のしかたでは、ただ機械的に計算の方法を教えるのではなく、10 のまとまりが 10 個で 100 が形成できることや、100 のまとまりをばらして 10 のまとまりが 10 個になることなどにも着眼させ、数の柔軟な見方を定着させることで、筆算の手順の意味を捉えることができるようにしていきたい。

また、算数に対して苦手意識がある子や数の概念が曖昧な児童も多いことから、反復練習に取り組んで基礎基本の定着を図る。さらに、数をまとめたり順序を変えたりすることで能率よく計算するよさに気付かせ、児童自身が「できた。」「わかった。」を体感できる授業づくりを念頭におきながら、本単元の指導にあたる。

5 単元の目標及び評価規準

(1) 単元の目標

3 口の数の加法、減法の意味や式について理解し、具体物や図などを用いて計算のしかたを考える力を身に付ける。また、加法、減法の計算に親しみ、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学ぶ態度を養う。

百の位に繰り上がる 2 位数などの加法及びその逆の減法や、百の位への繰り上がり・繰り下がりが無い 3 位数の加法及び減法について理解し、計算することができるとともに、図や式などを用いて計算のしかたを考える力を身に付ける。また、加法及び減法の計算のしかたを考えることに進んで関わり、その過程を振り返り、生活や学習に活用しようとする態度を養う。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
3 口の加法、減法の意味を理解し、式に表して計算することができる。	数量の關係に着目し、計算の意味や計算のしかたを考えたり、日常生活に生かしたりしている。	数や式に親しみ、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学ぼうとしている。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
2 位数 + 1・2 位数 = 百何十何の加法及びその逆の減法や、百の位への繰り上がりのない 3 位数 + 1・2 位数、百の位からの繰り下がりが無い 3 位数 - 1・2 位数の筆算のしかたを理解し、加法及び減法の計算が確実にできる。また、() の意味や使い方について理解している。	数量の關係に着目し、計算のしかたを考えたり計算に関して成り立つ性質を見いだしたりしているとともに、その性質を活用して、計算を工夫したり計算の確かめをしたりしている。	加法及び減法の計算に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気付き生活や学習に活用しようとしている。

6 指導と評価の計画（5時間）

時間	学習活動の概要	評価		
		知 技	思 判 表	態 度
1	3口の数の加法による場面を式に表し、計算のしかたを考える。	ノート		
2	3口の数の減法による場面を式に表し、計算のしかたを考える。	ノート		
3	3口の数の加減混合の計算になる場面を式に表し、計算のしかたを考える。		ノ ー ト・発 表	
4 本 時	10を多面的に捉え、式に表す方法を考える。		ノ ー ト・発 表	
5	学習内容を理解しているかを確認し、それに習熟する。			観察・ノ ー ト

指導と評価の計画（9時間）

時間	学習活動の概要	評価		
		知 技	思 判 表	態 度
1	2位数+2位数で百の位に繰り上がる加法の計算のしかたを理解し、筆算のしかたを考える。		ノ ー ト・発 表	
2	2位数+2位数で繰り上がり2回ある加法の計算のしかたを考える。	ノート		
3	繰り上がって答えの十の位が空位になる加法の計算を考える。また、百の位への繰り上がりのない3位数+1・2位数の加法の計算のしかたを考える。	ノート		
4	百何十何ー2位数で百の位から繰り下がる減法の計算のしかたを理解し、筆算のしかたを考える。		ノ ー ト・発 表	
5	百何十何ー2位数で繰り下がりが2回ある減法の計算のしかたを考える。	ノート		
6	百の位から波及的に繰り下がる減法の計算のしかたを考える。	ノート		
7	答えが1位数になる減法の計算や、百何ー1位数=2位数の減法の計算のしかたを考える。また、百の位から繰り下がりのない3位数ー1・2位数の減法の計算のしかたを考える。	ノート		
8 本 時	加法の結合法則を用いた計算や、（ ）を用いた式について理解する。	ノート		
9	学習内容を理解しているかを確認し、それに習熟する。			観察・ノ ー ト

7 本時の学習

（1）本時の目標

10を多面的に捉えて、式に表すことができる。

加法の結合法則を用いた計算や、（ ）を用いた式について理解し、よりよい方法で計算することができる。

（2）研究との関わり（本時）

【研究内容1ー②】課題の吟味

本時の展開3「本時の課題を確認する」場面では、教師との対話を通して、本時の課題を設定していく。これまでも1年生の児童は、一人学年ではあるが、前時までの学習の流れを想起しながら課題作りを行ってきた。児童の気づきを言語化させ、できる限り児童主体で課題を立てることを通して、本時のねらいにせまる課題作りを目指す。

【研究内容2ー④】ICT等教材・教具の工夫

デジタル教科書を用いて、問題把握をしたり集団解決の終盤場面での思考の確認をしたりする。特に、問題把握の場面において、プレゼントの図のブロックが10個あることを視覚的に捉えることで、本時の学習の深化につなげていく。また、個人思考の場面では、クロームブック等のICTを取って替えず、教科書の様々な図を紙に印刷したプリントを活用する。1年生という発達段階をふまえ、半具体物のブロックを様々な図の上に置き、動かしたり丸で囲ったりする動作を意図的に多く取り入れていく。試行錯誤しながらブロックを操作することで、児童自身で数のまとまりを見つけ、立式することが期待できると考える。

【研究内容1ー②】課題の吟味

本時の展開3「本時の課題を確認する」場面では、学習リーダーが中心となり児童同士での話し合いを通して本時の課題を設定していく。これまでも2年生の児童は、展開2の「問題把握」の場面から、前時までの学習との違いや、できそうだけれど解決できない部分に着目して課題づくりを行ってきた。これまでの学習を想起させながら、児童の気づきを言語化させ、本時のねらいに迫っていく課題へとつながっていく。

【研究内容2ー④】ICT等教材・教具の工夫

デジタル教科書を用いて、問題把握をしたり集団解決の終盤場面での思考の確認をしたりする。それぞれの教科書ではなく、1つの画面で視覚的に確認することで、全ての児童の確実な理解を図りたい。

また、個人思考をノートに書いた後に、自分の考えを説明するうえで実物投影機を用いて交流を行う場面を設定する。小学校第2学年という発達段階を鑑み、あえてクロームブックでの交流ではなくノートを実物投影機に写して交流する方法を選択した。個人思考の時間を十分に確保したうえで、集団解決を行うことができるため、自分の考えとじっくり向き合うことが期待できる。

<p>【研究内容 3—①】対話での練り合いを取り入れた学習展開の工夫</p> <p>本学年の児童は、一人のため、同学年の児童同士での対話の設定が難しい状況である。集団解決時には、必然的に個人思考の場面で考えた自分の考えを教師や他学年の児童に伝えることを繰り返し取り組んでいるため、自分の考えを発表することへの抵抗感は少ないものの、多様な考えに触れたり、練り合ったりする経験が乏しい。集団解決の場面では、新たな並べ方を提示していくことで、自分とは異なる考え方に触れるとともに、教師との対話を通して多様な見方に気付く契機となると考える。</p> <p>【研究内容 3—②】振り返りの工夫</p> <p>入学当初からほぼ全ての教科において、授業の終盤に振り返りの場面を設定してきた。初めは、◎○△から始め、ひらがなの習得と合わせて少しずつ記述も取り組むことで、児童は、抵抗感なく自分自身の一単位時間の振り返りを言語化することができるようになってきた。「～ができた。」「～を頑張った。」から、時々「つぎは、～したい。」と自分の考えを書くことができるようになってきた。少しずつ学習感想の第二段階へとつなげることで、数学的な考えを表現できるようにし、自己評価の充実を図っていく。</p>

<p>【研究内容 3—①】対話での練り合いを取り入れた学習展開の工夫</p> <p>研究内容 2—②とも関連するが、集団解決の場面では個人思考を書いたノートを実物投影機で写して、練り合いを進めていく。個人思考が書かれたノートを見ながら、友達が発表する考えを聞くことで、児童の思考をより深化させることができると考える。複数のノートを映しやすいという実物投影機の特性を生かし、自分の考えと比較しながら共通点や類似点、相違点を見つけ、対話を通しての練り合いを深めていく。</p> <p>【研究内容 3—②】振り返りの工夫</p> <p>昨年から継続して振り返りをどの教科でも取り組んでいるため、学習感想の第一段階である「～ができた。」「～を頑張った。」など抽象的な言葉での自己評価を行うことは身に付いている。今年度は、一単位時間の「まとめ」に立ち返ることで、本時で分かったことやつまづいたことを振り返りに取り入れることができるように指導してきた。少しずつではあるが、算数用語を使うこともできるようになりつつある。まとめを生かしつつ、学習過程を振り返られるようにするため、毎時間の振り返り発表の際に、具体的に書けた子を賞賛したり、アドバイスをしたりして内容の充実を図っていく。</p>
--

(3) 本時の展開 (5 時間扱いの 4 時間目)
(第 1 学年)

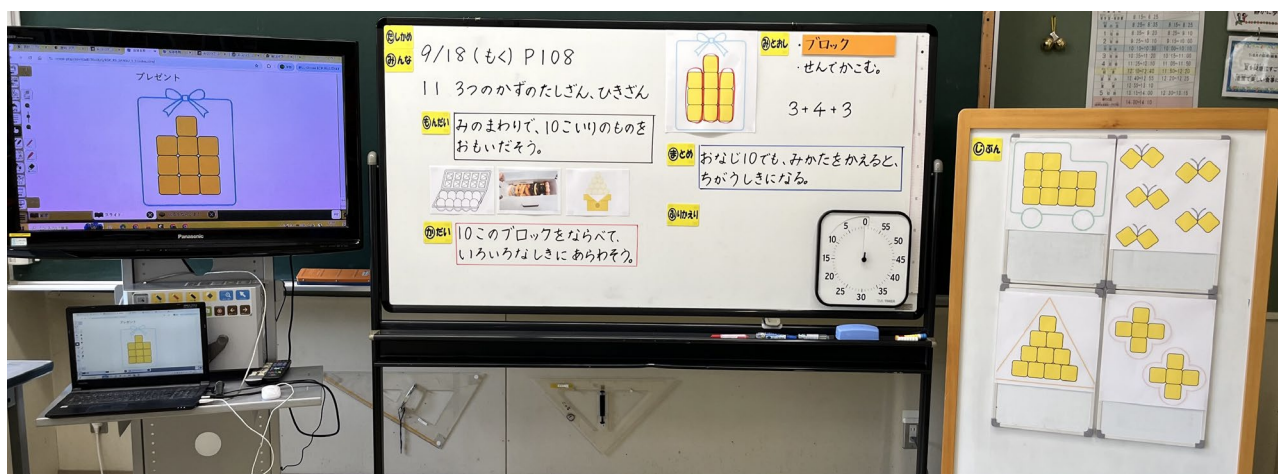
(9 時間扱いの 8 時間目)
(第 2 学年)

○主な学習活動 ・予想される児童の発言等	○教師の働きかけ ■評価規準□評価方法 ▲支援児童への手立て	形態	○教師の働きかけ ■評価規準□評価方法 ▲支援児童への手立て	○主な学習活動 ・予想される児童の発言等
<p>1 練習問題に取り組む</p> <p>○前時に学習した 3 口の加減混合の計算や、10 を構成する問題を解き、学習の確実な定着を図る。</p>	<p>○児童の実態に応じた量の練習問題を用意する。</p> <p>○解答を用意し、自分で丸付けを行うよう、指示する。</p> <p>○プリントが早く終わったら、e ライブラリの問題に取り組むよう、指示する。</p> <p>▲児童がつまづいた際に自力解決できるように、同じ問題でヒントが書いてあるワークシートを準備しておく。</p>	つかむ・見通す	<p>○数が大きくなっても、上の位から順に繰り下げると解決できたことを確認する。</p>	<p>1 前時までの学習を振り返る</p> <p>○前時には、答えが 1 位数になる減法の計算や、百何—1 位数=2 位数の減法の計算も、既習の筆算の手順と同様に一の位から順に計算したり、必要に応じて上の位から繰り下げたりすれば解決できることを想起する。</p>
			<p>ミニトマトはぜんぶで何個あるでしょうか。</p>	<p>2 問題を把握する</p>
			<p>○ミニトマトを (15 個・6 個・4 個ずつカップ入り) 用意し、学習への意欲を高める。</p> <p>○問題の場面状況を確実に捉えさせるため、問題から分かることに直線、聞かれていることに波線を引き、たし算言葉葉を丸で囲む。</p> <p>○15 + 6 + 4 の式が立てられていることを確認する。</p>	<p>○ミニトマトを視覚的に捉えることで、場面状況を理解する。</p> <p>○本時の問題をノートに貼り、把握する。</p> <p>・ぜんぶでだから、たし算だ。</p> <p>・3 つの数のたし算だ。</p> <p>○立式する。</p>
			<p>15 + 6 + 4 のけいさんのしかたをせつめいしよう。</p> <p>○様々な方法での答えの出し方があることに着眼させ、課題を立てさせる。</p> <p>○答えの見積もりや解決方法の見通しがどの程度できているかを確認する</p> <p>○多様な考えを出させることに重きを置き、敢えて、深く見通しをもたせることはしない。</p>	<p>3 本時の課題を確認する</p> <p>○学習リーダーを中心に本時の課題を話し合い、ノートに書く。</p> <p>4 見通しをもつ</p> <p>○学習リーダーを中心に答えの見積もりや必要最小限の解決方法の見通しをもつ。</p> <p>・20 ~ 30 個くらい。</p> <p>・順番に足す。</p> <p>・10 のまとまりを作る。</p> <p>・図であらわす。</p> <p>▲これまでの学習での解決場面</p>

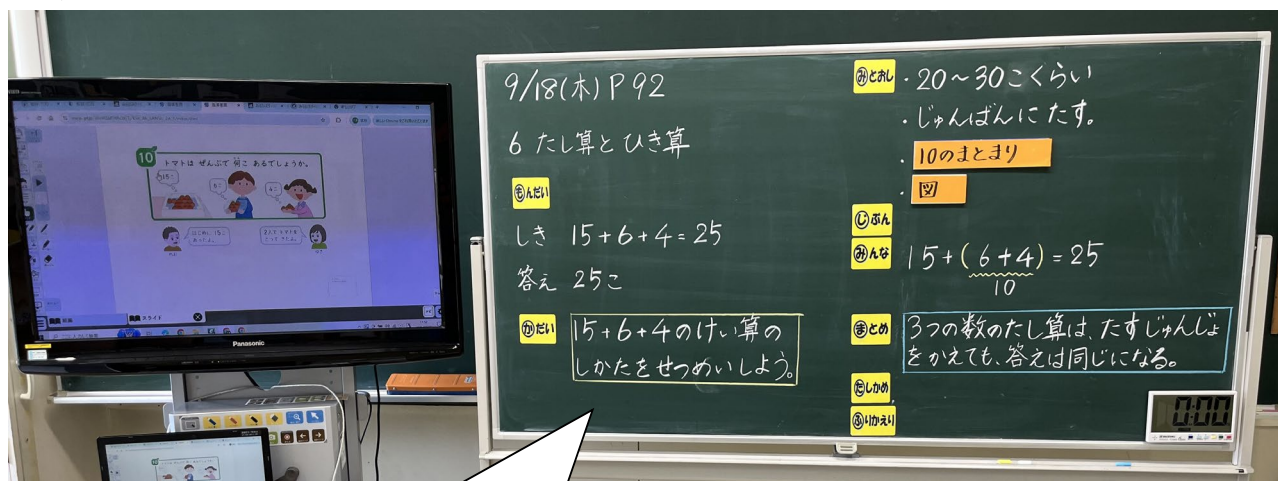
					で、図や言葉、半具体物などで説明してきたことを想起させ、十分にでないにしろ自分ができそうな方法を選択させる。	
2 前時までの学習を振り返る ○前時には、3口の数の加減混合の計算を式に表し、計算をしたことを想起する。				○個人思考が停滞した場合は、いつも通り友達のノートを見に行ったり、尋ねたりしてもよいことを確認する。(白紙共有)	5 個人思考 ○4の見通しをもとに、個人思考をノートに書く。 ・じゅんに足す。 15+6=21 21+4=25 ・10のまとまりを作ってから足す。 6+4=10 15+10=25 ・図で表す。	
3 問題を把握する <div>身の周りで10個入りのものを思い出そう。</div> ○1列に並んだ10個のブロックから、身の周りにある10個のまとまりを想起する。 ・たまご ・ドーナツ ・おだんご ○全体の形から、ブロックの個数に着目し、10個もブロックでも並び方が違うことに気付く。 ・全部で10個だ。	○身の周りにある10個のまとまりを想起させ、本時の学習への意欲を高める。 ○プレゼントの図を提示し、何個のブロックで構成されているかを問う。 ○本当に10個あるのか問うことで、1個ずつ数えたりまとまりごと数えたりする活動へとつなげる。	つかむ・見通す	追究する	■【知識・技能】 加法の結合法則を用いた計算をすることができる。 □ノート・発表	<div><div>○○○○○○○○○○</div><div>○○○○○</div><div>○○○○○</div><div>○○○○</div></div>	
4 本時の課題を確認する <div>10このブロックをならべて、いろいろなしきにあらわそう。</div> ○教師との対話を通して、本時の課題を考え、ノートに書く。	○ブロックの並べ方によって多様な式の表し方があることに着眼させ、課題を立てさせる。 ○視覚的にまとまりを見つけやすいように、合体していたブロックを、まとまりごとにずらす。 ○ブロックの並び方の式を問い、1つずつ数えなくてもまとまりで求答できる見通しをもたせる。			ふかめる	○発表の話し方・聞き方を確認する。 ・順に足す方法しか出なかった場合は、10のまとまりを作るために、6+4=10、15+10=25の式を提示し、どちらが「はかせどん」で解くことができるか考えさせる。 ○まとめて足すときは、()を用いて表すことと、()の中は先に計算することを確認する。 ○教科書では、たしかめ20で、文章問題を読み、()を使った立式をしているが、本時では、あくまでより簡単に計算するために()をつけることに止め、文意から()を使う問題は次時で扱う。	6 集団解決 ○ノートにまとめた自分の考えを実物投影機に写し、友達や先生に説明する。 ・じゅんに足す。 15+6=21 21+4=25 ・10のまとまりを作ってから足す。 6+4=10 15+10=25 ・○を書いて、10のまとまりを作った。
6 個人思考 ○10のまとまりで異なる並び方の図を見て、式に表す。 ・プレゼント3+4+3 ・チョコレート5+5 ・車6+4 ・ピラミッド1+2+3+4 ・ちょうちょ2+2+2+2+2 ・花5+5 ○早く終わったら、同じ図でも、見方によって違う式になる場合を考え、立式する。 ○教科書にはない並べ方を考え、立式する。	○教科書108ページの図が貼ってあるホワイトボードを用意し、立式させる。 ○同じ図を複数枚用意し、多様な式が立てられるようにする。 ○自分で考えた並べ方は、ブロックで表し、ホワイトボードに残しておくことを指示する。 ■【思考・判断・表現】 図を手がかりに、10を多面的に捉えて、ブロックの並び方を式に表している。 □ノート・ホワイトボード・発表	追究する			7 学習をまとめる <div>3つのかずのたしざんは、たすじゅんじよをかえても、答えは同じになる。</div> ○集団解決での気付きを言語化し、本時の学習内容を明確に捉えさせる。	○本時の学習のまとめをノートに書く。

<p>7 集団解決 ○ホワイトボードにまとめた自分の考えを先生に説明する。</p> <p>8 学習をまとめる おなじ10でも、みかたをかえると、ちがうしきになる。</p> <p>○本時の学習のまとめをノートに書く。</p>	<p>○発表の話し方を確認する。 ・同じ図で複数の式が出なかった場合は、ブロック操作を交えながら一緒に解くことで、多様な見方に気付かせる。 ・教科書以外の並べ方が出なかった場合は、他の並べ方を一緒に考え、多面的な見方に触れる場面を設定する。</p> <p>○集団解決での気づきを言語化し、本時の学習内容を明確に捉えさせる。</p>	<p>ふ か め る</p> <p>ひ ろ げ る</p>	<p>■【知識・技能】 加法の結合法則を用いた計算や、()を用いた式について理解し、解くことができる。 □プリント</p>	<p>8 練習問題に取り組む ○加法の結合法則を用いた計算や、()を用いた計算問題に取り組み、理解を深める</p>
<p>9 今日の学習を振り返る ○本時の学びをノートに自分の言葉で書き表し、発表する。 ・いろいろな式を見つけることができた。 ・新しい並べ方を考えることができた。</p>	<p>▲自分の言葉で書き表すことが困難な場合、まとめの言葉を使うことや、振り返りの観点等の掲示を参考に書くよう支援する。</p>		<p>▲自分の言葉で書き表すことが困難な場合、まとめの言葉を使うことや、振り返りの観点等の掲示を参考に書くよう支援する。</p>	<p>9 今日の学習を振り返る ○本時の学びをノートに自分の言葉で書き表し、発表する。 ・3つのかずのたしざんは、足すじゅんじょをかえても、答えは同じになることが分かった。 ・順番に足すより、10のまとまりを作った方がかんたんだった。 ・()は、先に計算することが分かった。</p>

9 板書計画 (第1学年)



(第2学年)



当日は、2年生の学習リーダーが板書します。

第 5 ・ 6 学 年 算 数 科 学 習 指 導 案

日 時 令和 7 年 9 月 1 8 日 (木) 2 校時
場 所 体育館
児 童 第 5 学 年 5 名 第 6 学 年 4 名
指 導 者 佐 藤 志 持

1 単元名

第 5 学 年 「 1 2 割 合 」

第 6 学 年 「 6 データの見方 」

2 内容のまとめ

第 5 学 年 「C 変化と関係」(3)「割合」(全 1 2 時間)

第 6 学 年 「D データの活用」(1)「データの考察」(全 1 1 時間)

3 児童の実態

- ①直感的に発言し、的を射ていることが多い。集中の持続や落ち着きのなさという面で課題がある。
- ②学習に真面目に取り組み、基礎的な学力も高い。一方で、説明の際に適切な語句を用いることが苦手である。
- ③自分のペースで学習を進めることが多い。時間がかかるが、自分の考えをしっかりともち、言葉にすることができる。
- ④学習に真面目に取り組み、基本的な学力も高い。伝えたい思いが強く、相手意識をもって伝えることができる。しかし、説明の中で自分自身が混乱してしまうこともある。
- ⑤作業スピードが速い。しかし、ケアレスミスも多い。問題に対し、正答に近い考えをもつが、言語化することが難しい場面が多く見られる。

- ①基礎的な学習内容が定着している。また、応用的な発想もできる。一方、交流場面では、自分の考えを正確に伝えようとするあまり、言葉が出てこなくなる場面が見られる。
- ②基礎的な学力はついてきているが、わからないことを素直に伝えることができず、困惑する場面が見られる。また、交流場面では複雑な手順を踏む内容では混乱してしまうことがある。
- ③計算などは、多少時間をかけても正確に解こうとする姿勢が見られる。考え方もよく、これまでの学習を生かして説明しようとしている。
- ④リーダーシップを発揮し、学習を進めることが多い。何事も作業が早く理解も進んでいるように見える。一方で、ケアレスミスなども見られる。

4 単元について

(1) 教材について

割合の意味については、低学年から「倍」という言葉を用いて素地となる経験をさせてきた。4 学年では、整数で表される簡単な場合についての割合も扱い、ある数量を 1 とみたときに、もう一方の数量がどれだけにあたるかを表しているという割合の意味と、ある 2 つの数量の関係と別の 2 つの数量の関係を比べる場合に差ではなく割合で比べる場合があることについて考察した。また、単元 1 0 「単位量あたりの大きさ」では、量の比較の考え方として、単位面積当たりの人数のように異種の 2 つの量の割合として捉えられる数量の比べ方や表し方についても指導してきた。一方で、小数や分数など有理数の概念定着は、多くの児童にとって大きな課題となっていると考えられる。

本単元では、同種の 2 つの数量の関係について割合を用いて比べることを考え、一方を基準量としたとき (1 とみたとき)、もう一方の比較量がどれだけにあたるかを表す数という割合の意味を、小数で表せる場合にまで広げ、「割合 = 比較量 ÷ 基準量」の式にまとめる。また、基準量を 1 0 0 とみて表した百分率の意味や表し方も理解させる。更に、割合の求め方をもとに、比較量や基準量を求める問題も扱い、それらの関係を明確にし、割合についての理解を定着させていく。割合は、算数の学習のみならず、他教科等の学習や実生活で活用されることも多い。公式を覚えるだけの形式的な指導にならないよう配慮し、具体的にどんな場面で活用できるかを、実感をもって捉えられるようにしていきたい。

統計的なデータをグラフや表に表すことについて、これまでに、量的データの大きさを示す棒グラフ、時系列データの変化の様子を示す折れ棒グラフ、データの割合を示す帯グラフと円グラフ、及び一次元や二次元の表を指導してきた。また、5 学年では、統計的な問題解決の方法について知らせ、「問題－計画－データ分析－結論」という統計的探究プロセスによって考察することを経験させた。

本単元では、これらの既習事項を生かし、日常の事象について目的をもって調べ、統計的な手法を適切に活用して分析したり判断したりする活動を行う。その過程では、データ全体を表す指標として平均値、中央値、最頻値などの代表値について指導するとともに、量的データの分布の様子を捉えることにも着目させ、ドットプロットに表すことや、度数分布を表す表や柱状グラフについても理解を図る。

統計的な問題解決の対象は不確実な事象であるため、得られた結論について、それが妥当なものであるかどうかを批判的に考察することが大切である。そして、更に検討が必要であると判断した際には、再度問題解決の過程を行うことになる。このような一連のプロセスを支えるものが、活動の最初にある目的意識である。子どもたちにとって身近で関心の高い題材を工夫し、目的意識をもって問題解決に取り組めるようにしていきたい。

割合で比べる場合には、比べるために必要となる2つの数量の関係について、比例関係を前提として捉える見方が大切になる。この見方により、ある数量の関係と別の数量の関係をどちらも基準量1にそろえて、それぞれの比較量の大きさによって比べることができるようになる。また、何を基準量として何を比較量とするのか、基準量を1とみるのか100とみるのかなど、問題の条件や目的をもとに考えていくことも大切にしたい。	集団の特徴を表すとき、最大値や平均値、中央値、最頻値など、さまざまな見方で考察するとともに、それぞれの代表値の目的に着目し、どの値を用いるのが妥当であるか、その値によって何がいえるのかについて批判的に考察することが大切である。また、データの特徴を1つの数値で表すだけでなく、データの分布によっても特徴をとらえようとするなど、多面的な見方で考察できるようにすることが大切である。
--	--

(2) 指導について

<p>本単元では、初めに、バスケットボールのシュートの練習場面について、「シュートがよく入ったのはどちらかな？」という問いのもと、比べ方を考える活動で導入する。〇〇のほうがよく入ったといえる場合など、さまざまな場合で入った数と投げた数の関係に着目させ、「投げた回数が〇回だとしたら…」と仮定する考えを引き出しながら、2つの数量の関係を捉えるときに差ではなく割合で捉えることが妥当な場合であることをおさえるようにする。</p> <p>そのうえで、バスケットボールの試合場面のシュートのうまさについて、「もとの数が違うときは、どのように比べればよいか」という問いへとつなぎ、基準量を単位として比較量の大きさを測定するという割合の理解を深めていく。</p> <p>そして、百分率や歩合といった100や10をもとにした割合の表し方について学習する中で、日常生活の場面などを題材とした問題に取り組み、割合や百分率が日常生活に活用できるよさを捉えていく。</p> <p>単元の後半には、同じ品物を異なる値引きのしかたで売っている2つの店の場面を用いて、割合についての学習を活用し、どちらの店で買うのが得かについて、どのように判断をしたのかを説明する活動を行う。</p>	<p>本単元では、学校の図書委員会の活動という設定で、「読書チャンピオンを決めよう！」という目的意識で導入する。1組と2組の読書記録のデータがあるとき、「どのような観点で比べればよいか」という問いについて話し合う中で、学級の人数が異なるため合計の冊数では比べられないことに気づき、平均で比べるという考えに着目していく。</p> <p>平均値を求めてみると、1組は11.75冊、2組は12冊という結果が得られる。ここで、「平均で比べることが本当に妥当なのか」という新たな問いに気付かせる。平均値では2組の方が結果がよいが、2組のデータはばらつきが大きいのではないかという予想のもと、ドットプロットに表すことによってそれを明らかにする。そして、ドットプロットの特徴を考察する中で、新たな指標として中央値や最頻値を導入していく。また、ドットプロットに表した分布の様子は、度数分布という見方により、統計データとして扱いやすいものになり、柱状グラフに表すこともできるようになる。</p> <p>このように、目的に応じてデータを分析し、その結果を多面的、批判的に考察しながら新たな見方を獲得していく過程を、子どもの問いの連続によって進めていくことが、本単元の数学的活動である。</p>
--	--

5 単元の目標及び評価基準

(1) 単元の目標

ある2つの数量の関係と別の2つの数量の関係を比べる場合に割合を用いる場合があることや、百分率を用いた表し方を理解するとともに、その意味や求め方を図や式などを用いて考える力を身に付ける。また、その過程において、多面的に捉え検討してよりよい方法を粘り強く考える態度や、学習したことを生活や学習に活用しようとする態度を養う。	代表値や、度数分布を表す表とグラフ、及び統計的な問題解決の方法について理解し、目的に応じてデータを集めて分類整理し、代表値などを用いて問題の結論について判断するとともに、その妥当性について批判的に考察する力を身に付ける。また、その過程を振り返り、統計的な問題解決のよさに気づき、生活や学習に活用しようとする態度を養う。
---	---

(2) 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ある2つの数量の関係と別の2つの数量の関係を比べる場合に割合を用いる場合があることや、百分率を用いた表し方を理解し、割合などを求めることができる。	日常の事象における数量の関係に着目し、図や式などを用いて、ある2つの数量の関係と別の2つの数量の関係を比べ方を考察し、それを日常生活に生かしている。	割合について、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え、検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気づき学習したことを生活や学習に活用しようとしていたりしている。	代表値の意味や求め方、度数分布を表す表やグラフの特徴及びそれらの用い方を理解している。また、目的に応じてデータを収集したり適切な手法を選択したりするなど、統計的な問題解決の方法を知っている。	目的に応じてデータを集めて分類整理し、データの特徴や傾向に着目し、代表値などを用いて問題の結論について判断しているとともに、その妥当性について批判的に考察している。	データを収集したり分析したりすることについて、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気づき、学習したことを生活や学習に活用しようとしていたりしている。

6 指導と評価の計画（12時間）

時間	学習活動の概要	評価		
		知 技	思 判 表	態 度
1 ・ 2	小数で表される場合の割合の意味と表し方、割合を用いた比べ方を理解する。	ノート		
3	資料の全体と部分の大きさの関係や、部分と部分の大きさの関係を、割合を用いて表すことができる。		ノート 発表	
4	百分率の意味と表し方を理解する。	ノート		
5	百分率が100%を超える場合を理解する。	ノート		
6	基準量と割合をもとに、比較量を求めることができる。	ノート		
7	比較量と割合をもとに、基準量を求めることができる。	ノート		
8	割合を $(1 \pm \alpha)$ とみる場合について理解し、基準量と割合をもとに比較量を求めることができる。		ノート 発表	
9 本時	割合を $(1 \pm \alpha)$ とみる場合について理解し、比較量と割合をもとに基準量を求めることができる。		ノート 発表	
10			ノート 発表	
11	日常生活の場面の問題解決に割合を活用し、判断の理由を言葉や式などを用いて説明することができる。		ノート 発表	観察 ノート
12	学習内容の理解を確認し、確実に身に付ける。	ノート		

（11時間）

時間	学習活動の概要	評価		
		知 技	思 判 表	態 度
1	データ全体を表す指標としての平均値の意味を理解する。	ノート		
2 ・ 3	ドットプロットの意味と使い方や、代表値として最頻値や中央値を用いる場合があることを理解する。	ノート		
4	データの分布の様子を度数分布表に表し、それを読み取ることができる。		ノート 発表	
5	度数分布表をもとに柱状グラフに表し、それを読み取ることができる。		ノート 発表	
6 ・ 7	様々な観点からデータを分析し、その結果を根拠にして結論をまとめることができる。		ノート 発表	
8	柱状グラフが用いられる場面や見方について理解を深める。	ノート		
9	統計的な問題解決の方法を理解し、身の回りの問題の解決に活用することができる。		ノート	観察 ノート
10 本時			ノート	観察 ノート
11	学習内容の理解を確認し、確実に身に付ける。	ノート		

※ノートはロイロノートも含む

7 本時の学習

（1）本時の目標

割合を $(1 \pm \alpha)$ とみる場合について理解し、比較量と割合をもとに、基準量を求めることができる。

統計的な問題解決の方法を理解し、身のまわりの問題の解決に活用することができる。

（2）研究との関わり（本時）

【研究内容1—②】課題の吟味

本時の展開3「本時の課題を確認する」場面では、学習リーダーが中心となり児童同士での話し合いを通して本時の課題を設定していく。また、課題の3つの型を用意し、問題に応じて適切な課題を児童が主体的に立てられるようにする。

【研究内容2—④】ICT等教材・教具の工夫

個人思考をノートに書いた後に、クロームブックで写真を撮り、共有ノートに送って交流を行う場面を設定する。集団解決に向けて、再度、個人思考を書いたりまとめたりする必要がないため、個人思考の十分な時間の確保が期待できる。

【研究内容3—①】対話での練り合いを取り入れた学習展開の工夫

児童の考えの共通点・相違点の比較や、問題の要点を抑える「ポイント作り」を行うことで練り合いの必然性を高めている。また、

【研究内容1—②】課題の吟味

本時の展開3「本時の課題を確認する」場面では、学習リーダーが中心となり児童同士での話し合いを通して本時の課題を設定していく。また、課題の3つの型を用意し、問題に応じて適切な課題を児童が主体的に立てられるようにする。

【研究内容2—④】ICT等教材・教具の工夫

個人思考をノートに書いた後に、クロームブックで写真を撮る、または、自作したスプレッドシートの画像を共有ノートに送るなど、交流を行う場面を設定する。集団解決に向けて、再度、個人思考を書いたりまとめたりする必要がないため、個人思考の十分な時間の確保が期待できる。

【研究内容3—①】対話での練り合いを取り入れた学習展開の工夫

問題によっては日常生活との関連を想起させ、考えに広がりをもたせている。

【研究内容 3—②】 振り返りの工夫

振り返りの時間を設け、学びの蓄積を図る。また、ロイロノートから、直接スプレッドシートの共有ファイルが利用できるようにする。

児童の考えの共通点・相違点の比較や、問題の要点を抑える「ポイント作り」を行うことで練り合いの必然性を高めている。また、問題によっては日常生活との関連を想起させ、考えに広がりをもたせている。

【研究内容 3—②】 振り返りの工夫

振り返りの時間を設け、学びの蓄積を図る。また、ロイロノートから、直接スプレッドシートの共有ファイルが利用できるようにする。

(3) 本時の展開 (12 時間扱いの 9 時間目)

(11 時間扱いの 10 時間目)

(第 5 学年)

(第 6 学年)

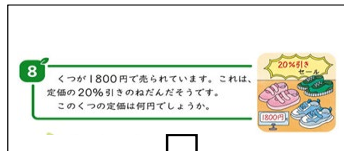
○主な学習活動 ・予想される児童の発言等	○教師の働きかけ ■評価規準□評価方法 ▲支援児童への手立て	形態	○教師の働きかけ ■評価規準□評価方法 ▲支援児童への手立て	○主な学習活動 ・予想される児童の発言等																																												
1 前時までの学習を振り返る ○割合を（1＋α）とみる場について想起させる。	○前時までの学習と異なる点に着目させる。	つかむ・見通す		1 練習問題に取り組む プリント・ワーク・ドリル・プラネット・e-ライブラリ等																																												
2 問題を把握する <div>くつが 1800 円で売られています。これは、定価の 20%引きのねだんだそうです。 このくつの定価は何円でしょうか。</div>																																																
○本時の問題をノートに貼り、把握する。 ・もとの値段がわからないよ。 ・安くなって 1800 円になっているね。 ・1－割合を使うのかな。	○前時までの学習と異なる点に着目させる。	つかむ・見通す	2 前時までの学習を振り返る ○これまで扱ってきた代表値や柱状グラフについて想起させる。	2 前時までの学習を振り返る ○これまで扱ってきた代表値や柱状グラフについて想起させる。																																												
3 見積もる ○見積もる ・2000 ぐらい？			3 問題を把握する <div>8 の字とびの学校代表にふさわしいのは何組ですか。 1 つの組を選びましょう。</div>		3 問題を把握する																																											
4 本時の課題を確認する <div>20%引きにすると 1800 円になる定価を求めよう。</div>	○前時の学習を生かすよう支援する。	つかむ・見通す	<div>8 の字とびの記録</div> <table><tr><td></td><td>①</td><td>②</td><td>③</td><td>④</td><td>⑤</td><td>⑥</td><td>⑦</td><td>⑧</td><td>⑨</td><td>⑩</td></tr><tr><td>1組</td><td>205</td><td>215</td><td>212</td><td>244</td><td>275</td><td>220</td><td>325</td><td>338</td><td>372</td><td>362</td></tr><tr><td>2組</td><td>310</td><td>266</td><td>245</td><td>278</td><td>298</td><td>288</td><td>348</td><td>263</td><td>320</td><td>335</td></tr><tr><td>3組</td><td>283</td><td>281</td><td>282</td><td>303</td><td>279</td><td>296</td><td>298</td><td>300</td><td>293</td><td>312</td></tr></table>		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	1組	205	215	212	244	275	220	325	338	372	362	2組	310	266	245	278	298	288	348	263	320	335	3組	283	281	282	303	279	296	298	300	293	312	2 前時までの学習を振り返る ○これまで扱ってきた代表値や柱状グラフについて想起させる。
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩																																				
1組	205	215	212	244	275	220	325	338	372	362																																						
2組	310	266	245	278	298	288	348	263	320	335																																						
3組	283	281	282	303	279	296	298	300	293	312																																						
5 見通しをもつ ○学習リーダーを中心に解決方法の見通しをもつ ・数直線を描いてみよう。 ・式で計算してみよう。 ・言葉で説明してみよう。	○前時の学習を生かすよう支援する。	つかむ・見通す	<div>代表値やグラフから、理由をつけて代表を決めよう。</div>	3 問題を把握する																																												
6 個人思考 ○見通しをもとに、個人思考をノートに書く。 ・20%は0.2 ・1800÷0.2？ ・もとのねだんを1として、0.8が1800かな？ ・1800÷0.8？			4 本時の課題を確認する	4 本時の課題を確認する																																												
	■【思考・判断・表現】 既習事項を生かし割合を（1±α）と考えることができる。 □ノート・ロイロノート・発表	追究する	■【思考・判断・表現】 既習事項を生かし根拠をもち自分の意見を整理している。 □スプレッドシート・ロイロノート・発表	5 見通しをもつ ○学習リーダーを中心に解決方法の見通しをもつ ・平均値や中央値を使うね。 ・柱状グラフで考えよう。 ・折れ線グラフから考えてみよう。																																												
				6 個人思考 ○見通しをもとに、個人思考をスプレッドシートやロイロノートに記入する。 ・2組の平均値は295.1回 ・3組の中央値は294.5回 ・1組は後半伸びていて、最大で372回とんでいるよ																																												

○ノートをクロームブックで撮影し、ロイロノートの共有ノートに送る。				○自分の結論の根拠となるデータをロイロノートの共有ノートに送る。
7 集団解決 ○ノートにまとめた自分の考えを友達や先生に説明する。 ・値引き後の割合は $1 - 0.2$ ・数直線で表すと、ここが 0.2 になるよ。 ・残りは 0.8 だね。 ・かけ算かわり算で迷ったよ。 ・数直線から考えるとわり算だとわかるね。	○「比較量」、「割合」といった単語を意識させる。	ふかめる	○「代表値」として、どの値を重視したかを意識させる。 ○グラフ等を使用した場合は変化や特徴などについて発言させる。 ○理由を含め、どの意見が1番納得できるのかを考えさせる。また、強い根拠となるものがデータの特徴であることに気付かせる。	7 集団解決 ○自分の考えを友達や先生に説明する。 ・わたしは1組がいいと思います。折れ線グラフを見ると最後の3回、1組が勝っているのだからです。 ・わたしは2組がいいと思います。理由は平均値が1番高いからです。 ・わたしは3組がいいと思います。10回中4回勝っているし、中央値が高く、他と比べても1番安定しているからです。 ・確かに1組は最大値が一番高いけど、本番も高いとは限らないよ。 ・3組は安定しているかもしれないけれど、この点数じゃ勝てないよ。
8 学習をまとめる <div>20%引きは、もとのねだんの80%になると考えて、 比較量÷割合で計算できる。</div> ○本時の学習のまとめをノートに書く。				8 学習をまとめる <div>見方によって結論が変わる。データの特ちょうをはっきりさせると、理由もはっきりする。</div> ○本時の学習のまとめをノートに書く。
9 練習問題に取り組む プリント・ワーク・ドリル・プラネット・e-ライブラリ等		ひろげる	○他にどんなデータがあると決めやすいか考えさせる。	・何回で他の学校に勝てるか ・あと5回分ぐらい知りたい
10 今日の学習を振り返る ○本時の学びを振り返り用のスプレッドシートに記入し、発表する。	▲まとめの言葉や振り返りの観点を参考に書くよう支援する。	みつめる	▲まとめの言葉や振り返りの観点を参考に書くよう支援する。	9 今日の学習を振り返る ○本時の学びを振り返り用のスプレッドシートに記入し、発表する。

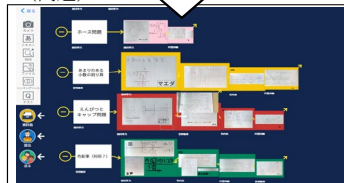
8 板書計画

(第5学年)

〈テレビ〉



(問題)



(交流場面イメージ)

〈ホワイトボード〉

9/18 (木)



2000 円?
2300 円?
1800 円より大きい?

ポイント

20%引き → $(1 - 0.2) = 0.8$ (割合)

課題

20%引きにすると 1800 円になる定価を求めよう!

見聞

式で
数直線で

まとめ

20%引きは、もとの値段の 80% になると考えて、比較量÷割合で計算できる。

個人思考

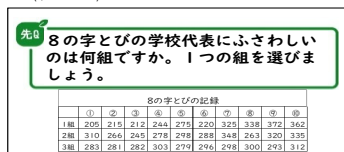
振り返り感想

交流

式: $1800 \div (1 - 0.2)$
答え: 2250 円

(第6学年)

〈テレビ〉



(問題)



(交流場面イメージ)

〈ホワイトボード〉

9/18 (木)

課題

代表値やグラフから、理由をつけて代表を決めよう。

見聞

代表値 (平均値、中央値) 柱状グラフ

まとめ

見方によって結論が変わる。データの特ちょうをはっきりさせると、理由もはっきりする。

個人思考

交流

ポイント

他に知りたいこと・データ
・他の学校の記録
・これまでの優勝したチームの回数

1 組

・折れ線グラフを見ると最後の3回、1組が勝っている。この後もよさそう。

2 組

・平均値が1番高い。

3 組

・10回中4回勝っている。中央値が高い。他と比べても1番安定している。

振り返り感想

8 研究協議の記録

(1)授業者振り返り

【1・2年 授業者 大田 千夏 教諭より】

<1年生>

- ・児童1名なので対教師となることも多いが、児童自身の言葉で考えを伝えることを意識して取り組んできた。
- ・10を色々な見方で見ること初めて挑戦した。4つの足し算の立式も初めてで、困る様子もあったが、ヒントを見に行きながら、自力解決できた点が良かった。
- ・振り返りは、◎○△での自己評価に加え、1年生ながら自分の言葉で書くことができるようになった。成長を感じている。

<2年生>

- ・人前で話すことや発表することが苦手な子どもたちだが、「元気よく話す」と、「白紙共有」を意識して授業作りを進めてきた。
- ・「白紙共有」はずいぶん浸透し、教師が促さなくても友達の考えを見に行けるようになってきた。
- ・自分の考えを自分の言葉で伝えられるようになってきた。
- ・学習リーダーを中心に、子どもたちの力で課題を立てたり、まとめをしたりする姿が見られた。

【5・6年 授業者 佐藤 志持 教諭より】

<5年生>

- ・授業中、考えが収束しない場面が見られた。ポイント作りや、まとめなど、本来の学習リーダー児童が欠席だったこともあるかもしれない。教師がもう少し介入するとすっきりしたかもしれない。
- ・子どもたちは非常によく話していたし、学習過程でのつぶやきがたくさん聞かれて良かった。

<6年生>

- ・とても優秀な子どもたち。昨年度に引き続き、研究大会をととても楽しみにしていた。普段から自分たちで学ぶことができている。
- ・統計分野「データの見方」の学習では、平均値を出すなどの技能的なところも大事だが、そのデータをもとに批判的な見方をすることを大切に、授業を進めていった。
- ・折れ線グラフをもとに考えを話す子がいると思ったが、子どもたちの意見が想定より割れず、一つにまとまってしまう印象。自分たちで準備したデータを多面的に見てほしかった。

(2)協議内容

【討議の柱】

- ① 練り合いの充実について
- ② 次時につながる振り返りの工夫について

【討議の柱① 成果】

1・2年

- ・ヒントカードや図など、一人でも思考が広がる教材の工夫がとても良かった。
- ・あえてICTを使わず、立ち歩いてコミュニケーションをとっているのが良かった。
- ・学習リーダー中心に授業の進め方がしっかりできていた。課題や本時の核心に迫るまとめを自分たちで考えられるなど、これまでの積み重ねにより、主体的に学ぶことができていた。

5・6年

- ・学習リーダーが育っており、リーダー中心に主体的に活発な話し合いができていた。子どもたちが楽しく学んでいたことが良かった。教師の立ち位置や、同時間接のスタンスが良かった。
- ・児童のつぶやきがたくさん聞かれ、お互いの思考の深化につながっていた。
- ・教師の問い返しにより、もう一度考え直す、思考を深めるなど、子どもたちの深い学びを引き出していた。
- ・6年生は、算数用語をしっかりと押さえられていることで、説明や話し合いがスムーズになっていた。

【討議の柱① 課題】

1・2年

- ・1人学級において多面的な考えを育てていくための方策について、同じ図で教師が違う式を提示する、教師に問題を出す、架空の登場人物や、生成 AI、他校との遠隔(Classroom の活用)、スタディログなどを取り入れる方法もある。
- ・2年生は、全体交流の前に、自由に会話や交流する場面があると良かった。
- ・実物投影では比較がしづらく、話し合いが進めにくそうに感じたので、ICT やミニ黒板を使用すると良かったのでは。

5・6年

- ・5年生で、2つの答えが出たので、どちらが正しいのかもっと集団思考し、みんなで納得できる過程を大切にすると学びがさらに深まったのでは。
- ・6年生では、代表値を何にするかをはっきりさせ、それを根拠に考えていくと、さらに話し合いが充実したかもしれない。

【協議の柱② 成果】

1・2年

- ・1年生は、学習でできたことを大きな声で話すことができていて良かった。
- ・学習でわかったことを言葉で振り返ることができていた。

5・6年

- ・スプレッドシートに記録することで、日々の変化が見えてくるため効果的だった。
- ・スプレッドシートで他の子のものを見て学ぶことができることも、よさだと感じた。
- ・次時につながる終わり方をしていたのが良かった。子どもたちが次の授業を楽しみにしている様子が見えた。

【協議の柱② 課題】

1・2年

- ・次時につながる振り返りは難しい。まとめをうつしたものにわかったとつけたしていた子がいた。
- ・振り返りに「疑問」が出ると、さらに次時につながるのではないかな。

5・6年

- ・特になし。

(3)助言等

<道へき・複連研究推進委員 北斗市立島川小学校長 佐々木 道彦 氏>

- ・子どもが一番忙しい授業、児童がやり方や進め方を選択する場面、児童同士や先生や他学年に興味を示すなどの関わりが見られたことから、「主体的・対話的で深い学び」と「個別最適な学びと協働的な学び」に迫る子どもまん中の授業だったと言える。
- ・子どもがすんわりいかない課題設定により、話し合いたくなる、練り合いたくなる授業となっていた。
- ・ICT の活用は、目標達成のための道具なので、今回の低学年の授業のようにあえて使わない選択も評価できる。目的に応じて ICT を利活用できるとよい。
- ・授業のスタイルが「ご飯、味噌汁」のような日常的な授業であった。これまでの積み重ねにより、子どもたちが主体的に学ぶ力がついている点がとても素晴らしかった。

<北海道教育庁空知教育局教育支援課学校教育指導班 主任指導主事 長南 彩 様>

- ・授業の目的は、教師だけでなく、自分だけでなく、クラス全員が問題の解き方を理解すること。子ども自身が授業の目的を理解し、安心感をもって進めることが大切。
- ・主体的・対話的で深い学びの主語は「子ども」であり、子どもたちが自分から学び、進んでいくための支えとなる「準備」を丁寧に行う必要がある。
- ・インクルーシブな視点として、集団として自然に相互に関わり合える学級風土が重要。おとなりさんは大丈夫？わからなくても大丈夫。間違っても大丈夫。(3つの大丈夫)

【授業の改善点】

① 目標と課題の明確化(ルーブリックの活用)

- ・解決すべき課題と、その課題にどういう姿で到達できるとよいか(ゴール)を、子どもたちと共有する。
- ・評価の基準を示すことで、子どもたちは自分の姿がどうしたら A なのか具体的にイメージでき、がんばる目標が明確になる。
- ・今回の授業では、到達目標の明確化が不十分だった。
- ・2年生の課題は「 $15+6+4$ を考えよう」で本当に良かったか。「どこを先に計算するとよいか考えよう」など、()のよさに気づき、()が重要だと理解できるような課題設定でなければ、目標と課題がずれてしまう可能性がある。
- ・6年生も課題の吟味が必要。単なる話し合いだけでなく、「代表値を決め、選んだ理由を説明しよう」などにすると、どのデータの特徴に目をつけたかが焦点化され、子どもたちの活動がより明確になったのでは。
- ・児童が考えた課題に対して教師が整理してあげる必要がある。そうすることで児童の練り合いもさらに向上する。

② 交流(対話)のタイミング

- ・個人思考→発表する時間と区切らず、できた児童から交流し始めることで、「何で違うのだろう？」という対話生まれやすくなるのでは。セルフチェックや相互チェックの機会を設けることで、一通りの方法で答えを求めだけでなく、他の方法も考えるなど、対話の質が向上していくことが期待できる。

9 成果と課題

【内容1 学ぶ意欲を高める工夫】

【成果】

- ・どの学年も児童の発達段階に応じて、学習リーダー中心に授業を進めることができた。教師の「待つ」姿勢や「同時間接」の学習形態も児童主体の授業を進める学習において効果的だった。
- ・実物や ICT による提示、生活に密着した問題など問題提示の工夫により、知的好奇心や見通す力が高まった。
- ・算数用語パネルを蓄積することで、見通す場面や課題設定で活用することができ、学びの焦点化につながった。

【課題】

- ・児童主体で進めていくことで、課題やまとめが本時の目標とつながらない部分がある。
- ・解決すべき課題と、その課題にどういう姿で到達できるとよいか(ゴール)を、児童と共有することで、自分たちの学びが明確になる。
- ・学習内容を定着させる習熟時間の確保。



【内容2 表現力を高める工夫】

【成果】

- ・児童の思考やつぶやきなどから発生する「問い返し発問」により、思考が広がる場面が見られた。
- ・「見やすさ」「わかりやすさ」を意識して、ICT 教材やホワイトボード、具体物など、効果的な活用ができた。
- ・「白紙共有」を行うことで、友達の考えをヒントにしながら、自分なりの考えをもつことや、考えに自信をもつことができた。

【課題】

- ・ノート交流や、実物投影機だと、集団解決時に比較がしづらい様子が見られたので、比較のしやすさを考慮した、効果的な教具の活用(ホワイトボードや、ICT の活用など)。
- ・児童が困っている時の教師の発問や指示など、軌道修正のしかた。



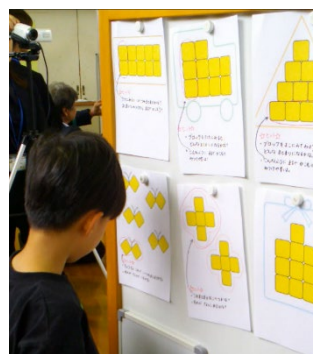
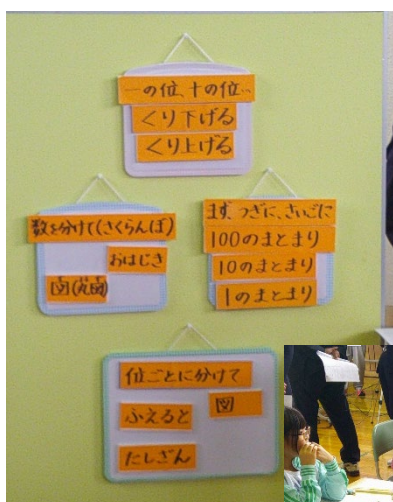
【内容3 考えを広げ、深める工夫】（今年度の重点）

【成果】

- ・算数用語を押さえられており、そのことにより考えが焦点化され、お互いに理解しやすく、話し合いがスムーズになった。
- ・ヒントカードや新たな視点の提示により、考えを深めることができた。
- ・児童のつぶやきが、お互いの考えの深化につながっていた。
- ・スプレッドシートによる振り返りで、自他の学びの蓄積と、学びの変容を感じることができている。

【課題】

- ・個人思考→集団思考とはっきり分けることをせずに、できた児童から交流する時間を設けると、より考えの深化や、他の考えを見付けたいという子が生まれ、学びが広がっていく。
- ・少人数指導における多面的に考える方策のより一層の工夫。（スタディログ、遠隔における Classroom の活用、生成 AI など）
- ・考えが複数出た時、児童に練り合わせ、正答を自分たちで見付けさせる必要性。
- ・ループリックを活用した振り返りや、疑問に感じたこと、今後学びたいことなどの次時へつながるポイントを絞った振り返りが必要。

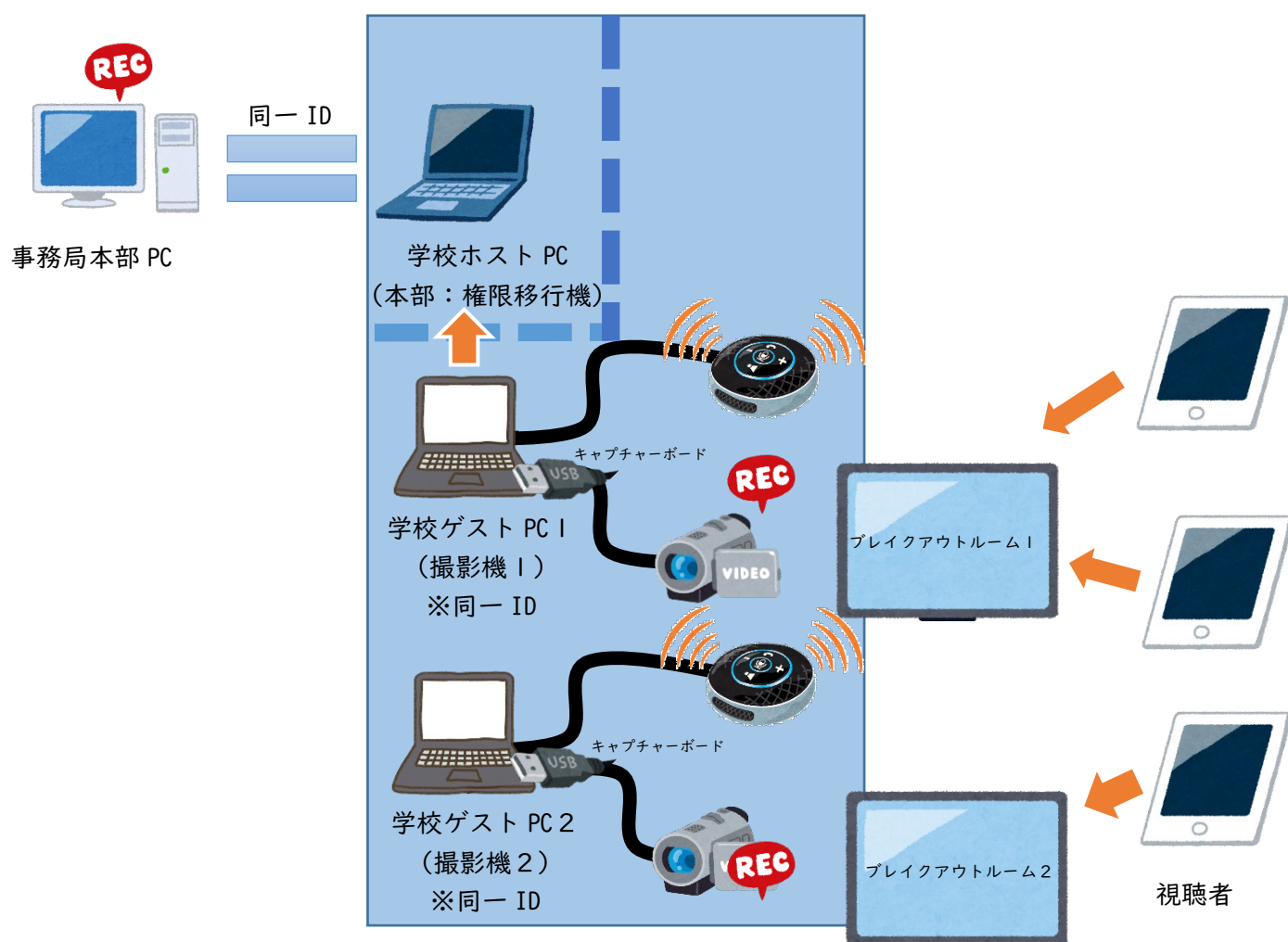


	A	B	C	D	E
	〇〇	日にち	今日の理解 と 度 (1~5)	・友達との交流 ・算数用語の使用 ・自分の考えとくらべながら(共通・相違点) ・あたたかい反応(うなずく・なるほど等)	本時の感想
1	1	2025/03/04火曜日	5	角柱と円柱でなかまわけできたし、角柱と円柱のことがわかった。ロイロで交流して、考えを深められた。(ほまれの角がないとか)	少しだけ角柱と円柱のことがわかってよかった！！
2	2	2025/03/05水曜日	5	交流で、円柱や角柱の面についてみんなで考えられてよかった。余の考えで、三角形とたの四角形は平行じゃないことがわかってよかった。	円柱と角柱の面のことがすこしわかってよかった！底面と側面という言葉がわかったよ。
3	3	2025/03/06木曜日	5	今日は、頂点、面、辺の数を調べられたし、〇角形だったら、頂点は〇×2で、辺は〇×3で、面は〇+2ということがわかってよかった！(法則)	頂点や辺、面の数の調べ方がわかったし、交流もしっかりできた。次回から複雑になるらしいのでがんばる。
4	4				
5	5				
6	6				
7					



10 配信状況の記録

(1) 配信の仕組み



(2)配信方法

接続方法(当日の流れ)

- ①事務局本部 PC の立ち上げ、学校ホスト PC の立ち上げ。学校アカウントで Zoom に入る。
- ②本部と電話でやりとりをしながら、実行委員会本部 PC より学校ホスト PC に権限を移行する。
- ③学校ゲスト PC を立ち上げ、それぞれ学校アカウントにて Zoom にログイン。
- ④学校ホスト PC よりブレイクアウトルームを開設、開設時に、「〇年」、「〇年」の部屋にそれぞれ割り当てる。
- ⑤参加者は事前に知らされている Zoom の「ミーティング ID」、「パスコード」を入力し、参加する。

(3)必要な機材・環境

	使用数
学校ホスト chromebook(メイン機)	1
学校ゲスト chromebook(撮影機)	2
ビデオカメラ	2
マイクスピーカー	2
HDMIケーブル(撮影 PC - ビデオカメラ)	2
マイクスピーカーケーブル	2
キャプチャーボード×2	2
延長・中継用 HDMI アダプタ	2
プロジェクター	1

(4)配信についての留意事項

- 配信に使用する Chromebook は「更新」されているか事前にチェックする。
- カメラワークで気を付けること
 - ・カメラ内の映像と配信映像が若干異なる(カメラの方が大きく映る)のでマスキングテープを貼る。
 - ・ズームした状態で移動すると、手振れが大きくなる。
 - ・授業開始前に録画ボタンを押し、カメラがスリープモードにならないようにする。
- 音声で気を付けること
 - ・マイクスピーカーが正常に起動しているかディスプレイ上で確認する。周囲に音を妨げているもの(上にプリント)などがないか確認する。
- 配信用 PC の前で確認すること
 - ・学校配信 PC(名:美馬牛小)で録画する。
 - ・「〇年」、「〇年」の映像の表示、音声の再生がされているかを確認。
→映像は画面で、音声は左下の音声バーで確認できる。
 - ・不要な参加者の画面を非表示にする。
→左上の「表示」ボタン→「ビデオを利用していない参加者を隠す」
 - ・配信中の「チャット」に対応する。

第5分科会

【研究主題】

「自分の考えを表現し、共に深め合い高め合う児童生徒の育成」

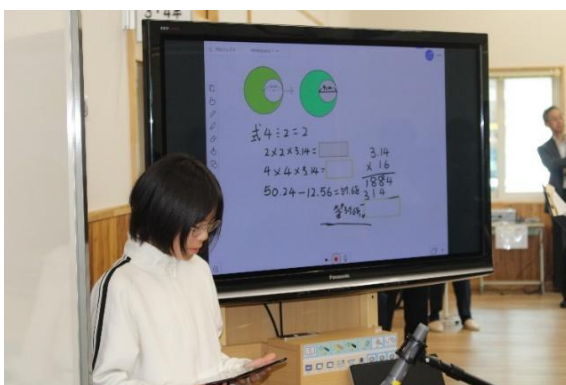
～主体的な学びを目指した指導の工夫を通して～



富良野市立樹海学校

I 授業の様子

【公開授業①：第3・4学年】



【公開授業②：第5～9学年】



Ⅱ 研究の概要

1 研究主題

「自分の考えを表現し、共に深め合い高め合う児童生徒の育成」
～主体的な学びを目指した指導の工夫を通して～

2 研究主題設定の理由

樹海学校の児童生徒の実態として、「やることが明確であれば、意欲的に学習に取り組める」「見通しがもてると取り組みやすくなる」ということが、よい点として挙げられる。学習への興味関心が高まり、解決までの見通しがもてると意欲的に学習ができることがわかった。一方、「自分たちで課題を見付けること」「関連付けて考えること」が苦手であり、パターン化されていないことへの対応力は乏しいことが課題である。また、全国・学力学習状況調査の結果からは、グラフや文章など複数の情報から自分の考えが伝わるよう書き表す問題（国語）、三角形の面積の大小を判断する理由を問う問題（算数）や、事柄や結論が成り立つ理由を記述する問題の正答率が低かったことが明らかとなった。

そこで、令和5年度より研究主題を「自分の考えを表現し、共に高め合う児童生徒の育成」とし、副主題を「主体的な学びを目指した指導の工夫を通して」と設定した。前研究における成果である、「学びが深まった姿（ゴールイメージ）を明確にし、『学びが深まる仕掛け』を1時間単位の中で行う」を踏まえ、北海道へき地・複式教育研究連盟の研究主題に迫る授業研究に取り組んでいきたい。



総合的な学習の時間（3・4年生）



全校朝運動



授業の様子（9年生：数学科）



かぼちゃ栽培活動（3～6年）

3 北海道へき地・複式教育研究連盟 第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画との関連

【研究分野1】学校・学級経営の深化・充実
〈研究課題2〉 ふるさとで学び、新しい時代を拓く、開かれた学校・学級経営の創造と推進を図る ○義務教育学校、小規模、少人数の利点を生かし、地域の特色を取り入れた教育活動の計画 ○保・小・中の連携を実践し、児童生徒一人一人の個性や能力に応じた教育活動の推進
【研究分野2】学習指導の深化・充実
〈研究課題5〉 学習意欲の向上や個々に最適な学びを重視した指導方法の改善・充実を図る ○主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善 ○思考の表出を促すICT機器等の効果的活用 ○思考の深まる指導形態の工夫



外国語活動(4年生)



授業の様子(8年生:国語科)



校内研修



縦割り班会議

4 全体構造図



5 研究内容

(1) 9年間の系統性、連続性を重視した教育活動の推進

- ・小学校と中学校で学ぶ内容の系統図を作成するなど、系統性や連続性に配慮した教育課程を編成。
- ・総合的な学習の時間では、学年の発達段階に応じた体験的な活動、学年や個人に応じた課題設定による探究的な学習を行う。また、運動会や学校祭での種目・演目の他、樹会活動(児童生徒会活動)や清掃活動など、異学年で活動する機会を設定する(各種集会、避難訓練等)。

○学びを通して、成長を続ける児童生徒	○自立し、他者と共生する児童生徒	○健やかに未来を目指す児童生徒
<ul style="list-style-type: none"> ・学習習慣の確立 ・「授業の受け方」「家庭学習の手引き」の作成(前期課程・後期課程) ・学びの連続性を意識した授業づくり ・教科担任制の導入 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域と連携を図った体験活動の実施 ・児童生徒の交流(行事等) ・小中の「生活のきまり」の見直し。学年段階に関係なく同一歩調で指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的生活習慣の徹底(早寝・早起き・朝ごはん) ・5年生からの部活動 ・9年間を見通した食育 ・実践的防災教育の充実 ・朝運動の実施

(2) 学年の区分と発達段階のとらえ方

- ・児童生徒の9年間の発達を3つの段階でとらえ、学年区分の基本を「4-3-2」とする。
- ・授業1単位時間を50分とする。但し、前期課程は児童の実情を勘案し、最後の5分間は「のびのびタイム」として、振り返りの時間等にあてる。

初等ブロック 1～4年 (基礎・基本期)	中等ブロック 5～7年 (習熟・接続期)	高等ブロック 8～9年 (充実・発展期)
<p>○「学習への興味・関心をもたせ、基本的な学習習慣や生活習慣の確立を図る時期」</p> <p>【目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的生活習慣の確立を図る ・学習習慣の確立を図る ・学校生活への適応を図る 	<p>○「義務教育学校前期課程から後期課程への円滑な接続を図る時期」</p> <p>【目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力の育成を図る ・学力の伸長を図る 	<p>○「自立して生きる力を育む義務教育9年間のまとめの時期」</p> <p>【目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・義務教育学校9年間で修了するのにふさわしい学力と社会性の伸長を図る ・自ら課題を見つけ、解決する力の育成を図る ・主体的に進路を選択できる力の育成を図る

(3) 教科担任制の推進

○→教科担任制 単→複式学級を分けて単学級指導

※令和7年度1・2年生欠学

	国語	社会	算・数	理科	音楽	図・美	体育	技術	家庭	外国語
9年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6年	複式	単	複式	単	単○	複式	複式		単	単○
5年		単○		単	単○		○		単	単○
4年	複式	単	複式	単	単○	複式	複式			単○
3年		単		単	単○		○			単○
2年										
1年										

- ・5・6年では、社会・音楽・体育・外国語の授業を、教科免許所有者が担当するよう配慮する。また、社会、理科、音楽、家庭科、外国語の5教科は、単学級で授業を行う。
- ・3・4年では、音楽、体育、外国語活動の授業を、教科免許所有者が担当する。また、社会、理科、音楽、外国語活動は、単学級で授業を行う。

(4) 9年間の学び(学びをつなぐ)

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9
教育課程	前期課程 (小学校学習指導要領)						後期課程 (中学校学習指導要領)		
4－3－2制	初等ブロック (基礎・基本期)				中等ブロック (習熟・接続期)			高等ブロック (充実・発展期)	
指導形態	一部教科担任制						教科担任制		
授業時間	45分+のびのびタイム5分						50分		
交流学習	学校農園	かぼちゃ栽培					かぼちゃ収穫・販売など		
		樹海太鼓					演劇		
		鼓笛							
	日常的な交流・縦割り活動（清掃）・委員会活動・朝運動								
樹会活動	係活動・当番活動				樹会活動（児童生徒会）・実行委員会				
役員選挙				被選挙権	選挙権・被選挙権				
部活動					部活動（体験入部）		部活動		
儀式的行事	入学式					前期課程修了式	後期課程進級式		卒業式
				ブロック修了式			ブロック修了式		

(5) 令和6年度の研究内容

「学びに向かう仕掛け」

○主体的・対話的な学びに向かうための授業展開の工夫

○主体的・対話的な学びに向かうための端的な指示・説明や教材の工夫

①主体的に学ぶ児童生徒の姿の設定

・授業で児童生徒が主体的に学んでいる状態を学習の様子や学習活動、理解度など、授業者が目指す姿を指導案に位置付けた。

②学びに向かう仕掛けの設定

・①で設定した姿になるために、どのような教材、発問、資料、指導形態等を授業で行うかを指導案に位置付けた。

③授業記録シートを用いた研究討議の実施

・①の姿になるために、②の仕掛けが有効であったかを中心に授業参観、研究協議を行い、実践を積み重ねた。

【主体的・対話的に学ぶ姿と学びに向かう仕掛け】(一部抜粋)

学年	教科	単元名・学ぶ姿	仕掛け
2	国語	「ジャンプロケットを作ろう」 「ジャンプロケット」ができるまでに、することと気を付けることを表にまとめることができる。	①順序を表す言葉（まず・つぎに・さいごに）に着目し、赤鉛筆で○をつける。 ②文章や写真に着目させ、することに気を付けて読み取る。 ③読み取った内容を表にまとめる。
3 (複式)	算数	「わり算」 除法の意味（等分除）を理解することができる。	①前時の振り返りで学んだことを確認し、本時との違いを明確にする。 ②具体物の操作をする。 ③具体物を使い、どのように動かしたのか、友達に説明をする。
4 (複式)	算数	「角」 180°より大きい角度の測定の仕方を考えることができる。	①前時の振り返りで180°より小さい角の測定の仕方を確認する。 ②どのくらいの大きさになりそうか予想を立てる。

			③ワークシートの図を使い、角度の求め方を友達に説明をする。
6	算数	「円の面積」 円の面積の求め方について、既習の求積可能な図形の面積の求め方などをもとに図や式などを用いて考えている。	①どのような既習事項が使えるかという見通しをもたせる場の設定。 ②数学的なキーワードをもとに、自分の考えを表出できる手立て。
9	英語科	「Unit 3 Unit Activity 守りたい日本の動物たち」 let[help]+(人など)+動詞の原形を用いた文の理解をもとに、自分の考えを書いている。	①オクリンクのカードを使い、文法の形・意味・用法の定着を図る。 ②文法解説映像を使って、形・意味・用法の理解を深める。 ③場面や状況の異なるカードを選ぶ活動を通して、自分の考えを整理する。

6 これまでの成果と課題

【成果】

- ・樹海学校版「対話的な学び」の設定と、それらを具体化する授業づくりを積み重ねることができた。
- ・授業の流れが定着し、課題を自分たちの言葉で考え、何をすべきかわかる課題がつかれるようになった。
- ・児童生徒が何をすることがわかるための「思考を表出させる工夫」を意識した授業づくりができた。
- ・「見通し」「振り返り」を取り入れた授業づくりが意識されていた。また、複数のワークシートや ICT 教材が準備され、児童に選ぶ責任が生まれる場面を設定していた。

【課題】

- ・児童生徒が目的意識をもって学習に取り組める課題・問いの設定（課題の精選）。
- ・必要感をもって課題解決へ向かい、「わかった」「できた」という学びの実感がもてる授業づくりを目指す。
- ・課題をより具体的にして、数など見える形で提示するのはどうか。
〈例〉「ラリーを続けてゲームを楽しもう」→「ラリーの回数を増やそう」
- ・児童生徒が自分たちの言葉で課題を設定していくことで、課題意識をもてるようになる。
- ・ICT の効果的な利活用。発達段階に合わせた基本的操作の習得から、思考を深めるツールとしての選択肢にしていく。

【令和 7 年度の研究内容】

「(各教科の) 見方・考え方をもとに、知識を活用・発揮させる場面の設定」

○主体的・対話的で深い学びに向かうための授業展開の工夫

○主体的・対話的で深い学びに向かうための端的な指示・説明や教材の工夫

樹海学校版「深い学び」について

○樹海学校版「深い学び」の設定

深い学び = 教科等の目標を実現する学びの過程

授業改善に向けた「学習者」の視点	授業改善に向けた「指導者」の視点
<ul style="list-style-type: none"> ・各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる。 ・知識を相互に関連付けてより深く理解する。 ・情報を精査して考えを形成する。 ・問題を見い出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資質・能力を焦点化する。(つきたい力を明確にする) ・単元や各授業の目標を把握する。 ・ねらいを達成した子どもの姿を具現化する。 ・教材の価値を把握する。 ・単元及び各時間の計画を立てる。 ・協働して問題解決する。 ・目標の達成状況を評価する。

3 年次計画の重点項目

内 容	R 5	R 6	R 7
ア 日常生活や既習事項とのつながりをもたせる	◎	○	○
イ 課題を追究する・学びを振り返る場面の設定	◎	○	○
ウ 思考を表出させる工夫		◎	○
エ 交流を通して思考を広げる場面の設定		◎	○
オ 各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる			◎
カ 知識を活用・発揮する場面の設定			◎
キ ICT を活用した学習指導	◎	◎	◎

第5・6学年 算数科学習指導案

日 時：令和7年9月18日（木）1校時
児童生徒：富良野市立樹海学校
第5学年 4名
第6学年 4名
指導者：T1 平間 はるな
T2 佐藤 一博

1 単元名

第5学年	第6学年
分数の大きさとたし算、ひき算	円の面積

2 単元の構想にあたって

第5学年	〔本単元で扱う学習指導要領の内容〕	第6学年
A（4）分数の意味と表し方 ア（ウ）一つの分数の分子及び分母に同じ数を乗除してできる分数は、元の分数と同じ大きさを表すことを理解する。 （エ）分数の相等及び大小について知り、大小を比べること。 イ（ア）数を構成する単位に着目し、数の相等及び大小関係について考察すること。 A（5）分数の加法、減法 ア（ア）異分母の分数の加法及び減法の計算ができること。 イ（ア）分数の意味や表現に着目し、計算の仕方を考えること。	B（3）円の面積 ア（ア）円の面積の計算による求め方について理解すること。 イ（ア）図形を構成する要素などに着目し、基本図形の求め方を見いだすとともに、その表現を振り返り、簡潔かつ的確な表現に高め、公式として導くこと。 ※内、（3）内容の「B図形」の（3）のアの（ア）については、円周率は3.14を用いるものとする。	
〔児童生徒の実態〕		
・自分なりの考えをもち、考えを交流することができる。分かりやすい説明にするために、工夫する姿が見られるようになってきた。 ・わからない問題や、考えている途中で解決方法が分からなくなると、手が止まり今までの考えを消してしまうことがある。 ・考え方の共通点や相違点を見付けることができる。		・数量の関係の把握が難しく、計算に時間がかかる児童が多い。 ・計算の工夫に気付く、見付けることが難しい。どうしてその計算になるのか、理解するのに時間がかかる場合が多い。
〔指導の工夫〕		
・問題把握の場面での気付きを板書きし、課題の構成に活かせるようにする。 ・話し合いをして、解決方法をまとめられるように、話し合いの視点を提示している。 ・個人思考の場面は、間違えることで、知識が身に付くことを伝え続けている。		・既習事項の振り返りを丁寧にを行い、子どもたちが使うことのできる知識をしっかりと確認するようにする。 ・学習リーダーが中心となって学習を進められるように、役割をはっきりとさせておく。

3 単元の目標

第5学年	第6学年
・分数の意味と表し方について理解を深め、分数の相等や大小関係について考える力を身に付けるとともに、異分母の分数の加法及び減法の計算の仕方について、図や式などを用いて考える力を身に付ける。また、その過程を振り返り、分数の表現のよさに気付き生活や学習に活用しようとする態度を養う。	・円の面積の計算による求め方を理解するとともに、その方法や図や式などを用いて考えたり、公式を導いたりする力を身に付ける。また、その過程において、面積の求め方を多面的に捉え検討してよりよい方法を粘り強く考える態度を養う。

4 単元の評価規準

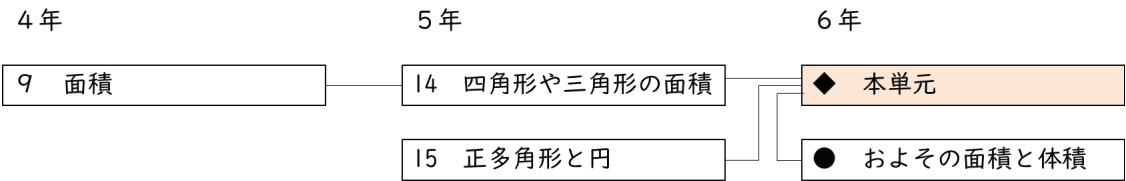
	第5学年	第6学年
知識及び技能	・分数の分母、分子に同じ数を乗除してできる分数は、もとの分数と同じ大きさを表すことや、分数の相等及び大小について理解し、大小を比べることができる。また、異分母の分数の加法及び減法の計算ができる。	・円の面積の計算による求め方について理解している。
思考力・判断力・表現力	・数を構成する単位に着目し、数の相等及び大小関係について考察している。また、分数の意味や表現に着目し、計算の仕方を考えている。	・図形を構成する要素などに着目し、円の面積の求め方を見いだしているとともに、その表現を振り返り、簡潔かつ的確な表現に高め、公式として導いている。
主体的に学習に取り組む態度	・分数の意味と表し方、異分母の分数の加法及び減法について、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用しようとしていたりしている。	・円の面積について、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用しようとしていたりしている。

5 単元の系統

《5年 分数の大きさとたし算、ひき算》



《6年 円の面積》



6 算数科における児童生徒の実態

児童生徒名	算数科における実態 【○実態 ☆目指す姿 ・手立て】
5年 I・K	○算数の学習に前向きに取り組み、復習をしっかりと行っている。既習事項を使い、問題を解決しようとしている。 ☆自分の考え方と友達の考え方を比べ、共通点や相違点を見付け、問題解決の方法についてまとめられるようにする。 ・考えを交流する中で、キーワードを探すなど、共通点や相違点を見付けられるようにする。
5年 O・T	○個人思考の場面で考えたことに対して、自信をもてないことがある。 ☆自分なりの考え方に自信をもち、友達にしっかりと伝えることができる。 ・既習事項を使って考えをもつことで、自信につなげて、自分の考えを説明できるようにする。
5年 F・E	○算数の学習に対する意欲は高い。いろいろな方法を考え、問題を解決することができる。 ☆自分の考え方と友達の考え方を比べ、それぞれの考え方のよさに気付き、よりよい方法を考えることができる。 ・共通点や相違点を見付けける活動をする中で、自分の考えと比較しそれぞれの考え方のよさに気付くことができるようにする。
5年 Y・M	○算数の基本的な知識が定着している。授業の中で、できるようになったことや分かったことを振り返っている。 ☆自分の考えとその理由を分かりやすく友達に伝えることができる。 ・ホワイトボードやタブレットなどに自分の考えとその理由を書き込み、分かりやすく説明できるようにする。
6年 I・R	○計算が苦手で、時間がかかることがある。分からない時に友達に聞くことができる。 ☆自分の考え方をしっかりともち、友達に自信をもって伝えることができる。 ・既習事項を確認し、自分の考えに活かせるようにする。
6年 T・M	○問題の解決方法を考えるのが得意で、計算も早い。 ☆自分の考え方を分かりやすく友達に伝えることができる。 ・自分の考えをノートやホワイトボードなどに整理し、分かりやすく説明できるようにする。
6年 N・H	○自分の考えをもつことができるが、自分の考えを整理するのに時間がかかる。 ☆時間の中で、自分の考えをまとめ、友達に伝えられるようにする。 ・時間が意識できるように声掛けをする。自分の考えをまとめられるように、既習事項の確認をする。
6年 N・Y	○一度学習内容を理解すると活用することができるが、理解するまでに時間がかかる。 ☆既習の考え方と比べ、新しい内容を理解できるようにする。 ・既習との違いを明確にすることで、新しい内容を理解できるようにする。

7 単元の指導計画

第5学年（9時間扱い・本時5／9）				第6学年（9時間扱い・本時7／9）			
時間	学習活動 (本時の問いの深まり)	目標	評価規準	時間	学習活動 (本時の問いの深まり)	目標	評価規準
1	○「どちらが大きいかな？」の活動をきっかけに、分数の大きさを比べることに興味をもつ。 ○大きさの等しい分数（ $\frac{2}{3}$ 、 $\frac{4}{6}$ 、 $\frac{6}{9}$ ）の分母どうし、分子どうしの関係を調べて、分数の性質を知る。	・大きさの等しい分数の表し方を考え、分数の性質を理解する。	・分数の意味や性質をもとに、図や式などを用いて、分数の相等及び大小関係について考察している。 〔思・判・表〕	1	○「どちらのピザが大きいかな？」の活動をきっかけに、円の面積の求め方を考えることに興味をもつ。	・円の面積の求め方を理解する。	・円の面積の求め方について、既習の求積可能な図形の面積の求め方などをもとに図や式などを用いて考えている。 〔思・判・表〕
2	○ $\frac{12}{18}$ と大きさが等しく、分母が18より小さい分数を表すことをとおして、約分の意味を知る。	・約分の意味を理解し、約分することができる。	・約分の意味を理解し、約分することができる。 〔知・技〕	2	○半径10cmの円の面積が、1辺が10cmの正方形の面積の2倍より大きくて4倍より小さいことを調べる。		
3	○ $\frac{3}{5}$ と $\frac{2}{3}$ のような異分母の分数の大小を比べることをとおして、通分の意味を知る。	・異分母の分数の大小の比べ方を考え、通分の意味を理解する。	・分数の大小を比べることをとおして、通分の意味を理解している。 〔知・技〕	3	○既習の面積の学習で用いてきた方法や考え方をもとに、半径10cmの円の面積の求め方を考える。		
4	○ $\frac{5}{6}$ と $\frac{7}{8}$ のような異分母の分数の通分のしかたを考え、もとの分母の公倍数を共通な分母にすることをまとめる。 ○異分母の分数の大きさを比べる場合に、分数の表し方に着目し、「共通な分母にそろえる」という見方をしたことを振り返り、異分母の分数の加法や減法にも関心を広げ、次の問題解決につなげる。	・分母の公倍数に着目して、通分することができる。	・分母の公倍数に着目して、通分することができる。 〔知・技〕 ・分数の意味や性質をもとに、図や式などを用いて、分数の相等及び大小関係について考察している。 〔思・判・表〕	4	○円を等分して並べ替え、長方形とみて計算で面積を求めるしかたを考える。 ○円の面積の求め方を公式にまとめる。	・円の面積の公式を理解する。	・円を分割して並べ替えた図を既習の求積可能な図形とみて、もとの円の構成要素との関係に着目して、円の面積を求める式を考えている。 〔思・判・表〕

5 〈本時〉	○ $1/2 + 1/3$ のような、異分母の分数の加法の計算のしかたを考える。	・異分母の分数の加法の計算のしかたを理解する。	・異分母の分数の加法の計算のしかたを理解し、計算ができる。〔知・技〕	5	○円の面積は、半径を1辺とする正方形の3.14倍になっていることを知る。 ○円の面積の求め方について、「面積の求め方がわかる形に変える」という見方を振り返り、ほかの図形の面積を求めることにも関心を広げ、次の問題解決につなげる。	・円の面積の公式を理解する。	・半径×半径×円周率の式が、半径を1辺とする正方形の面積の3.14倍を意味していることを理解し、公式を用いて円の面積を求めることができる。〔知・技〕
	○ $3/4 + 1/6$ のような、答えが約分できる場合の加法の計算のしかたを考える。 ○ $1\frac{5}{6} + 2\frac{2}{3}$ のような、帯分数の加法の計算のしかたを考える。	・異分母の分数の加法の計算で約分をする場合や、異分母の帯分数の加法の計算ができる。	・異分母の分数の加法の計算で約分をする場合や、異分母の帯分数の加法の計算ができる。〔知・技〕		○中心角が 90° のおうぎ形の面積を、もとの円の何分の一かを考えて求める。 ○中心角が 60° のおうぎ形の面積を、もとの円のどれだけにあたるかを考えて求める。	・中心角が 90° のおうぎ形の面積の求め方を理解する。 ・中心角が 60° のおうぎ形の面積の求め方を、発展的に考えることができる。	・図形の求積に必要な構成要素を判断し、円の一部とみられる図形や円などを組み合わせた図形の面積の求め方を、図や式などを用いて考えたり表現したりしている。〔思・判・表〕
7	○ $2/3 - 1/2$ のような、異分母の分数の減法の計算のしかたを考える。	・異分母の分数の減法の計算のしかたを理解する。	・異分母の分数の減法の計算のしかたを理解し、計算ができる。〔知・技〕	7 〈本時〉	○円を組み合わせた図形の面積の求め方を考える。	・円を組み合わせた図形の面積を求めることができる。	・図形の求積に必要な構成要素を判断し、円の一部とみられる図形や円などを組み合わせた図形の面積の求め方を、図や式などを用いて考えたり表現したりしている。〔思・判・表〕
	○ $3\frac{1}{4} - 1\frac{1}{2}$ のような、帯分数の減法の計算のしかたを考える。 ○ $2/3 + 1/2 - 3/4$ のような、3口の分数の加減混合の計算のしかたを考える。	・異分母の帯分数の減法の計算や、3口の異分母の分数の加減混合の計算ができる。	・異分母の分数の加法、減法の計算のしかたを、既習の計算や分数の意味、性質をもとに図や式などを用いて考えている。〔思・判・表〕		○半円と直角三角形を組み合わせた図形の面積の求め方を考え、図や式、言葉などを用いて説明する。	・半円と直角三角形を組み合わせた図形の面積の求め方を、筋道を立てて説明することができる。	・図形の求積に必要な構成要素を判断し、円の一部とみられる図形や円などを組み合わせた図形の面積の求め方を、図や式などを用いて考えたり表現したりしている。〔思・判・表〕
9	○単元のまとめをする。	・学習内容の理解を確認し、確実に身につける。	・学習内容を理解し、基本的な問題を解決することができる。〔知・技〕 ・「分数の大きさとし算、ひき算」の学習のよさや見方・考え方を振り返っている。〔思・判・表〕	9	○単元のまとめをする。	・学習内容の理解を確認し、確実に身につける。	・学習内容を理解し、基本的な問題を解決することができる。〔知・技〕 ・「円の面積」の学習のよさや見方・考え方を振り返っている。〔思・判・表〕

〔主体的に学習に取り組む態度は、単元全体を通じて評価〕

・分数の意味と表し方、異分母の分数の加法及び減法の計算のしかたについて、学習したことを関連づけながら粘り強く考えたり、振り返ってよりよい方法を見いだそうとしたりしている。

〔主体的に学習に取り組む態度は、単元全を通じて評価〕

・円の面積の求め方について、既習の求積可能な図形の面積の求め方などをもとに粘り強く考えたり、数学的に表現・処理したことを振り返り多面的に検討してよりよい方法を見いだそうとしたりしている。

8 本時について


(1) 本時の目標

第5学年（5／9時間目）	第6学年（7／9時間目）
知識・技能 ・異分母の分数の加法の計算のしかたを理解することができる。	思考・判断・表現 ・円を組み合わせた図形の面積の求め方を、円の面積の公式を使って考えることができる。

(2) 研修との関わり（本時に働かせたい数学的な見方・考え方）

見方・考え方 ・分母が異なる分数同士は、たすことができないことに気付く。 ・分母が同じになるとたすことができると気付く。 ・ $1/\Delta$ がいくつ分という数の見方ができる。	見方・考え方 ・図形の中に円があることに気付く。 ・円の面積の公式を使うことに気付く。 ・計算を工夫することができる。（分配のきまり）
指導の工夫 ①既習事項を振り返る。 ②分母をそろえることに気が付けるように、導入問題との違いを明らかにする。 ③話し合いの視点をもたせ、まとめにつなげる。	指導の工夫 ①既習事項を振り返る。 ②既習の図形が入っていることを見付けられるようにする。 ③友達に説明する場面をつくる。

(3) 本時の展開（ は直接指導、 は間接指導）

第5学年			第6学年		
学習活動	主な指導○・評価◎・【指導の工夫】	段階	学習活動	主な指導○・評価◎・【指導の工夫】	
○前時の振り返り ・通分という言葉を確認する。 ・通分のしかたを確認する。 ○導入問題 「グレープフルーツをしぼって、ジュースを作ります。 $1/5$ Lと $2/5$ Lのジュースをしぼりました。あわせて何Lあるでしょうか？」 ・分母が同じ数であることをとらえる。 ・式と考え方を確認する。（ $1/5$ がいくつ分かで考えた） ○問題把握 問「 $1/2$ Lと $1/3$ Lのジュースをしぼりました。あわせて何Lあるでしょうか？」 ・わかっていること、聞かれていることを確認する。 ・式を立てる。 ・困ったこと、いつも違うところを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> (課) 分母がちがう分数のたし算の計算のしかたは？ </div>	○前時までに導入している「通分」という言葉をしっかりと確認する。 【指導の工夫①】 ・既習事項を振り返る。 ○図をテレビに映す。 【指導の工夫②】 ・導入問題との違いを明らかにする。	導入	○前時の振り返り ・円の形が $1/4$ になっている。 ・（円の面積の公式） $\times (1/4)$ で面積を求めたことを確認する。 ○確かめ問題 ・プリント、ステップアップの問題に取り組む。	○長方形や正方形で、同じように面積を求めたことを事前に想起させておく。 【指導の工夫①】 ・既習事項を振り返る。 ○前時の内容を確認できるプリントを準備しておく。	確認
○個人思考 ・自分の考え方が友達に伝わるようにまとめる。 ・友達に自分の考えを分かりやすく説明する。 ・図を使う。（ICT、プリント） ・計算を使う。	○既習の内容を掲示しておく。	個人思考	○問題把握 問「色が付いた部分の面積は？」  ・どのくらいの面積か、予想をする。 ・わかっていること、聞かれていることを確認する。 ・図形の中に何があるか、確認する。 ・図形がどうなっているか見付ける。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> (課) 円が重なっている図形の面積の求め方は？ </div>	○図を小さく印刷したプリント配る。 【指導の工夫②】 ・既習の図形が入っていることを見付けられるようにする。	導入

<div>○集団解決</div> <div>・考え方の同じところ、似ているところ、違うところを探す。</div> <div>・どうやって解決したのか問う。</div> <div>・何のためにそうしたのか問う。</div>	<div>○話し合いの視点を提示する。</div> <div>○子どもたちの発言から出たキーワードを板書する。</div> <div>【指導の工夫③】</div> <div>・話し合いの視点をもたせ、まとめにつなげる。</div>	集団解決・まとめ	個人思考	<div>○個人思考</div> <div>・円の面積の公式を使うことに気づき、面積の求め方を考える。</div> <div>・自分の考え方が友達に伝わるように式や計算の過程を記述する。</div> <div>・友達に自分の考えを分かりやすく説明する。</div> <div>・図を使う。(ICT、プリント)</div>	<div>【指導の工夫③】</div> <div>・友達に説明する場面を作る。</div> <div>◎円を組み合わせた図形の面積の求め方を、円の面積の公式を使って考えることができる。 [思・判・表]</div> <div>(発言・ノート・ホワイトボード・確認問題)</div>
<div>③ 分母がちがう分数のたし算の計算は、通分して計算する。</div>					
<div>○確認問題</div> <div>・教科書の確認問題を解く。</div>	<div>◎異分母の分数の加法の計算のしかたを理解することができる。</div> <div>[知・技]</div> <div>(ノート・ホワイトボード・確認問題)</div>	確認	集団解決・まとめ	<div>○集団解決</div> <div>・考え方の同じところ、似ているところ、違うところを探す。</div> <div>・面積の求め方を一言で表す。</div>	<div>○子どもたちの発言から出たキーワードを板書する。</div>
<div>○振り返り</div> <div>・学習の中で、分かったこと、できたこと、次につながることを発表する。</div>					<div>③ 大きな円の面積から、小さな円の面積をひく。</div>
		振り返り		<div>○確認問題</div> <div>・教科書の確認問題を解く。</div> <div>○振り返り</div> <div>・学習の中で、分かったこと、できたこと、次につながることを発表する。</div>	

9 板書計画

5年生

9/18

グループワークをしぼって
ジュースを作ります。

① 1/5Lと2/5Lのジュースを
しぼりました。あわせて何L
あるでしょうか?

式 $\frac{1}{5} + \frac{2}{5} = \frac{3}{5}$ 5が1L? あわせて考え!
答え $\frac{3}{5}$ L

② 1/2Lと1/3Lのジュースを
しぼりました。あわせて何L
あるでしょうか?

式 $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$ 分母がちがう!!

③ 分母がちがう分数のたし算の計算のしかたは?
分母が同じにならない?

④ 分母が6になる!!
答えが $\frac{5}{6}$
通分して!!

⑤ 分母がちがう分数のたし算の計算は、通分して計算する。
⇒ 分母がちがうとたし算できないから通分して分母をそろえる!

⑥ $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$
= $\frac{3}{6} + \frac{2}{6}$
= $\frac{5}{6}$ 答え $\frac{5}{6}$ L

⑦ P124 ④⑤⑥

⑧

6年生

9/18

① 色がついた部分の面積は?

② 円が重なっている図形の面積の求め方は?
円の面積の公式を使う?

③ 大きな円の面積から小さな円の面積をひいて求める。

式 $4 \times 4 \times 3.14 - 2 \times 2 \times 3.14$ 分母の2乗!!
= $(4 \times 4 - 2 \times 2) \times 3.14$
= $(16 - 4) \times 3.14$
= 12×3.14
= 37.68 答え 37.68cm^2

④ P116 ④

⑤

⑥ ⑦ ⑧

⑨ ⑩

⑪ ⑫

⑬ ⑭

⑮ ⑯

⑰ ⑱

⑲ ⑳

㉑ ㉒

㉓ ㉔

㉕ ㉖

㉗ ㉘

㉙ ㉚

㉛ ㉜

㉝ ㉞

㉟ ㊱

㊲ ㊳

㊴ ㊵

㊶ ㊷

㊸ ㊹

㊺ ㊻

㊼ ㊽

㊾ ㊿

第5～9学年 体育・保健体育科学学習指導案

日 時：令和7年9月18日（木）2校時

児童生徒：富良野市立樹海学校

第5・6学年 9名

第7～9学年 8名

指 導 者：館山 英治

1 単元名

第5・6学年	第7～9学年
ソフトバレーボール	バレーボール

2 単元の構想にあたって

第5・6学年		【本単元で扱う学習指導要領の内容】		第7～9学年	
E ボール運動		E 球技		(1)次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開すること。 イ ネット型では、ボール運動や用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすること。 (2)攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。 (3)球技に積極的に取り組むとともに、フェアプレイを守ろうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとする、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする、仲間の学習を援助しようとするなどや、健康・安全に気を配ること。	
(1)次の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、その技能を身に付け、簡易化されたゲームをすること。 イ ネット型では、個人やチームによる攻撃と守備によって、簡易化されたゲームをすること。 (2)ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。 (3)運動に積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすること。					
【児童生徒の実態】					
・全体的に元気が良く、体育の学習には意欲的に取り組んでいる。休み時間には自分の体のことを考え、進んで体を動かす児童が多い。しかし、自分の考えを伝えたり、運動のコツを見付け出したりすることには時間がかかることが多い。		・体育の学習には、明るく元気に参加している。何事にも意欲的に取り組める生徒が多い。運動に対して苦手と感じている生徒も、前向きに頑張る姿勢を大切にしている雰囲気がある。仲間と課題を共有し、課題を解決しようとする生徒も多い。			
【指導の工夫】					
・単元のまとめ、単元の導入のゲームを異学年交流学習とすることで、課題解決に向けての姿勢や態度を学んだり、伝えたりする機会とする。また、人数が増えることから普段経験することがなかなかできない審判の役割にも触れさせる。 ・バレーボールは軽量ボールを使用することで、5・6年生は安心して活動することができ、7～9年生もソフトバレーボールを使用するときよりも本来の動きに近づけることができると考える。					

3 単元の目標

第5・6学年	第7～9学年
・ボール運動の楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付け、簡易化されたゲームで、チームの連携による攻撃や守備によって、攻防ができる。	・ボール操作とボールをもたない時の動きを知り、ラリーを続けるゲームを楽しむ。 ・球技の特性や成り立ち、球技の名称や行い方を理解するとともに、仲間と連携した動きで攻防を展開できるようにする。

4 単元の評価規準

	第5・6学年	第7～9学年
知識 及び技能	・ソフトバレーボールの行い方がわかる。 ・自陣のコート（中央付近）から相手コートに向けサービスを打ち入れることができる。 ・ボールの方向に体を向けて、その方向に素早く移動することができる。 ・味方が受けやすいようにボールをつなぐことができる。 ・片手、両手を使って、相手コートにボールを打ち返すことができる。	・球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることや理解したことについて、言ったり書いたりしている。 ・味方が操作しやすい位置にボールを返すことができる。 ・相手側のコートの空いた場所にボールを返すことができる。
思考力・判断 力・表現力	・誰もが楽しくソフトバレーボールに参加できるように、プレイヤーの人数やコートの広さ、プレイの制限、得点の仕方などの規則を工夫している。 ・チームの特徴に応じた作戦を選び、自分の役割を確認している。 ・課題の解決のために、自分や友達が行っていた動き方の工夫を、動作や言葉、絵図、ICT 機器を用いて記録した動画などを使って友達に伝えている。	・提示された動きのポイントやつまづきの事例を参考に、仲間の課題や出来栄を伝えている。 ・練習やゲームの場面で、最善を尽くす、フェアなプレイなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝えている。 ・体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えている。

主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> ・ソフトバレーボールの簡易化されたゲームや練習に積極的に取り組んでいる。 ・ルールやマナーを守り、仲間と助け合っている。 ・ゲームを行う場の設定や用具の片付けなどで、分担された役割を果たしている。 ・ゲームの勝敗を受け入れている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・球技の学習に積極的に取り組もうとしている。 ・マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。 ・練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助している。 ・健康・安全に留意している。
---------------	--	---

5 体育科・保健体育科における児童生徒の実態

学年	体育科・保健体育科における実態 【○実態 ☆目指す姿 ・手立て】
5・6年	<p>○休み時間にも進んで体を動かす児童が多い。また、自分の健康を意識し、めあてを決めて運動に取り組んでいる児童もいる。</p> <p>自分の課題を発見したり、相手に考えを伝えたりする経験は積んでいるが、時間がかかることが多い。</p> <p>☆自分の課題を見付け、相手に考えを伝えることができる。</p> <p>・上級生の発言や姿勢、行動から学び、自分の課題を伝えることができる。</p>
7年	<p>○休み時間に進んで体を動かすことは少ないが、自分の健康を意識し、めあてを決めて運動に取り組んでいる。自分の課題を発見したり、相手に考えを伝えたりすることに時間がかかることが多い。</p> <p>☆自分の課題を見付け、相手に考えを伝えることができる。</p> <p>・上級生の発言や姿勢、行動から学び、自分の課題を伝えることができる。</p>
8年	<p>○どの運動にも積極的に取り組む姿勢が見られ、運動能力も高い。自分の課題を見付け、他と共有し、解決に向けて努力することができる。</p> <p>☆チームとしての課題を共有し、解決しようとする。</p> <p>・映像でゲームを振り返ることで、課題を共有する。</p>
9年	<p>○自分の課題を見付け、他の意見を取り入れながら解決に向けて努力することができる。</p> <p>☆チームとしての課題を共有し、解決しようとする。</p> <p>・映像でゲームを振り返ることで、課題を共有する。</p>

6 単元の指導計画

第5・6学年（6時間扱い・本時6／6）				第7～9学年（6時間扱い・本時2／6）			
時間	学習活動 (本時の問いの深まり)	目標	評価規準	時間	学習活動 (本時の問いの深まり)	目標	評価規準
1	<p>○オリエンテーション</p> <p>(サーブ・レシーブ・キャッチ・トス・アタック)</p> <p>○試しのゲーム</p>	・ソフトバレーボールに慣れよう。	・ソフトバレーボールの行い方がわかる。 [知・技]				
2	<p>○ボールに慣れる基本運動</p> <p>○ボールをつなぐためのポイント(サーブ・レシーブ)</p> <p>○3対3ゲーム</p>	・サーブ・レシーブのポイントを知ろう。	<p>・自陣のコート(中央付近)から相手コートに向けサーブを打ち入れることができる。</p> <p>・ボールの方向に体を向けて、その方向に素早く移動することができる。 [知・技]</p>				
3	<p>○ボールに慣れる基本運動</p> <p>○ボールをつなぐためのポイント(キャッチ・トス・アタック)</p> <p>○3対3ゲーム</p>	・キャッチ・トス・アタックのポイントを知ろう。	<p>・味方が受けやすいようにボールをつなぐことができる。 [知・技]</p> <p>・チームの特徴に応じた作戦を選び、自分の役割を確認している。 [思・判・表]</p>				

4	○ボールに慣れる基本運動 ○ボールをつなぐためのポイント（味方・相手） ○3対3ゲーム	・味方や相手を考えてプレーしよう。	・課題の解決のために、自分や友達が行っていた動き方の工夫を、動作や言葉、絵図、ICT機器を用いて記録した動画などを使って友達に伝えている。 〔思・判・表〕			
	○ボールに慣れる基本運動 ○まとめのゲーム①（チームの課題追求）	・チームの課題を見付けて練習しよう。	・誰もが楽しくソフトバレーボールに参加できるように、プレイヤーの人数やコート広さ、プレイの制限、得点の仕方などの規則を工夫している。 〔思・判・表〕	1	○オリエンテーション ○ボールに慣れる基本運動 ○試しのゲーム ①（チームの課題追求）	・チームの課題を見付けて練習しよう。 ・提示された動きのポイントやつまづきの事例を参考に、仲間の課題や良いところを伝えている。 〔思・判・表〕
	○ボールに慣れる基本運動 ○まとめのゲーム②（チームの課題追求）	・前回のゲームから課題を見付けて練習しよう。	・片手、両手を使って、相手コートにボールを打ち返すことができる。 〔知・技〕	2（本時）	○ボールに慣れる基本運動 ○試しのゲーム②（チームの課題追求）	・前回のゲームから課題を見付けて練習しよう。 ・体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えている。 〔思・判・表〕
6（本時）				3	○対人パス・円陣パス ○ボールをつなぐためのポイント（サーブ・レシーブ） ○4対4ゲーム	・個人技能を高めよう① ・球技の各型の各種目において用いられる技術には名称があり、それらを身に付けるためのポイントがあることについて、理解したことについて言ったり書いたりしている。 ・味方が操作しやすい位置にボールを返すことができる。 〔知・技〕
				4	○対人パス・円陣パス ○ボールをつなぐためのポイント（トス・アタック） ○4対4ゲーム	・個人技能を高めよう② ・相手側のコートの空いた場所にボールを返すことができる。 〔知・技〕 ・練習やゲームの場面で、最善を尽くす、フェアなプレイなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝えている。 〔思・判・表〕
				5	○ボールに慣れる基本運動 ○まとめのゲーム①（チームの課題追求）	・チームの課題を見付けて練習しよう。 ・提示された動きのポイントやつまづきの事例を参考に、仲間の課題や良いところを伝えている。 ・練習やゲームの場面で、最善を尽くす、フェアなプレイなどのよい取組を見付け、理由を添えて他者に伝えている。 〔思・判・表〕
				6	○ボールに慣れる基本運動 ○まとめのゲーム②（チームの課題追求）	・前回のゲームから課題を見付けて練習しよう。 ・体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えている。 〔思・判・表〕

〔主体的に学習に取り組む態度は、単元全体を通じて評価〕

- ・ソフトバレーボールの簡易化されたゲームや練習に積極的に取り組んでいる。
- ・ルールやマナーを守り、仲間と助け合っている。
- ・ゲームを行う場の設定や用具の片付けなどで、分担された役割を果たしている。
- ・ゲームの勝敗を受け入れている。

〔主体的に学習に取り組む態度は、単元全を通じて評価〕

- ・球技の学習に積極的に取り組もうとしている。
- ・マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。
- ・練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助している。
- ・健康・安全に留意している。

7 本時について

(1) 本時の目標

第5・6学年（6／6時間目）	第7～9学年（2／6時間目）
知識・技能 ・片手、両手を使って、相手コートにボールを打ち返すことができる。	思考・判断・表現 ・体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えている。

(2) 研修との関わり（本時に働かせたい体育や保健の見方・考え方）

見方・考え方 ・ソフトバレーボールの運動ポイントから自己の課題を発見し、課題解決に向けて努力する。	見方・考え方 ・バレーボールの運動ポイントから自他の課題を発見し、課題解決に向け自分の考えを伝えようとする。
指導の工夫 ①個人やチームの課題を共有するために、前回のゲーム映像を振り返る。 ②異学年交流学习とすることで、課題解決に向けての姿勢や態度を学んだり、伝えたりする機会とする。	

(3) 本時の展開

段階	学習活動	○主な指導・◎評価・【指導の工夫】
導入 10分	○挨拶・準備運動・補強運動 ○対人パス（1分×3） ・サーブ～キャッチ　トス～レシーブ～キャッチ　トス～アタック～キャッチ ○前時の振り返り・本時の課題把握 ・前時を振り返り、本時の課題を把握する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> (課) ラリーを続けて、ゲームを楽しもう </div>	○上級生の手本を示す。 ○相手のことを考え、取りやすいボールを意識させる。
集団思考 10分	○前時のゲームを見て、自分の課題・チームの課題を発見する。 <児童生徒の気付き> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 45%;"> <p>【チームの課題】</p> <p>○○さんは、あきらめずに落下点まですばやく動けてすごい！私もやってみたい！</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 45%;"> <p>【チームの課題】</p> <p>レシーブで、2人の間に落ちちゃった。「ハイ！」って声をかければいいのか？</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 45%;"> <p>【自分の課題】</p> <p>キャッチは、落下点まですばやく動けた！でも、トスはちょっと低すぎたかな？ など</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 45%;"> <p>【自分の課題】</p> <p>サーブの時に、ボールを上げすぎているな。低く上げてみよう。 など</p> </div> </div> ○チームの課題発表 ・ホワイトボードに各チームが記入し、発表する。	○チームの課題は、どんな声かけや前向きな応援があるかについても考えるように促す。ビデオを見ながら、ボールをつなぐためのポイントに○を付け、課題を考える。 【指導の工夫①】 ・個人やチームの課題を共有するために、前回のゲーム映像を振り返る。 ○前回のゲーム映像を振り返ることで、自己の課題を見付け、チームの課題を共有する。 ○各チームの課題を全体で共有させる。

<p>追求活動・ゲーム</p> <p>25分</p>	<p>○課題解決練習</p> <p>・3カ所を回り、それぞれの課題を意識して練習する。(3分×3)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p><コートA></p> <p>【サーブ・レシーブ・キャッチ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひざを曲げて低くかまえる ・ひざを伸ばしながら ・ボールの真ん中をパー・グーで打つ など </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p><コートB></p> <p>【トス・アタック・レシーブ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひざを曲げて フワッと ・ひざを伸ばしながら ・手首をきかせパーで打つ など </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p><コートC></p> <p>【円陣パス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひざを曲げて低くかまえる ・ボールを運ぶように ・声を掛け合う など </div> </div> <p>○ゲーム</p> <p>・B対C ・A対C ・A対B(4分×3)</p> <p>・対戦のないチームは、審判をする。</p>	<p>○コートA・Bでアドバイスをする。</p> <p>○つなぐことを意識したゲーム展開を心掛けさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>◎片手、両手を使って、相手コートにボールを打ち返すことができる。</p> <p>(5・6年、7～9年は形成的評価)</p> <p>[知・技]</p> <p>◎体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習やゲームを行う方法を見付け、仲間に伝えている。</p> <p>(7～9年) [思・判・表]</p> <p>(ワークシート・ビデオ映像)</p> </div>
<p>振り返り</p> <p>5分</p>	<p>○振り返り</p> <p>・ワークシートに記入する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><例>・声を掛け合うことで、ラリーを続けることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・足を前後にして、低くかまえることができた。 ・パスするときに、声を掛け合うことができた。など </div> <p>○挨拶・片付け</p>	<p>○できたこと、努力していたことを全体で確認してから振り返りをさせる。</p> <p>時間があれば、数名発表させる。</p>

8 板書計画

① ラリーを続けて、ゲームを楽しもう

<ボールをつなぐためのポイント>

【サーブ】

- ・ひざを曲げて低くかまえる
- ・ボールは高く上げない
- ・ボールの真ん中をパー・グーで打つ

【レシーブ】

- ・落下点に動く (ハイハイ)
- ・足を前後に低くかまえる
- ・ひざを伸ばしながら
- ・ひざを伸ばして運ぶように

【キャッチ】

- ・足を前後に低くかまえる
- ・落下点にすばやく入る
- ・絶対に落とさない気持ち

【トス】

- ・前にすばやく移動
- ・ひざを曲げて
- ・両手でフワッと
- ・ひざを伸ばしながら

【アタック】

- ・落下点に動く
- ・反対の手を上げ引きながら
- ・スナップをきかせ、上に向かってパーで打つ

【チームのみんな】

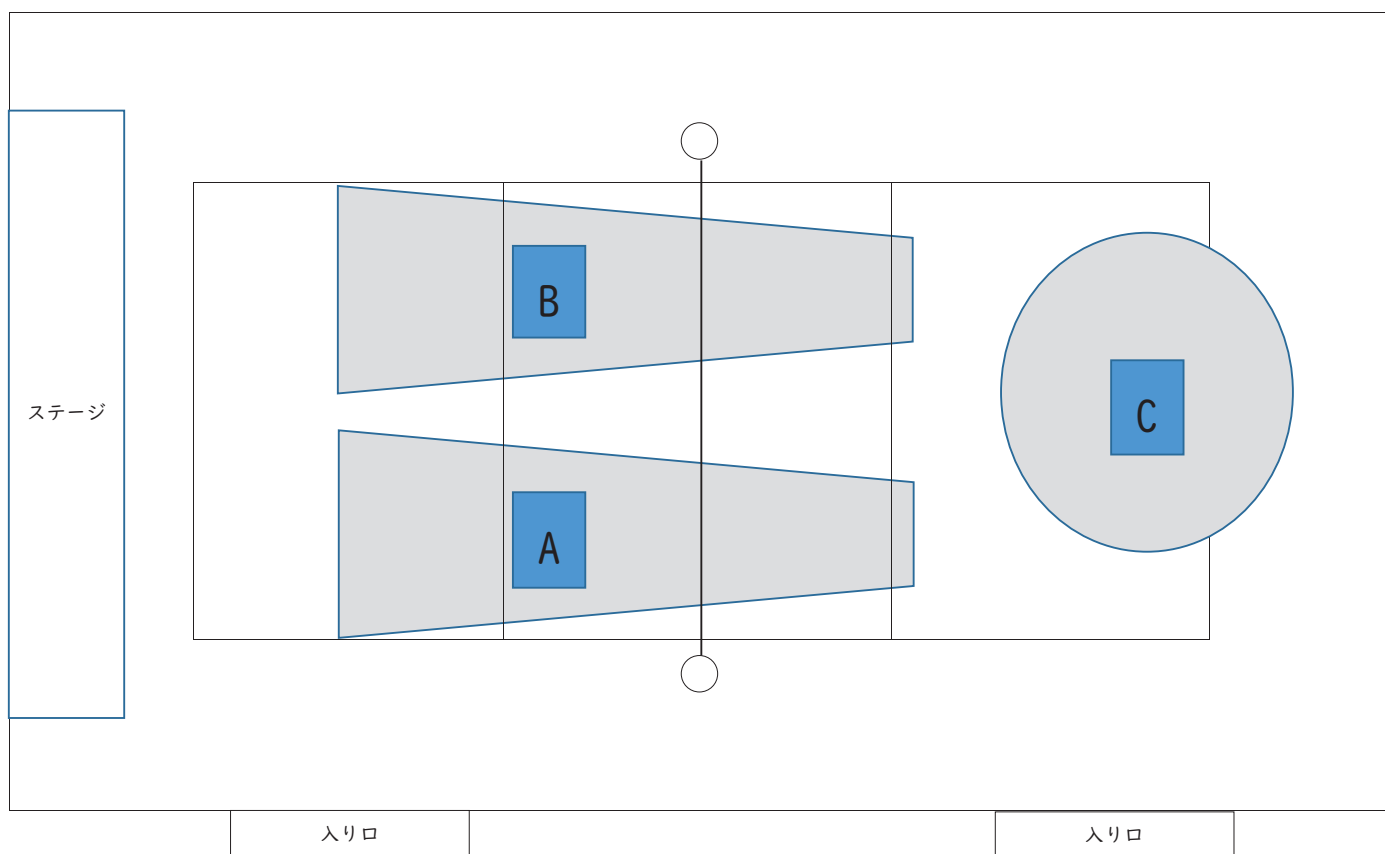
- ・動ける基本姿勢
- ・ボールに体を向ける
- ・あきらめない!
- ・声かけと前向きな応援

ホワイトボード
<Aチームの課題>

ホワイトボード
<Bチームの課題>

ホワイトボード
<Cチームの課題>

9 場の設定（課題解決）



9 / 18

キャッチバレーボール

名前 _____

課題 ラリーを続けて、ゲームを楽しもう！

<ボールをつなぐためのポイント>

【サーブ】

- ・ひざを曲げて低くかまえる
- ・ボールは高く上げない
- ・ボールの真ん中をパー・グーで打つ

【レシーブ】

- ・落下点に動く（ハイハイ）
- ・足を前後に低くかまえる
- ・ひざを伸ばしながら
- ・ひじを伸ばして運ぶように

【キャッチ】

- ・足を前後に低くかまえる
- ・落下点にすばやく入る
- ・絶対に落とさない気持ち

【トス】

- ・前にすばやく移動
- ・ひざを曲げて
- ・両手でフワッと
- ・ひざを伸ばしながら

【アタック】

- ・落下点に動く
- ・反対の手を上げ引きながら
- ・スナップをきかせ、上に向かってパーで打つ

【チームのみんな】

- ・声かけと前向きな応援
- ・動ける基本姿勢
- ・あきらめない！
- ・相手のことを考えて

◎前回の映像を見て、チームの課題・自分の課題を見付けよう。（上のポイントに○を付けよう）

◎チームの課題（7～9年生を中心に考えよう）	練習で気を付けることは？
○自分の課題	
ふり返り・相手チームへ一言	

【評価のポイント】

<5・6年>

○チームで協力して、相手コートにボールを打ち返すことができる。〔知・技〕

<7～9年>

○チームや相手の力量、性別等の違いを踏まえて、仲間とともにボールをつなぐためのポイントを見付けて伝えている。〔思・判・表〕

8 研究協議の記録

討議の柱

I 各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる指導の工夫は有効だったか。

II 知識を活用・発揮する場面の設定は適切だったか。

(1) 公開授業① 5・6年算数科

【単元名及び本時の学習課題】

5年生「分数の大きさとし算、ひき算」 課題「分母がちがう分数のたし算の計算のしかたは？」

6年生「円の面積」 課題「円が重なっている図形の面積の求め方は？」

①授業者振り返り

- ・子どもたちは緊張していた様子であったが、自分の言葉で説明するなど、研究主題である、「自らの考えを表現する」ことに迫ることができた。
- ・子どもたちの思考の時間を十分とれるように配慮したが、時間配分が予定通りとはならなかった。
- ・子どもたちの言葉から課題を作るという流れで進めた。また、今までと違うところを考え、課題につなげることができた。
- ・5年生の異分母の計算では、なぜ通分が必要かを考えることができ、6年生の円が重なる面積の求め方では既習事項を生かして考えることができた。

②協議内容

(ア) 質疑応答

- ・日常的にT2を活用しているのか
- 5・6年生は、国語と算数を複式授業で実施。T2が入って学習を進めている。
- ・机配置（向かい合わせ）は、普段からしているのか。
- リーダーが進めやすいので、国語や算数では、毎時間行っている。子どもたちの関わりをもたせたいので机を合わせて、顔が見える形で行っている。
- ・学習アプリのメリット・デメリットは何か。
- メリットは、図の貼り付けや貼った図をまとめて添付できること。デメリットは、動かなかったり、消したくないところが消えたりすることや図へのこだわりが出て、説明以外で時間がかかることがあるところ。使う意味を考えさせた上で使用させる配慮が必要である。
- ・6年生は子どもたちの言葉で課題を引き出したいとのことだが、今回のねらいは、「公式がそのまま使えない図形をどのようにして求めればよいのか」を考えることだったのではないか。
- 今回の目標は、円を重ねた図形の面積がわかること。次回は、円と違う図形を重ねた図形の面積が分かることであるので、単元を通して解き方が分かればよいと押さえている。
- ・間違えた考えが出たときに、どのように発表させているのか。
- 間違えた解答であっても発表させ、間違いを基にしながら考えさせるようにしている。また、考えが出てこない時は、友達の考えを参考にしてもよいと伝えている。全員が間違えていることもあるが、その際は、問い返しの発問をすることで間違いに気付かせている。

(イ) 感想・意見

- ・学級があたたかい雰囲気、安心して学べる環境が整っている。
- ・学習リーダーを中心として、自分たちで進める場面が多く見られた。
- ・テレビでの資料投影やホワイトボードへの書き込み等、視覚的支援を効果的に使っていた。
- ・子どもたちの発表に対する抵抗感が少なく、参観者がいる中でも堂々と発表していた。
- ・既習事項を活用しながら課題に取り組む姿勢が見られた。
- ・複式学級の並行指導において、課題提示までの時間がかかり、練習問題に入れない場面があった。
- ・円の中心の意味を理解していない児童がおり、時間内で触れることができていないようだった。

(2) 授業② 5～9年体育科

【単元名及び本時の学習課題】

5・6年生「ソフトバレーボール」 7～9年生「バレーボール」

課題「ラリーを続けてゲームを楽しもう」

①授業者振り返り

- ・子どもたちは緊張しながらも、9年生が下級生の意見を吸い上げてまとめながら活動していた。
- ・5・6年生は運動が苦手な面はあるが、授業では課題を見付け意欲的に取り組んでいた。
- ・異学年との交流、そして大人数で活動できるようにカリキュラムを工夫した。ソフトボールの単元でも同様の流れで進めた。
- ・ソフトバレーボールは軽いボールを使用。導入期、苦手な子にも取り組みやすい工夫を行った。

②協議内容

(ア) 質疑応答

- ・体育を教える上で、小と中（前期課程と後期課程）のつながりなど、意識していることは。
→大人になっても自ら選択して運動に親しむ意識をもたせたい。そのために義務教育段階でいろいろな競技に触れさせて、運動に親しめるようにしていく。
- ・発達段階の違う子どもたちへの指導において、言葉がけ等で工夫しているところは。
→日常的に発達段階を意識して、学年に応じた言葉がけしている。また、児童生徒に分かりやすいキーワードを提示するなどの工夫を行っている。
- ・レシーブに代わるキャッチは有効であった。2回目に取り入れていたが、子どもたちには、どのように思考してほしいとねらっていたのか。
→サーブキャッチよりレシーブをしてからのほうが、動きに余裕が出ると考えた。また、落とさないためにどうするかのを思考を育てる目的で行った。

(イ) 感想・意見

- ・前期・後期課程を一緒に行うことの難しさを体感したことがあるので、内容をずらして導入とまとめを工夫した授業が参考になった。
- ・単元や課題設定の難しさはあるもののカリキュラムの工夫で、義務教育学校の特性を生かした合同授業ができることがわかった。
- ・後期課程の生徒が前期課程の児童に教える場面が設定されており、義務教育学校の9年間を通した縦のつながりが育まれている。
- ・運動量が少なめだったので、主運動につながるような準備運動を取り入れたり、ゲームにおける人数を減らしたりするなどの工夫で運動量を増やすことができる。
- ・児童生徒の観察を考えたときに、目標・課題・評価が学年ごとに異なるので、統一した方が指導しやすいのではないかと。

(3) 助言等

①北海道へき地・複式教育研究連盟研究推進委員長 洞爺湖町立とうや小学校長 羽根 秀哉 氏

- ・教職員が児童生徒の声を大切にして、丁寧に接し、認める姿が常に見られる。この信頼関係の強さが子どもたちの姿や表情から伝わり、樹海学校が安心した環境になっていると感じた。そのような環境が整っているからこそ、どの学年においても授業で思考を表出でき、交流でもはっきり表現できることに結びついていた。
- ・校長を中心に授業者、研修担当者はもちろんのこと、配信などの各担当と連携しながら、全教職員で研究大会を運営されていることが伝わってきた。チームとしての樹海学校の力強さが伝わり、参加者は活力を得たと感じた。

【公開授業①：5・6年算数科】

- ・リーダー中心として課題解決に取り組む姿が素晴らしく、学校が目指す主体的な学びが展開されていた。同時に個別解決場面でも声を掛け合い、解決の見通しをもつ様子があり、共に学び合おうとする雰囲気醸成されていた。
- ・児童が既習事項を生かしながら課題解決に向けて見通しをもって学習を進めていた。指導者が児童の言葉を大切にして課題やまとめを作成したり、端末等を活用しての学び方や表現方法を児童自身が選択したりできるようにするなど、主体的な学びにつながる指導が見られた。

【公開授業②：5～9年体育科】

- ・昨年度と比べ、児童生徒が自発的に声を出し、生き生きと表現して運動に臨むなど、主体的に取り組んでいることが感じられた。
- ・児童生徒がゲームを楽しんでいた。楽しみながら主体的かつ協働的に取り組むことを通じて、技能を高めたいという思いにつながっていた。結果、各グループで課題を生み出すことに結びつき、練習に反映されていた。これは、前回の授業を映像で振り返る、児童生徒が興味を示し理解しやすい資料提示を工夫するなど、ICT活用とともに指導者が児童生徒の実態を把握し、主体的な取組につながるよう働きかけを行った成果と考える。

②北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班 主査 中山 智洋 様

【公開授業①：5・6年算数科】

- ・昨年度の課題を今年度に生かしており、課題に基づく授業改善がなされていた。
- ・授業の中に生徒指導の機能が生かされ、教科指導との両輪ができていた。また、学習指導要領に基づきながら実態に合わせた多くの工夫が見られた。
- ・身に付けさせたい資質・能力を明確にした単元計画を立て、資質・能力を明確にした単元構成がよかった。
- ・ゴールを明確にすることで子どもたちのやる気が増す。できた子どもの姿で作る評価規準が大切。
- ・子どもが主体的に学ぶ機会を積極的に設けることの大切さがこの授業にあった。自立した学習者を育てるためには、常に指導事項を定めて、位置付けることが大切。
- ・詳しい見取り、実態把握という、小規模校のよさを生かしている。また、子どもの主体性は、複式という環境の中、子どものみで過ごすことで自然と身に付く。
- ・討議の柱にもある、各教科における「見方・考え方」を働かせることが大切。これは、深い学びに導くキーワードとなる。そして、知識を活用し、発揮する場面をいかに設定するか。
- ・ICTの活用について。クラウドに上がっているものを他者参照できる。クラウドの活用。
- ・算数は数学的活動。根拠をもって理論的に説明させることが大切。分数足し算でリットルマスを使うか、1リットルより小さいか、数字でも図でも考えるとよい。考えるために大事なことが見方である。見方を生かしながら考えさせる活動が大切である。
- ・本日の6年生の授業内容の複合図形は公式をそのまま使えない図形であったが、円や図形に注目させ、図を構成する要素を調べることで、子どもの思考につながられた。
- ・同じ時間だけ両方の学年に指導していたので、本時の目標を考えると、6年生の思考判断の場面を見取る時間を確保できるとよい。

【公開授業②：5～9年体育科】

- ・体育はみんなができる喜びを感じられるとよい。子どもと相談して考えるのも手である。
- ・子どもたちが、それぞれの種目に応じた楽しさを実感できる授業づくりが大切。
- ・複式学級で指導事項が違う場合、見取りが難しいことがある。本日の協議の中に改善のヒントがあり、評価規準を揃える、もしくは学年別にするなどの工夫を行い、できた場面を見取り、説明させるとより実感につながる。
- ・小学校・中学校の連携を図ることが大切。そのために、児童生徒に学習のつながりを意識させるなど、授業における働きかけが大切。

9 成果と課題

(1) 研究主題より

【成果】

- ・子どもたちが自分の言葉で説明し、間違いも含めて発表する文化が育まれており、安心して表現できる環境が整っていた。
- ・複式学級という少人数の環境を生かし、また、リーダー学習や机配置等の工夫をすることで、児童生徒同士の関わりを深めながら学び合い、課題に対し深め合える姿が見られた。

【課題】

- ・自分の考えを表現できるように複式指導における時間配分と思考判断の場面の保障が重要である。そのための適切な課題提示や発問、効果的な ICT 活用をより一層深めていく必要がある。

(2) 「見方・考え方」を働かせる指導の工夫より

【成果】

- ・算数科では、分数や図形の意味に迫る活動を通して、子どもたちが既習事項を活用しながら課題解決に取り組む姿が見られた。
- ・体育科では、キャッチバレーなどの柔軟な工夫により、子どもたちが「どうすれば落とさないか」を考える場面が生まれ、技能習得と思考の両立が図られた。

【課題】

- ・円の中心の意味など、図形の本質的理解に至らない児童がいたため、見方・考え方を働かせる場面の時間が十分に取れなかった。複式指導において、時間配分の工夫が必要であり、思考や判断の場面を十分に見取る時間の確保の工夫が必要である。

(3) 知識を活用・発揮する場面の設定より

【成果】

- ・算数科では、異分母の通分や複合図形の面積など、既習知識を活用する場面が明確に設定されていた。また、ICT の活用により図や説明を全体共有でき、思考の可視化と他者との比較などが可能となった。
- ・体育科では、異学年交流を通じて、上級生が下級生に教える場面が設定され、知識の活用・発揮とともに縦のつながりが育まれた。

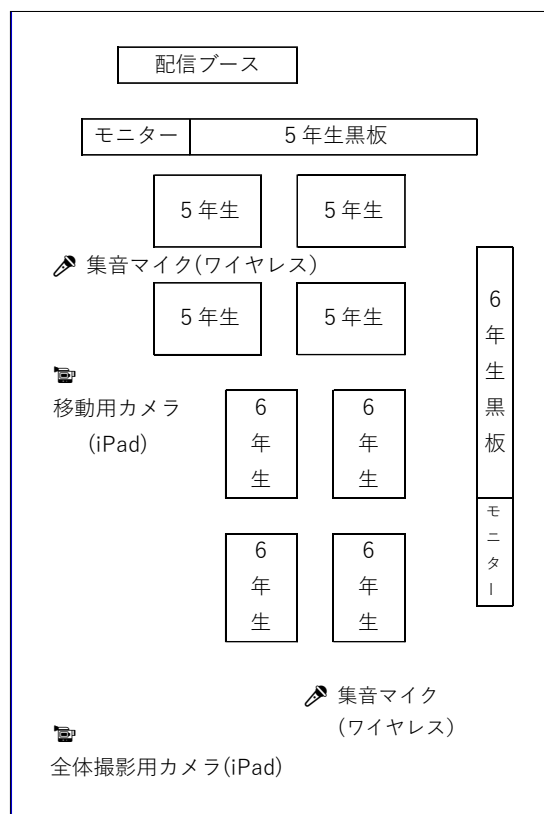
【課題】

- ・学年ごとの指導事項・評価規準の違いにより、観察や評価が難しくなる場面があるため、見取りをしやすくする単元構成等の工夫が必要である。

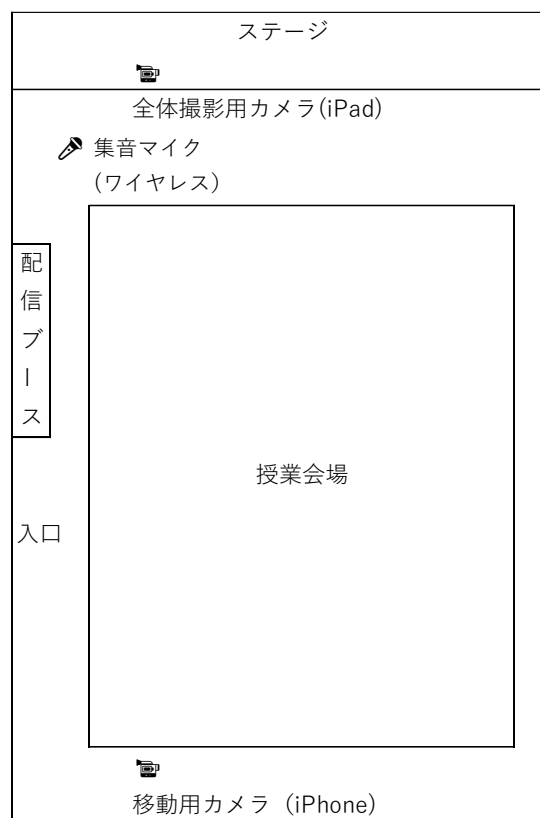
10 配信状況の記録

(1) 配置図

①ランチルーム（公開授業①）



②体育館（公開授業②、開会式、研究発表、研究協議）



(2) 配信方法

移動用カメラの映像を Bluetooth 接続、固定用カメラの映像を光ファイバーHDMI ケーブルにて有線接続、ストリーミングボックスで映像、音声を調整し配信用 PC より有線配信。

(3) 機材など

No	使用機材	用途
1	ワイヤレスマイク（2本）	児童生徒集音用、スピーカー集音用
2	ワイヤレスピンマイク（1本）	授業者用マイク
3	iPhone	移動用カメラ
4	iPad（2台）	固定用全体カメラ、配信用
5	iPad 連動型ストリーミングボックス	
6	PC	配信用
7	三脚	固定カメラ用
8	手持ち式マイクブーム（2本）	集音マイク用
9	Lan ケーブル	
10	光ファイバーHDMI ケーブル	
11	マイクショットマウント	

※開会式及び研究協議は体育館放送設備を使用。集音マイクでスピーカーからの音声を集音して配信。

第6分科会

【研究主題】

主体的に学び続け、協働しながら自己の学びを深める子どもの育成
～深い学びにつながる学習過程の工夫を通して～



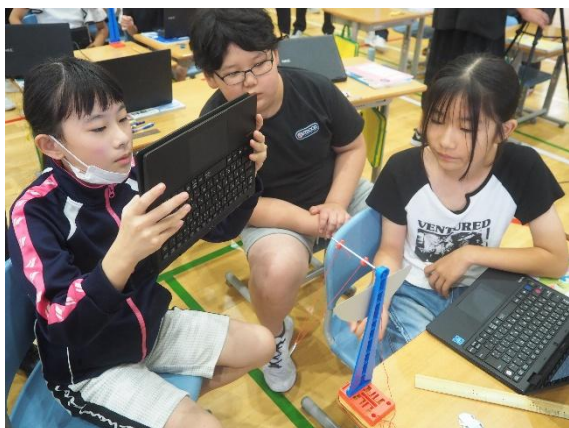
南富良野町立南富良野小学校

I 授業の様子

1 公開授業①：第4学年



2 公開授業②：第5学年



Ⅱ 研究の概要

1 研究主題

主体的に学び続け、協働しながら自己の学びを深める子どもの育成

～深い学びにつながる学習過程の工夫を通して～

2 主題設定の理由

(1) 南富良野町の取組

南富良野町では、「南富良野町小中高連携教育推進基本計画」に基づき、小学校2校・中学校1校・町立高等学校1校の4校において、12年間一貫した教育を進めている。このような環境下において、第1次計画～第3次計画では、資質・能力を育成するため、「南富良野町学習スタンダード」を基本とした問題解決的な学習展開による「主体的・対話的な深い学び」の実現に取り組んできた。

令和7年度からは、「南富良野町小中高連携教育推進基本計画」が第4次計画となり、前年度までの研究の成果と課題を踏まえ、「南富良野町学習スタンダード」は、学びの一つの手段として取り入れ、新たに授業改善のための授業づくりの基本「5つの視点」をもとに各校で授業づくりを進めることとした。

《授業づくりの基本「5つの視点」》 ※道教委「小学校・中学校教育課程編成の手引」より
〔視点1〕 育成を目指す資質・能力の明確化
〔視点2〕 内容や時間のまとまりを見通した単元（題材）のデザイン
〔視点3〕 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を支える手立て
〔視点4〕 全ての児童生徒が安心して学ぶことができる環境づくり
〔視点5〕 特別な配慮を必要とする児童生徒への指導内容や指導方法の工夫

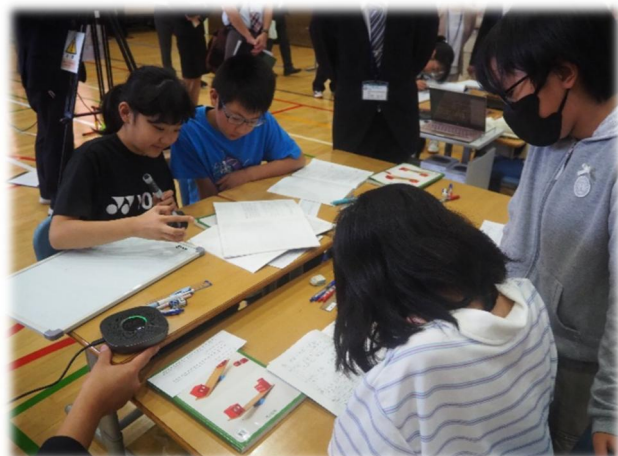
(2) 南富良野小学校の取組

本校では、南富良野町の取組や今日的な教育課題、本校の児童の実態を踏まえて、令和4年度より「深い学びを実現する子どもの育成 ～『南富良野町学習スタンダード』における集団解決の工夫を通して～」の研究主題のもと、授業改善に努めてきた。その成果として、リーダーを中心とした学習やキーワードを手掛かりとする学習のスタイルが全校に定着した。さらに、学習の目的や学習形態を明確化することで、よりスムーズに学習が進められるようになるなどの成果が挙げられた。一方、学習方法や学習に使用するツールに偏りがある、パターン化してしまう、知識・技能の定着などに課題が見られたことから、児童の自己決定・自己選択の場、個別最適化した学習方法や違う学習形態を取り入れる必要が出てきた。

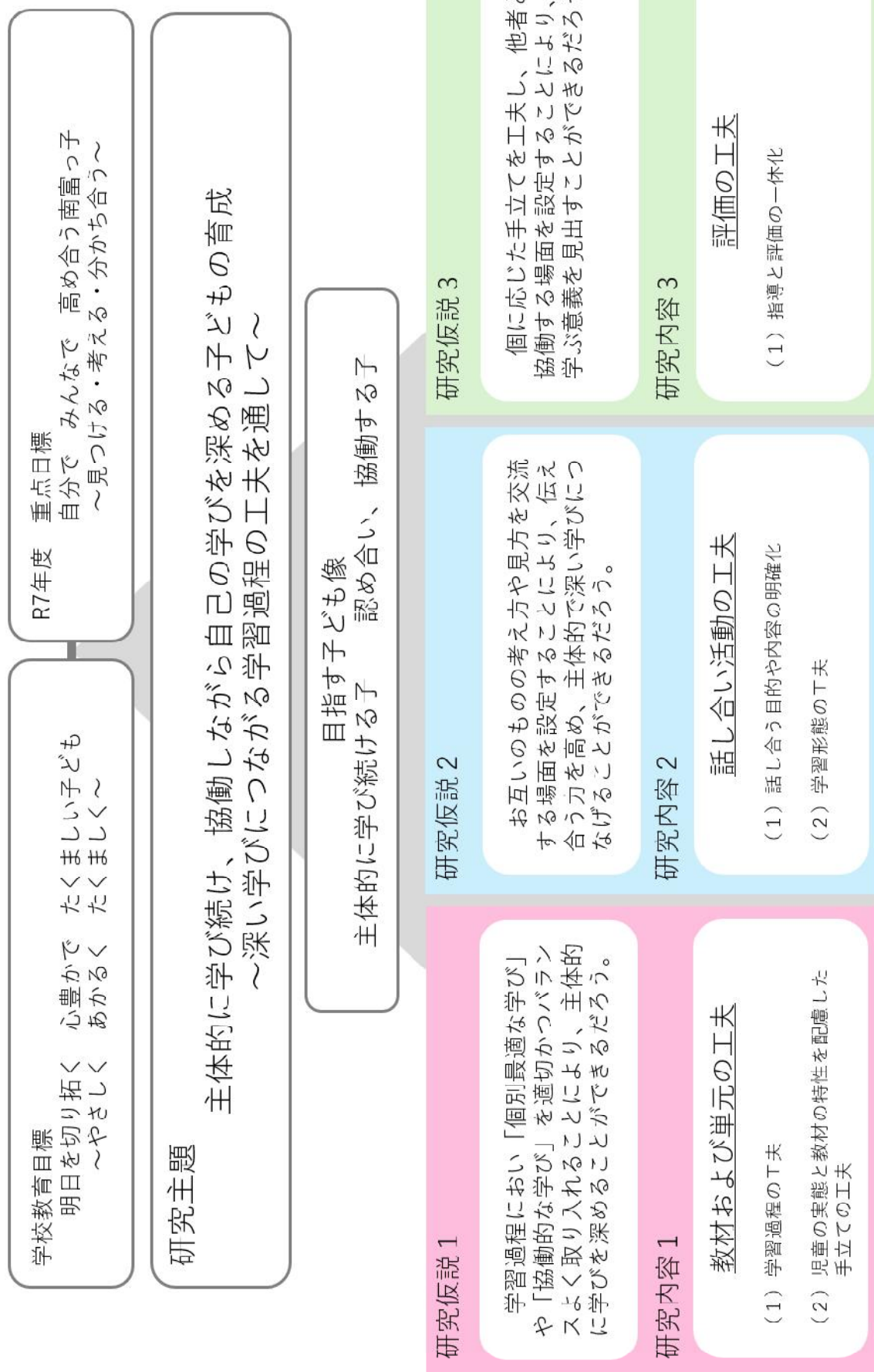
今年度は、南富良野町学習スタンダードからの進化・発展を目指し、「南富良野町小中高連携教育推進基本計画」（第4次計画）のもと、「南富良野」授業づくりの基本5つの視点のうち、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を支える手立てを重点として、研究を進めていくこととした。そして、本校の研究主題を「主体的に学び続け、協働しながら自己の学びを深める子どもの育成 ～深い学びにつながる学習過程の工夫を通して～」と設定し、教材・単元の工夫、話し合い活動の工夫、評価の工夫を中心に全教職員で共通理解を図りながら研究を進めていく。

3 北海道へき地・複式教育研究連盟 第Ⅱ期第10次長期5か年研究推進計画との関連

<p>分野Ⅰ 学校・学級経営の深化・充実</p> <p>〈研究課題1〉 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と連携を図る。</p> <p>○教育目標の達成に向けて確かな学びを創る学校経営計画 ○地域に根差した特色ある教育課程 ○合同学習・集合学習・交流学习 ○地域素材・人材を活用した地域に根差した教育活動の展開 ○チームで授業改善を図る校内研修</p>
<p>分野Ⅱ 学習指導の深化・充実</p> <p>〈研究課題6〉 主体意識をもって仲間と共に高め合う学習過程の改善・充実を図る。</p> <p>○リーダー学習を活用した主体的・対話的で深い学びの充実 ○教科の特質に応じた問題解決的な学習の改善 ○集合学習での町内学校間の充実した交流 ○小中高の接続を進める連携事業</p>



令和7年度 南富良野小学校 研究の概要



研究内容 1 教材および単元の工夫

(1) 学習過程の工夫

○見通し（問い）の工夫

○自己決定、自己選択の場面の設定

学習過程の工夫において、「見通し」の段階で、児童が本時の学びの見通しをもてるような場面を設定する。学習内容や学習方法、学習の流れを共有し、見通しをもって学ぶことができるようにする。また、学ぶ中で「問い」をもたせることで、児童が主体的に学習することにつながると考える。どうやって学習を進めるか、何を使って学習するかについて、自己決定や自己選択の機会を設定する。児童が自己決定・自己選択を重ねることで、自分の考えをもち、自信をもって学びに向かう子どもの育成を目指す。

(2) 児童の実態と教材の特性を配慮した手立ての工夫

○具体物半具体物などの手立ての工夫

○補助教材等の工夫

○ICT の効果的活用

教師が教材研究を行う中で、児童に身に付けさせたい資質・能力に合わせ、具体物や補助教材、ICTなどを効果的に活用できるようにする。ICTの活用については、児童が学習用端末を使用して学習を進める以外にも、実物投影機や電子黒板の活用、教師による iPad の活用なども行っている。児童一人一人の実態に応じた最適な手段を選び、理解を深める学びを実現する。

研究内容 2 話し合い活動の工夫

(1) 話し合う目的や内容の明確化

○必要感をもたせる学習環境の設定

○「話し合いわざ」の活用

児童が必要感をもって、話し合いに臨めるように視点・目的・内容を明確にする。児童に話し合いの方向性をもたせることで目的意識を高め、深い学びへとつなげる。また、「話し合いわざ」を手掛かりとして、話し合い活動を行っている。「話し合いわざ」を使って話したり考えをまとめたりすることで、伝えたい内容を整理することができ、効果的な話し合い活動につながると考える。対話を通して多様な考えに触れる中で、思考を深めることができるようにしている。

	話し合いわざ	使ってみよう！
1	順じょ・順い	まず、次に、最後に 1 番目は…、2 番目は…、なぜなら
2	同じ所・ちがう所	同じ所は… ちがう所は…
3	くらべる	～は、△より… ～は、△に比べると
4	仲間分け	似ているものをまとめて題をつけると…
5	共通点	□と○からわかることは… □と○の共通なことは…
6	関係	□と△との関係は… □が～すると△が～に変わります。
7	きまり	□のきまりがありそうです。なぜなら… このきまりにあてはまるのは…
8	原いんと結果	□になった原因を考えてみると…
9	条件	□になるための条件をいくつか考えてみると…
10	理由と予想	たぶん□になります。なぜなら… もし、□であるなら△になります。

※「話し合いわざ」は、発達段階に応じて、掲示内容を精査して、活用している。

(2) 学習形態の工夫

○ペア、グループなどの小集団をつくっての交流活動

個人の考えを交流する際に、どのような人数で集まって話し合うのか、ペアやグループの作り方をどうするのかといった集団解決の目的を達成できる方法を考えて小集団を設定する。同じ手段を選んだ児童同士で集まれば、求め方を確認することができ、違う学習手段同士で集まれば、考えを広げることができる。学習内容や学習方法に応じて、適当な学習形態を選択することで、児童の学びを深めることができる。と考える。

研究内容 3 評価の工夫

(1) 指導と評価の一体化

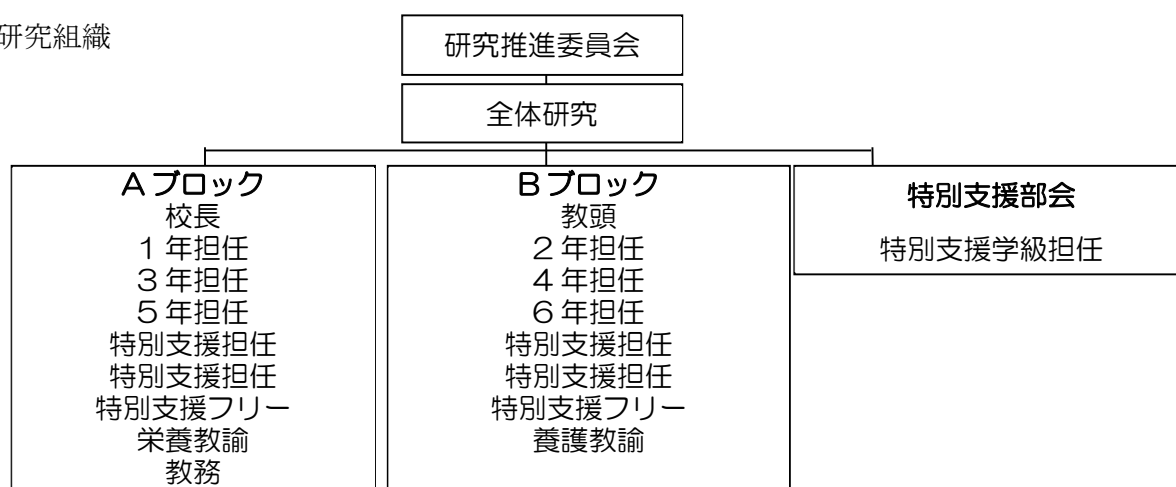
- 個に応じた指導の充実
- 振り返りの充実

指導と評価の一体化に取り組むことで、個に応じた指導の充実を図る。児童一人一人の学習状況を、評価を通して把握し、つまづきや理解の程度に応じた支援を行う。これにより、学びの定着を図るとともに、授業の改善にもつなげる。また、児童自身が学習の成果や課題を振り返る時間を設定している。学習の成果や更なる疑問、自身の学び方、学びの発展などの視点を設けて振り返りを行うことで、学びを可視化し、次の目標へとつなげることができる。

●研究の方法

- (1) 本研究では、深い学びにつながる学習過程の工夫について取り組む。授業後の振り返りや、学力検査の結果などに基づき、仮説の検証を行う。
- (2) 各ブロックより、研究推進委員を選出し、各ブロックにおける研究推進を図る。また、研究部との打ち合わせに、部会の代表として参加する。
- (3) 授業力向上のため、全職員が年に1回以上授業（交流授業も含む）を公開する。指導案検討（略案も可）については、事前に各ブロック推進委員を中心に集まり、検討する。
- (4) 研究部は各ブロックから出された課題と改善策を整理し、授業改善に役立てるようにする。

●研究組織



☆校内研究における教員の授業力向上を目指した取組

原則：全担任が公開授業を行う。（ブロック内の交流授業・特別支援授業交流を含む）

目的：お互いの授業のよさを見付け、個々の授業力向上を図るため。

6 これまでの成果と課題（令和6年度反省より）

研究主題 （令和3年度～令和6年度）

深い学びを実現する子どもの育成
～「南富良野町学習スタンダード」における集団解決の工夫を通して～

研究仮説1

教師が集団解決の目的や形態を明らかにすることにより、学びを深めることができるだろう。

＜研究内容1＞

- ・ 集団解決の目的・意図
- ・ ペア、グループなどの学習形態の明確化
- ・ 学習手段(ツール)

【成果】

＜南富良野町学習スタンダード＞

- ・ 南富良野町学習スタンダードが全学年で定着している。
- ・ 児童だけで授業をよりスムーズに進めることができるようになった。
- ・ キーワードが活用できていた。板書の中で、キーワードを動かすので関連が明確になっている。

＜見通し＞

- ・ 学習の流れの見通しをもたせることで、リーダーも迷いなく進行できた。
- ・ 見通しがあると低位の児童も取り組みやすい。
- ・ 見通しが明確になり、進行にかかる時間も短くなった。そのため、話し合いへの入りが早くなった。

＜集団解決の目的や形態＞

- ・ 目的や形態の明確化ができていた。教師が考察につなぎやすくなり、授業内容もより明確になる。
- ・ 集団解決の目的が明確にされることで、課題となっていた授業後半の南富良野町学習スタンダードができあがった。
- ・ 話し合う目的がずれずに児童が話し合いを行うことができた。話が逸れてしまった場合でも、戻しやすくなった。
- ・ それぞれの授業で選択した、学習形態が目的に合っていた。
- ・ ぶらぶらタイムも効果があった。他者との交流、共有のしやすさにつながる。目的を明確にしたぶらぶらタイムを設定することも大切。

＜学習手段（ツール）＞

- ・ 考えるためのツール選択を自分ですること、児童がスムーズに学習に取り組んでいた。
- ・ ツールやICTの活用ができていた。

【課題】

＜南富良野町学習スタンダード＞

- ・ 毎時間、スタンダードではなく、本時のねらいに合わせて違う形態で行ってもよい。
- ・ 児童が型にはめて進行することが1つの目的になっている場合がある。学びが深まっているのか。

＜見通し＞

- ・ 課題の設定時に、子どもの興味や関心をもたせるような工夫が必要。問いをもたせる。
- ・ 児童がツール（WB・端末・ノートなど）を選べるようにするとよい。学習方法がワンパターン化している。様々な工夫も必要。

＜集団解決＞

- ・ 児童のみでも、話し合いや集団解決が盛り上がるような工夫を考えたい。
- ・ 交流の仕方（WBにまとめるなど）を、様々な形で実施できるようにするとよい。
- ・ 集団解決でも、児童がまとめる方法やグループを選択できるようにしていったらどうか。

＜学習手段＞

- ・ 学習手段や方法が固定化している。色々な方法を試せるように、スタンダードに幅をもたせることも必要。
- ・ 考え方やツール選択（ノートに書く・ICTを使う・WBに書く）を、児童が自分で選択できるとよい。

研究仮説 2

児童が話し合う方法を身に付けることにより、学びを深めることができるだろう。

<研究内容 2>

- ・話し合う方法の習得
- ・学習リーダーの役割と目標の明確化

【成果】

<話し合う方法>

- ・「話し合いわざ」の定着が見られた。(ノートの記述にも活用されていた)
- ・「話し合いわざ」がスリム化され使いやすくなった。数を絞り、学年別にまとめたことが良かった。
- ・「話し合いわざ」を意識できるようになっている。表現する型(下地の形成)が身に付いた。
- ・自分の考えの説明を整理でき、スムーズに説明できている。
- ・発達段階に応じて、内容を精選し、教室に掲示したことで、いつでも目にすることができるようになった。

<学習リーダー>

- ・学習リーダーを育てる指標ができてよかった。
- ・学年段階に合った学習リーダーが育成されている。(学年が上がるごとに、成長を感じられる)
- ・学習リーダーの積み重ねが見られた。南富良野町学習スタンダードが確立されている。
- ・説明がスムーズに行えている。

【課題】

<話し合う方法>

- ・「話し合いわざ」がどれだけ使用されているか。全部網羅するのは難しい。①～③はよく使用しているが、他のものは使用頻度が低いときもある。
- ・すべての授業で、話し合いわざに触れることが厳しかった。場合によっては、話し合いわざが無い方が良い場合もある。
- ・日常で、指導にどれだけ使えるか考えたい。型にはまらないこともある。教員が意識して取り上げないといけない。
- ・単元の中で、どこで話し合わせるかを考えていく必要がある。一単位時間ではなく、単元デザインも検討していく必要がある。(スタンダード・自由進度・技能の定着など)

<学習リーダー>

- ・リーダーシップを全員が発揮できるよう指導が必要。
- ・学習リーダーをどこまで育てるかが課題である。学習リーダーの技能に個々の差が出ているため、日常的にリーダーを活用して育成を図っていくことと、学級の支持的風土を育てることが大切。

令和 7 年度に向けて

- ・学習形態や学習指導方法、学習ツールなどの活用について
- ・個別最適な学びの方法の検討
- ・学びを深める集団解決や他者との関わり
- ・単元デザインの構築(南富良野町学習スタンダードからの進化)

7 指導案

第4学年 算数科学習指導案

日 時：令和7年9月18日（木）2校時

児 童：第4学年男子7名 女子8名 計15名

授業者：教諭 佐藤 慶弥

1. 単元名 「面積」（11／12）

2. 単元の目標

- ・平面図形の面積に関わる数学的活動を通して、面積の単位について知り、正方形および長方形の面積の計算による求め方を理解している。（A（6）ア（イ）、B（4）ア（ア）（イ））（知識及び技能）
- ・面積の単位や図形を構成する要素に着目し、図形の面積の求め方を考えるとともに、面積の単位とこれまで
に学習した単位との関係を考察することができる。（B（4）イ（ア））（思考力・判断力・表現力）
- ・面積に関わる数学的活動を振り返り、面積の単位と計算による求め方のよさに気づき生活や学習に活用しようとする態度を養う。（学びに向かう力・人間性等）

3. 児童の実態

これまで図形分野の学習では、3年生では、「二等辺三角形や正三角形の意味や性質・作図、円の意味」について考え、4年生では、「角や垂直、平行」について学習を進めてきた。

授業前のプレテストでは、直接比較の問題（①）と間接比較でタイルが何枚分かを数える問題（②）の2つを行った。①の問題ではほぼ全員（93％）の児童が正答していた。②の問題では、80％の児童が正答していた。学級全体的に見ると概ね理解はできていると考えられるが、正答率が100％とならなかった児童や算数に苦手意識をもっている子どもたちがおり、より学習が定着するための手立てとして、既習単元のプリントや、問題文の語句や文章の内容を理解し、それをイメージ化するための練習プリントを2学期から行ってきた。

今回の学習単元では、子どもたちの日常生活の経験から、図形分野における量感や面積の単位の基礎的な理解を深め、必要感や主体性を引き出すために、身近なものをものの広さを使いながら量感を育みつつ授業を進めていく。また、単元の見通しや授業に対する必要感をもたせるために、学習計画（課題・めあて・振り返りなど）を子どもたちが自分たちで決めて活動をできるようにしていく。話し合い活動を高めるために、算数的なキーワードをマグネットシートに書いて強調したり、順序立てて説明するための文法的をまとめたカードを渡したりして班での話し合いをサポートしていく。

4. 単元の評価規準

観点 評価	知識及び技能	思考力、判断力、表現力	学びに向かう力、人間性等
単元の 評価規準	面積の単位〔 cm^2 、 m^2 、 km^2 、 a 、 ha 〕の測定の意味、単位の関係について理解し、長方形及び正方形の面積を公式を用いて求めることができる。	面積の単位や図形を構成する要素に着目し、図形の面積の求め方を考えているとともに、面積の単位とこれまでに学習した単位との関係を考察している。	長方形や正方形の面積について、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え、検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用しようとしていたりしている。

5. 単元計画

小単元	各時間の目標	評価の観点【評価物】
(長方形や正方形の面積) (大きな面積の単位)	1・2 面積における単元の学習計画を自分で考え、友達と共有することができる。また、面積を数値化して表すことのよさを実生活と結び付けて考えることができる。 面積の意味、面積の比べ方、面積の単位〔 cm^2 〕を理解する。	主体的【ノート・ICT・発表カード裏】 知技【ノート・ICT】
	3 長方形の面積を計算で求めるしかたを理解する。	知技【ノート・ICT】
	4 正方形の面積を計算で求めるしかた、及び長方形と正方形の面積の公式を理解する。	主体的【ノート・ICT・発表カード裏】 思判表【ノート・ICT】
	5 面積の単位「 m^2 」と単位の間係を理解する	知技【ノート・ICT】
	6 面積の公式では、辺の長さの単位をそろえて用いることを理解する。	思判表【ノート・ICT】
	7 長方形の面積公式を用いて、面積と1辺の長さから、もう1辺の長さを求めることができる。	主体的【ノート・ICT・発表カード裏】 思判表【ノート・ICT】
	8 面積の単位「 km^2 」と単位の間係を理解する。	知技【ノート・ICT】
	9 面積の単位「 a 、 ha 」と単位の間係を理解する。	知技【ノート・ICT】
	10 長さの単位と面積の単位の間係をまとめ、理解を深める。	主体的【ノート・ICT・発表カード裏】 思判表【ノート・ICT】
	11 (本時) 長方形を組み合わせた面積の求め方を、図や式、言葉などを用いて考えたり表現したりしている。	思判表【ノート・ICT・発表カード裏】
	12 学習内容を理解し、確実に身に付ける。	主体的【ノート・ICT】 知技【ノート・ICT】

6. 本時の目標

- ・長方形を組み合わせた面積の求め方を、図や式、言葉などを用いて考えたり表現したりしている。
【思考力・判断力・表現力等】

7. 本時と研究内容との関わり

研究内容①

教材及び単元の工夫

○ICT の効果的活用

子どもたちの学習に対する必要感を引き出すために、子どもたちと作成した単元の学習計画を視覚的に提示する。

◎具体物、半具体物などの手立ての工夫

具体物や学びリンクのアニメーションを使って、子どもたちが興味をもったり、算数のよさに気付いたりできるようにする。

研究内容②

話し合い活動の工夫

◎話し合いわざの活用

より効果的で実りのある話し合いにするために、話し合い技の書かれたカードを作って話し合いができるようにする。

○小集団をつくっての交流活動

全体交流を円滑に行えるように、キーワードが書かれたカード（孫カード）を使ったり、ホワイトボードの色分けを意図的に行ったりできるようにする。

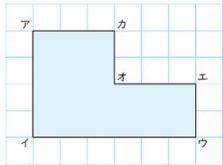
研究内容③

評価の工夫

◎振り返りの充実

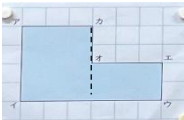
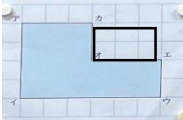
ICT やノートへの振り返り、ホワイトボードなど子どもたち一人一人に合った評価の方法を探ったり、毎時の授業の要点のまとめ方や見通しのたて方（児童自身の学びの方向性）が妥当だったかを終末で考えさせたりする。「評価のため」だけではなく、「授業形成のため」の見取りを大切にしていく。

8. 本時の展開（1 1 / 1 2）

学習過程	◇学習活動 ・指導上の留意点	研究内容との関わり
ふ	◇前時の振り返りをする。 ・班（3人1班）で確認した後、ICT を使って全体で振り返る。	研究内容① ICT の効果的な活用
3	◇子どもたちと考えた学習計画をまとめたものから問題をノートに記入する。	
問	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>㊦面積の求め方を考えましょう。</p>  </div>	研究内容① 具体物、半具体物などの手立ての工夫
見	・問題の記入後に具体物を渡す。	
3	◇分かっていることをノートに整理させる。 ・立式をする際に何を意識するのか考える。 ・数値を丸で囲んだり、単位などに線を引いたりする。 ・面積の求め方（公式）を振り返る	研究内容① 具体物、半具体物などの手立ての工夫
課	◇本時の課題を把握する。	
2	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>㊧ 階段の形（仮）の面積を、長方形や正方形の面積の公式を使って求めよう。</p> </div>	

自 6 友 7 考 4 ま 6 ふ 3	<p>◇個人思考をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思考の手がかりとして、テレビに前時のノートを映したり、学習で使用したキーワードを掲示したりしておく。 ・早く終わった子どもたち同士で、ノートを見せ合って交流をする。 <p><個人思考を促す手立て></p> <p>① 問題文の形の分け方が想像できない子への手立て →面積を求めるためには、長方形に分ければよいことを声掛けする。</p> <p>② 線を引くだけでは、イメージしにくい子への手立て →あらかじめ図形に補助線が書かれたプリントを用意して、それを切って面積を考える。</p> <p>◇3人1組の班で、ホワイトボードに考えを整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・字の色は全て黒で書かせる（考えの交流の時に、赤は共通点、青は異なる点、緑を疑問点で整理するため） <p><協働的な学習を促す手立て></p> <p>① 話し合いが苦手な子への手立て →話し合い技カードを作り、子どもたちが話し合いをスムーズに進められるようにする。</p> <p>② ホワイトボードをスムーズに書くための手立て →話し合い技カードの裏にホワイトボードへの役割分担を書き、一人一人の役割を明確化する。</p> <p>◇考察をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【本時の考察】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考え方で同じところは、面積を分けたり、補ったりして公式を使えるようにしている。 ・答えは全て同じになっている。 ・違うところは、線のひき方が違う。 </div> <p>◇まとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考察をもとに、自分の言葉でまとめをノートに書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>㊟ 階段の形（仮）の面積を求めるときは、形を分けたり、おぎなったりして、公式を使えるようにしてから求める</p> </div> <p>◇練習問題</p> <p>◇自分の学習の成果に関するふり回り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早く終わった子はより複雑な問題にチャレンジする。 	<div style="background-color: #d9e1f2; padding: 10px; border-radius: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>研究内容② 話し合いわざの活用</p> </div> <div style="background-color: #d9e1f2; padding: 10px; border-radius: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>研究内容② 小集団をつくっての 交流活動</p> </div> <p>【評価】</p> <p>長方形を組み合わせた面積の求め方を、図や式、言葉などを用いて、考えたり表現したりすることができる。（思判表）</p> <div style="background-color: #d9ead3; padding: 10px; border-radius: 10px;"> <p>研究内容③ 振り返りの充実</p> </div>
--	---	---

9. 板書計画

ふ 課 間 見	<p>前回は a や ha について学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長方形の面積＝たて×横 ・正方形＝一辺×一辺 <p>階段の形の面積を公式で求めよう。</p> <p>面積の求め方を考え ましょう。</p> <p>分ける作戦 おぎなう作戦</p>	自 交	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-around; width: 100%;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 2px;">ホワイトボード</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 2px;">ホワイトボード</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; width: 100%;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 2px;">ホワイトボード</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 2px;">ホワイトボード</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; width: 100%;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 2px;">ホワイトボード</div> <div style="margin: 2px;">A 18 m²</div> </div> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 10px;">  <div style="margin: 0 10px;">→</div>  </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・長方形や正方形に分ける。 ・おぎなう。 ・2つの図形を付ける。 <p>階段の形は、形を分けたり、補ったりして工夫して面積を求める。</p>
------------------	---	--------	--	--

第5学年 理科学習指導案

日 時：令和7年9月18日（木）3校時

児 童：第5学年男子5名 女子17名 計22名

授業者：教諭 大内 明

1. 単元名 「ふりこ」(5/11)

2. 単元の目標

- ・振り子の運動の規則性について、条件を制御しながら、振り子が1往復する時間はおもりの重さなどによっては変わらないが、振り子の長さによって変わること理解するとともに、観察、実験に関する技能を身に付けることができる。((2)ア(ア)) (知識及び技能)
- ・振り子の運動の規則性について追究する中で、振り子が1往復する時間に関係する条件について、予想や仮説を基に解決の方法を発想し、結果を整理し、自分の言葉で表現することができる。((2)イ) (思考力・判断力・表現力等)
- ・振り子の運動について追究する中で、予想や仮説を立て、見通しをもって主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養う。(学びに向かう力・人間性等)

3. 児童の実態

「植物の発芽や成長」では、発芽に必要な条件について仮説を立て、それぞれの仮説に応じた実験条件を選択することができた。教科書の実験例を参考にしながら、比較する条件やそろえる条件を考え、実験計画を立てる姿も見られた。こうした学習を通して、「条件制御」の考え方を意識できるようになってきている。

しかし、自らの目的に応じて実験の方法や手順を工夫する経験はまだ少なく、計画の段階で試行錯誤する姿や、記録の取り方、結果と仮説を結び付けた検証には課題がある。

本単元「ふりこ」では、ふりこの動きと長さ・重さ・振れ幅などの関係を調べる活動を通して、前単元で育んできた「条件を制御する視点」や「仮説に基づいた実験の組み立て方」を活かし、自ら問いをもち、筋道を立てて調べようとする力をさらに育んでいきたい。

4. 単元の評価規準

観点 評価	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の 評価規準	①振り子が1往復する時間は、おもりの重さなどによつては変わらないが、振り子の長さによって変わること理解している。 ②観察、実験などに関する技能を身に付けている。 ((2)ア(2))	①振り子の運動の規則性について追究する中で、振り子が1往復する時間に関係する条件について、仮説を基に解決の方法を発想し、表現しようとしている。 ②振り子の運動の規則性について追究する中で、結果を整理し、自分の言葉で表現しようとしている。 ((2)イ)	①振り子の運動について追究する中で、仮説を立て、見通しをもって主体的に学習の問題を解決しようとしている。

5. 単元計画

小単元	各時間の目標	評価の観点【評価物】
ふりこ (まとめ)	1 身の周りの現象に関心をもち、ふりこの動きに着目して、ふりこの実験に進んで関わるができる。	主【オクリンク・発言】
	2 学習問題を基に、自分なりの仮説を立てることができる。	思判表①【オクリンク】
	3・4 仮説をもとに検証計画を立てる中で、変える条件・そろえる条件などの条件制御を意識し、解決の方法を発想し、表現することができる。	思判表①【オクリンク】
	5 (本時) 検証計画を基に、変える条件と変えない条件を制御して、ふりこの1往復する時間の変化について、実験を通して検証することができる。	知技②【オクリンク】 主【発言・オクリンク】
	6 予想や実験方法を再検討することを通して、ふりこの運動の変化とその要因を関係付けて考察し、自分の考えを表現することができる。	思判表②【オクリンク】
	7 他のグループが行った方法でも実験を行うことを通して、ふりこの1往復する時間の変化について、実験を通して検証し、理解を深めることができる。	知技①②【オクリンク】
	8 実験結果を共有し、整理・分析することを通して、仮説と照らし合わせながら問題に対する自分なりの結論を導き出すことができる。	思判表②【オクリンク】
	9 単元を振り返り、学習内容を生活に活かす活動を通して、ふりこの性質について理解を深めることができる。	知技①【オクリンク】

6. 本時の目標（5時間目）

- ・ 検証計画を基に、変える条件と変えない条件を制御して、ふりこの1往復する時間の変化について、実験を通して検証することができる。【知識・技能】
- ・ ふりこの運動について、他者と関わりながら粘り強く問題解決しようとしている。
【主体的に取り組む学習の態度】

7. 本時と研究内容との関わり

研究内容①

教材及び単元の工夫

○見通しの工夫

「ふりこの1往復する時間は何によって変わるのか。」という学習問題に対して各自で仮説を立てることで、目的意識をもって実験に取り組めるようにする。

◎自己決定・自己選択の場面の設定

実験条件（ふりこの長さ・ふりこの振れ幅・おもりの重さ）を自分で選び、必要な道具を選定・準備しながら実験に取り組む場面を設けたことで、「何を確かめたいか」「どのように確かめるか」を自己決定・自己選択させ、児童自らの興味や仮説に応じた実験を行うことで、主体的な学びを引き出す。

研究内容②

話し合い活動の工夫

○必要感をもたせる学習環境の設定

本時では、児童が前時に立てた仮説と検証計画に基づき実験を行い、結果をICTツール（オクリンク）にまとめる。オクリンクにより、各班のまとめがリアルタイムで共有されることで、自分の班だけでなく、他の班の実験の進み具合や記録の仕方にも気付き、自然な形で比較や対話につながる視点をもつことができる。

結果をまとめる際に「何の条件を変えたか」「1往復の時間はどうか」を明確にすることで、対話の深まりを図る。

研究内容③

評価の工夫

○振り返りの充実


振り返りの視点（①本時の進捗状況と次時の計画、②実験を通しての気付き、③次につながる問い）を明確に示すことで、自らの学びを自覚できるようにする。振り返りを次時につなげることで、学びを積み上げる見通しをもたせ、自発的に学ぶ姿勢を育成する。

8. 本時の展開（5/11）

学習過程	◇学習活動 ・ 指導上の留意点	研究内容との関わり
課題1	◇学習問題を確認する。 学習問題 ふりこの1往復する時間は、何によって変わるのだろう。	研究内容① 見通しの工夫
問い4	◇自分の仮説・検証計画を確認する。 〈予想される仮説〉 ○おもりの重さ ○ふりこの長さ ○ふりこの振れ幅 ◇ふりこの1往復する時間のはかり方を再度確認する。 〈確認事項〉 ○オクリンクのカード上で動画を撮影し、時間を測定する。 ○正確な時間を計測するため、おもりを放して、戻ってきたところから計測を始める。 ふりこの1往復する時間=ふりこの10往復する時間÷10 ○3つの条件に共通しているそろえる条件（重さの形・大きさ・放す強さ）を確認する。	研究内容① 自己決定、自己選択の場面の設定
実験整理分析20	◇検証計画に基づき、問題解決に向けて実験を開始する。 〈実験〉 それぞれの仮説について、条件を変え、1往復する時間を3回はかり比較する。	

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1つだけ条件を変え、あとは同じ条件にして調べさせる。 ・ 各班は結果をオクリンクへ記入し、リアルタイムで共有する。 <p>〈個別・協働的な学習への手立て〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の班だけでなく、他の班の実験の進み具合や記録の仕方にも気付き、自然な形で比較や対話につながる視点をもつことができるよう、声かけを行う。 <p>〈子供たちが取り組む学習形態〉</p> <p>個人やペア・小集団に分かれて、実験を行う。</p> <p>〈実験が上手くいかない児童への手立て〉</p> <p>① 検証計画を立てることが不十分な児童</p> <p>② 実験の準備で戸惑う児童</p> <p>→ 資料を確認するように声かけを行う。また、同じ条件で実験を行っている班とつなげ、友達の実験を参考にして実験を行うことができるようにする。必要に応じて教師が介入し、手本を見せる。</p> <p>③ 正しい実験結果が出ない児童</p> <p>→ 「どうして実験が上手くいかなかったのか」を児童に問いかけ、次時に向けてどのように改善していったらよいかを考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実験が終わった場合、他の班が実験をしている条件に目を向け、更に探究（実験）するよう、声かけを行う。 <p>◇ 実験結果の整理・分析をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オクリンクに結果と実験の気づきを記入させる。 	<p>研究内容②</p> <p>必要感をもたせる 学習環境の設定</p> <p>【評価】</p> <p>検証計画を基に、変える条件と変えない条件を制御して、ふりこの1往復する時間の变化について、実験を通して検証することができる。</p> <p>（知技）</p> <p>ふりこの運動について、他者と関わりながら粘り強く問題解決しようとしている。（主）</p>
まとめ 15	<p>◇ 本時の結果を共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現時点の結果を共有し、次時に向けて学習問題解決への見通しをもたせる。 <p>→ おもりの重さの実験結果を比較する。おもりの付け方によって結果が異なることに気付かせ、実験の妥当性について考えさせる。</p> <p>⇒ 本時検討した実験の妥当性をもとに、次時では実験方法を改善し、再実験を行う。</p>	
振り返り 5	<p>◇ ふり返しをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返りの視点 <ul style="list-style-type: none"> ① 本時の進捗状況と次時の計画 ② 実験を通しての気づき ③ 次時につながる問い 	<p>研究内容③</p> <p>振り返りの充実</p>

9. 板書計画

<p>9 / 18 (木) ふりこ</p> <p>問題「ふりこの1往復する時間は、何によって変わるのだろう。」</p> <p>予想 ・ ふりこの長さ ・ おもりの重さ ・ ふりこの振れ幅</p> <p>実験</p> <p>結果 オクリンク（結果・気づき）→他の班は？</p> <p>ふ ①どこまで進んだか ②次の時間は？ ③気づき・疑問 ④友達</p>	<p>実験のポイント！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 調べたい条件を 1つだけ変える あとは同じ条件にする ・ 1往復する時間を3回はかる （オクリンクの動画） <p>※おもりを放して、戻ってきたところからスタート</p> <div data-bbox="997 1877 1380 2065"> <p>ふりこの1往復する時間のはかり方</p> <p>ふりこの1往復する時間は、ふりが一定の時間でゆれをくり返すことから、ふりこの10往復する時間を10でわって求めることができます。</p> <p>ふりこの1往復する時間 = ふりこの10往復する時間 ÷ 10</p>  </div>
--	---

8 研究協議の記録

(1)授業者振り返り

① 公開授業① 4年 佐藤教諭

- ・児童が中心となって進める授業をしていたが、児童の実態から新しい学習形態で授業を行った。
- ・ICTの効果的活用については、学校周辺の地図を検索して、よい形のもので活用した。
- ・形のイメージがつくように実物大のもの、手で操作して考えやすいように小さい紙を配布した。
- ・話し合いの場面では、いつも使っているホワイトボードを使用した。話し合いカードの活用をしているが、使っていない児童もいたので、個に応じて渡せるとよかった。
- ・振り返り活動の工夫として、振り返りの仕方や種類で分かれた5つのレベルを使っている。次の自分につながることを意識した振り返りをしている。本日は、時間配分がうまくいかず最後までいかなかったため、振り返りの時間を確保するタイムマネジメントが必要であった。

② 公開授業② 5年 大内教諭

- ・ふりこの一往復する時間は何によって変わるのだろうかを考え進めていた。本時の後半は、仮説を検証する意識が薄まってしまったので、次の時間の実験は検討をしていく。
- ・子どもたちの仮説に基づいて、実験条件を自己決定・自己選択させ、それぞれの実験内容を決めた。仮説の検証ができたよかった。
- ・ICTの活用では、オクリンクを準備していた。本時では、自分の班の実験で精一杯になっていた。子どもたちにゆとりがなく、他の班とつながって、話し合いには至っていなかった。
- ・おもりの付け方で、「縦につながる」「一か所につながる」班があったが、一か所につなげるようにしていく。
- ・振り返りは、次時につながるような視点で行った。自分たちの仮説を自発的に学ぶことをねらった。

(2)協議内容

① 公開授業① 4年生

○討議の柱 1

- ・具体物は、子どもたちがイメージをもつことができていた。
- ・問題提示の時に、ICTの活用としてアニメーションを使ってもよかった。
- ・Googleマップでの上から見た画像の説明があると子どもたちはより身近に感じたかもしれない。
- ・実物の模造紙は、サイズ感が分かるのでよかった。
- ・実物の模造紙の必要性はあったのか。もし使わなかったなら、時間を確保でき最後まで進めたかもしれない。
- ・公式という言葉が課題に入っていたので、補助線を引くなどして公式を使って教えるべきところを大切にされた方がよかったのかもしれない。公式を使って、図形の分け方を確認してから進めてもよかった。

○討議の柱 2

- ・話し合い活動では、「話し合いのわざ」があってよい。カードやホワイトボードを使って活発な交流ができていた。
- ・個別学習を考えたら、方法別に話し合い進めてもよかったのかもしれない。
- ・グループのまとめは、ICTを使って共有してもよかった。
- ・見通しの場面で出ていた〇〇の方法という言葉を使って確認すると、児童の理解が深まったかもしれない。
- ・「はかせ(はやく かんたん せいかくに)」という言葉が出ていたので、この言葉を使って、まとめの共有ができてよかった。
- ・3人グループでの活動は、役割で手が余る子がいないようにしたとあるが、二人が頑張る一人が手を余しているグループがあったので、今後の見直しも考えていきたい。

○討議の柱 3

- ・振り返りのレベルが掲示されていてよかった。
- ・ピクトグラムでの振り返りの掲示がわかりやすくよかった。

② 公開授業② 5年生

○討議の柱 1

- ・失敗を生かして、2回目へと続く流れは珍しい。実験の失敗を次に生かせるのは子どもたちにとってよいという意見もあるが、なかなかそうもいかない部分もある。
- ・動画だとオクリンクでタイムを計測しないで、ストップウォッチでやってもよかったのではないだろうか。オクリンクは共有するときに活用すると子どもたちはわかりやすいかもしれない。
- ・オクリンクは、子どもたちが実験に対して見通しをもてるのがよかった。他の班のデータを見るときに使用するだけでよかったのかもしれない。
- ・動画を撮影するなど、活動が多かったので、シンプルにデータを取るだけの本時でもよかったのではないか。

○討議の柱 2

- ・他のグループの実験結果に目を向ける場面が少なかった。
- ・自分たちの実験がメインとなっているので、話し合いや他のグループとの比較場面が少なかった。必要感のある話し合いの場面設定を検討するとよい。
- ・学習ルールの指導(子どもたちの声が小さい、相手の話をしっかり聞くなど)があるとよかった。

○討議の柱 3

- ・振り返りは、わかりやすくまとまっていて次時の実験につながる。
- ・振り返りは、自分がやった評価だけではなく、友達の話聞いて気付いたことなどもあれば、次の実験につながるのではないか。
- ・オクリンクを使用して振り返りを行うことで、振り返りを蓄積していくことができていてよい。

(3)助言等

① 北海道へき地・複式教育研究連盟研究推進委員 枝幸町立音標小学校長 有路 直人 氏

- ・「主体的、対話的で深い学び」は、子どもたちの脳が活性化していて、ずっと集中している状態である。授業の中で子どもたちがそういう状態である。子どもの表情も大事である。
- ・教師が教えることから子どもが学ぶことへ、教師がファシリテーターになっていく。結果より過程を重視する、子どもたちが自分で苦労してつかみ取るようにするなど、舵を切っていく。教えやすさからわかりやすさへなど、子どもが学びやすい授業づくりをしていくことが大切。
- ・子ども一人一人を大切に、一人にはしないで安心感を与える。一人でたどり着けないところは、仲間と一緒に考える、仲間と一緒に学び合う姿が大切である。
- ・教えやすい・わかりやすい授業を意識して授業作りを行うとよい。子どもがやることだけを記入している
- ・課題と向き合っているか、対峙しているか、対話の部分で、わからないと言えるか、子どもが気づくような課題を設定していく必要がある。

② 北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班 指導主事 川邊 宏司 様

【4年生】

- ・課題の設定について、現行指導要領から、育成すべき資質・能力を考えた学習活動だったか。課題にある長方形や正方形の面積の公式を使って求めるという子どもたちの思考が生まれたか考えていく必要がある。授業の2つのポイントは、求積可能な図形に変形にすると面積が求めることができること、補助線を引きながら分けて考えることである。それらを意識した授業づくりになっていたか。グループ活動では、一言も話せない子がいたが、適切な話し合い活動になっていたのか。グループ編成の工夫が必要。指導と評価の一体化について、いつどの場面で評価するか、練習問題の中で評価する予定だったができなかったため時間配分はどうだったか検討する。また思考判断を評価できる練習問題だったか検討が必要である。

【5年生】

- ・本時の目標や課題に対して振り返っていたか。気付いたことを書き入れたことは、本時の授業の目標につながっていたか考えるとよい。学習活動が、身に付けさせたい資質能力に結び付いているか検討する。本時の目標について、子どもたちが振り返ることができるようにするとよい。仮説や予想を立てて検証していたが、子どもたちは自分の仮説が正しかったかどうかを確認していたのか。自分で立てた仮説を検証し、仮説に対して次の計画を立てることができるようにした方がよい。最後にクラス全員が結論を出して問題解決をするという。

9 成果と課題

研究仮説1

【成果】

- ・見通しを丁寧に行っていてよかった。児童に安心感を与えていてよかった。
- ・ICT の活用を進めることができた。今後は、効果的な活用について検討していく必要がある。
- ・ICTを使用することで、他者参照が可能となった。
- ・オクリンクを使用したことがよかった。学びの蓄積にもなる。次の時間などにも動画として共有できるのがよい。

【課題】

- ・見通しは、どの程度丁寧に行っていくのか検討が必要。丁寧に行いすぎると、個人思考での深まりがなくなる。
- ・問いや見通しで、児童がわくわくしたり、活動への意欲を持たせたりするような工夫が必要。
- ・実物大模造紙を用意していたが、具体物をどのように生かすのかが課題となる。
- ・ICTの活用については、単元計画でより効果的に活用できる場面や方法を検討していくとよい。

研究仮説2

【成果】

- ・話し合いの素地ができていた。今までの蓄積の成果だといえる。今後は、話し合いの型に頼り切らない方法も検討していくとよい。
- ・話し合いカードを使った話し合い活動がよかった。活発な話し合いになる。低位の子の救い上げにもなった。

【課題】

- ・個人思考のあとにすぐにグループでの話し合いにするのではなく、ペアでの活動を入れてもよいのではないか。
- ・学習形態や話し合いの意図・ねらいを児童とも共有してくとよい。
- ・話し合いを行う中で、意見を全体に広げていく話し合い形態を身に付けさせたい。

研究仮説3

【成果】

- ・振り返りの視点を提示することで、振り返りの内容を充実させることができた。
- ・ピクトグラムで振り返りの視点を提示していたのが、わかりやすくてよかった。

【課題】

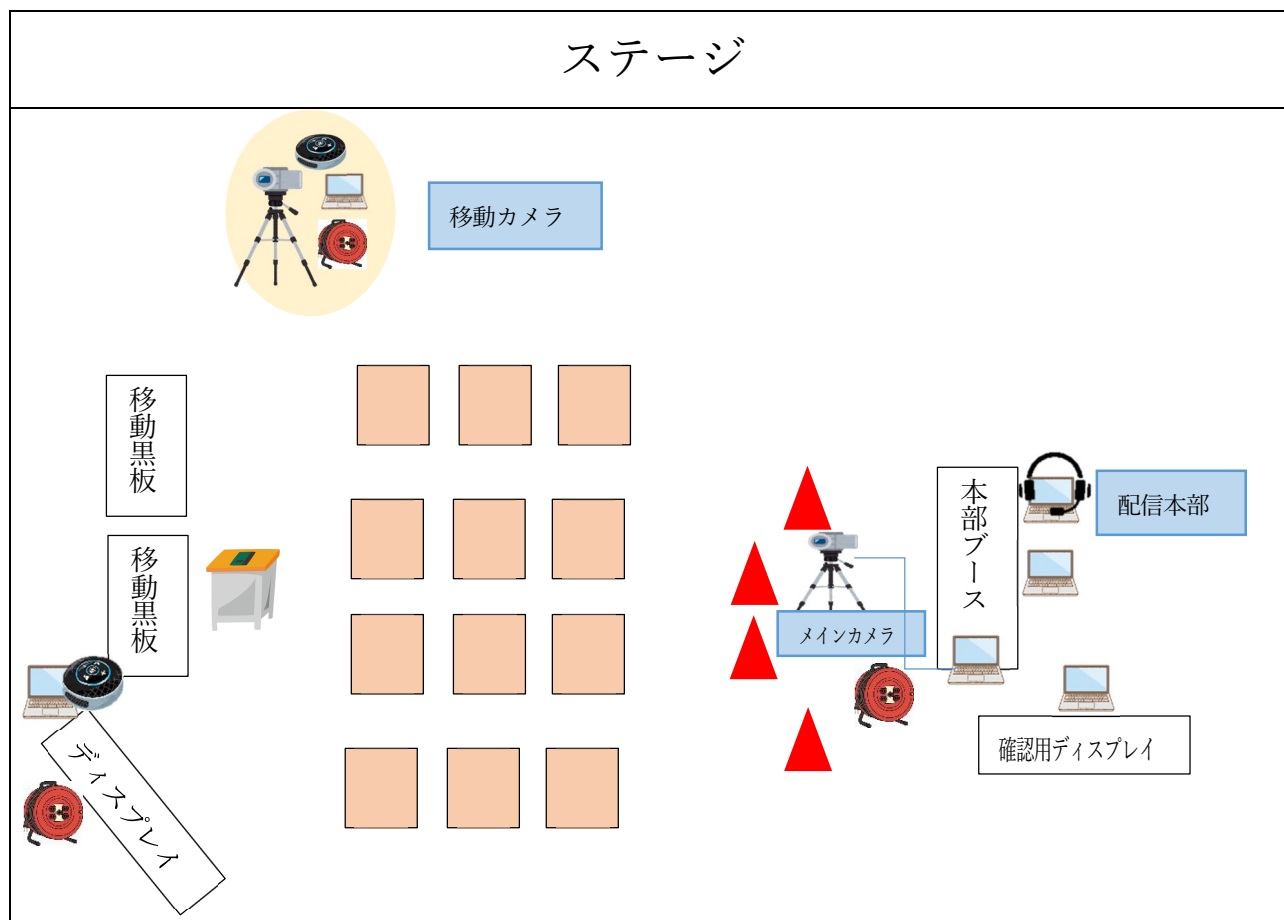
- ・振り返りの時間を確保できるようなタイムマネジメントが必要。
- ・児童の学習活動を適切に評価し、授業の改善に活用することに課題がある。
- ・学習の記録をICTに残すなど、振り返りや評価に活用する方法を検討したい。
- ・「効果的な振り返り」とはどんな振り返りなのか、校内で検討し共有する必要がある。

その他

- ・今まで行ってきた南富良野町学習過程スタンダードを今後はどのように授業に位置付けたり、学校としての授業づくりや授業の形態について検討していく必要がある。

10 配信状況の記録

(1) 機材配置図



(2) 機材一覧

本部ブース ・ホスト ・サブ ・全体カメラ	ノート PC とタブレット PC。 ノート PC はホスト用、タブレット PC は全体カメラ用。	・ホスト用ノート PC、ヘッドセット(音声確認) ・タブレット PC (サブアカウント用)
		ビデオカメラ(マイク付)、三脚、 タブレット PC、HDMI ※全体カメラのマイクはオフにする。
移動カメラ	台座にカメラ・マイク・PCを取り付ける。ドラムロールを伸ばして移動。	タブレット PC、カメラ、三脚(小)、 Web 会議用マイク(円盤形)、ドラムロール ※マイクの設定 ノイズキャンセルを弱
確認用ディスプレイ	配信画面用ディスプレイ。 ゲストアカウントで参加。	ディスプレイ、タブレット PC、HDMI-タイプ C コード ※体育館入口にも、動作確認用のタブレット 1 台 配置
授業用ディスプレイ	授業で資料等を提示するディスプレイ。 タブレットを下部の棚に置き、全体の音声を拾う。	ディスプレイ、タブレット PC、 Web 会議用マイク(円盤形)、ドラムロール ※マイクの設定 ノイズキャンセルを弱

(3) Zoom の各種設定

- ①ホスト用 PC は、職員室より **MFS-PC10** を使用。**ZoomWorkplace(アプリ)**よりログインする。
- ②タブレット PC は、サインインせずにミーティングに参加。なお、カメラに接続するため、HDMI を接続できる特支担任用 PC を使用する。

※各カメラ用 PC とアカウント名

用途	PC	アカウント名
ホスト、チャット対応	MFS-PC10	南富良野小ホスト
会場全体撮影	特支担①	会場カメラ
児童撮影用移動カメラ	特支担⑥	児童用カメラ
配信確認用(本部横)	特支担③	南富良野小サブ
動作確認用(体育館入口)	特支担②	確認用 P
音声用	3 年担	会場音声

- ③各 PC のログインが完了したら、ホストからブレイクアウトルームを作成。

「児童の様子」でルームを作り、**児童用カメラと南富良野小サブ**をルームに割り振る。

ブレイクアウトルームは、「参加者によるルーム選択を許可」に設定する。

- ④ホスト管理者(ICT 担当)は、ヘッドセットで音声の確認を行う。全体への呼びかけは、ヘッドセットもしくはチャットを通じてアナウンスする。

(4) 授業会場物品

会場用	配信機材
<input type="checkbox"/> ブース用長机×2 台 <input type="checkbox"/> 移動黒板×2 台 <input type="checkbox"/> 教卓机（授業者に確認） <input type="checkbox"/> パイプ椅子×1 セット <input type="checkbox"/> 大型扇風機たくさん（熱中症対策）	<input type="checkbox"/> 職員用ノート PC×1 <input type="checkbox"/> タブレット PC×5（3 年担、特支担①②③⑥） <input type="checkbox"/> ビデオカメラ×2（大小1 ずつ） <input type="checkbox"/> USB-HDMI カメラアダプタ×2 <input type="checkbox"/> ビデオ用三脚×2（大小1 ずつ） <input type="checkbox"/> ドラムロール×3 以上 <input type="checkbox"/> Web 会議用マイク×2 <input type="checkbox"/> ヘッドセット×1 <input type="checkbox"/> HDMI-TypeC ケーブル×1

※1 ブレイクアウトルームの音声確認は、ホストアカウントではなくサブアカウントを利用する。

サブアカウント用にもヘッドセット（イヤホン）があると便利。

※2 配信中、ブレイクアウトルーム解放時以外は、児童用マイクをオフにする。

第 74 回全道へき地複式教育研究大会

上川大会ファイナルステージ

IV 上川大会ファイナルステージを終えて



第 5 分科会 富良野市立樹海学校



第 6 分科会 南富良野町立南富良野小学校

第 74 回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ 大会振り返り

1 参加者について

(1) 参加状況

昨年の成果を生かし、参集型とオンライン配信型のハイブリッドで実施した。

特に2日目は、昨年に引き続き分科会ごとに実行委員会を組織することで、加盟校からも実行委員として多数参加があった。各実行委員では、昨年のノウハウを生かし、協力して運営しながら、研修を深めることができた。

参加者数は、1日目は昨年とほぼ変わらなかったが、2日目の分科会については、昨年度比 111% (50 名増) であった。

管外からの参加者は、昨年 2 割程度だったが、今年度は、1 日目管外からの会場参加者が 6 割、オンライン参加者は管外が 8 割を超えた。当日は申し込み 18 名中 5 名不参加だった。2 日目は、会場校のある市町村からの参加者が多く、管外からは 3 割弱の参加者だった。しかし、昨年よりは管外の参加者の増加が見られた。また、オンラインの参加状況は、公開授業については、4 つの分科会において 100% の参加率、6 つの分科会の平均は 89% であった。一方研究協議は、参加されなかった方が増加し、6 つの分科会のオンライン参加率平均は 48%、1 つの分科会は 0% であった。

(2) 参加集約

- ・ファーストステージの反省を受け、会場校のある市町村は別途集約、それ以外の参加者は一括してフォームで受け付けた。
- ・参加申し込みを 1 次案内から行うことで参加申込期間をしっかりと確保し、最終案内の締切りを延長せずに行った。締切り後の申し込みについては、数件事務局へ直接問い合わせがあった。

(3) 振り返り

- ・1 日目の総参加者は横ばいだが、分散会のみ参加も多く、開会式～基調報告に参加する人数が少なかった。次回大会では開会式にも参加していただくよう呼びかけを行うとよいのではないかな。
- ・2 日目は、昨年より参加者が増加した。上川管外の方の参加が増えたことはよかった。
- ・参加者増の要因として、①道へき・複連からの働きかけ ②道へき・複連総会で、前年度の参加状況・反省、今年度の参加申し込み方法・各地区へのお願いを直接伝えたこと ③一次案内、最終案内を道教委を通して全道の加盟校以外へも送付したこと が考えられる。
- ・次年度の石狩大会に向けて、やはり公開授業は実際に会場で子どもたちの姿を見てほしい。そのためにも道へき・複連とも連携をとりながら、会場での参加を積極的に呼びかけるとともに、遠隔地等のため、どうしてもオンラインでの参加になる場合には、会場校の準備へ配慮し、研究協議まで参加するよう、各地区での声かけをお願いしたい。

2 大会運営

【1 日目 全体会】

(1) 開会式・基調報告

- ・第 74 回全道へき地複式教育研究大会上川大会（ファイナルステージ）は、昨年と同じく旭川市大雪クリスタルホールを会場に、アトラクションとして士別市立温根別小学校の児童 10 名による力強い和太鼓演奏で幕を開け、開会式、基調報告、分散会を実施した。

- ・今大会においても、引き続き全へき連ブロック大会のオンライン配信を実施した。
- ・分散会の運営は、道へき・複連研究推進委員学習指導部長が中心となり、大会実行委員も配信本部としてサポートにあたることでスムーズに実施された。
- ・配信環境整備のため今年度も工事を行った。昨年の反省を受け、前日から会場を押さえ、Wi-Fiの開通作業を行ったのはよかった。
- ・大会における配信は、全へきから借用した zoom アカウント、機器は iPad を用いたが、機材の不具合等もあり、実行委員会で調達した機材も使用した。
- ・会場参加者には、大会研究紀要、開催要項、基調報告資料、参加者名簿の他、観光用パンフ・ボールペン等の小物を配付した。オンライン参加者へは郵送せず、上へきのドライブ及び道へき・複連 HP（限定公開）に資料を格納し、参加者へ URL を送付、各自で資料をダウンロードする形にした。但し、参加者名簿については格納せず、必要な方のみ事務局長へ連絡を入れていただき、参加者アドレスに送付した。
- ・オンライン参加者には一斉メールで zoom のミーティング ID とパスコードを伝えた。

（２）分散会

- ・道へき・複連常任委員・研究推進委員・現地実行委員（配信担当）が前日準備で顔を合わせ、事前に打ち合わせを行い、当日の配置や役割分担の詳細を協議できたことが大変良かった。当日の業務がスムーズに進行できた。次年度も計画できると良い。
- ・３会場とも前日に会場準備、配信準備、担当者打ち合わせを行えたため、時間的・心理的余裕をもって当日を迎えることができた。すべての会場で、予定どおりの開始・終了時刻で実施することができた。
- ・音響関係が良かったため、全体協議や助言内容を全て良い音で録音できた。音声を AI に落とすことで作業の効率化が図れた。
- ・オンライン配信の円滑な運営に不安があったが、大きなトラブルなく進められた。実行委員会から配信補助を配置できたため、オンライン参加者の参加確認や、配信本部との連絡調整を行えた。
- ・オンライン参加を充実させるため、オンライン参加者の映像を会場で共有し、運営者がオンラインで声かけすることも、意識や雰囲気を高めるきっかけになるのではないかな。

（３）振り返り

- ・前日から会場を押さえ、Wi-Fi 工事、会場準備、配信準備等を行えたことが良かった。
- ・道へき・複連常任委員・研究推進委員・現地実行委員（配信担当）は前日に顔合わせ、事前打ち合わせを行えると良い。
- ・参加者が参加する分散会・分科会を控えておらず、問い合わせが数件あった。参加者の参加分散会や分科会の誤りを減らすため、フォームでの参加申し込みの内容について参加者へ送付する等、参加者本人が確認できると安心である。

【２日目 分科会】

（１）分科会運営

- ・ファーストステージに引き続き、管内６校を会場校として分科会を開催し、公開授業、全体会、研究協議のすべてをオンライン配信し、ハイブリッド型で実施した。
- ・全道からの参加者に対応するため、広い授業会場の準備や、参加者の負担軽減を考慮した同じ場所での配置転換の工夫など、各会場校で多くの工夫を行った。

- ・不測の事態により、1つの授業を行えなくなってしまった会場もあったが、会場校が直前に代替案を準備し、子どもたちの学びの姿や学校・授業者の取組を紹介するなどに対応し、実施することができた。これに伴う参加者の会場変更などは生じなかったが、会場校に大きな負担をかけることとなった。会場校の対応に感謝するとともに、緊急時の対応マニュアルは、あらゆる事態を想定して準備しておくべきだと感じた。
- ・すべての分科会において、公開授業、全体会、研究協議、配信等を滞りなく進めることができた。会場校、協力校、実行委員会の事前準備、連携の大切さを改めて感じた。

(2) 配信関連

- ・ファイナルステージ1日目の分散会では、配信本部を設置し、画面やレコーディングの一元管理と確認を行った。配信本部を設置したことで、トラブルが無かったことと配信担当の負担軽減に有効だった。
- ・2日目の各会場校で使用する配信機材とブレイクアウトルームなどの配信方法をスプレッドシートを使って共有することができたため、配信担当者と会場担当者の情報共有がスムーズだった。
- ・各校2～3回の配信テストを行い改善を重ねることで映像・音声をクリアに届けることができた。
- ・当日全へきから借りるPCやiPadを前日準備の際に確認し、不具合があったアカウントのIDとPWを急遽変更した。オンライン参加者が変更したアカウントで参加できるよう待ち受け画面で周知するとともに、名簿で確認しながら参加していない参加予定者に直接連絡し、スムーズに参加者を誘導することができた。
- ・単焦点プロジェクターやHDMIケーブル、iPad充電器など、配信にかかわる機材が多く必要となった。事前の会場下見で何が必要か確認できたのでよかった。
- ・レコーディングができないなど、端末の不具合が想定されるので、できなかった場合を想定し、会場校でもローカルレコーディングを確実にしてもらう必要がある。

(3) 振り返り

- ・ハイブリッド型で実施し、公開授業・全体会・研究協議のすべてが円滑に進行した。
- ・各会場校の工夫と連携により全道からの参加者にも柔軟に対応でき、参加者からは学びの充実度や運営の円滑さに対して高い評価を得られた。
- ・得られた研究の成果と課題を今後のへき地・複式教育の研究推進に生かしていく。
- ・運営面における緊急対応マニュアルの充実や代替コンテンツの事前準備により、柔軟かつ負担の少ない対応を目指す必要がある。
- ・ファースト、ファイナルともにオンライン参加者が少なかった。各校では配信準備に多くの時間や費用（市町村負担の場合もあり）をかけている。今後は、期待参加数の提示などを含め、参加者を増やす方策の検討が必要である。

3 連絡手段

- ・事務局・役員・会場担当者との情報共有のため、今年度もgoogleスプレッドシートを活用した。同じシートを見ながら修正できる利点があり、円滑に調整を進めることができた。Zoomでの配信テストではチャットを使いながら機器を調整し、本番での円滑な配信につなげることができた。
- ・会場校、実行委員との連絡メールは上へき・複連アカウントのGmailを利用したことで、複数の実行委員会が確認でき、迅速な対応や情報共有をすることができた。

4 運営費用

- ・本大会の運営は、道へき・複連からの助成金および上へき・複連からの積立金、及び管内 21 市町村からの助成金を運営費に充てた。助成金については、実行委員会からの要請や管内教育委員会連合会への働きかけによるもので、今後も大会運営を行う場合は関係機関との連携が重要である。
- ・費用として大きかったものの 1 つに wi-fi の工事費用がある。昨年度は予想以上に費用がかかり予算をオーバーしてしまったが、今年度は昨年の決算から費用を想定して予算を増やすことで対応した。
- ・大会紀要や大会研究記録の印刷製本をインターネット印刷通販会社に依頼し、質を落とさず費用削減を図ることができた。
- ・大会紀要の印刷製本にかかる費用については、管内加盟校参加者用の大会研究紀要をデータ配付とすることで、一層の費用削減を図った。

5 その他

- ・大会での写真撮影のガイドラインを決め、参加者にメールや掲示で周知したことで混乱なく対応することができた。実行委員の撮影は、腕章を実行委員会で購入・作成。担当者は必ず着用するなど、ガイドラインに沿って撮影を行った。
- ・全へき連のオンデマンド配信は上へき・複連との連携により、昨年度よりも早く 10 月に配信を開始することができた。

6 各分科会の成果と課題

※各会場校の成果と課題の抜粋

第 1 分科会	成 果	<ul style="list-style-type: none">・同時間接指導を中心とした学習展開により、児童は自らが学びの主体であることを意識し、課題解決に意欲的に取り組む姿が見られた。学力下位層の児童にも柔軟に対応でき、つまずきや戸惑いに応じた適切な支援が可能となった。・ ICT 機器やアプリの効果的な活用により、児童は自分に合った解決方法を見つけたり、考えを整理したりすることができた。また、少人数の中で協働的に課題に取り組む場面では、対話的な学びを支える手段としても有用であった。・ 自己評価と到達度の一致を図る取組を通して、児童は自らの学習を振り返る視点を持ち、次の学習に向けた課題意識や追究の姿勢を高めることができた。
	上 士 別 小 課 題	<ul style="list-style-type: none">・ 児童が主体的に学びに取り組むためには、日常的な学習の中で課題への見通しや追究の方法を自分で考える力を育てる必要がある。・ ICT 機器やアプリの活用に向けては、学年に応じた操作指導と、教師自身のスキル向上のための校内研修の充実が求められる。・ 少人数学級における対話的な学びの広がりには限界があり、遠隔授業などを活用して多様な意見に触れる機会を設ける工夫が必要である。・ 評価規準に基づいた振り返りの定着には、日常的に自己評価の方法を指導し、次時の学習につながるよう教師が適切に支援する体制づくりが重要である。

第2分科会 幌加内小学校	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔合同授業は、へき地校においても多様な考えに触れることができ、両校にとって効果的であった。他校とつながることで、児童の意欲や集中力にもつながった。 ・遠隔合同授業により、道徳以外の教科や活動にも展開できる可能性が広がった。 ・導入や展開の場面で意図を明確にした ICT の活用ができた。また、ICT を活用して意見を可視化することにより、協働的な学びへとつなげることができた。 ・導入、振り返りを工夫し、自分事に移行しやすい学習の流れを確立させた。 ・学習リーダーにおいて、役割を絞った上で継続的に取り組んだことにより、複式の間接指導を児童が主体的に進められるようになった。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・複式指導における道徳の授業では、直接指導と間接指導のバランスを考えた時間配分が必要である。間接指導でも自己を見つめ、他者と協働しながら多面的・多角的に考えを深めていけるよう、更なる手立てを考えていかなければならない。 ・遠隔合同授業において、実践や打ち合わせを重ね試行錯誤することで改善を図ることができた。一方で準備に費やす労力や時間など、負担も大きくなってしまった。ICT 機器に詳しい教職員がいないと、方法や改善策を検討することも難しいため、持続可能な方法を模索していく必要がある。
第3分科会 東川第二小学校	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・間接指導の場面では、子ども同士が相談・解決しながら学びを選択したり、既習事項を確認できる工夫をしたりすることで、主体的な学びにつながった。 ・見通しをもたせることで、リーダーによる進行に沿って意欲的に学習に臨む姿が育まれた。既習内容を生かした流れや声掛けにより、児童の思考が途切れることなく続いた。 ・児童の実態に即した学習環境を工夫することで、安心して授業に集中できるようになった。 ・ICT の活用により、友達との考えの比較やヒントの取得がしやすくなり、子ども同士の学び合いや学びの深化に効果があった。 ・近隣校と共同で研究を進め、授業改善の視点が広がり、効果的な授業づくりにつながった。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに委ねる時間を確保することを意識した授業づくりを進めてきたが、教師主導で学習を進める場面とのバランスについて、今後も考えていく必要がある。1 単位時間だけでなく、単元全体の計画を構築していくようにする。 ・間接指導につながる直接指導では、児童が本時で「何を学ぶか」「何ができるようになればよいのか」を一人一人が把握できるよう、課題設定の工夫が必要である。 ・デジタルを活用する場面とアナログで行う場面を両立させ、ICT の良さとノートの良さを教師が把握した上で、学年の発達段階に応じて系統立てる必要がある。 ・授業の中で、目標達成状況の把握をどの場面で行うか計画・評価することが必要である。
第4分科会 美馬牛小学校	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・どの学年も発達段階に応じて、学習リーダー中心に授業を進めることができた。教師の待つ姿勢や同時間接の学習形態も、児童主体の授業づくりに効果的だった。 ・実物や ICT による提示、生活に密着した問題などの工夫により、知的好奇心や見通す力が高まった。算数用語パネルの蓄積も課題設定に活用され、学びの焦点化につながった。 ・「問い返し発問」によって、思考が広がり、互いの考えの深化にもつながった。 ・友達の考えを自由に見られる場の設定（白紙共有）を行うことで、友達の考えをヒントにしながら、自分なりの考えをもったり考えに自信をもったりすることができた。 ・スプレッドシートによる振り返りでは、学びの蓄積や変容を実感することができた。

第4分科会 美馬牛小学校	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・児童主体で進める中で、課題やまとめが本時の目標とつながらない場面がある。課題とゴールの共有によって学びの方向性を明確にする必要がある。 ・学習内容の定着には習熟時間の確保が必要。ノート交流や実物投影機では比較しづらいため、ホワイトボードやICTなど、比較しやすい教具の活用が求められる。 ・児童が困ったときの教師の発問や指示による軌道修正が重要で、個人思考と集団思考を分けず、できた児童から交流することで考えの深化や関心が広がる。 ・少人数指導ではスタディログや遠隔でのClassroom、生成AIなどを活用し、児童が複数の考えを練り合わせて正答を導く機会を設ける。ループリックの活用や視点を絞った振り返りも効果的である。
第5分科会	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言葉で説明し間違いも含め発表する文化が育ち、安心して表現できる環境が整った。 ・複式学級の少人数という特性を生かし、リーダー学習や机配置の工夫により、児童生徒同士の関わりが深まり、学び合いながら課題に取り組む姿が見られた。 ・算数科では、既習事項を活用し、分数や図形の意味、通分や複合図形の面積の課題解決を行った。ICTにより図や説明の共有が進み、思考の可視化と比較が可能となった。 ・体育科では、キャッチバレーなどの工夫により、「どうすれば落とさないか」を考える場面が生まれ、技能習得と思考の両立が図られた。 ・異学年交流で上級生が下級生に教える中、知識の活用と縦のつながりが育まれた。
樹海学校	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを表現するためには、複式指導における時間配分と、思考・判断の場面の保障が重要である。そのためには、適切な課題提示や発問、効果的なICTの活用をより一層深めていく必要がある。 ・円の中心の意味など、図形の本質的理解に至らない児童がいたため、見方・考え方を働かせる場面の時間が十分に確保できなかった。複式指導においては、時間配分の工夫と思考・判断の場면을十分に見取る時間の確保が必要である。 ・学年ごとの指導事項や評価規準の違いにより、観察や評価が難しくなる場面があるため、見取りをしやすくする単元構成などの工夫が求められる。
第6分科会 南富良野小学校	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しを丁寧に行うことで、児童に安心感を与えることができていた。 ・ICTの活用が進み、他者参照や交流が可能となった。学びの蓄積にもつながり、次の時間に動画として共有できる点も有効であった。 ・話し合いの素地ができており、これまでの蓄積の成果が見られた。今後は、話し合いの型に頼りすぎない方法の検討も求められる。 ・話し合いカードを使った活動により、活発な話し合いが生まれ、低位の児童の救い上げにもつながった。 ・ピクトグラムを用いた振り返りの視点の提示が効果的で、内容を充実させることができた。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しは丁寧すぎると個人思考の深まりを損なうため、程度の検討が必要である。問いや見通しの工夫により、児童の興味・関心や意欲を高めたい。 ・具体物の準備はされていたが主体的な学びにはつながらず、提示や操作方法の工夫が求められる。ICTも単元計画の中で効果的な活用場面を検討するとよい。 ・個人思考の後にペア活動を挟むことで思考の深化が期待できる。学習形態や話し合いのねらいを児童と共有し、意見を広げる話し合いの力を育てたい。 ・振り返りの時間確保にはタイムマネジメントが必要であり、学習記録のICT活用や観点の共有を通じて、評価と授業改善につなげる工夫が求められる。

全道へき地複式教育研究大会上川大会 業務報告

〈令和5年〉

4月25日	第8回胆振大会実行委員会・研修会参加（洞爺湖サミット記念館）
4月2日	上川へき地・複式教育研究連盟総会
5月9日	上川大会第1回実行委員会事前打ち合わせ（オンライン開催）
5月11日	上川大会胆振大会事務局と引継（札幌ライフオート）
5月11日	道へき・複連総会（札幌ライフオート）
5月19日	上川大会第1回実行委員会・研修会（上川教育研修センター）
7月6日	上川管内教育委員会連合会 教育長部会訪問～挨拶及び協力依頼
7月7日	上川大会第2回実行委員会・研修会（上川教育研修センター）
7月18日	会場校市町教育委員会挨拶廻り（幌加内町・東川町）
7月20日	会場校市町教育委員会挨拶廻り（美瑛町・中富良野町）
7月24日	会場校市町教育委員会挨拶廻り（富良野市）
7月末日	上川大会プロモーションビデオ素材収集〆切
9月13日	全道へき地複式教育研究大会胆振大会（ファイナルステージ）
9月14日	上川管内より参加者合計：役員3名，校長17名，教頭9名，教諭18名参加 1日目参加者【32名】（内訳：会場14名，オンライン18名） 2日目参加者【39名】（内訳：会場22名，オンライン17名）
10月11日	上川管内教育委員会連合会 教育長部会訪問～R6・7負担金協力依頼
11月9日	会場校市町教育委員会挨拶廻り（南富良野町）
11月21日	会場校市町教育委員会挨拶廻り（士別市）
12月5日	臨時大会実行委員役員会（Zoom開催）
12月8日	上へき・複連第3回常任委研修会②・第2回評議員研修会
12月末日	授業校プロモーション 素材集め・流れ・シナリオ作成〆切

〈令和6年〉

2月19日	上川大会第3回実行委員会・研修会（上川教育研修センター及びオンライン）
4月25日	令和6年度上川へき地・複式教育研究連盟総会
5月15日	第4回実行委員会事前ブーム会議（Zoom開催）
5月24日	上川大会第4回実行委員会・研修会（上川教育研修センター）
6月18日	道へき・複連常任委員会（ホテルライフオート札幌）【井上実行委員長】
6月25日	挨拶廻り【旭川市（局・市教委）・幌加内町教委・士別市教委・名寄市教委】 小野田道へき・複連委員長・井上実行委員長・荒川事務局長・会場校校長
6月26日	挨拶廻り【東川町教委・美瑛町教委・中富良野町教委・富良野市教委・南富良野町教委】 小野田道へき・複連委員長・井上実行委員長・荒川事務局長・会場校校長
7月5日	上へき・複連 第2回常任委員研修会、第1回評議員研修会
8月5日	第5回実行委員会事前ブーム会議（Zoom開催）
8月7日	上川大会第5回実行委員会・研修会（会同及びZoom開催）旭川市民活動交流センター（CoCoDe 会議研修室1）
8月8日	道へき・複連常任委員会（ホテルライフオート札幌）【井上実行委員長・桑原上へき委員長】
8月21日	クリスタルホールとの事前打ち合わせ 14:00～15:00 【島村総務部長・長井研究部長・荒川事務局長・早坂事務局次長】

9月17日	【前日準備】第73回全道へき地複式教育研究大会 上川大会（旭川市大雪クリスタルホール 1階 第3会議室）
9月18日	第73回全道へき地複式教育研究大会 上川大会ファーストステージ【1日目】 ～全体会・基調報告・分散会・歓迎交流会（旭川市大雪クリスタルホール・アートホテル）～
9月19日	第73回全道へき地複式教育研究大会 上川大会ファーストステージ【2日目】 分科会6会場～士別市・幌加内町・東川町・美瑛町・富良野市・南富良野町
9月20日	大会直後挨拶回り～旭川市(局・市教委)・東川町教委・中富良野町教委 【小野田大会長・井上実行委員長・荒川事務局長】
10月7日	上川管内教育委員会連合会 教育長部会訪問【実行委員長・事務局長】
10月28日	第6回実行委員会事前ズーム会議（Zoom 開催）
11月8日	上川大会第6回実行委員会・研修会（上川教育研修センター）
12月6日	上へき・複連第3回常任委研修会②・第2回評議員研修会

〈令和7年〉

1月27日	道へき・複連 第5回常任委員会（ホテルライフオート札幌） 【高館道へき・複連総務部長・井上ファーストステージ実行委員長・荒川事務局長】
2月12日	第7回実行委員会事前ズーム会議（Zoom 開催）
2月21日	上川大会第7回実行委員会・研修会（ときわ市民ホール）
2月26日	最終監査（上川教育研修センター）
4月14日	上川大会実行委員会・会場校会議（オンライン）
4月28日	令和7年度上川へき地・複式教育研究連盟総会
4月30日	総務部クリスタルホール会場確認【島村総務部長、成田総務副部長、荒川事務局】
5月8日	道へき・複連常任委員会（ホテルライフオート札幌）【荒川事務局長】
5月9日	道へき・複連定期総会（ホテルライフオート札幌）【山田実行委員長、荒川事務局長】
5月12日 ～13日	道へき・複連研究推進委員会（ホテルライフオート札幌） ＜大会実行委員会 進捗状況報告・分散会 運営計画検討＞【長井研究部長】
5月16日	第8回実行委員会事前ズーム会議（Zoom 開催）
5月23日	上へき・複連 第1回常任委員研修会（上川教育研修センター） 上川大会第8回実行委員会・研修会（上川教育研修センター及び Zoom 開催）
6月4日	一次案内送付
6月5日	挨拶回り【東川町教委・旭川市(局・市教委)・幌加内町教委・士別市教委・名寄市教委】 道下道へき・複連委員長・山田実行委員長・荒川事務局長・会場校校長
6月6日	挨拶回り【美瑛町教委・富良野市教委・南富良野町教委】 道下道へき・複連委員長・山田実行委員長・荒川事務局長・会場校校長
6月17日	道へき・複連 第2回常任委員会（山田実行委員長・荒川事務局長）
7月3日	最終案内送付
7月4日	第2回常任委員研修会、第1回評議員研修会（上川教育研修センター）
7月29日	第9回実行委員会事前ズーム会議（Zoom 開催）
8月4日	道へき・複連 第3回常任委員会（山田実行委員長）
8月5日	上川大会第9回実行委員会・研修会【第1部】（研修センター及び Zoom 開催） 上川大会第9回実行委員会・研修会【第2部】（研修センター及び Zoom 開催）
8月19日	クリスタルホールとの事前打ち合わせ 14:00～15:00 【島村総務部長・長井研究部長・成田研究副部長・荒川事務局長】

9月16日	【前日準備】第74回全道へき地複式教育研究大会 上川大会ファイナルステージ (旭川市大雪クリスタルホール)
9月17日	第74回全道へき地複式教育研究大会 上川大会(ファイナルステージ)【1日目】 ～全体会・基調報告・分散会・歓迎交流会(旭川市大雪クリスタルホール・アートホテル)～
9月18日	第74回全道へき地複式教育研究大会 上川大会(ファイナルステージ)【2日目】 分科会6会場～士別市・幌加内町・東川町・美瑛町・富良野市・南富良野町
9月19日	大会直後挨拶回り～旭川市(局・市教委)・東川町教委・旭川市教委・士別市教委 美瑛町教委・富良野市教委・南富良野町教委 【道下大会長・前田道へき事務局長・山田実行委員長・荒川事務局長・各会場校または担当市町村委員長】
9月22日	大会直後挨拶回り～幌加内町教委【山田実行委員長】
10月1日	全へき連のオンデマンド配信準備が整い、参加者へ案内送付
11月4日	上川大会第10回実行委員会事前ズーム会議(Zoom開催)
11月12日	上川大会第10回実行委員会・研修会(Zoom開催)
12月5日	上へき・複連 第3回常任委員研修会、第2回評議員研修会

各部活動報告

【総務部】

2月12日	第7回実行委員会事前ズーム会議(Zoom開催)
2月21日	上川大会第7回実行委員会・研修会(ときわ市民ホール)
4月14日	上川大会実行委員会・会場校会議(Zoom開催)
4月30日	上川大会 クリスタルホール下見 ・wi-fi 工事に関わる会場確認
5月15日	研究紀要原稿依頼発出 ・上川教育局長、教育委員会連合会会長、全へき会長、道へき委員長、 大会実行委員長、上へき委員長
5月16日	上川大会第8回実行委員会事前ズーム会議(Zoom開催)
5月23日	上川大会第8回実行委員会・研修会(上川研修センター) ・総務部業務計画提案・確認(配信関係について) ・研修会
7月29日	上川大会第9回実行委員会事前ズーム会議(Zoom開催)
8月5日	上川大会第9回実行委員会(上川研修センター) ・各部の進捗状況確認 ・弁当の発注先決定(美味しんぼ弁当)
8月7日	上川大会配信打ち合わせ(麓郷小中学校)
8月19日	上川大会 クリスタルホール下見 ・wi-fi 工事に関わる会場確認、使用物品確認
8月21日	弁当発注 ・役員及び実行委員(1000円×49個 ※回収費込み) ・温根別小(1000円×15個 ※回収費込み)

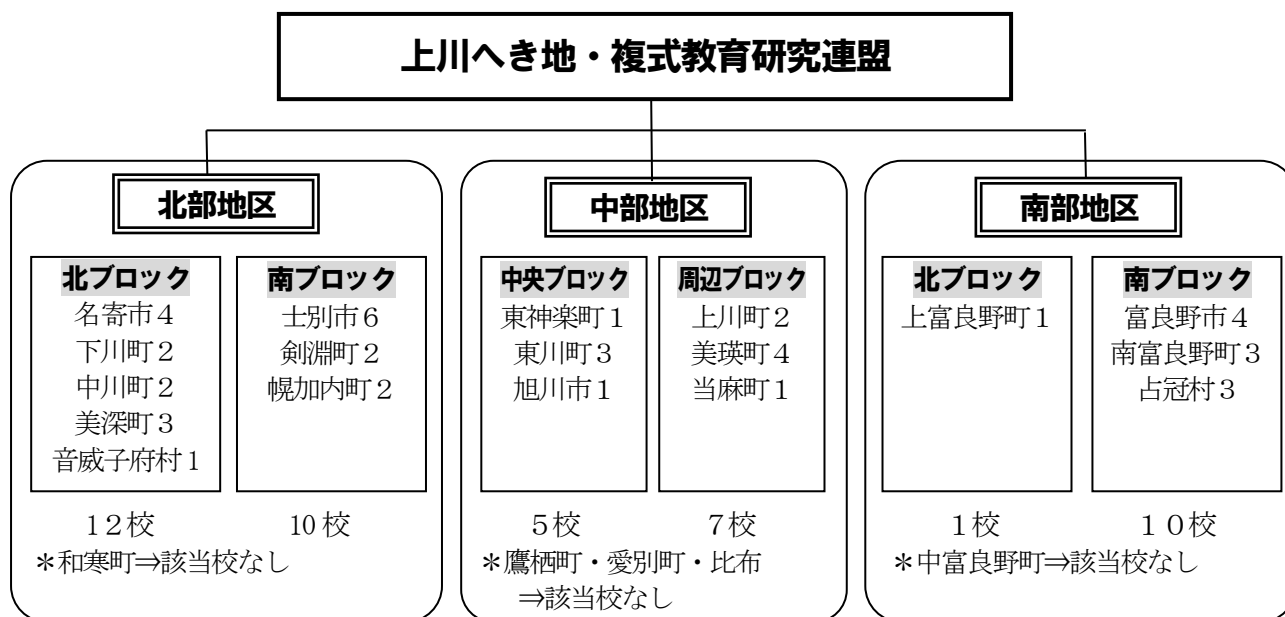
9月 2日	研究紀要印刷製本終了、納品(総務部長) ・来賓、市教委へ発送
9月 16日	前日準備 ・wi-fi 工事立ち合い、設定(PC・iPad)
9月 17日	上川大会ファイナルステージ 1 日目
9月 18日	上川大会ファイナルステージ 2 日目
【配信テスト】 ①7/3…幌加内小 ②7/9…南富良野小 ③7/17…上士別小 ④7/28…樹海学校 ⑤8/21…美馬牛小 ⑥8/28…上士別小 ⑦8/29…東川第二小 ⑧9/4…南富良野小	

【研究部】

2月 12日	第7回実行委員会事前ズーム会議 (Zoom 開催)
2月 21日	上川大会第7回実行委員会・研修会 (ときわ市民ホール)
4月 14日	上川大会実行委員会・会場校会議 (Zoom 開催) ・研究部年間活動予定 提案 ・分科会作成資料 (研究概要・開催要項・研究紀要・指導案綴等) 提案、作成依頼 ・分科会運営計画 提案
4月 28日	会場校一次案内 提出
5月 12日 ～13日	道へき・複連 第1回研究推進委員会 (ライフオート札幌) ・大会実行委員会 進捗状況報告 ・分散会運営計画 提案①
5月 16日	第8回実行委員会事前ズーム会議 (Zoom 開催)
5月 23日	上へき・複連 第1回常任委員研修会 (上川教育研修センター) 上川大会第8回実行委員会・研修会 (上川教育研修センター及び Zoom 開催) ・分科会作成資料、分科会運営計画 確認 ・分散会運営計画 提案
5月 27日	上へき・複連 第1回研究部会研修会 (上川教育研修センター) ・研究推進計画・研究解明の手引き作成計画・分科会基調報告原案 提案 ・大会協力体制 確立
5月 30日	会場校二次案内 (最終案内) 提出
6月 12日	会場校研究概要 提出
7月 4日	第2回常任委員研修会、第1回評議員研修会 (上川教育研修センター)
7月 7日 ～ 8日	道へき・複連 第2回研究推進委員会 (ライフオート札幌) ・大会実行委員会 進捗状況報告 ・分散会運営計画 提案②
7月 24日	分科会開催要項 (参加者名簿以外) 提出 基調報告 (全体会) 完成
7月 29日	第9回実行委員会事前ズーム会議 (Zoom 開催)
8月 5日	上川大会第9回実行委員会・研修会【第1部】(研修センター及び Zoom 開催) 上川大会第9回実行委員会・研修会【第2部】(研修センター及び Zoom 開催) ・分科会作成資料 進捗状況確認、今後の日程確認 ・分散会運営計画 報告 (道へき・複連研究推進委員会)

8月 7日	上川大会分散会配信打ち合わせ（麓郷小中学校）
8月 19日	クリスタルホール会場事前打ち合わせ ・分散会会場配置・使用機材等 確認
8月 20日	大会研究紀要 入稿（印刷通販プリントパック） ・オンライン入稿
8月 21日	分科会作成資料（参加者名簿・研究紀要・指導案綴・封筒） 提出 基調報告（分科会） 完成
9月 1日	大会研究紀要 納品・発送（実行委員会総務部）
9月 5日	基調報告（全体会）発表資料・発表原稿 完成
9月 16日	第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ【前日準備】 （旭川市大雪クリスタルホール・東川第二小学校） ・大会研究紀要 配付（実行委員会総務部） ・前日準備、リハーサル等 道へき・複連 第3回研究推進委員会（同会場） ・分散会運営計画 最終確認、会場設営
9月 17日	第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ【1日目】 （旭川市大雪クリスタルホール・アートホテル） ・全体会・基調報告・分散会・歓迎交流会
9月 18日	第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ【2日目】 （分科会6会場～士別市・幌加内町・東川町・美瑛町・富良野市・南富良野町） ・公開授業、基調報告、研究発表、研究協議
9月 18日	道へき・複連 道へき情報紙 原稿（基調報告・分散会） 依頼・作成
9月 29日	大会研究集録 原稿一次集約（巻頭言、開催要項、記録写真等）
10月 3日	大会アンケート 入力締切、集約
10月 9日	大会研究記録 原稿二次集約（会場校の研究、配信方法、大会振り返り、業務報告）
10月 17日	大会アンケート 結果周知（各会場校）
10月 23日	道へき・複連 道へき情報紙 原稿（基調報告・分散会） 提出
11月 4日	上川大会第10回実行委員会事前ズーム会議（Zoom 開催）
11月 12日	上川大会第10回実行委員会（Zoom 開催）
11月 19日	大会研究記録 入稿（印刷通販プリントパック） ・オンライン入稿→原稿チェック→印刷→製本→発送（6営業日） 上へき・複連第3回研究部研修会 ・大会業務反省
12月 3日	大会研究記録 納品（実行委員会総務部）
12月 5日	上へき・複連 第3回常任委員研修会、第2回評議員研修会 ・大会研究集録 配付（実行委員会総務部） ・会場校資料（参加者配付資料セット） 集約

令和7年度 上川へき地・複式連教育研究連盟 加盟校一覧



《ブロック別学校一覧》

R7. 4. 1現在 45校（昨年度より4減）

地区	ブロック	市町村	学校数		学 校 名
北部	北	名 寄 市	12	4	中名寄小・智恵文小中・風連中央小・風連中
		下 川 町		2	下川小・下川中
		中 川 町		2	中央小・中川中
		美 深 町		3	仁宇布小中・美深小・美深中
		音威子府村		1	音威子府小中
	南	士 別 市	10	6	温根別小・上士別小・上士別中・多寄小・糸魚小・朝日中
		剣 淵 町		2	剣淵小・剣淵中
		幌 加 内 町		2	幌加内小・幌加内中
中部	中央	東 神 楽 町	5	1	志比内小
		東 川 町		3	東川第一小・東川第二小・東川第三小
		旭 川 市		1	江丹別小中
	周辺	上 川 町	7	2	上川小・上川中
		美 瑛 町		4	美沢小・美馬牛小・明徳小・美馬牛中
		当 麻 町		1	宇園別小
南部	北	上富良野町	1	1	東中小
	南	富 良 野 市	10	4	樹海学校・鳥沼小・山部小・麓郷小中
		南富良野町		3	南富良野西小・南富良野小・南富良野中
		占 冠 村		3	占冠中央小・占冠中・トマム学校

* R6年度末閉校…中富良野町西中小、旭中小、旭川市嵐山小中の3校

* R6年度末休校…幌加内町朱鞠内小の1校

令和7年度 第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ
 <全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会>

令和7年度 実行委員会 組織図



地区実行委員会 <委員長・事務局長会議>

地区実行委員による、分科会推進の取組

○地区実行委員会は、役員と各地区の委員長・事務局長で組織し、全体運営・連絡調整にあたる。

○上川管内を6地区に分け、6会場にて公開授業・研究協議を実施する。

<士別地区、幌加内地区、東川地区、美瑛地区、富良野地区、南富良野地区>

○各地区にて大会準備委員会・研究部との連携の下、研究公開校（会場校）を中心に、分科会運営に向けた取組を推進する。（6地区）

・分科会に向けての準備計画、役割分担、会場設定、研究内容（提言・授業内容）等の確認

*研究公開校は研究内容の提言、授業公開に専念し、公開校以外の学校が事務的な準備作業や当日の運営を行う。

※ 基本的には、総務・研究の二部制とする。（会計は事務局に含む）

令和7年度 北海道へき地・複式教育研究連盟 役員名簿

役職名	氏 名	地区	学校名	電話番号
顧 問	柿崎 秀顕 (全国へき地教育研究連盟特別顧問)		北海道教育大学札幌校	011-778-0684
	温泉 敏 (全国へき地教育研究連盟会長)		北海道教育大学釧路校	0154-44-3205
委員長	道下 誠	後志	泊村立泊小学校	0135-75-2003
副委員長	総務部長 落合 利広	オホーツク	遠軽町立白滝小学校	0158-48-2026
	研究部長 高橋 郁子	日高	日高町立厚賀小学校	01456-5-2154
監 査	嶋本佳世子	留萌	苫前町立苫前小学校	0164-64-2440
	高館 正司	上川	下川町立下川小学校	01655-4-2023
財政部長	高橋 仁	石狩	千歳市立駒里小中学校	0123-23-3237
事務局長	前田 道弘	胆振	白老町立白老中学校	0144-82-2026
事務局次長	長澤 啓二	十勝	更別村立上更別小学校	0155-52-2461

令和7年度 北海道へき地・複式教育研究連盟 研究推進委員

地 区	役・担当	氏 名	学校名	電話番号
胆 振	研究推進委員長	羽根 秀哉	洞爺湖町立とうや小学校	0142-82-5051
檜 山	研究推進副委員長	北川 美香	今金町立種川小学校	0137-82-0506
根 室	研究推進副委員長	辻 由子	根室市立厚床小中学校	0153-26-2142
オホーツク	学校・学級経営部長	木下めぐみ	北見市立相内小学校	0157-37-2824
空 知	学校・学級経営部	船越 一郎	深川市立北新小学校	0164-23-3480
後 志	学校・学級経営部	吉田 貴	神恵内村立神恵内小学校	0135-66-2775
渡 島	学校・学級経営部	佐々木道彦	北斗市立島川小学校	0138-77-8625
上 川	学校・学級経営部	長井 香征	上川町立上川小学校	01658-2-1429
十 勝	学習指導部長	増田 覚	鹿追町立瓜幕小学校	0156-67-2323
石 狩	学習指導部	鬼塚 建次	石狩市立浜益小学校	0133-79-3124
日 高	学習指導部	遠山 昌志	平取町立二風谷小学校	01457-2-2572
留 萌	学習指導部	平田 佳子	初山別村立初山別小学校	0164-67-2451
宗 谷	学習指導部	有路 直人	枝幸町立音標小学校	0163-66-1073
釧 路	学習指導部	柏尾 和市	標茶町立中茶安別小中学校	015-488-6133

令和7年度 北海道へき地・複式教育研究連盟 委員長（会長）・事務局

地 区	委員長		事務局長		
	氏 名	学 校	氏 名	学 校	電話番号
石 狩	鳴海 孝則	千歳市立支笏湖小学校	笠井 賢吾	千歳市立東小学校	0123-21-3200
空 知	古畑 聡子	岩見沢市立メープル小学校	梶沼 登資	栗山町立角田小学校	0123-72-0519
後 志	三上 智之	寿都町立潮路小学校	植木 義明	仁木町立銀山小学校	0135-33-5314
渡 島	中田 和久	八雲町立浜松小学校	白鳥 宏幸	七飯町立峠下小学校	0138-65-2415
檜 山	工藤 崇	せたな町立久遠小学校	小原なおみ	せたな町立久遠小学校	01398-4-5018
胆 振	柴田 暦章	洞爺湖町立洞爺湖温泉小学校	市嶋 信一	豊浦町立大岸小学校	0142-84-1011
日 高	佐藤 正寿	様似町立様似小学校	熊谷 真	浦河町立堺町小学校	0146-22-2391
上 川	山田 顕次	音威子府村立音威子府小中学校	島村 圭吾	富良野市立麓郷小中学校	0167-29-2021
留 萌	嶋本佳世子	苫前町立苫前小学校	酒井 康有	小平町立鬼鹿小学校	0164-57-1160
宗 谷	中村 繁仁	稚内市立天北小中学校	塩原 千夏	稚内市立宗谷小学校	0162-77-2010
オホーツク	落合 利広	遠軽町立白滝小学校	山田 敏弘	北見市立上常呂小学校	0157-38-2234
十 勝	和嶋 康彦	広尾町立豊似小学校	藤井 将弘	幕別町立糠内小学校	0155-57-2240
釧 路	伊藤 善一	白糠町立茶路小中学校	大山 淳子	浜中町立散布小中学校	0153-67-2324
根 室	今井 浩文	別海町立上風連小学校	川村 幸樹	別海町立上春別小学校	0153-75-6364

あとがき

カムイミントラ～神々が遊ぶ庭～ と称される大雪山の麓、ここ上川において第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージを開催し、そして、その成果をまとめた研究集録を発刊できますことに、心から感謝申し上げます。

「北の大河の源流 上川の地で育つ子らに 未来を切り拓き 夢を実現する力を」の大会スローガンを掲げ、参集とオンラインのハイブリット型で大会運営を行い、ライブ配信はもちろんのこと、オンデマンドでも配信し、参集した方もオンラインでの参加者も、等しく分散会や分科会の様子が見られるよう配慮いたしました。私たち上川へき地・複式教育研究連盟が中心となり組織した本大会の実行委員会も、大会の成功に向け幾度となく会議、打合せを重ねてまいりました。また、ファーストステージを終えて多くの手応えを感じつつも翌年への課題を克服すべく準備を進め、当日の運営にあたったところです。

参加された皆様におかれましては、私たちの行き届かぬ点や不手際によりご不便、ご迷惑をおかけしたところもあったのではないかと憂慮しております。この場を借りてお詫び申し上げます。

さて、大会は1日目に、基調報告として、これまで上川へき地・複式教育研究連盟が取り組んできた研究の成果や、全道へき地複式教育研究大会上川大会に向けた研究推進内容及びファーストステージ大会の成果と課題などについて報告いたしました。引き続き行われた分散会では、3名の提言者の発表に基づき、討議の柱を深めることができました。貴重なご提言をいただいた皆様には改めて感謝申し上げます。

2日目は、管内6会場で実施した分科会において、少人数や複式の授業をとおして子どもたちが主体的・協働的に学ぶ生き生きとした姿を見ていただくことができました。その後の研究協議も、参集された皆様とオンライン参加者それぞれが意見を交わすことで、充実した研究協議が行われました。

道内の加盟校、多数の参加者のお力添えをいただき、多くの成果を挙げる事ができた本大会の様子をまとめたこの研究集録が、次年度開催の石狩大会へと引き継がれ、併せて道内外の小規模校やへき地複式校の教育の充実・発展の一助となれば幸いです。

結びになりますが、本研究集録の編集にあたり北海道教育庁上川教育局・空知教育局、上川管内教育委員会連合会教育長部会、上川管内各市町村教育委員会、北海道へき地・複式教育研究連盟の皆様には多大なるご支援を賜り、かつ貴重なご指導、ご助言をいただきました。心より感謝を申し上げ、あとがきの言葉といたします。

令和7年12月

上川へき地・複式教育研究連盟
委員長 山 田 顕 次
(音威子府村立音威子府小中学校長)

北海道へき地・複式教育研究連盟

— 令和7年度 —

第74回全道へき地複式教育研究大会上川大会ファイナルステージ
(全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会)

研究集録

発 行 令和7年12月5日

編 集 北海道へき地複式教育研究大会上川大会実行委員会

編集責任者 北海道へき地複式教育研究大会上川大会実行委員長
音威子府村立音威子府小中学校 山 田 顕 次

事 務 局 美瑛町立美沢小学校（事務局長） 荒 川 美奈子
〒071-0236 上川郡美瑛町美沢中央
TEL 0166-92-4960

印 刷 株式会社プリントパック
〒617-0003 京都府向日市森本町野田 3-1
TEL 0120-977-920
Fax 075-935-6890
E-mail pac@printpac.co.jp